

---

# 交差する世界 番外

山口多聞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

交差する世界 番外

### 【Nコード】

N8870U

### 【作者名】

山口多聞

### 【あらすじ】

現在並行連載中の「交差する世界」の外伝となります。本編と同じく、作者の趣味が爆発しているので御注意ください。

## ヘルベチア転移編 1

新世界暦3年5月 南東諸島 南500km海上

日本国海上警備機構所属の警備船「漣06」は異常事態に直面していた。既に恒例となっている国境海域の哨戒任務中、突然気象予報にはなかった嵐に遭遇し、さらに電子機器にも異常を来たしていた。

「全くどうなっているんだ？こんな嵐が起きるなんて聞いてないぞ。おまけに電子機器は皆不調と来た。」

船長の檣村三等警備正が忌々しげに外を眺めながら言った。

「あの、大丈夫なんですか？」

そう心配そうに言うのは、現在この船で研修中のサクラス帝国海軍中尉のマーレス・スレイだ。ただでさえ慣れない船の上なのに、思わぬ事態の遭遇に驚いていた。と言うか恐怖していた。

「嵐が晴れてくれればな。だが、この嵐のせいで磁気も乱れているようだからな。電子機器が動かないのが本当に痛い。GPSどころか無線機もダメと来ているからな。」

そう苦々しく言った時、報告が入る。

「船長！」

「どうした？」

「左舷前方に陸地を発見!!」

「何!? バカ言つな。この付近に島や大陸は無い筈だぞ・・・」

見張りにそう言いつつも、樫村は双眼鏡を向けた。相変わらず外は大嵐で視界が悪い。しかし。

「確かに、陸地だ・・・」

微かではあるが、確かに陸地らしき物が確認できた。

「まさか、また新しい国が!？」

と彼が呟いた時である。突然船がガクンと揺れた。

「嫌な予感がするぞ・・・」

その予感は当たった。

「船長、舵損傷!!! 全く利きません!!! 陸地の方へ船が流されています!!!」

「何!？」

同時刻 ヘルベチア共和国セーズ郊外ヘルベチア共和国陸軍第1  
121小隊駐屯地「時告げ砦」

ローマ帝国とヘルベチア共和国の国境地帯の街セーズ、その郊外にあるのが第1121小隊の駐屯地、通称「時告げ砦」だ。広い駐屯地の中で、唯一食堂だけに灯が灯っていた。

「ひどい嵐ね。」

小隊長のフィリシア・ハイデマン大尉が食堂の窓の外を眺めつつ言う。昼間から始まった嵐は一向に収まる気配を見せない。雨風ともに強く、窓ガラスに当り激しい音を立てていた。

「全く忌々しい。朝までには晴れて欲しいな。」

そう言うのは、和宮 梨旺少尉だ。現在起きているのは2人だけだ。この砦に配置されている5人の兵士の内、3人は既に夢の中だった。

「あらあら。」

「だってそうだろ？こう言う時に限って、厄介ことが起きるんだからな。」

そう彼女が言った途端、外の扉が叩かれる音がした。

「ほらな。」

「私が出るわ。」

フィリシアが扉まで行き、開けた。するとそこには、顔馴染みの街の人々が立っていた。

「夜分遅くにごめんね。」

口を開いたのは、小隊のメンバーと関係が深いナオミであった。彼女は町の住人からも信頼されている好人物だ。その彼女がやってきたのだから、何かが起きているのは一目瞭然だった。

「何か起きたんですか？」

「うん。何か起きた事には間違いないね。ただ、ちょっと私自身信じられないことで。」

「取り敢えず、ここで話すのもなんですから、中へどうぞ。」

フィリシアは、ナオミたちを中へと案内した。

数時間後 セーズ郊外

街の住人の要請により、第1121小隊は緊急出動した。出動先は、郊外の通称ノーマンズランドと呼ばれる地域だ。そこにやってきた1121小隊の面々は、思わぬ光景を目にした。

「どう言うことなの、これ？」

唖然としながらそう言うのは、第1121小隊所属の墨埜谷 暮羽上等兵だ。

「これ、どうみても・・・海だよね？」

暮羽同様啞然としているのは、同じく上等兵の空深 彼方だ。

2人の目の前には、嵐によって高い波飛沫を立てている海が広がっていた。

「どう言うことなんだこれは？」

「わからない。けど、これは夢や幻じゃないわ。ノーマンズランドが消えて、海になった。」

梨旺の言葉にフィリシアが答えるが、彼女も努めて冷静にはしているが、驚いているのに変わりは無かった。

セーズの街は隣国の正統ローマ帝国との国境にあるが、ローマとの間には荒野が続くノーマンズランドと呼ばれる地域があった。セーズからは山を越えていけば辿りつけるのだが、第1121小隊が通報を受けて来てみれば、見慣れた荒野は消え去り、変わりに大海原が現われていた。

「ありえない。こんなこと。」

隊のもう1人のメンバー寒風 乃絵留曹長が皆と同じ感想を漏らす。彼女は隊の中でも秀才であるが、今回のことにはさすがに驚きを隠せなかった。

「一体全体どうなっているんだろうね？」

「とにかく、今の所行方不明になっている人もいないし、一端砦へ

戻りましょう。このことを首都の司令部に報告しないと行けませんし。」

フィリシアはナオミと善後策を協議する。

「私も賛成だ。取り敢えず確認はしたんだ。嵐はもうしばらく続きそうだし、とつとと砦に戻ろう。」

「そうですよ。こんな嵐の中にいつまでもいたところで意味ありません。早く砦に戻って、お風呂に入りたいです。」

暮羽が同調する。外套に身を包んでいるとは言え、やはり風と雨が冷たい。

「そうね。取り敢えず戻って、嵐が止むのを待ちましょうか。」

フィリシアも同意しかけた時、彼方が気づいた。

「待つてください！！」

「何よ？」

暮羽が怪訝な表情をした。

「静かに・・・」

彼方はそう言うと、目を閉じて耳をすました。相変わらず風雨と波の音が辺りを包んでいるが、彼女はそんな状況にあって、それらとは違う音を感じ取った。



「聞こえる・・・何か、汽笛のような音がします!」

「「「え!?!」」」

「ダメです船長。全く動きません。」

「漣06」は、舵の故障で操舵不能となり、そのまま未確認の岩礁に座礁してしまった。

「参ったな。まさか本当に座礁するとは。とにかく、汽笛を鳴らし続ける。電子機器はどうだ?」

「未だ復旧せずです。」

部下からの報告に、櫛村船長は舌打ちする。

「チツ! 浸水してないからいいが・・・船を捨てるにしてもこの嵐じゃ脱出も危険だしな。」

荒い波の中で救命艇を出すのは危険であつた。もちろん、どうしても船が沈む場合は仕方が無いが、今の所船を捨てる必要は無く、加えてボートを降ろしても岩礁に叩きつけられるのが落ちであろう。

「船長!」

「何だ!?! まさかどこか浸水したか?」

「いいえ、10時方向に灯火を確認!!」

「10時・・・さつき見た陸地の方向だな。車か家の灯か？」

「いいえ、かなり小さな光です。あ！点滅しています。信号のようです！」

「読めるか？」

「ダメです。そこまでは無理です。しかし、発光信号であるのは間違いないようです。」

「うーん。よし。取り敢えずこっちも信号を返しておけ。」

「答えた!!」

彼方が嬉しそうな声を上げる。彼女が聞き取ったほんの僅かな汽笛らしい音。それを信じてフィリシアはその方角に発光信号を行ってみた。すると、暗い海上から確かに光の点滅が帰ってきた。

「返事はしたけど、ダメね。内容までは読めないわ。」

「それにしても、一体誰なんでしょうか？今時海に出ているなんて？」

暮羽が首を傾げた。彼女にとって、海とは生命のない死の世界でしかなかった。そんな海に、こんな嵐の中一体誰が出ているのかさっぱり理解できなかった。

「さあな。取り敢えず、私と彼方がここに残って監視する。フィリシアたちは、一旦砦に戻って救助に必要な資材を取って来てくれ。」

梨旺がそう提案すると、フィリシアも頷いた。

「わかったわ。」

こうして、フィリシアと暮羽、乃絵留とナオミの4人はタケミカツチで砦へと戻り、残る2人は沖合いの光点を出した物体を監視することとなった。

座礁してから数時間後、嵐は去ったのか急速に雨風共に収まっていた。それと共に電子機器も次々と復旧した。

「ただちに南東管区司令部、自治海軍司令部に救助要請。それから現在位置と大陸発見の報を送れ。やれやれ、どうやら我々が第一発見者のようだな。」

「これからどうするんですか？」

スレイ中尉が訪ねる。

「うーん。迂闊に上陸するのは危険だしな。取り敢えず本国政府の

指示を待とう。もっとも、それを待っている暇はなさそうだがな。」

彼はようやく朝日が差し込み、その姿が見え始めた大陸の方を眺める。そしてその海岸線には、明らかに人の姿が確認できた。時折こちらに信号を送ってくるのがわかる。

「向こうの方から先に乗り込んでくるかもしれない。」

彼の言葉通り、1時間ほどして海岸に現われた多脚戦車から降ろされたボートを、数人が必死に漕いで向かってくるのが確認できた。

「あと少しだ。がんばれよ。」

「「「はい!」「」」

急遽調査に加わったオートバイ兵のクラウド中佐の声に、若い3人が反応する。

「それにしても、まさか海に漕ぎ出すことになるとは思わなかった。」

「あと少しよ。」

ボートは目標の船までもう少しと言う所まで来ていた。

「それにしても、どこの船かしらね?」

「さあな。少なくとも、俺が知る限りあんな旗は使っている国は知らない。」

目標の船には、船首の竿に白地に赤の国旗が掲げられていた。一番年長のクラウスでさえ、そんな旗の国や組織は知らなかった。

と、そこで彼方が気づいた。

「あ！誰かいますよ！」

「何！？」「」

クラウスと梨旺が銃に手をかける。しかし、それは杞憂に終わる。まもなく戦場で白旗を降る人間の姿が確認できたからだ。

「どうやら戦う意志はなさそうね。」

そして、間もなく彼女らの頭上に声が掛けられる。

「おーい！こちらの言葉が分かりますか！？」

それは彼女らにも、明確に理解できる言葉、少なくともヘルベチア語にしか聞こえない言葉だった。それに対してフィリシアが答える。

「はい！わかります！！」

「なら良かった。話し合いがしたいので、船の後ろに回ってください。そこにタラップを降ろしますから。ただ、岩礁にぶつけない様に気をつけてください。」

フィリシアたちは、言われたとおりに船の後ろに回った。確かにそこにはタラップが降ろされていた。一方で、突き出した岩礁も見えるので、クラウスの指揮の元注意して進んだ。そして、無事にタラップの下についた。

「お前たちは先に行け、俺は船を括り付けておく。念のため武器は持っていていけよ。」

「はい！」

「それじゃあ、お先にいきますねクラウスさん。」

「おう、気をつけて行けよ彼方。」

そしてフィリシアを先頭にして、彼方たちはタラップを上がった。

一行が甲板に上がると、そこでは数人の男が彼女らを出迎えた。その中の1人が前に出て敬礼した。

「ようこそ、本船へ。船長の樫村です。」

「ヘルベチア共和国陸軍大尉、フィリシア・ハイデマンです。」

すると、樫村は複雑そうな表情をした。

「どうかされましたか？」

「いえ、なんでも。本船は日本国海上警備機構所属、警備船「漣06」です。皆様を歓迎いたします。」

「ニホンコク？」

「その事に関しても説明します。どうぞ、こちらへ。」

そう言つと、榎村は彼女らを案内した。

## ヘルベチア転移編 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。



## ヘルベチア転移編 2

新世界暦3年5月 ヘルベチア共和国近海 日本海上警備機構警備船「漣06」

「漣06」の船長である榎村三等警備正は、乗り込んできた軍服姿の少女たちと、彼女らの言葉に多少驚きはしたものの、既に彼らが新たな転移者とわかつていただけに、表面上は冷静であった。

彼は挨拶を終えると、彼女らを船内の食堂へと案内した。多人数で話し合える場所はそこ位であったからだ。それに対して、フィリシアは武器の携帯許可を要求し、榎村はそれを認めて合意に達する。

それから間もなくボートを縛り付けたクラウス中佐が合流し、6人のヘルベチアの軍人たちは船長の提案に従い、船内の食堂へと案内された。

船内に入る前から、6人は船に対して並々ならぬ興味を持っていたが、乗り込んで乗員と出会い、船内へと入ったことで、その興味はより大きな物となった。

「これって、イディア文字だよね!？」

彼方が船内の至るところに使われている文字を見ながら言った。イディア文字とは、ヘルベチア共和国内で使われている古代文字のことだ。ただし、名前を書くとき等に使われているが、公用語ではない。読めるのは研究者や宗教関係者位だ。

そのイディア文字がそこら中にあり、自分たちが見慣れたヘルベ

チア語の文字が全く無ければ、興味を覚えない方がおかしい。

さらに、小隊長のフィリシアが天井を見て言う。

「灯もランプじゃないわね。」

ヘルベチア共和国の灯の主流はランプだ。電灯などは主に軍内部の一部で使われているに過ぎない。

「タケミカツチと同じ雰囲気とする。」

無口な乃絵留がそんなことを口にした。タケミカツチとは、彼女らの小隊に配備されている多脚歩行戦車で、国に10台と残っていない旧時代の遺物である。かつて人類が科学技術によって繁栄を極めた時代の物で、使われている技術はオーバーテクノロジーばかりだ。

そんな戦車を見事復元させたのが乃絵留で、アカデミーにおいて100年に一度の天才と言われた彼女の非凡さを持っていることを、如実に示していると言える。

そして彼女が言ったタケミカツチと同じにおいがするということ、この船がオーバーテクノロジーで出来ていると言うことを意味する。

「全く訳がわからない。ノーマーズラントが海になったと思ったら、見たことの無い国の船が現われる。一体どうなっているんだ？」

「とにかく、向こうの話を聞いてみましょう。考えるのはそれからでも良いんじゃない？」

梨旺の愚痴めいた疑問に、フィリシアはそう言って宥めた。

「そうだな。」

ヘルベチア軍の6人は、榎村と「漣06」の乗員2人、そしてサクラス帝国のマーレス中尉と相対する形で着席させられた。

「改めまして。本船「漣06」へようこそ。船長の日本海上警備機構榎村明人三等警備正です。」

「副長の森永一義一等警備士です。」

「頸城恵二三等警備士です。」

「サクラス帝国海軍中尉のマーレス・スレイです。」

榎村は42、森永は36、頸城は21、そしてマーレスは26である。

「漣06」側の挨拶が終わると、交代する形でヘルベチア側の挨拶がスタートする。

「ヘルベチア共和国軍、第23通信隊所属のクラウス・コンラート中佐です。」

「同じく、ヘルベチア共和国軍、第1121小隊隊長のフィリシア・ハイデマン大尉です。」

「第1121小隊所属、和宮梨旺少尉です。」

「同じく、第1121小隊所属、墨埜谷 暮羽一等兵です。」

「同じく、第1121小隊所属の空深彼方一等兵です。」

「寒風 乃絵留曹長です・・・」

こうして一同は挨拶を終えた。ちなみに乃絵留が階級が下の2人よりも後に官姓名を申告したのは、本人が一番最後の位置に座ったからだ。

「それでは、クラウド中佐。早速ですが、ここがどこなのか教えてください。」

まず檉村が話し合いの口火を切った。

「ここはヘルベチア共和国の国境に程近い街、セーズ郊外です。我々の知る限りでは、ここに海がある筈が無いのですが・・・」

「では、日本、トリステイン、ロクシアーク連邦、サクラス帝国、ロシア・・・東ロシア帝国。この中で聞き覚えのある国はありますか？」

「いいえ、ありません。」

クラウドは首を振った。

「では、今年は何年ですか？」

「今年はヘルベチア暦110年ですが？」

その言葉に、櫛村らは顔を見合わせる。

「やはり、また別の世界からの転移でしょうか？」

森永が口にした言葉を、櫛村が肯定する。

「だろうな。ヘルベチアなんて国地球にはなかったし、マーレス中尉も知らんよな？」

「ええ、聞いたことがあります。もしかしたら、西大陸にあったかもしれませんが、自分は存じておりません。」

すると、頸城が発言する。

「多次元宇宙が実証された現在、さらに別世界があってもおかしくありませんよ船長。」

「うーん・・・」

そんな風に日本側のメンバーが勝手に話を進めるが、もちろんクラウスらにはさっぱり理解できない。

「あの、話を進めたいのですが？」

「ああ、失礼クラウス中佐。」

するとフィリシアが口を開いた。

「一体あなた方は何者なんです？日本と言う国は聞いたことがありますし、あなた方が言っていることの意味もさっぱり理解できません。」

「申し訳ない。それではまず、我が国について地図を用いて説明しましょう。」

檉村は現在世界標準となっている地図を持ってこさせた。最初の転移の半年後の国際会議で各国共通となった転移暦2年の最新版の地図である。

衛星からのデータを元に製図されたそれには日本を中心にその南に浮かぶ小さな王国であるトリスティン、さらに南にあるアルカディア自治区（旧 諸島）、日本から見て西にあるロクシアーク連邦とサクラス帝国を擁する2大陸、そして1年前に現われた日本の東側に現われたロシア帝国が描かれている。

もちろん、ヘルベチアは描かれておらず、ヘルベチア人である6人も見たことの無い物だ。

「これが我が国、日本です。そしてこちらの大陸が、今回研修として乗り込んでいるマーレス中尉の故郷サクラス帝国です。我々は国境警備任務のためアルカディア自治区にある南東管区司令部を出港、その後荒天に遭い現在位置で座礁しました。本来なら我々はこの辺りにいるはずです。」

そう言つと、彼は大海原をしめす青い部分を指でグルグルと回した。

「しかし、こんな地図は見たことありません。」

フィリシアが怪訝な目で榎村を見る。

「それはそうでしょうね。昨日まであなた方の国はなかったはずですから。しかし、それを言えば我々も同じなのです。」

「それはどういうことですか？」

クラウドが尋ねる。

すると、榎村はかつて自分たちの身の上で起きた転移について話し始めた。最初の転移現象によって、もはや多次元宇宙論の存在は確実なものとなっている。

しかしながら、そのメカニズムは未だ不明であり、いつどのようなに起きるかは全く把握できない。1年前に新しい国が現われたが、その時も忽然とという言葉通りに現われている。

「つまり、私たちも同じように異世界に飛ばされた……」

頭の良い乃絵留が真っ先に理解し、口に出した。

「その可能性が高い。」

しかしそれに対して暮羽が反論した。

「そんなこと信じられないわ！」

すると、梨旺が頷いた。

「私も同意見だ。あなた方が嘘を言っている可能性もあるし、もしかしたら我々ではなくあなた方が現れたと言う可能性もある。何か、確実な証拠が欲しい。我々が異世界に、あなた方のいる世界に現われてしまったと言う確実な証拠が。」

梨旺は軍人としては単なる少尉に過ぎない。しかしながら、彼女にはヘルベチア共和国大公家の娘であり、継承権第一位という姫様としての顔もある。決して無能ではないし、政治などの話にも理解がある。

「それは最もな話ですね。頸城警備士、その点に関して何か意見はあるか？」

「はい。無線が回復すれば確実な物になります。無線が回復し、本国、もしくは南東管区司令部や自治海軍司令部などと連絡が取れば、我々は元からいた世界に存在し続けていることを証明できます。逆に回復せず、一切の無線連絡が取れない、もしくは取れても我々の知る組織との間に出来なければ我々は少なくとも別の世界にいることになります。」

「なるほど。さすがは船内1のオタクだけあるな。まあ、そう言うわけで我々は本国との無線連絡を試みますので、今しばらく待つて欲しいとしか言いようが無い。もちろん、我々はあなた方と敵対する意志は全く無いので御安心なく。・・・話続けると咽が渴くな。皆様も何か飲みますか？緑茶、コーヒー、紅茶、ジュースがあります。そうした飲み物はそちらにも存在しますか？」

「ええ、あります。では、私はコーヒーをお願いします。」



「じゃあ、私は紅茶で。」

「私もフィリシアと同じもので。」

「じゃ、私はジュースを。」

「私も。」

「・・・私は緑茶で。」

6人がそれぞれに注文し、さらに「漣06」の4人もそれぞれに飲み物を厨房に注文した。間もなく、まずカップに注がれたコーヒ―と紅茶、さらに湯飲みに注がれた緑茶が出てきた。

ところが、ジュースは缶の物が出されたのだが、それをみた暮羽と彼方は呆然としてしまう。他の4人も驚いている。

「あの、これどうやって飲むんですか？」

暮羽はあれやこれやと缶を開けようと手で持ってあちこち触っているが、彼方は正直に質問した。

「こうやるんです。」

同じく缶ジュースを注文した頸城がプルトップ式の缶を開けるのを見せる。

「すごい！」

彼方が素直に感嘆の声を上げる。

「そこまで褒められる物じゃないよ。」

と言いながら、頸城は少女に褒められて満更でもなさそうだった。

とにかく、一同はそれぞれの飲み物に口をつけ、束の間ではあるが和む。

しかしその時間は本当に束の間であった。間もなく無線室から船員が連絡にやって来た。

「船長、南東管区司令部と自治海軍司令部に連絡がきました。電子機器も逐次復旧中です。」

「そうか。で、救援要請はどうなった？」

「はい。近海にて演習中のロシア帝国駆逐艦「スタールイ」と自治海軍所属のフリゲート8号、そして海上自衛隊所属のフリゲート「対馬」が急行中とのことです。この内「スタールイ」が3時間ほどで到着の見込み。」

「ようし、相手にわかるよう救難信号を発進し続ける。それから曳航の受け入れ準備だ。」

「船長、それから日本への連絡も。電子機器が復活したなら、衛星電話が使えます。」

頸城が意見をする。

「おお、そうだった。すぐにそれもやれ！」

こうして「漣06」は動き始めた。

もっとも、客人であるヘルベチア軍の6人は急速に命令が飛ぶ船内の様子を見ているしかなかったのだが。

## ヘルペチア転移編 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

### ヘルベチア転移編 3

新世界暦3年5月 ヘルベチア共和国近海・日本国海上警備機構警備船「漣06」

救助船が来るまでまだ時間がある。その間に、樫村船長は乗り込んできたヘルベチアの6人に色々な物を見せて、自分たちが異世界人であることを証明しようとした。

船内には調度品や船員の私物として様々な物品が積まれている。それらを見せてることで、彼らに理解を求めようとしたわけだ。

この方法は上手く行った。何故なら船内にある調度品のほとんどが、彼女らにとって驚きの物ばかりであったからだ。

「この黒い板のような物はなんですか？」

食堂に置かれたプラズマテレビに、フィリシアが興味を持って乗員に質問する。

「それはテレビです。映像を映し出す機械です。」

乗員が電源を入れると、衛星放送が受信されて映像が映し出された。

「「「おお！！」「」」」

若い暮羽や彼方が感嘆の声を挙げる。

「では、こっちの箱みたいなのはなんですか？」

「それはCDコンポです。音楽を聴いたりするのに使います。」

「音楽！？どんな音楽ですか？」

今度は音楽に人一倍興味がある彼方が食いついた。彼女、軍隊への入隊理由がそもそも音楽を習うためという一風変わった経歴を持つ。これはヘルベチア共和国において、音楽を習えるのが軍隊からいなくはない物だからだ。

「うーん、そうだね。船員たちが色々持ち込んでいるからな・・・クラシックもあればポップもあるし。ロックやサクラスの音楽もあるからね。」

この側コンポの側に置かれたCDをあさりながら、船員が答える。

「その円盤で再生するの？」

乃絵留がCDに目を向けながら、疑問を口にする。

「うん？そうだよ。よくわかったね。」

「タケミカツチにも同じような物があったから。」

「ふーん。それじゃあ、1曲掛けてみようか。」

船員がCDを一枚ケースから出して、コンポにセットして再生した。スピーカーから音楽が流れ始める。

「目と目が逢う、瞬間好きだと気づいた。あなたは今どんな気持ちでいるの。」

流れ始めたのは、アイドルが歌うポップだった。

「うわあ、すごい。」

彼方が目を輝かせる。

「聞いたことも無いメロディ。それにどんな楽器使ってるんだろう？」

「あー、ちょっと音楽についてはあまり知らないからね。俺にはわからないや。多分キーボードとかドラムを使っているんだろうけど。」

「キーボード？ドラム？」

聞き覚えの無い楽器の名前を聞き、彼方が首をかしげる。

「その内多分わかるよ。」

「それで、これ歌っている人はやっぱり軍人なんですか？」

彼方のセリフに、船員はもちろん驚き、啞然としてしまう。どうしてそんな質問を彼女がしたのか理解することができなかった。

「何で軍人が歌を歌うことになるの!？」

「え!？だって、音楽を習えるのは軍隊だけじゃないんですか？」

「お嬢ちゃんの国じゃそうなのかい？我が国、日本もそうだけどロクシェやサクラス、ロシアも音楽や歌は軍隊以外でも学べるよ。むしろ、軍隊で学ぶ方が珍しい。そりゃ軍楽隊はあるけど、規模なんて小さいからね。」

「ええ！？じゃあ軍隊じゃなくても音楽が学べるんですか？一体どうやって？」

「どうやって、まず普通に初歩的なものは学校で習うよ。まあ、それで食っていこうと思ったら専門の学校へ行くか、何年も自分で練習するだけだね。」

そんな2人の会話を、クラウス、フィリシア、梨旺は興味深げに聞いていた。

「どうやら日本と言う国は、我が国とは全く違うようだな。」

「おまけに技術力も凄いいましいだな。」

「中佐の言うとおりですね。この船にある物はタケミカヅチで見たような、まるで旧時代の話に出てくるような物ばかりです。もしそんな国が我が国の近くに現われたとなれば、大問題です。しかも、彼らの話を聞く限りじゃ、1国だけではないようですし。」

「フィリシアの言うとおりだ。一刻も早く、このことを首都に知らせるべきだ。」

「そうですね。しかし、全員戻ってしまうのも問題です。」



「同感だ。危険だが監視役が必要だ。」

「じゃあ少佐と私、それに暮羽ちゃんて基地に戻って連絡しましょう。梨旺は彼方ちゃんと乃絵留ちゃんと一緒にこの船に残って。」

「わかった。一応聞いておくが、どうしてそんな人選に？」

「梨旺なら交渉とかそう言うの得意でしょ？乃絵留ちゃんは機械に強いわ。そして彼方ちゃんは、どんな人とも仲良く出来そうだしね。」

彼女は船員と仲良くお喋りしている彼方を一瞥した。

「そうだな。それじゃあ中佐、そしてフィリシア。よろしく頼みます。」

「梨旺も気をつけろよ。はつきりいつて危険がないとは限らんし、それにお前は・・・」

「おっと中佐、それ以上は無しにしましょう。私は一軍人、和宮梨旺少尉なんですから。」

「ふ・・・お前らしいな。じゃあ、よろしく頼むぞ。」

「了解！」

この15分後、クラウド、フィリシア、そして暮羽の3人は再びボートを漕いで陸地へと戻って行った。樫村船長は搭載してある内火艇の使用を勧めたが、フィリシアらは敢えてそれを辞退した。

それから3時間ほどの間特に動きはなく、船員もそして乗り込んでいる彼方たちも特にやることはなかった。

梨旺は日本人が自分たちを監禁したりするなどの強硬手段にでも訴えはしないかと警戒していたが、それは結局の所杞憂だった。まあ、さすがに女性であり既に体格的にも大人である彼女に、卑猥な視線を向けて来る者がいないことはなかったが、彼女はそれを無視した。

そんな彼女の気苦労を他所に、部下である彼方と乃絵留の2人は船内食堂で、船員たちに誘われてトランプに熱中していた。

「まったく、お気楽な奴らだ。ま、それがあいつらの持ち味でもあるがな。」

部屋の隅に1人たつ彼女に、ある人物が声を掛けた。サクラス帝国のスレイ中尉だった。

「あなたはあの中に入らないんですか？」

「え？ええ。私は最上位者としての責任がありますから。そう言うあなたはどうなんです？」

「私もちよつと今は入りにくくて・・・コーヒーでもどうですか？」  
スレイがコーヒーマーカーを手に持って言う。自分で飲もうとしていた所で、彼女に勧める。

「じゃあ、一杯下さい。」

スレイは2つのカップにコーヒーを注ぎ、一つを梨旺に渡した。  
梨旺はそのカップをジッと眺める。

「どうかしました？」

「え！？いや、別に。」

「・・・なるほど。警戒は怠っていないと言ったことですか。」

「まあ、誰でもそうなるでしょうね。私も彼らと最初に出会ったばかりの時は驚きの連続でしたし、不信任を持つ人間もそれなりにいましたからね。まあ、それはお互い様なんでしょうが。」

「そう言えば、あなたは日本人では・・・」

「ええ、サクラス帝国海軍所属です。もともと、出来てから1年半しか経っていない新しい軍隊で、今は日本やロクシエに人を派遣して人材を育てている所です。」

「異世界か・・・本当に信じられない。」

「最初はそうでしょうが、後で嫌と言うほど認識することになりますよ。私たちはそうやってこの世界で突然出会い、共生することになったんですから。あなたの国も、いずれ難しい舵取りを行うことになるでしょうね。」

「・・・」

何か思つところがあるのか、梨旺は黙り込んでしまった。

「和宮少尉？」

「あ、すまない。とつと考え事をしている。」

「！？」

と、その時船内スピーカーが鳴った。

「漣06」の救援へ一番乗りしたのはロシア海軍の駆逐艦「スタールイ」だった。

「これでようやく離礁出来るな。」

ブリッジからその姿を確認した榎村船長が、双眼鏡を降ろすと呟いた。

「だが、問題はここからか。」

その頃、食堂にいた梨旺や彼方たちも乗員たちに混じって甲板上へと現われていた。

「あれは？」

「双頭鷲の紋章に青い十字の旗。ロシア帝国海軍の駆逐艦ですね。」

近づいてきた艦影を見ながら、スレイが呟いた。

「ニホンの船ではないということですか？」

梨旺の質問に、スレイが頷く。

「ロシア帝国はここから見て遙か北にある国です。しかしながら、その海軍力はあなどれません。旧式ですが、戦艦と空母を多数保有し、ハワイ王国海軍と合わせて数の上では日本の海上自衛隊を圧倒していますから。」

梨旺は彼の言葉を聞いて、理解できない部分も多々あったが、取り合えずそのロシア帝国が凄い国であることは理解できた。

（我が国は、ローマを相手にするよりも厄介なことに巻き込まれたかもしれない。）

一方、部下の彼方は別の意味で驚いていた。

「大きな船ですね。この船よりも大きいですね。」

すると近くの船員が笑った。

「あれくらいで驚いちゃいけないよ嬢ちゃん。あれは駆逐艦で言つて、軍艦では小さい部類にはいるんだ。もっと大きな船だと、この船の60倍近い大きさがあるんだぞ。」

「ええ!？」

海上警備機構の巡視船は全長80mの排水量1200tで、76mm速射砲やCIWS、対潜魚雷を搭載しているが、あくまで主任

務は漁業監視や国境警備であり、遠洋航行能力は高い設計だが大きな船は少ない。

ただ彼方は海も船も今日まで見たことがなかったから、目の前の駆逐艦さえ大きく感じていた。

「あれよりもっと大きな船があるんですか？」

「ああ、日本やロシア、ロクシエもサクラスも持っているぞ。」

「へええ。」

彼女の見ている前で、駆逐艦は停船した。そして艦上で乗員が慌しく動き回っているのが見える。

「ロシア駆逐艦より内火艇が来る。乗員は受け入れの準備をなせ。」

スピーカーから命令が流れると、集まっていた乗員が一斉に動いた。

「それでは、私はこれで。」

スレイも走っていつてしまった。

「皆さんはこちらへ。」

別の船員が3人に言うが、梨旺が質問を口にした。

「あの、私たちはここにいてはいけませんか？」

「え!？」

「ですから、あの船から来る人間を見たいのですが？」

「・・・ちよっとお待ちを。」

船員は一目散にブリッジへと走って行った。

「先輩？」

彼方が怪訝な表情をする。

「お前たちだつて見たいだろ、あの船にどんな人間が乗っているか。」

「・・・ハイ！」

「・・・うん。」

5分後、先ほどの船員が戻ってきた。

「いいですよ。船長は是非とも会って欲しいそうです。つきまして、こちらへお願いします。」

「了解です。行くぞ、2人とも。」

「「ハイ!!」」

それからさらに5分ほどして、ロシア駆逐艦から内火艇が来て、数名の男が「漣06」に乗り移った。

「救援感謝いたします。日本国海上警備機構警備船「漣06」船長の榎村三等警備正です。」

榎村船長に敬礼に、カイゼル髭を蓄えた士官が答礼する。

「ロシア帝国海軍、南方派遣部隊司令官の木村昌福少将だ。貴艦の救助要請を受け参った。」



## ヘルベチア転移編 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## ヘルベチア転移編 4

新世界暦3年5月 ヘルベチア共和国近海 日本海上警備機構 警備船「漣06」

やって来た黒を基調とした制服のロシア海軍将官に、樫村船長も答礼する。

「漣06」船長の樫村明人三等警備正です。救援感謝致します。それと、御高名なる木村閣下自らの来訪、心から歓迎致します」

樫村の言葉に、木村少将はカイゼル髭に手をやりながら笑った。

「なあに、高名とは言ってもそれは君たちの世界での私であろう。私は私だ。大した男ではないよ」

「御謙遜を。確かに、あなたはキスカの奇跡を成し遂げた訳ではありませんが、前の世界におけるソビエト海軍相手の戦いで御活躍は、我が日本海上警備機構内にも響いております」

「あんなアカの海軍や陸上砲台に勝利した戦いなど、勝った内に入らんよ。全く、伊藤大将や山口中将の苦勞がわかるよ・・・」

2人が話す様子を見ていた梨旺は、近くにいた森永副長に尋ねた。

「あの2人は一体何を話しているんですか？木村と言う將軍はそんなに有名なんですか？」

「うーん・・・かなりややこしい話になりますけど、あの木村少将

は70年以上前の戦争で活躍した、我が国の海軍司令官の1人なんです。」

「はあ？70年前？」

70年前の人間が生きているなど、信じられなかった。それに加えて、今森永は我が国と言ったが、木村少将は日本とは別の国であるロシア海軍の船に乗っていた。梨旺にしてみれば、全く訳がわからない。

「驚いて当然ですね。さっきの船長との話で、この世界は色々な世界から転移してきた国々の集まりだって言いましたよね。ロシア帝国もその内の一つです。それで、そのロシア帝国と言う国は・・・」

梨旺は森永副長から、より詳しくロシア帝国と日本の関係について聞くことが出来た。

それによれば、ロシア帝国が以前存在していた世界は、日本と同じ世界の70年ほど前の時代（西暦1940年代）であつたそうだった。つまり、日本から見れば過去の時代からこの世界に飛ばされてきたそうだった。

そして、ロシア帝国では日本から多くの軍人を傭兵や移民として受け入れており、木村は日本海軍からロシア海軍に移籍した一人だったと言う。

「ただし、ロシア帝国時代は今の日本の過去から来たわけではありません。私たちの暮らしている今の日本の歴史では、ロシア帝国はもっと前に崩壊しています。ですから、我々の過去に良く似た世界からやって来たと言うことなのです。ですから、実際には我々の世界

の過去の戦争で活躍した木村將軍と、あそこにいる木村將軍は、似て異なる存在なんです。わかりました？」

「はー。なんとなくは。」

とは言ったが、実際の所梨旺にはほとんど理解できていなかった。そもそもいくつも世界があるということ時代、彼女の脳裏では想像し難いことであつた。

「まあ、理解するには時間が掛かるでしょうね。」

「おい副長！」

「おっと、船長が呼んでいますので失礼します。」

樫村に呼ばれて、森永は行ってしまった。

「あの先輩、一体何の話を？」

彼方が聞いてくるが、梨旺はその間に明確な答えを見いだせれなかった。

「何と言えば良いのか、私にもわからん。」

「はあ？」

そんな感じで2人が困惑している所に、声が掛けられる。

「おい！君たち！」

「あ、はい！行くぞ、彼方。乃絵留。」

「はい。」

「うん。」

3人は檣村の所へと出る。

「木村少将。紹介いたします。ヘルベチア共和国軍、第1121小隊の皆さんです。」

すぐに梨旺は木村に向かって敬礼し、彼方と乃絵留もそれに続く。

「第1121小隊所属の和宮梨旺少尉です！」

「同じく、空深彼方一等兵です！」

「・・・寒風乃絵留軍曹です。」

「うむ。木村少将だ。君達が、今回発見された国の軍人が・・・これより我々はこの船の離礁作業に入る。その後の行動はまだ決まっていないが、おそらく貴国政府とコンタクトを取ることとなるだろう。君たちにはその際、是非とも手助けを願いたい。」

「確実なお約束は出来ませんが、善処いたします。」

「よろしく頼むよ。・・・おや？空深一等兵だったな？君はラツパ兵か？」

木村が彼方の腰にぶら下がっている、軍用ラツパを見ながら尋ね

た。

「えー？あ、はい！そうであります！」

「そうかそうか。家の艦のラッパ兵とどっちが上手いかな？」

「え？それは・・・」

「もちろん、彼方に決まっています。」

口をつぐんだ彼方に変わって、梨旺が答えた。

「そうかね・・・それにしても、若いな。今幾つかな？」

「16です。」

「ほーう。うちの少年兵と同じ位か・・・がんばりたまえよ。」

「はい！ありがとうございます。」

「うむ。ああ、話を元に戻すが。作業を開始するので、君たちには一旦この船を離れてもらいたい。陸地に戻るなら、家の船から内火艇かカッターを出そう。」

「ありがとうございます、少将閣下。しかしながら、私たちは仲間が戻るまで、あなた方の監視をすることが任務です。離れるわけにはいきません。」

「君は中々芯のある軍人のようだな。よろしい、さすがにこの船は作業を行うのは危険だから、私の艦に移りたまえ。もちろん、君た

ちの任務を妨害する気はないし、客人として遇しよう。」

「お心遣い感謝します。では、そうさせていただきます・・・榎村船長、そう言うわけなので。我々はあちらの船に移ります。短い時間でしたが、お世話になりました。」

「ああ。こっちこそ、楽しかったよ。」

榎村が敬礼をする。すかさず、梨旺たちも答礼した。

「それでは、下の内火艇に乗りたまえ。」

「はい！！！！」

2時間後、満潮の時刻に合わせて、ロープで「スタールイ」と繋がれた「漣06」は、「スタールイ」に引っ張られ、何とか離礁した。

直に浸水が無いか確認が取られたが、「漣06」からは若干の浸水があるものの、航行には差し支えなしという報告が「スタールイ」に送られ、同艦の乗員をホツとさせた。

その一連の様子を、梨旺たちは「スタールイ」の甲板上から眺めていた。

「案外早く終わったな。」

「・・・うん。」

「て、彼方はまだ戻ってこないのか？」

「・・・うん。」

「全く、どこへ行っても気楽な奴だよな、あいつは。」

彼方は木村の案内で、「スタールイ」のラッパ兵と会っている。そのため、今は梨旺と乃絵留しかいなかった。

と、梨旺が言っていた頃、彼方と言えば。

「へえ、じゃあロシアでも軍隊以外で音楽が学べるんですか？」

「ああ、首都のノーヴァ・サンクトペテルブルクをはじめとして、主要な都市には1校位は音楽学校があるから。」

「いいなあ。」

木村少将から宛がわれた部屋で、「スタールイ」のラッパ兵たちとラッパや音楽に関する話で盛り上がっていた。

「でも、やっぱり今の日本の方がすごいよな。」

日系水兵が言うと、ロシア人水兵も頷く。

「だよなあ。公立の学校に加えて専門学校も多い筈だし。留学する奴も最近随分と増えたし。さすが未来の国だよ。俺も補給のために横須賀に寄った時、一度だけ東京と横浜を見たけど、スゴイもんだっただぜ。」



「日本・・・さっきの船の国ですよ。」

「ああ。この世界じゃもつとも進んでいる国だよ。」

「日本・・・」

彼方は、まだ見ぬ遠い異国に思いを馳せていた。

同時刻 日本・東京首相官邸

1人の少女が未知の国への憧れを募らせている頃、その国のトップに立つ男は、早朝にもたらされた情報の続報に注視していた。

「それで、そのヘルベチア共和国に関しての続報はないのか？」

「今の所は。先ほど、ロシア駆逐艦による警備船の救助作業が始まったと言うこと以外、何も入ってません。」

「そうか・・・」

コンコン！

「入ってくれ。」

「失礼します。首相、JAXAから衛星の写真が届きました。」

入ってきたのは文部科学相だった。

「お、御苦労。」

春川首相は渡された封筒の封を開けた。

「1枚目は1週間前に撮影された写真。2枚目は先ほど撮影された物です。」

1枚目の写真には、碧く広がる大海原だけが広がっている。それに対して、2枚目には大陸が映し出されていた。

「どうやら間違いないようだな。」

「ですね。一年半前の東ロシア帝国とハワイ王国以来ですね。」

「本当にまた唐突に現われたもんだな。予兆は何も掴めなかったんだろ?」

「はい。何も。転移の原理は、一行にわからんようです。」

「やれやれ。せめて現われる予兆くらい掴めれば、こうもアタフタすることはないんだけどな。」

「それでも、前回よりは素早く対応できていますよ。」

「ありがとう小泉。正式に確認が取れたからには、記者発表の必要があるな。それから、臨時の閣議も。」

「既に準備は整っています。それから、各国首脳にも伝えておくべきだと思いますよ。」

小泉副首相が笑みを浮かべて答える。

「こいつ・・・よろしい。文科大臣、そう言うわけだ。記者会見はそっちで行ってくれ。俺はこれから各国首脳に連絡する。臨時閣議のスタートは、そうだな・・・他の閣僚も準備するのに時間は必要だろうから、1時間後にしよう。」

「わかりました。失礼します。」

文科大臣は執務室から退室した。

「さてと、それじゃあ電話しますか。まずはロシアだな・・・前回散々困った国に、最初に掛けなきゃいけないとはな。」

「仕方がありませんよ、キョンさん。現場に逸早く駆けつけたのは、あの国の艦艇なんですから。」

「わかってるよ。その次にサクラスだな。農水大臣の話じゃ、「連06」にはサクラスからの留学生が乗っているらしいからな。んでトリステインのヴァリエール首相。そして、最後にロクシエのクラーク大統領かな。」

「自治領にも伝える必要がありますね。」

「ああ、そうだな。はあ・・・ロシアのスカルスキー首相は苦手なんだよな。同じ日本人のヒロセ侍従長の方がまだ話し易いのにな。」

「愚痴を言っても仕方がありませんよ。スカルスキー首相が終われば、後は話し易い人ばかりじゃないですか？」

「だな。けど、メイベル首相は一步間違えると長話に付き合わされるから要注意だな。」

「ですね。」

「と、あんまり時間は無かったんだ。じゃ、掛けるとしますか。」

春川は執務机の上にある電話機に手をやり、受話器を取った。

## ヘルベチア転移編 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## ヘルベチア転移編 5

新たに現われたヘルベチア共和国は、各国に大きな衝撃をもたらした。それは同国の歴史が、科学の発展した旧時代が戦争によって急速に衰退し、海は汚染されて生き物の住めない死の世界となり、人種も文化も滅茶苦茶になってしまったと言う、これまでにない極めて異例の物だったからだ。

もつとも、驚きこそすれ排斥や侵略の対象にするなどという考えは、各国の代表者には毛頭無かった。むしろ、この新参者に対して如何に接していくかと言う意見で、日本の春川首相をはじめとした全ての首脳陣はまとまった。

既にこうした経験を得ていた日本やロクシエ、サクラス、トリステイン、また彼らより経験的に乏しいものの優秀な政治家に恵まれていたロシア帝国は、ヘルベチア共和国に対して早々と国交の樹立と、国際共同体への参加を呼びかけた。

対して、ヘルベチア共和国側は軍部の一部強硬派が動いたものの、元首である大公が友好関係樹立を強く望んだこともあり、最終的に日本をはじめとする各国の提案を丸々呑むこととなった。

これには、大公の娘である和宮梨旺の意見具申が大きく貢献したとされている。

こうして、ヘルベチア共和国は転移3ヵ月後に、正式に新世界における国際的な地位を確立した。もつとも、それは同国にとって新たな戦いの幕開けであった。

ヘルベチア共和国は、かつての人類が科学全盛の時代に作られた産物を細々と使っているに過ぎず、それを再開発する技術力はほぼ皆無であった。日本の調査によれば、第二次大戦前後の科学力しかもっておらず、航空技術と海洋技術、さらに電子技術に至っては消滅していた。

そのため、ヘルベチア共和国はこうした技術を一から学びなおさねばならなかった。彼らがその教えを請うべき相手としたのは、やはりこの世界でもっとも科学技術が進んでいる日本であった。

新世界暦4年6月 日本・東京練馬区 朝霞駐屯地

日本の首都である東京郊外に広がる陸上自衛隊朝霞駐屯地。この基地には様々な部隊が駐屯すると共に、陸上自衛隊の広報センターもある。そして同基地には、防衛大臣直轄部隊の一つである中央音楽隊も駐屯している。陸上自衛隊中央音楽隊には音楽科要員教育のために、教育科が設けられており、今日も隊員の教育が行われていた。

その教育を受けている中にたった1人ではあるが、ヘルベチア陸軍の制服を着ている空深彼方の姿があった。

「よし、次は空深彼方上等兵、吹いてみる！」

「はい！」

陸上自衛隊の教官の言葉を受け、彼方は立ち上がり、梨旺からプレゼントされたトランペットを両手で構える。そしてマウスピース

に口を付けると、吹き始めた。部屋の中に、彼方の吹くトランペットの音が響く。

「よし！まだまだ荒いが、始めてから3年前でそれなら大したものだ。よし、次！」

教官の言葉に、彼方は椅子に座る。

「ふう。」

多少緊張しながらの演奏であつたのか、座るなり息を吐く。しかながら、その表情に不安や疲労の色は一切見えない。今の彼女は、日々忠実した者が見せる、明るい表情をしていた。

（毎日の練習は大変だけど、やっぱり来てよかった）

ヘルベチア共和国と日本が国交を樹立すると、ヘルベチア共和国もそれまで日本が接触した国家と同じく、軍事面においては優秀な日本製兵器の購入を打診した。

しかしながら兵器だけ売却してもそれを使いこなせないのは、目に見えていた。特に海軍と空軍に関しては、ヘルベチアは一から作り上げる必要があつた。

そのため、まず始まつたのが人事交流であつた。これに伴い、多数の人材がヘルベチアから日本やロクシエ、そしてロシア帝国へと派遣されていった。

これに伴い、彼方は日本へ音楽を習いに行くことを希望した。「スタールイ」艦上での会話が忘れられず、その後入ってくる情報か



ら、日本に行けば充分に学べると考えたからだ。

それに対して日本側は、陸上自衛隊の音楽隊への留学と言う、処置を取った。しかも、その中でも最精鋭である陸上自衛隊中央音楽隊へである。

中央音楽隊は特にエリート部隊で、音大卒業者でも簡単には入れないと言われている。それでも彼女がこの隊に迎え入れられたのは、政治的な思惑もあったが、彼女の適性をテストした音楽隊の陸上自衛官が後押ししたからであった。

わずか2年前にラッパを持ったにも関わらず、素晴らしい音感と早い修得力を持ってトランペットを弾く彼女に、その自衛官は輝ける将来を見出したのであった。

後にヘルベチア共和国親衛音楽隊の隊長として名を馳せる、空深彼方の新たな歴史の始まりであった。

そんな未来のことも露知らず、彼方は時には教官に厳しく、時には優しく教えを受けながら、日々驚くべきスピードでその腕を上達させていた。

（とにかく、がんばらないと！梨旺先輩や乃絵留ちゃんたちも元気にやっているかな？）

日本とヘルベチア両国からその将来を期待されている彼女が、時折空を見上げて想うのが、共に日本の空の下で学ぶ仲間達のことであつた。

同日 航空自衛隊防府北基地

「マズイマズイ！寝過ぎた！」

梨旺は基地内の廊下を全力疾走していた。留学生であるが、着ている服は航空自衛隊のそれにそっくりのヘルベチア空軍のものであった。

「よし！間に合った！！」

教室に駆け込み、自分の席に着く。

「ふー」

「梨旺ったら、また寝過ぎたの？」

隣の席に座る臙脂色えんじの制服を着込んだ少女が、半ば呆れながら言う。

「ああ、リリア。遅くまで本を読んでいてな。」

声を掛けてきたのは、ロクシエからの留学生であるリリアーヌ・アイカシア・コラソン・ウィッティングトン・シュルツであった。

2人は会って依頼、非常にウマがあい、もはや親友であった。

「そんなんじゃ目を悪くするわよ。」

「わかってる。休み時間には、なるべく遠くを見るように心がけて

いるさ。」

「それにしても、梨旺さんも勉強熱心ですね。」

梨旺から見ても、リリアを挟んで反対側の席に、1人の青年が座る。リリアと同じく、臙脂色のロクシェ空軍の制服を着込んでいる。彼は教科書を机の上に置くと、座った。

「おはようトレイズ。お前にしては遅いな。」

やって来たのはリリアと同じく、ロクシェからの留学生であるトレイズだった。

「おはよう梨旺さん。ちょっと、実家に電話をしていたから。」

「ほー。相変わらず、この国の科学力の凄さには驚かされるな。」

「本当よね。あーあ。早く私もジェット機の操縦したいな。」

「そう言うことは、基礎科目でちゃんと点を取ってから言うもんだぞ。」

「わかってるわよ。けど梨旺はすごいよね。私達よりも後に日本語習いだしたのに、もう完璧にマスターしてるんだもん。」

「本当。俺たちだって、使いこなすのに1年半も掛かったのに。」

「私だって楽に覚えた訳じゃない。けど、空を飛びたいという憧れをかなえるために必要なことだと思えば、別に苦になるようなことじゃなかった。」

「クー、格好いいわね。同じ女なのに惚れ惚れするわ。」

「な、バ、バカなことを言うな!」

「いや、実際、今の梨旺さんは格好良かったし。素敵だった。」

リリアに続いて、トレイズも褒める。ところが、それに対して梨旺ではなくリリアが反応した。

「ちょっとトレイズ、何よ今の言葉は?」

「え!? 普通に梨旺さんのことを褒めただけだけど。」

「本当に? ふん!」

リリアはソップを向いてしまった。

「ちょ、ちょっとリリア」

慌ててリリアの機嫌を取ろうとするトレイズ。そんな2人を、今度は梨旺が呆れながら見た。

「やれやれ。」

と言いつつも、一瞬後には彼女の表情は楽しそうな物になっていた。

後に、ヘルベチア空軍総司令官となる梨旺・和宮・アルカディア公女の、日本留学時代の一場面であった。

同日 陸上自衛隊土浦駐屯地内武器学校

ガチャガチャ・・・

「幸せ。」

教材用の車両を整備しながら、寒風乃絵留は御満悦であった。

「寒風曹長は本当に機械弄りが好きだね。」

共に留学してきたクラウドス中佐が笑いながら言う。ヘルベチア時代から百年に1人の天才と言われている彼女は、教科書を一読しただけで全てをマスターしまう程頭がよく、教官などいないような存在であった。

そんな彼女が何よりも好きなことであつたのが、機械弄りであった。空いた時間に許可を貰って、自衛隊の車両や武器を、解体して、再組み立てするのが、彼女にとっての日課となりつつあった。

後にヘルベチア共和国の産業大臣となる、寒風乃絵留の若き日の姿であった。

同日 ヘルベチア共和国 第1121小队駐屯地 時告げ砦

「こらあ！何もたもたやってるの！もっと素早く動きなさい！！」

「す、すみません!!」

「全く。彼方だってもう少し役に立ったわよ。」

2人の新兵を叱咤した先輩の女性兵士が、何かを思い出すように  
呟く。

「随分と先輩ぶりが板についてきたわね、暮羽ちゃん。」

「あ、フィリシア少佐。」

墨埜谷暮羽兵長は、やってきた小隊長のフィリシア・ハイデマン  
少佐にピシッと敬礼する。

「別にそんな堅苦しいことしなくてもいいのに。」

「いえ!ちゃんとしないと、新兵に示しが付きませんから。」

「そうね。けど、怒ってばかりじゃ彼女達も付いてこないわよ。梨  
旺だって怒ってばかりじゃなかったでしょ?」

「そうですね。・・・梨旺先輩や彼方、乃絵留まで日本に行っちゃ  
って。皆のことを知っているのは、私と少佐だけになっちゃったし。」

「

「けど、暮羽ちゃんが無理しなくてもいいのよ。あの娘たちは、こ  
れからじっくりと時間を掛けて皆に慣れてくれればいいんだから。」

フィリシアの視線の先では、新兵たちが四苦八苦しながら作業を  
行っていた。

「でも、やっぱり梨旺たちがいないと寂しいわね。」

「ですね。」

2人は遠く異国の地で勉強しているであろう、3人に想いを馳せる。

「私達も日本に行きたいわね。日本には美味しい物や、珍しいものがたくさんあるって言うし。」

「今度の休暇にでも遊びに行きます?」

「いいわね。」

そんな風に2人が会話をしていると、砦の入り口の方から音がした。

「あ、私行つてきます。」

暮羽が扉を開けると、そこには最近始まったばかりの、赤い郵便の帽子を被った男が立っていた。

「こんにちわ。第1121小隊宛に国際小包です。」

「国際小包?」

暮羽は小箱を受け取った。

「はい。ではよろしく。」

用を済ませると、郵便局員は行ってしまった。

「どこからかしら？・・・あ！？」

小包につけられた伝票を見て、暮羽はすぐにフィリシアの元へと走った。

「フィリシア少佐！！」

「どうしたの？暮羽ちゃん。嬉しそうな顔をして。」

「彼方から小包です。」

「あら。一体何を送って来てくれたのかしら？」

「開けますね。」

暮羽は外側の包装紙を解き、中身を出すと。中には綺麗な装飾が施された小箱と、手紙が一枚入っていた。フィリシアがそれを読む。

「フィリシアさんと暮羽ちゃんへ。お元気ですか？私はとても元気です。今日も音楽隊でがんばってトランペットを練習しています。・・・中略・・・今日はプレゼントを贈ります。オルゴールと言う、箱を開けると音楽が鳴る機械です。私のとっても好きな曲です。楽しんで下さい。・・・だって。」

「へえ、開けてみて良いですか？」

「いいわよ。私も早く聞きたいし。」



2人がオルゴールを開けると、中から綺麗な音楽が流れ始めた。

「うわー、素敵。」

「不思議ね。この曲を聴いていると、あの娘がすぐ側にいるみたい。」

音楽はどこまでも響き渡るかのように、皆に広がっていった。

## ヘルベチア転移編 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 東露帝国転移編 1

1年目 中部太平洋上 海上自衛隊護衛艦「えちご」

海上自衛隊護衛艦「えちご」は2011年度予算で建造が開始された「えちご」級ヘリコプター護衛艦の1番艦である。と言うより、同型艦はない。

本来は19500t級護衛艦として建造予定だったが、2010年の黄海における北朝鮮と韓国の武力衝突事件を受けて設計をやり直し「ひゅうが」級ヘリコプター搭載護衛艦の武装強化型に設計しなおされた。

その後2番艦の建造が計画されたが、予算が付かず着工が遅れたのに加えて、昨年の転移による周辺情勢の変化から、以後はターボプロップ機搭載中型空母の「瑞鶴」級とハリヤー戦闘機搭載可能な航空機搭載護衛艦「あかぎ」級にシフトされた。

「えちご」は転移後の防衛力強化と、造船所救援の目的から竣工が早められたものの、結局同型艦のない珍しい艦となってしまった。

海上自衛隊ヘリコプター搭載護衛艦「えちご」

基準排水量16000t 全長205m 速力30ノット

武装76mm速射砲2基

20mmCIWS2基

VLS16セル2基

3連装対潜魚雷発射管2基

搭載機最大11機（戦闘ヘリ2機 対潜ヘリ8機 掃海ヘリ1機）

この日「えちご」は護衛艦「はるかぜ」「ゆうだち」補給艦「ましゅう」と共に、竣工後の遠洋航海訓練に出動していた。

母港である舞鶴を出港、津軽海峡経由で太平洋へ出た後はトリスティンのラ・ロシエール軍港で補給を行い、さらにそこから東へと向かった。

この付近は衛星情報でも何もない大海原が広がっているのが確認されており、各国海軍にとって遠洋航海訓練や実弾演習を行うための演習海域として重宝されていた。

ところが彼らは演習予定海域到着直後、想いも拠らぬ事態に出くわした。天候が急速に悪化すると共に、海上に靄が発生して視界も悪くなった。さらに、各艦内でも異常が発生した。

「電子系機器、一切使用不能！」

「無線、GPS反応無し！！」

「こちら機関室。エンジンは正常に作動していますが、各種計器が滅茶苦茶に動いています！」

艦内各部から異常を報せる報告が艦橋へと上げられた。

「艦長、強力な磁気嵐が何かに突っ込んでしまったようです」

「えちご」の副長兼船務長である角松洋介二佐は、司令官席に座る臨時隊司令兼艦長の梅津三郎一佐を見やる。

「各艦の状況はどうだ？発光信号で確認できないか？」

「各艦もどうやら似たような状況見たいですよ。いずれの艦からも電子機器の使用不能と無線・GPS反応消失と言ってきています」

艦橋後方の張り出しから、後続艦に発光信号を行っていた航海長の尾栗康平二佐が戻ってくるなり報告する。

「とにかく収まるのを待つしかないようだな。航海長、後続艦に現状維持を送ってくれ」

「わかりました！」

「えちご」以下4艦は悪化した視界の中で無線も使えないと言う状況にありながら、発光信号で連絡を取り合い、目視で互いの距離を確認しながら進み続けた。

梅津の読みどおり、10分ほどして待望の報告が艦橋にあげられた。

「各電子機器正常に戻りました！」

「無線、GPS復旧！衛星軌道上の衛星を確認！」

視界も回復し、急速に天候も回復してきた。

「どうやら抜けたようだな」

梅津はホッと一息を吐いた。

「ですが、もしかしたらどこかに異常があるかもしれません。確認させましょう」

「そうだな。早速やらせよう」

ところが、次なる異常事態が「えちご」を襲う。

「艦橋CIC！」

艦の中枢というべきCICに詰める砲雷長の菊地雅行三佐から交信が入った。すぐに角松が対応する。

「どうした菊地？何か異常でも見つかったか？」

「ああ。レーダーが不審な反応を探知。2時方向、距離30海里に多数の艦船と思しきエコーを捕捉！その数およそ40！」

「それは間違いないのか！？」

「ああ、何度も確認したが間違いない」

「艦長！」

「今日この付近を航行中の艦艇は、我々以外無い筈だな？」

梅津が確認を取るが、それは角松にも分かりきっていることだった。

「はい。この方面で演習を行っていたロクシエ艦隊は2週間近く前

に引き揚げています。それに、その数も20隻程度だった筈です。40近い反応があるなど、考えられません」

「となると、新たな転移現象が発生した可能性もある。副長、ただちに本国にこの事態を打電しろ。CICにはレーダーの反応を捕捉しつつけるよう指示してくれ。それから万が一と言うこともある。総員対艦戦闘用意！」

「了解です。総員対艦戦闘用意！！」

艦内に戦闘配置を告げるアラームが響き渡る。

「我々はどうしますか？針路を変えますか？」

尾栗が指示を求める。

「現状では命令に変更は無い。このまま現針路と速度を維持せよ」

「わかりました」

尾栗に指示をした梅津は、報告のあった2時方向に双眼鏡を向けた。もちろん、双眼鏡を使ったところで目標を視界内に捉えることはできず、大海原が広がるだけであった。

それから20分ほど航行を続けたが、相変わらずレーダーでは正体不明のエコーを探知し続けていた。

「艦長！」

「どうした副長？」

「「ゆつだち」から意見具申で、偵察ヘリを飛ばしてはどうかと言  
つてきています。どうしますか？」

「うーん・・・少し待て。本国からの回答を待とう」

梅津は本国からの指示が出る可能性を考え、一旦角松の意見を保  
留とした。

待望の回答は、それから10分ほどして届けられた。

「通信室艦橋！」

「艦橋だ！」

「海上幕僚長名で次のような内容を受信しました。ただちに不明反  
応の調査にあたれ。以上です」

「わかった。航海長、針路変更。不明反応と最短で接触できるコー  
スに変針してくれ。後続艦にも打電」

「わかりました」

尾栗は命令を実行するべく、すぐに動いた。間もなく「えちご」  
以下4隻は、その舳先を不明目標方向に合わせた。

「ヘリを出すべきでは？」

「距離30海里なら、ヘリを出す必要はあるまい。すぐに接触でき  
る。ただし「スーパーパー」とSH60Kはすぐに出せるように



だけはしておいてくれ」

「わかりました」

「それと、不明目標が何かわからんが。全ての周波数で交信を試みてくれ」

「わかりました！」

「CIC艦橋！」

またもCICの菊池二佐から通信が入る。

「どうした？」

「不明反応より複数の小型目標分離！」

「ミサイルか！？」

「いや、速度から考えて恐らくヘリか何かだ。内1つが我が部隊に接近中！対地速度100ノット！距離28海里！」

「100ノットと言うことは、ミサイルやジェット機の類じゃないな・・・」

「対空戦闘用意掛けますか？」

「任せる」

梅津の言葉に、角松は頷くと艦内マイクを送に入れた。

「総員対空戦闘用意!!」

これで対艦と対空両戦闘準備がなされたこととなる。

「不明対空目標接近! 2時方向! 高度1000m」

「目標の識別に掛かれ!」

直に艦橋内や艦橋外の張り出しの者が双眼鏡による確認に入った。さらに、艦に取り付けられている外部モニターが目標に指向する。これでCICでも目標の確認が出来る。CICでは捉えた不鮮明な映像を解析し、目標の機種の割り出しに入る。

「目標はレシプロ機! 降下中!」

「目標機種不明! …いや、これは…接近しているのは旧軍  
アンソウ  
の零式水偵です! 目標さらに降下!」

その報告に、ほぼ全員が耳を疑った。

「旧軍機だと!?!」

「お! 見えた! …マジかよ! 本物だ!」

尾栗らの双眼鏡には、確かに主翼の下に2つの大きなフロートを搭載した水上機が映っていた。

「目標は本艦直上を通過する模様!」

間もなく、その零式水偵は「えちご」上空を通過した。その主翼と胴体には、日の丸は描かれていなかった。

「目標にラウンデルの国籍マークを確認！日の丸じゃありませんでした！」

「どこの国の物かわかるか？」

複数の円の組み合わせによるラウンデルの国籍マークは、日本が以前いた世界ではそこから中で採用されていた。蛇の目と俗称されたイギリス。フランス、イタリア、フィンランド、インド等々挙げればキリがない。

「外から青、赤、白でした・・・該当する国家はありません！」

「となると・・・」

梅津が出しえる答えは一つしかなかった。

「通信室艦橋！不明反応よりと思われる電波を受信！2通あります！」

通信室からの

「読んでくれ！」

「はい！我大日本帝国第二航空艦隊。貴艦隊の所属を問う。もう一つは、発信者名がロシア帝国海軍太平洋艦隊となっているだけで、内容は同じです」

「大日本帝国とロシア帝国・・・」

「おいおい、異世界に来て少しのことじゃ驚かなくなったけど、今度は亡霊の登場か!？」

尾栗が叫ぶ。

「あり得ない話じゃない。色々な世界がこの星に飛ばされてきているんだ。どんな世界が来ても不思議じゃない。しかし艦長、どうしますか？」

梅津はしばし目を瞑って考え込んだ。

「我々の任務は不明目標の調査だ・・・副長、不明艦隊に向けて打電」

「内容は？」

「我に戦闘の意志なし。これより貴艦隊と会合し、会談を求む。それでいいだろう」

「了解しました。ですが、念のためこのまま戦闘配置を解かないことを勧めます」

「それは副長に任せるよ」

「わかりました。では、早速」

梅津の指示した内容の電文が、発信された。それに対する返信は、予想以上に早く帰ってきた。

「了解。貴艦隊の合流を待つ・・・か・・・副長、全艦マイクを」  
「は！」

マイクを受け取ると、梅津は全艦に向かって放送を開始した。

「達する。艦長の梅津だ。本日予想外の状況が続発しているが、恐らく転移現象が起きた可能性が高いと私は判断している。我が隊はこれより、不明艦隊との接触を行う。想定すら出来なかった状況に戸惑いもあると思う。しかし、私は諸君らが海上自衛官としての職務を全うできると信じている。以上」

梅津はマイクを角松に返した。

「これより、我が隊は不明艦隊と接触する！よろしく頼むぞ」

「は！」

30分後、「えちご」以下の海上自衛艦隊は不明艦隊と接触した。

「これは壮観だな」

梅津はそう言わずにはいられなかった。太平洋戦争時代と思しき旧式の艦艇ばかりであったが、40隻近くもいれば、壮観以外の何物でもなかった。

「「大和」級戦艦が3隻・・・大型航空母艦4隻に小型航空母艦2

隻。大小巡洋艦12隻。そして駆逐艦が20隻強。こいつは強力な機動艦隊です」

「うちの科の柳が喜ぶ筈です・・・お！？艦長、「大和」級戦艦に発光信号を確認！貴艦隊との会合を祝す。味なことしてくれるじゃないか」

「航海長、こちらも返信だ。内容は、これより会談を行いたしだ」

東露帝国転移編 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 東露帝国転移編 2

1年目 中部太平洋上 海上自衛隊護衛艦「えちご」

「それでは、行つて来るぞ！」

海上に降ろされた内火艇から、「えちご」副長である角松二佐の  
声が響く。

「艦長、副長、お氣をつけて！」

「柳！しっかりと補佐するんだぞ！」

艦に残る菊地砲雷長と尾栗航海長の表情は少々不安げであつた。  
これから「えちご」艦長の梅津一佐と角松、そして航海科より選抜  
された柳一曹の3名は正体不明艦隊との会談に挑むのだ。会談場所  
に指定されたのは「大和」級戦艦の内の1隻であつた。

内火艇は「えちご」を離れ、不明艦隊の中心へと向かつて動き始  
めた。

「しかし、本当に見れば見るほど驚きです。本当に旧軍の艦隊なの  
でしょうか？」

双眼鏡で艦隊を観察しながら言つた角松の言葉に、同様に双眼鏡  
で観察していた梅津も頷く。

「まあ会つてみればわかるだろう。それに旧軍も気になるが、あち  
らのロシア帝国を自称する艦艇も気になる」



梅津が目をやった先には「大和」級戦艦が海上に停止していた。外見はどう見ても映画や写真などで御馴染みの「大和」である。しかしその艦尾に掲揚されているのは旭日旗ではなく、白地に青のクロスロシア帝国海軍旗であった。

またロシア艦艇の艦首には双頭鷲のエンブレムが付けられていた。

「柳、お前はと思う？」

航海科より派遣された柳一曹は尾栗航海長曰く「うちの科の柳は超が付く戦史オタクです」と言うことで、今回の会談にアドバイザーとして派遣された。

「艦長と副長も知つてのとおり、我々が元いた世界でのロシア帝国は1918年に皇帝一家が惨殺されたことで幕を閉じました。当然「大和」級戦艦を運用しているなどありません。となると、我々が元いた世界とは違う世界から転移したと考えてよろしいかと」

柳の言葉に、2人も頷く。ちなみに護衛艦の方が転移もしくはタイムスリップした可能性は、既に本土と連絡が取れ、さらにトリスティンやロクシエなどから発信される電波を傍受したことで否定できた。

「そうなると艦長、かなり難しいことになりますが」

「なあに、今更のことだよ。この世界では何が起きてもおかしくはないよ」

「ですが、やはり本国からの具体的な命令が届くのを待つべきだっ

たのでは？」

「それでは遅すぎるよ。こちらも向こうに発見されたんだ。だってら直接会って話すのが筋だ。それに、海上幕僚長からは不明反応の調査を命じられている。直接会ってみるのも調査の内だよ」

「そう来ますか」

「副長こそ、良かったのか？」

「ええ。尾栗と菊池の2人だけでも大丈夫でしょう。艦長のことは、3人の中で私が一番良く知っているつもりなので」

「まあ、よかろう」

2人が2人だけがわかる会話を終えた時、柳が興奮しながら口を開いた。

「艦長、副長。やはりこれらの艦隊は我々の歴史の旧軍艦艇とは大きく違います」

「その根拠は？」

角松の言葉に、柳が説明を始めた。

「まず艦艇上に搭載されている対空火器が違います。史実の旧軍艦艇は、主に25mm機銃を搭載していました。しかしながら、今見える巡洋艦の艦上には40mm機関砲らしい大口径砲が見えます。それにマストに搭載されているレーダーの種類も多いです」

「うむ」

「またロシア海軍旗を掲げた艦艇も気になります。戦艦や空母は日本の「大和」級と「瑞鶴」級ですが、巡洋艦と駆逐艦には日本の「利根」級や「秋月」級に似た艦艇も混じっていますが、英国の「サウザンプトン」級や「トライバル」級らしい艦艇も見受けられます。」

柳の説明に、2人は再び頷いた。2人は柳ほど太平洋戦争史に詳しいことはないが、防衛大学校と幹部候補生学校でそれなりに勉強している。

「それにしても、嬉しそうだな柳」

「はい、本物の旧軍艦艇を見ることなど出来ませんから」

柳の言葉に、角松は苦笑いしながら言う。

「喜ぶのは良いが、相手に失礼の無いようにな」

「は！」

そんな風に会話をしている間に、内火艇は「大和」級戦艦のタラップの下へと到着した。艦上には多くの人間が立っている姿が見て取れた。

3人はタラップを上っていった。この内角松だけは防水性のバツクを抱えていた。

タラップを上がり終え甲板に上がると、そこにはズラッと小銃を

抱えた水兵がタラップの出口を囲むように立っていた。

「これはまた派手な歓迎だな」

梅津が表情一つ変えずに呟いた。対して柳は観察することに余念がなかった。

「あれは九九式小銃ですね。そして軍装もやはり旧海軍に間違いありません・・・あ!？」

「どうした?」

角松が突然言葉を失った柳に、怪訝な表情をする。

「まさか・・・そんな!？」

「うん?」

柳が驚愕したのは、ある人物を見つけたからであつた。そしてそのある人物のほうから、3人に近づいてきた。白い制服を着た将軍と、もう1人は同じく将軍らしかったが、上は白で下は黒の制服を着込んでいた。

梅津と角松、少し送れて柳も敬礼した。

「日本国海上自衛隊護衛艦「えちご」艦長の梅津三郎一等海佐です」

「同じく「えちご」副長の角松洋介二等海佐です」

「「えちご」航海科所属の柳一信一等海曹です」

すると2人の将官も答礼した。

「大日本帝国海軍第二航空艦隊司令の山口多聞中将だ」

「ロシア帝国海軍太平洋艦隊司令の伊藤整一中将だ」

2人が名乗った所で、さすがに梅津と角松も驚き顔を見合わせた。

山口多聞は元いた世界の西暦1942年6月のミッドウエー海戦において、第二航空戦隊司令として戦死した人物である。また伊藤整一も1945年4月に第二艦隊司令長官として戦艦「大和」に座乗し、沖縄への特攻途中に「大和」と共に戦死した人物である。

角松はどうして柳が驚き、言葉を失ったかようやく理解できた。

「さて互いに平和的に出会えたのはいいが、色々と君たちには聞きたいことがある」

「それはこちらと同じです。どこかでゆっくりと話すことは出来ないでしょうか？」

梅津の言葉に、山口が頷いた。

「会議室で話をしたいと思うが、よいかな？」

「はい、構いません」

3人は艦内へと案内された。

3 時間後、梅津艦長たちを乗せたランチが「えちご」に戻ってきた。

「お！？艦長たちが戻ってきたぜ」

「無事で何よりだな」

留守番していた尾栗や菊地らがホッと安堵の息を吐いた。しかしながら、対照的に内火艇から「えちご」へと戻った梅津と角松の表情は真剣なものであった。

「艦長、一体あの艦隊の正体は？」

「一体どんな話をしてきたんです」

菊地と尾栗の質問に、梅津は答えることなく逆に命令した。

「至急、各艦の幹部を集めてくれ」

1 時間後「えちご」の会議室に各艦の主だった人間が集められた。

「早速だが、先ほど我々が聞いてきた話の内容を伝えようと思う。色々信じられないことも多いだろうが、諸君には冷静に聞いてもらいたい」

それから、梅津と角松による話が始まった。その内容は聞き手である自衛官たちを驚かせるものであった。

目の前に現われた艦隊は大日本帝国海軍の第二航空艦隊とロシア帝国海軍の太平洋艦隊主力で、彼らの元いた世界での西暦は1943年8月だったとのこと。そして彼らのもといた世界では、ロシア帝国が存続しているとのこと。

「ロシア帝国が存続している!？」

「では、ロシア革命は失敗したと言うことですか？」

「いや、それとも違うらしい」

角松の言葉に、参加者が首を傾げる。

「彼らが言うには、ロシア帝国の正式名は東露西亞帝国と言って、首都もノーヴァ・サンクトペテルブルクだそうだ・・・もつとも、我々にはアンカレッジと言ったほうがわかりやすいがな」

「『アンカレッジ!？』『』」

さすがにその都市名に聞き覚えのある人間は多かった。何せつい1年前までいた世界にあった地名なのだから。

角松は続けた。

「簡単にしか聞いていないが・・・」

角松の話に拠れば、彼らの元いた世界では1867年のアメリカへのアラスカ売却が発生せず、アラスカはその後もロシアの領土であり続けた。そして1918年のロシア革命によってニコライ2世皇帝とその家族は惨殺されたが、唯一四女のアナスタシアだけは救

出され、脱出できた。そして1921年に共産党による支配を免れていたアラスカで、アナスタシアが新皇帝として即位し、東露西亜帝国として独立したらしい。

「いやはや、まるで小説の話だな」

菊地の言葉は、他の参加者全ての気持ちを代弁していると言って良かった。

「それだけじゃないぞ菊地。彼らが言うにはハワイも王国として存続しているらしい」

「何!？」

「彼らはそのハワイ王国の真珠湾を拠点にして、アメリカと戦っていたそうだ」

「つまり、日本とロシアとハワイは同盟国だったってことか？」

尾栗の質問に、角松は頷いた。

「しかもただの同盟国どころの話じゃないぞ。ロシア帝国軍は実質日本人が動かしているらしいぞ」

「はあ!??どう言う意味だそれ？」

驚く尾栗を含む人間に対して、再び角松は説明を始めた。

東露西亜帝国はアラスカのみが領土であり、その人口は100万強である。これでは強大なソ連から国を守るだけの軍隊を編成す



るなど無理であった。

そこで、ロシア帝国が取った方法が日英など友好国からの傭兵受け入れであった。傭兵だけでなく、艦艇などもほとんどこの両国からの輸入品で、最近では地理的に近い日本からの輸入が群を抜いて多かつたらしい。

しかも、傭兵としてロシア軍に参加したがそのままロシア側に帰化した人間も少なからずいるらしい。

「先ほど会ってきた伊藤整一中将も帰化した人間だそうだ」

「なるほどね」

「ところで、今回の転移はあの艦隊だけなんでしょうか？」

菊地の質問には、角松も答えに困った。

「向こうも一時的に無電がダメになったそうだが、俺たちと話している最中にハワイと連絡が付いたと言っていた。だが、こればかりは衛星からじゃないとわからないだろう」

角松としては、それ以外に言いようがなかった。

「日本本土から何らかの連絡はまだないのか？」

「何も来ておりません。確認中としか」

これでは行動の取りようがなかった。参加者からも良い意見は出ず、やむなく梅津が最終的な判断を下した。

「まあ、人工衛星の数が少ないのでは確認に時間が掛かっても仕方がないだろう・・・我が隊は別命あるまで待機とする。引き続き各艦は日本艦隊とロシア艦隊の動きに注意してくれ。以上だ」

**東露帝国転移編 2（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。

### 東露帝国転移編 3

1年目 中部太平洋上 帝国海軍戦艦「信濃」 大会議室

「ふむ。異世界ね」

「俄かに信じ難い話だな」

梅津らから、一通りの話を聞いた山口多聞中将と伊藤整一中将の感想である。しかし2人の感想はまだ良いほうで、参謀などから「バ力にするな!」とか「貴様ら我々をおちよくっているのか!」と散々な反応であつた。

当たり前と言えば当たり前だが。しかしそんな答えに対しても、梅津らは冷静であつた。

「まあ、常識的に考えれば信じられないのは当然です」

梅津は角松に目配せした。

「そこで、我々も証拠をわずかばかりではありますが持つて参りました」

角松が持つていた鞆から出したのは、パソコンだった。

「それは?」

「これはパーソナルコンピューターと言いまして、我々の時代には様々な用途に使用される機械です。映像を映すことも可能なので、

今回は皆さんに我々の世界の映像を見ていただきたいと思います」

「えちご」艦内には小さいながら、資料室が設けられている。今回角松たちが持ってきたのは、そこにある歴史のDVDであった。

「では、再生します」

DVDをパソコンに挿入すると、角松は再生のスイッチを押した。

2時間後 海上自衛隊護衛艦「えちご」艦橋

「それで、どうなったんだよ洋平？」

角松から、つい1時間前まで行われていた「信濃」でのやりとりを聞いていた尾栗は、話の続きが気になって仕方がないようだ。

「まあ、色々と驚かれた。それだけだ。ただし、向こうもある程度は理解してくれたらしい。伊藤中将はともかく、山口中将は猛将と聞いていたから、途中で怒り出すんじゃないかと思ったが、最後まで冷静に話を聞いてくれたよ」

「映像だけで説得出来たのか？」

「まさか。向こうも異常事態を察知したからだよ。本国とハワイとの通信は取れているが、その他の地域との連絡が途絶しているのと、こちらの世界の電波を拾ったらしいから、こちらの話を嘘だとは決め付けられなくなったようだ」

菊地の問を、角松はやんわりと否定した。

角松の言葉に、菊池が頷く。

「まあ、それが妥当だろうな。いきなり信じられたら、それはそれで困るぜ」

「それはともかくとして、本艦でも今までにない発信源の電波を多数探知しているから、新しい国が転移してきたのは確実だな」

菊地の言葉に、角松は問い返す。

「その内容はわかるか？」

「平文ばかりだからな。多くは現状がどうなっているかの問い合わせ電だ。発信地はキスカやアッツ、ホノルル、ノーヴァ・サンクトペテルブルクになっていたから、お前たちの言っていたアラスカにあるロシアがそっくりそのまま国ごと、しかもハワイが付いて転移してきたと考えていいんじゃないか？」

「わからないぞ、無線だけでの推測には限界がある」

3人が色々と憶測を立てる中、梅津は冷静に呟いた。

「まあ、それは衛星が上空を通ればすぐにわかるだろう。本国からの追加の命令がないなら、我々はこのまま当初の命令を続行するぞ・・それから、対潜対空警戒を厳にな。山口中将と伊藤中将の言うことがただしければ、彼らはアメリカとの戦争中だった。さすがにアメリカ艦隊が近くにいるとは考えられないが、潜水艦や航空機はいるかもしれん。レーダーとソナーの反応、ならびに通信の傍受に細心の注意を払うように」

梅津が気にしているのは、転移してきた物に彼らの敵も一緒について来ていないかと言うことだった。転移してきた日本艦隊とロシア艦隊のいた世界では、太平洋で日露と米ソが戦っていたらしい。そのため、米ソの艦艇や航空機が現われてもおかしくなかった。

もちろん、梅津はその事も既に日本へ向けて打電させていた。

「万が一アメリカ・・・第二次大戦中のアメリカ合衆国になります  
が、その艦艇や航空機と接触した場合はどうしますか？」

角松の質問に、梅津は逆に問い返した。

「副長はどう思う？アメリカは我々にとって敵かな？」

「何もしなければそうでしょう。しかし、万が一敵対行動を取った  
場合は、自衛権の行使の対象となるかと」

「そうですね艦長。撃たれたら撃ち帰すのは当たり前です。それは  
認められていることじゃないですか？」

尾栗の言葉に、菊地も頷く。

「2人の言うとおりです。我々は自衛官であります。もちろん、相  
手に対して警告するなどの必要はありませんが、このような緊急事  
態においては、現場の判断で行動することは、既に認められていま  
す」

「・・・よからう」

「しかし、アメリカ軍と戦うことになったらどうなるか？」

角松の疑問に、尾栗が多少呆れ気味に答える。

「相手は70年以上前の艦艇や航空機だろ？こつちには対空ミサイルや対艦ミサイルもあるし、対潜兵器だって当時とは比べ物にならないくらい進んでいるんだ。簡単に撃退できるだろ？」

「確かに、我々ならな・・・しかし、太平洋上には多数の漁船が操業しているし、数は少ないが東回りでサクラスへ向かう商船だっている・・・そう言えば、それらが遭難したと言う情報は？」

「今の所、入っていない。もつとも、絶対には言い切れないがな。何せまだ転移現象の確認から半日も経っていないんだからな」

「うーん・・・」

尾栗の言葉に、角松は呻くしかなかった。

この短時間では例え遭難船舶があつたとしても、海自、海保、そして新設された海上警備機構も把握できるかはわからない。だいいち、どの組織も今頃は新たに転移してきた国家や船舶の把握の方が忙しい筈だ。

「ま、俺たちが考えた所で始まらん」

と尾栗が言った時、新たな報告が入った。

「戦艦「信濃」より入電。「我これより真珠湾へ帰還せん。貴部隊は如何せられるや？」です」



「艦長、どうしますか？」

「・・・本土からも自衛艦隊司令部からも新たな命令はまだ来っていないな？」

「はい。確認されておりません」

「では我々の任務はそのままだ。全艦機関始動。白露両艦隊の後方2000mに付け。このまま両艦隊を追求する。両艦隊にもその旨を打電しろ」

「わかりました」

「しかし良いんですか？」

角松の言葉に、梅津は笑みを浮かべて答える。

「まあ良からう。命令に変更はないし、幸いにも燃料や食料も「ましゅう」がいるからな」

その言葉に、角松も苦笑せずにはいらなかった。

同時刻 戦艦「信濃」艦橋

「海上自衛艦隊、報告にあったとおり駆逐艦「グロースヌイ」の後方2000mにつきました。現在我が艦隊と同速度で追ってきています」

「よろしい。針路速度そのまま。海上自衛艦隊には引き続き警戒を続ける。ただし、くれぐれも下手なマネをしないよう、各艦に厳命しろ」

「了解です！」

「やれやれ、また可笑しいことになったもんだな」

第二航空艦隊司令官である山口多聞中将は、そう言つと「信濃」の司令官席に腰を降ろした。

「しかし長官、彼らの言っていることは本当なのでしょう？」

「俺も俄かには信じられんよ、樋端君」

山口は後に立つ艦隊参謀長である樋端久利雄少将に笑いながら言つた。

「しかし、彼らが見せてくれたあの映像やパソコンとか言う機械はどう見ても本物だったし、我が国やドイツでも真似できん技術だ。それに、東露帝国から来た電文もある・・・あと、あの梅津とか言う男。とても嘘を言っているようには見えなかった。ま、それは俺の感に過ぎんがな」

そう言つと、彼は再び笑つた。

「人殺し多聞丸にそう言わせられる男と言うことは、中々の人間だと言つことですね・・・まあ、それはいいとして、確かに東京やトラックからの通信は途絶えていますし、ハワイやアラスカからくる

電文の内容も常軌を逸しています。しかし、異世界とは・・・」

「理解しがたいのは事実だ・・・ま、ハワイの中部太平洋方面艦隊司令部から全作戦の中止命令が出た以上止むを得ない。我々は真珠湾に帰るだけさ」

「あの艦隊は付いてきますが？」

「敵でないのなら、追っ払う必要もないさ。もちろん、戦闘になったら退避を勧告するだけだがな」

山口は、異世界であろうとなかろうと艦隊に通常と同じく対空と対潜警戒を厳にするよう命じていた。梅津のように、アメリカ軍やソ連軍の襲撃があるとは微塵も考えていなかったが、軍人としての警戒心を疎かにするようなマネだけはしなかった。

さて、この時日本をはじめとする各国の政府は、文字通りの大混乱に陥っていた。何せ初めての新たな転移国の登場である。これまで可能性を取り沙汰されてきたが、こうも早く来るとは誰も考えていなかった。

そこで期待されたのが、日本の偵察衛星であった。この世界で唯一宇宙技術を持つ日本は、他国政府の了解の元気象用や事業用、偵察用の衛星をここ1年で多数打ち上げていた。

それらは転移前の衛星の補完のみならず、この星やこの星が存在する宇宙の観測に役立てられ、そのデータは諸外国からも高い評価をもらっていた。

この時もその性能を如何なく発揮することとなった。

366日目早朝 日本 東京首相官邸

「で、JAXAから送られてきた写真がこれか・・・」

日本国首相春川は、持ち込まれたばかりの写真を眺めた。

「地球自体の地図と照合した結果、間違いなくアラスカです。ついでにアリユーション列島の島々も全て確認できます。またハワイ・ミッドウェー・ウエークの各島も確認できます。今回の転移は、再び大規模で発生した模様です」

JAXAの技術者が説明する。

「それで、現状は？」

「現在演習中だった海上自衛隊の1個戦隊が、転移してきた艦隊を追及中です。現針路と向こうからの連絡にあったとおり、ハワイに向かっているようですが・・・どうします？やめさせますか？」

石川防衛大臣の言葉に、春川は首を振る。

「そのまま追わせてくれ。場合によっては、そのまま相手政府との接触を行うよう命じてくれ」

「よいのですか？」

「ああ。一度交渉して手ごたえがあつたのなら、このままやらせよう。ただし、逐一連絡は取り続けるように。昨日みたいに6時間遅れじゃ話にならないぞ」

「わかりました」

そう言うと、春川は溜息を吐いた。

「やれやれ、また厄介ごとが増えたもんだ」

「まあまあ。今は現実と向き合いませんと」

「そうだな。サクラスとロクシエ、トリステインにも詳細を伝えなきゃならんし・・・ああ、憂鬱だ」

「それだけじゃありません。漁船や貨物船の中に、行方不明船も出ています。そちらへの対応も必要です」

「わかつてるよ」

と春川が素っ気無く答えたとき、新たな情報が石川に伝えられた。

「・・・首相、困ったことになりました」

「どうした？」

これ以上厄介ごとを増やされたくないと、露骨に顔に出ていたが、それでも聞かないわけにはいかなかった。

「北緯40度、東経170度付近において操業中だった漁船が救難信号を発した後消息を絶ちました」

「・・・勘弁して欲しいな」

東露帝国転移編 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 東露帝国転移編 4

1年目+1日 西太平洋上 護衛艦「えちご」

「「えちご」以下各艦は北太平洋上において消息不明の漁船の調査を行うべし。なお、万が一攻撃を受けた場合については自衛目的のための武器使用を現場判断にて許可する・・・か」

防衛大臣名で出された命令を読み上げると、梅津は静かに目を閉じた。

昨日、突如として現れたのが艦隊だけではないことは、既に衛星や電波情報からも確認されていた。地球のアラスカに当たる地域と、<sup>ハワイ</sup>布哇諸島を含む島嶼の一部が丸々転移してきていた。

幸いなことに、すぐに日本をはじめとする各国政府はこの転移してきた東露西亜帝国や布哇王国に対して間接的、ならびに直接的な接触を試みた。

間接的な接触は電波によるもの。直接的な接触は、梅津たちを含めた海上自衛隊や航空自衛隊によって行われた。特にトリスティン駐留の航空自衛隊のF2戦闘機による、航続距離ギリギリのウェーク島への強行偵察飛行は、勇敢を通り越して一步間違えば蛮行であった。

ただし、こうした素早い接触は東露帝国やハワイを中心に活動中の旧軍とのコンタクト成功と、無用な接触の回避に成功したと言える。



そのため、東露帝国と帝国海軍とこちらの世界の各国との間に起きた衝突は、いずれも大きな騒ぎにならず（せいぜい海上での睨みあい）で済んでいた。

しかしながら、北太平洋方面で操業していた、或いは航行していた艦船の中にはブツツリと通信を絶ってしまった船や、SOSを発して行方不明になった船が既に日本籍だけでも10隻近く出ていた。

その他にロクシエ国籍やサクラス帝国籍の船舶にも行方不明船が出ている可能性があった。

「えちご」をはじめとする、太平洋上にて活動中の各艦艇はそれらの搜索任務を命じられたのであった。

「副長、現在位置は？」

「現在、ハワイオアフ島の西40マイルです」

角松が言つと、航海長の尾栗が笑いながら続ける。

「さつきから旧軍やロシア軍の飛行機が引つ切り無しに我が部隊の側を掠め飛んでますよ。柳なんか目を輝かせてますよ」

「今の所接近する艦艇ならびに航空機が我が部隊への攻撃を行う兆候は見せておりません」

「それは何よりだ」

「それでどうしますか艦長？予定では、あと2時間もすればパールハーバーに入港ですが」

「命令が下った以上、我々はそちらを優先するしかない。副長、ただちに戦艦「近江」の山口中将と「アレクサンドル2世」の伊藤中将宛に発信。我が隊は本国よりの新任務を受領し、現海域を離脱せんとす」

「わかりました」

同時刻 戦艦「近江」艦橋

「如何いたしますか長官？」

戦艦「近江」の艦橋では、「えちご」からの信号を受ると樋端参謀長が艦隊司令長官である山口多聞中将に伺いを立てていた。

「ふむ。どうすると言っても、我々の任務は真珠湾への帰港だ」

山口らに出されていた命令は、当初の任務の即時中止と真珠湾への即時帰還であった。

山口としても、海上自衛隊と名乗る艦隊の動向は気になる所であったが、既に半日以上も同行している中で特に敵対行動を取るわけでもない。さらに実際に会った限りでは、彼らが嘘を言っているようにも見えなかった。

だから必要以上に、彼らを追う必要は感じていなかった。

「ですが、未だ所属が不確かなあの艦隊を勝手に行かせるのはどう

かと思いますが？」

「そうだな・・・中部太平洋艦隊司令部に転電しろ。それから水偵を出して追跡させる。中部太平洋艦隊司令部からの許可を受け次第、我が艦隊からも艦艇を分派して追跡させよう。それでいいだろ？」

「はい！では、早速」

「うむ」

5分後、「利根」級巡洋艦の「黒部」から零式水上偵察機2機が射出された。

そしてそのさらに30分後。ハワイ・オアフ島に置かれている中部太平洋艦隊司令部から、堀悌吉大將名で新たな命令が、第二航空艦隊に対して出された。

「ハワイ沖で補給艦より補給を受け次第、ミッドウェー方面に進出せよだ」と？」

同日 日本・東京

「前にも申しましたが、転移が確認されたのは間違いなく地球のアラスカからアリューシャン列島にかけてとハワイ諸島、そしてミッドウェー諸島にウェーク島です。非常に広範囲において転移現象が起きました」

文部科学大臣の報告に、春川首相は顔を曇らせる。

「で、その影響は？」

最初に質問に応えたのは、国土交通大臣だった。

「現在のところ、国内における異変は特に確認されておりません。以前から懸念のあった地震や火山活動の誘発と言った現象は全く起きていません。どうやら取り越し苦労で済んだようです。また国内に限って言えば、どこかの地域が消失したような事実もありません」

続いて文部科学大臣が発言する。

「JAXAの報告では、転移発生時に該当地域を周回していた衛星は2基で、いずれも健在が確認されています。しかし通信用衛星だったので、転移の瞬間を収めることは出来ませんでした」

次に発言したのは、木戸外務大臣であった。

「今の所、ロクシェ・トリステイン・サクラス・諸島などからは別段の異常事態を知らせる情報は入っておりません。ただし、行方不明になった船舶が複数出ており問い合わせが来ています。また、自衛隊から報告のあった東露西亞帝国やハワイ王国との接触は、外務省の方では通信を行うレベルが精一杯です」

「だろうな・・・で石川防衛大臣」

「はい？」

「駐留トリステインの空自部隊の戦闘機がウエーク島に飛行した件

はどう言うことかな？相当危険だったと聞いているが？」

転移半年後に締結された日本・トリステイン・サクラス・ロクシエの4カ国の枠組み条約に則り、トリステイン王国には他の3カ国の軍隊が駐留することとなった。

これはトリステインが転移後の混乱によって自軍の戦力をすり減らしたのに加えて、軍備の面から見て全くお話にならない程遅れていたため、アンリエッタやマザリーニと言ったトリステイン王政府が要請したためであった。

これら駐トリステインの各国軍は、トリステイン王国の防衛の肩代わりならびに軍事顧問として赴いていた。

もともと、距離的に離れているためサクラスとロクシエの軍隊は申し訳程度の規模に過ぎず、主力は日本の自衛隊であった。

トリステインには海自の護衛艦2隻と海上警備機構の警備船4隻に加えて空自のF2戦闘機6機が進出していた。

これらを運用する施設は突貫で建設され、つい先日春川もトリステインへ出向いて完成式を挙行したばかりであった。

「確かに危険には違いありませんが、理論的には飛んでいけない距離ではありませんでした。現にF2はウェーク島の撮影に成功して無事に帰還しています」

「だがなあ、高価な戦闘機だからなあ・・・と、こんな時に出し惜しりするもんじゃないか」

4カ国の枠組み条約によって、日本はトリステインの防衛を肩代わりするのに加えて、一気に拡大した防衛義務を果たさなければならなくなつた。

これはこの世界に数はすくないが、大型の怪獣の存在が確認され、今の所それらに有効な打撃を与えられる武器を持っているのは、日本の自衛隊だけであつた。

さらに、以前にも増して広がった海域を防衛・監視する必要まで出てきた。

そこで海上自衛隊と海上警備機構、海上保安庁の拡充が図られた。この内保安庁は沿岸部における治安維持と救難が主任務と決定し、国境や遠洋における警備と救難・保護を海上警備機構が、そして他国からの侵略への防衛と前者2組織へのサポートが海自に割り振られた新任務であつた。

既に転移前から、日本の防衛は海上と航空へ大きくシフトしていたが、その動きが転移によって拍車をかけた。

このため、日本政府は新防衛大綱を決定し、諸外国に目立った脅威がないことから現用兵器の調達を最低限に抑えて、それらよりも性能に劣るがコスト的にも生産時間的にも安心なロートル（日本基準で、他国から見れば20〜30年ほど進んでいる）兵器を大量に揃えることとなつた。

特に遠洋における保護任務を仰せつかつた海上警備機構は急ピッチで拡大が進められていた。

また海自でも、第二次大戦型の艦艇をベースに建造した廉価版艦

艇が多数配置予定（ついでに輸出予定）で、こちらも突貫で建造が進められていた。

空自もF2Cの生産が年4～6機まで減らされ、代わりに製造が始まる予定なのがターボ・プロップ式の「烈風」、「流星」、小型ジェット戦闘機の「震電」であつた。これは現用ジェット戦闘機の10分の1から12分の1の調達価格を予定していた。

だから、F2戦闘機や現用護衛艦は今後生産が最低限まで減らされ、まさに宝石よりも貴重な戦力であつた。

ちなみに、これらの艦艇建造や航空機製造は転移によって大幅に生産が落ち込んだ各種産業界救済の狙いもあつた。

「その通りですよ。せっかく高い買い物をしたんですから、こう言う時に有効活用出来なければ、それこそ税金の無駄遣いですよ」

小泉副首相の言葉に、春川は苦笑する。

「それもそうだ。で、行方不明になった艦船の搜索はどうなっている？」

まず石川が答える。

「現在太平洋上に展開している海上自衛隊の艦艇と航空機をあるだけ掻き集めて投入しています。既にトリスティンと大湊、横須賀に駐留している各艦艇が出撃しています。対潜哨戒機や空自の偵察機も出ています」

さらに農水大臣が続く。

「海上警備機構の警備船や監視船も船舶が消息不明になった地域へ向けて順次出撃中です」

「大変結構・・・だが、それだけの戦力を動かすとなると、後から野党から突き上げ喰らうだろうな」

「後の（政治家としての）危機よりも、今の（国家としての）危機ですよ。首相」

「わかってるよ小泉」

とその時、秘書官の朝日奈みくるが走ってきた。

「首相、サクラスのメイベル首相とロクシエ大統領、それにトリスティンのヴァリエール首相から問い合わせの電話が来ています」

すると、彼の顔が一気に憂鬱な物になった。

「わかってるよ。やれやれ、また厄介なことになったもんだ」

「それに対処するのが、首相の義務ですよ」

「わかつとるわ」



**東露帝国転移編 4（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。

## 東露帝国転移編 5

1年目＋2日目 東露西亜帝国首都 ノーヴァ・サクトペテルブルク（旧名アンカレッジ）王宮

「誠に信じがたいことですが、昨日から起きている異常事態から判断すると、我が国が異世界に飛ばされたと言うのは信じがたいにしても、何かしらこれまでにないことが起きているのは間違いないかと」

御前会議の席上、現首相であるミカエル・スカルスキー首相が玉座に座る現皇帝、アナスタシア1世に報告する。

今年42歳となるアナスタシアは、暗殺されたニコライ1世の子供の中で唯一の生き残りである。そしてこれまでも、共産主義者の手に落ちたロシアからの逃避行、ソ連による侵攻など様々な苦難に対処するなど人生は波乱万丈であった。

しかしながら運命はそんな彼女に、これまでにない大きな試練を課そうとしていた。

「あなた方はどう思いますか？この度の異常事態を？」

アナスタシアは、列席している閣僚たちに意見を求めた。

まず発言したのは、若い内務大臣のヤコフ・フォン・エッセンだった。

「極めて信じられないことですが、我が国とハワイ王国を除く周辺

諸国が消滅したのは、ほぼ間違いの無い事実のようです。カナダとの国境監視所からは、一瞬でカナダ側の陸地が消滅し、海になったと報告されています。私も最初は耳を疑いましたが、複数の監視所から同じ報告が届いている以上、信じざるを得ません」

そこで彼は区切ると、国内のことにも言及した。

「なお、現段階では厳重な報道管制を敷いているので、国民にパニックなどは起きていません。しかし、カナダが消滅している以上、早々に国民が騒ぎ立てるのは時間の問題です。その場合の対処法を考えておくべきでしょう」

続いて建国以来（東露西亞帝国の建国は1921年1月1日）の老練な外務大臣であるレオニード・フォン・ローゼンであった。

東露西亞帝国の政治体制は、大日本帝国に近い立憲君主制であるが、天皇が君臨すれども統治せずの道を行っているのに対して、この国では皇帝がそれなりの発言権を持っている。

しかしながら、そもそも国の全体人口が100万を超える程度の規模で、しかも建国を支えた閣僚や政治家、国民は皇帝に対して忠誠を誓っていた。

そのため、これまでに数度行われたソ連の侵攻を跳ね返すことも出来たし、政権が転覆することもなく、選挙を行ってもほぼ同じ人間が当選していた。

ただし、さすがに建国から20年も経てば人間の方にガタが来てしまう。現首相のスカルスキーは1933年に就任しているし、エッセン内務大臣も3年前に前任のクロムキンが病気で政治活動が継

続不可能となつたための就任であつた。

「外務省としましても、この異常事態に対処するのに四苦八苦しております。海外の大使館や領事館との連絡はハワイ王国を除いて全く取れません。カナダは言うに及ばず、日本や満州、イギリス政府とも連絡が取れなくなりました。それらの国から発信される電波もです。しかしながら、これまでにない周波数での受信がありますが、ハッキリ言つて理解出来ないものでして」

続いて国防大臣のコンドラチエンコが発言する。

「軍におきましても、この異常事態への対処を急いでいます」

コンドラチエンコに促され、参謀総長のルイブキン大将が口を開いた。

「現在太平洋上で活動中でした全艦艇、ならびに全部隊へ即時作戦中止を命令し、現状維持を厳命しております。なお、満州や日本などにはいた艦艇や部隊との連絡は大使館などと同じく取れておりません。加えて中部太平洋では我が軍の艦隊が既に国籍不明の艦隊と接触しております。その件に関しては、昨日の御前会議で報告したとおりです。また国内の偵察部隊がソ連並びにカナダを搜索しましたが、何も発見できておりません」

その後も各官僚から報告が相次いだが、重要な報告は以上のものであつた。

全ての報告を聞き終え、アナスタシアは口を開いた。

「わかりました……ところで、仮にもし我が国に接触してきた日本国

の言つとおり、我が国が異世界へと飛ばされてしまっているのならば、どう対処するべきだと皆は思いますか？」

その言葉に、閣僚たちは顔を見合わせた。

まずルイブキン参謀総長が発言する。

「陛下、確かに昨日から理解できない事象が連続しているのは私も理解しております。しかしながら、だからと言って我が軍が異世界へ来たと言う証拠にはなりません。アメリカやソ連の謀略という可能性もあります」

その言葉に、コンドラチエンコ国防大臣も頷いて賛成した。他の大臣からもほぼ同じような意見が出る。ただ1人、若いエッセン内務大臣のみが彼らとは違う意見を出した。

「確かに容易には信じられませんが、既に起きていること自体が常識では推し量れるものではありません。異世界へ飛ばされるというのは俄かに信じ難いことですが、可能性としては捨てるべきではないと考えます。それに相手が接触を求めているのなら、まずは受け入れるポーズを示すべきでは？……ヒロセ侍従長。あなたはどう思いますか？」

エッセンの言葉に、参加者全員の視線が1人の隻腕の老人に向けられた。

「おやおや。この老骨に意見を求めるのかね？」

「侍従長。私からもお願いするわ。あなたの意見を聞かせて？」

「私かもお願いいたします」

「陛下と首相閣下から頼まれては仕方ありません……私としては、エッセン大臣の意見を取るべきかと。もちろん、これは個人的な感情はありません。彼の言うとおり、今や何が起きてても可笑しくない。その状況下で、我が国と話し合いがしたいと言っているのです。もちろん、それ相応の備えはしておくべきでしょうが、平和的に話し合いを求めているのに拒むようでは、あの赤い独裁者と同じです。話を聞くべきだけなら宜しいかと」

老人ははっきりとした声と言葉で、そう言い切った。

「わかりました。首相はどう思いますか？」

皇帝の言葉に、首相は一礼すると言った。

「侍従長の意見に賛成いたします」

この瞬間、東露帝国の方針は決まった。

御前会議が終わり、閣僚たちが戻っていく中で、隻腕の侍従長はエッセンに近づいた。

「あまりワシに意見ばかり求めるなよ、ヤコフ」

「わかっております。タケオ先生」

エッセンにそう言われた広瀬武夫侍従長は、我が子を見るように微笑んでいた。

同日布哇王国首都ホノルル 帝国海軍中部太平洋艦隊司令部庁舎  
長官室

多くの艦艇でひしめき合っている真珠湾のすぐそばに建てられた  
中部太平洋艦隊の司令長官室に、1人の男が訪問していた。

「これはようこそカメハメハ陛下」

と部屋の主である司令長官は恭しく出迎えたが、出迎えられた方はフランキーな態度で返す。

「よせよ堀。今は俺たちだけなんだ。昔のように呼び合えばいいじゃないか」

現ハワイ国王カメハメハ6世は、笑いながらそう言う。それに対して、堀悌吉大將は苦笑いしながら席を勧める。

「変わらんね。まあ座れよ」

2人はソファアに座った。

「で、今日ここに来た用向きは何だ？」

「久しぶりに海軍の臭いが吸いたくなってね。どうも俺には宮殿にいるのが性に合わんようだね」

カメハメハ6世、日本名南洋豊仁は帝国海軍退役少佐であり、堀や山本五十六と同期生であった。そのため、堀や山本とプライベ

トな時にはこんな軽口を叩き合っていた。

もっとも、彼自身はハワイ国王としての職務を忠実にこなしていたし、また日本の皇族を妻に娶っただけあって、公式の場での行いは弁えていた。

「現役に戻りたいなら何時でも推薦状を書いてやるぞ。もっとも、ハワイ政府の連中が絶対に認めないだろうがな」

「海兵にいたころが懐かしいよ」

「確かにな。で、本題は何だ南洋。昔話をしにきたわけじゃあるまいし」

「言わなくてもわかってるだろ。昨日から起きていることについてだ。国民はまだ知らんが、いずれ知るのも時間の問題だ」

「だろうな。こっちも今大騒ぎだ。日本本土どこからトラックやマリアナとの連絡すらつかん。それでもって訳のわからん艦隊や航空機の接触に放送の受信だ。本当に異世界に飛ばされたのかもしれないぞ。今搜索艦隊の出動を考慮中だ。それで、お前としてはどうして欲しいんだ？国内の治安維持に力を貸せとでも？」

「違う。それなら王室親衛隊や我が軍でなんとかなる。問題はお前の国と東露軍だ。知つてのとおり、わが国は両軍の駐屯を認め、我が国の国軍の数十倍の戦力が展開している。これもそれも、ソ連やアメリカの脅威に対抗するためだ。しかし、その脅威が消えたとなると、言わずもがなだ」

「なるほど。つまり、我が軍の暴走を気にしているわけか？安心し



る、我が艦隊はそんなことはせん。少なくとも、俺が指揮官である限りはな。山口君や伊藤君だって、そんな破廉恥なことをする人間じゃない」

「だが陸軍はどうだ？どうも俺は陸軍の連中が好かん。第一満州事変を起こしたような輩だぞ。まあ、前の司令官の本間中将はそれなりに信頼できる人だと思うがな」

帝国陸海軍の仲の悪さは有名だが、海軍出身であるカメハメハ6世は当然海軍の肩を持っていた。

現在ハワイには陸軍の1個師団が駐屯しており、その編成はハワイ王室陸軍よりも強力であった。

「なるほど。わかった。後で陸軍の連中も集めて、王宮へ行こう。そこでちゃんと軽拳妄動を慎むように言わせるさ」

「悪いな」

「もつとも、新しい司令官の栗林中将だって悪い人じゃないさ。彼はアメリカ留学の経験もあるそうだからな。しかし、ちょうど交代の時にこんなことになるとは。2人とも運の悪いことだ」

「そうは言うが、一刻も早く対処しないと手遅れになりかねんからな。それじゃあ、そう言うわけだから後は頼むぞ、中将閣下」

「では後ほど王宮でお会いしましょう。国王陛下」

来た時と同じく、カメハメハ6世は軽く挨拶を交わすと出て行った。もつとも、廊下に出たときにはピシッと王族らしい表情になっ

ていたのだが。

それから1時間もしない内に、堀をはじめとする帝国海軍の司令官、ならびに栗林と本間をはじめとする帝国陸軍の司令官がハワイ王室王宮へと向かい、各部隊が軽挙妄動を起こさぬよう確約することとなった。

**東露帝国転移編 5（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。

秋月律子&日高愛誕生日記念・・・のつもり 上（前書き）

当小説は本編に一度6月20日に投稿したものです。

## 秋月律子&日高愛誕生日記念・・・のつもり 上

3日目 6月24日 布哇王国・王都ホノルル郊外

「律子！」

「愛ちゃん！」

「「「お誕生日おめでとう！！」「」」

ここは常夏の島布哇。日本人にしてみれば、転移によって一度は二度と来れない場所となった夢のリゾート地であった。

しかし2年目に起きた転移現象によって、そのハワイの方が転移してきてくれた。ただし時代と世界が全く違っていたが。それでもその後日本と布哇王国の間に友好条約が結ばれた。

さらに戦争の危機が去ったことによって、転移前はオアフ島を中心にして日露軍（一部布哇王国軍）の軍事施設が多数点在していた。

しかしながら転移による戦争の終結によって、それらの多くが民間転用された。そのため、ハワイ諸島はかつての日本がいた世界と同じく常夏のリゾート地へと徐々に変貌しつつある。

転移前の時点でも、軍人向けにリゾートや娯楽施設が大分発展していたが、現在はそれらを基礎にして新たに参入した日本やロクシエ等の資本によって開発が進んでいる。

既に元軍用飛行場を拡張した国際空港が稼動しており、日本やロ

クシエ・サクラス・東露帝国からの定期航路も設置されていた。

そんな布哇の王都ホノルルの郊外、とある日本資本のリゾートホテルの広大な庭で、2人の女性の誕生日会が盛大に開かれていた。

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

お祝いを受けたのはお下げ髪的眼鏡を掛けた女性と、そして元氣潑刺な少女であった。元アイドルの秋月律子と現役アイドルの日高愛の2人である。

6月23日は律子20歳、そして25日は愛16歳の誕生日である。そのため、間の24日に2人のための盛大な誕生日パーティーが開かれていた。

「おめでとう律子姉ちゃん、それに愛ちゃん」

2人の側に、秋月涼がやってきて祝福の言葉を掛けた。涼は律子の従姉弟にして、愛の同期のアイドルであり彼氏であった。

「ありがとうございます！涼さん！」

「ありがとう涼。それにしても、あんたたちまださんづけで呼び合ってるの？」

恋人関係にありながら、未だに互いにさんとちゃん付けであることに、律子は呆れ顔となる。

「うん。どうも呼び捨ては、言い難くて」

「あたしも、涼さんと同じです」

「たく、付き合い始めて3年にもなるのに、何やってるんだか。まあ、口で言う割にはお熱いみたいだけどね。じゃなきゃ9月には結婚式なんてことにはならないでしょうし」

「・・・・」

既に公になっているが、涼と愛は付き合っている。付き合い始めたのが転移直後のことなので、かれこれ3年近くだ。巷の噂では、愛は舞と同じこと（16歳で出産）をする気だと言われたが、今の所そんな兆候はない。

そんな兆候はないにしても、2人が周囲から「リア充死ね」「涼ちゃんもげろ!」と言われるほどにバカップルぶりを発揮して、間もなく結婚するのは事実だ。

それはともかく、律子に弄られる涼はなんとか反撃を試みる。

「そう言う律子姉ちゃんはどうなの？誰か付き合ってる人とかいるの？」

「生憎まだよ。Pは結局春香を選んだし、祐太郎君もやよいと付き合い始めたから、まず同年代で仲の良い男を探す方が大変よ・・・けど、私はプロデューサー業に専念したいから、今のままで良いんだけどね・・・それよりも涼、この私に反撃を試みるなんていい度胸しているわね？」

「!？」

「随分偉くなったわね。フッフッフ・・・良いのかなあ？涼が子供の頃に体験した恥ずかしいことを、小鳥さんに同人誌のネタとして提供しようかしら？」

律子がイジワルな表情を浮かべる。

765プロ事務員の我那覇（旧姓音無）小鳥は、結婚した後も札付きの腐女子だった。彼女に同人誌のネタにされたら最後・・・

「ぎゃおおおんん!!!ごめんなさい!!!それだけは勘弁して!」

従姉弟に全く頭の上がない涼であった。

「うわああ。涼さんは相変わらず律子さんに頭が上がりませんね。ここは私が助けないと!」

と、そんな3人に声を掛けてくる人影があった。

「愛さん、お誕生日おめでとunggざます!」

「愛、誕生日おめでとung!」

「あ、リリアさんにトレイズさん。ありがとうございます!今日はわざわざ来てくれてありがとうございます!」

やってきたのはリリアヌ・シュルツとトレイズ・ベインの2人だった。



「あたりまえでしょ。わざわざ飛行機のチケットまで一緒に送ってくれたのに、断るなんて出来ないわ」

「それにちょうど日本にいたことだし。ロクシエにいたら、さすがに考えたかもしれないけどね」

現在2人は、ジェット機の操縦を習うために今年の4月から日本の航空自衛隊に留学中であつた。そのため、ハワイまでは愛たちと一緒に飛行機で移動してきた。

「涼、久しぶり」

トレイズが涼に声を掛ける。2人は愛を通じて面識があつた。

「お久しぶりですトレイズさん。あれからリリアさんと上手く行ってますか？」

「まあね。涼こそ、いよいよ結婚式だね。羨ましいよ」

「おかげさまで。トレイズさんこそ、リリアさんと結婚する気なんじゃ？」

「まだ学校に通つてるから。今すぐってわけにはいかないよ。けど、いずれはね」

一方、その2人の相手はといえば。

「リリアさん。また今度一緒にカラオケ行きましょう！」

「いいわね！行きましょう！」

「私リリアさんが歌う水樹奈々の歌、また聴きたいです！本当にそっくりだから」

「ありがとう。けど、早くロクシエにもカラオケ出来ないかな？あればメグも誘えるのに・・・」

と2人が楽しそうに会話する一方、トレイズは律子と挨拶を交わしていた。

「トレイズさん、紹介します。こちら僕の従姉弟の秋月律子」

「初めまして律子さん。涼から話は窺っています」

「こちらこそ初めましてトレイズさん。イクス王国の王子様と会えるなんて、光栄です」

「アハハ。王位継承権はないんですけどね」

トレイズの存在が公にされた時、同時に王位継承権もないと発表された。もちろん、イクス王国の王女であるメリエルが戴冠不能になった場合は、代わりに指名されるかもしれないが、今の所その可能性はほとんどなかった。

そのため、トレイズはあいも変わらず普通の生活を謳歌していた。

ただし、その交友関係は普通ではなかったが。主に親のせいだ。

「本当だったらメイベルさんやアンリエッタさんにも来て欲しかった

たんですけど」

「仕方が無いよ愛ちゃん。メイベルさんもアンリエッタさんも公務があるから」

サラツと凄いことを発言する2人。メイベルはサクラス連合帝国の初代首相、アンリエッタはトリステインの女王様である。

「偶然とは言え、女王様たちと友人関係にあるなんて凄いわよね」

律子が呆れと驚きをミックスしたような声で言った。

「ところで、アリソンさんとヴィルさんの姿を見かけませんか？」

リリアの母であるアリソンと、父親であるヴィルの2人も参加すると涼は聞いていたので、その姿を参加者の中に見つけられず、首を傾げた。

すると、涼の言葉にリリアが答えた。

「それが2人とも、遅れるらしいわ。多分シュミットとハインのせいだと思うけど・・・あ、初めまして。リリアーヌ・シュルツです。あなたのことは愛や涼から聞いてるわ」

律子に気づいたリリアが挨拶をする。彼女らは初対面だ。

「初めまして。秋月律子よ。こちらこそ、あなたのことは涼たちを通じて聞いてるわ。何でも歌が上手いんですってね？良かったらアイドルにならない？私がトップアイドルにプロデュースしてあげるわよ」

「律子姉ちゃん。何もこんなところで」

「それに、リリアさんはそんな気全くないですよ。以前ママが同じように誘ったけど、全く興味を示しませんでしたから」

「そうね。アイドルに興味がないって言ったら嘘だけど、私は今の生活に満足しているし。それに、やっぱり空を飛びたいし」

「それは残念ね。その水樹奈々そっくりの声なら売れること間違いないのに。スタイルもいいし」

「それだけじゃないですよ！歌も上手いんですよ！」

望外な評価に、リリアは顔を赤らめる。

「ちょっと愛、やめてよ。とにかく、私はアイドルになる気はありませんから」

「それにリリアはそんな柄じゃないし」

とトレイズがボソツと言うが、彼女はそれを聞き逃さなかった。

バシ！

「痛！」

「自業自得よ」

「あらあら仲の良いことで。まあ、私も無理やりアイドルをやらせ

る気なんかないから安心して。それにしても、飛行機を操縦できるなんてスゴいわね」

「まあ、ほとんどママのせいですけど」

リリアの母のアリソン・シュルツは現在は退役したものの、元空軍パイロット。リリアが子供の時に軍の燃料をちよろまかして彼女に飛行機の操縦を教えた結果が、今のリリアであった。彼女もレシプロの単発機程度なら簡単に操縦できる。

「そのママさんは、舞さんと仲がいいのよね？一体どんな人なのかしらね、舞さんと馬が合う人って？・・・そう言えば、舞さんと愛のお父さんもないわね？」

律子が参加者の中に、愛の両親がいないことに気づいた。

「それが「ビックなサプライズイベントをやってやるから楽しみにしてなさい！」と言ってて。結局何をやるかまでは教えてくれなくて」

「そうなの。けど、そうになると妹さんと弟さんは誰が面倒見てるの？」

「結と正人なら、まなみさんが見てくれます。今はホテルの部屋にいるはずですよ」

結と正人は、愛の双子の妹と弟で今年2歳になる。そしてまなみは、日高舞の芸能界復帰後のマネージャーをしているが、相変わらず彼女に振り回される苦労人である。

「まなみさん、さつきホテルの人から「可愛いお子さんですね」って言われて凹んでたけど」

涼が付け加える。まなみは今年23歳であるが、未だに独身であった。

「迷惑な話ね。それにしても、あの舞さんがビックなサプライズ？・嫌な予感しかないわね・逃げた方がいいかしらね？」

「「ええ！？」」

と、律子が言ったものの既に手遅れであった。

キュラキュラ・・・

聞きなれない音が、パーティー会場へと近づいてきた。

「な、何！？て、きゃあ！」

「だ、大丈夫春香！？」

春香がキョロキョロと首を回していたら派手に転び、それを見た千早が声を上げる。

「何かが近づいてきているみたいねえ」

「お姉さま、冷静すぎ」

普段と変わらぬ物言いのあずさに、夢子が突っ込む。

「ねえ、トレイズ。この音もしかして？」

「もしかしなくてもキャタピラと、エンジンの音だね。こんな音を出す乗り物は・・・」

トレイズが口に出そうとした時、音が一層大きくなった。

ガガガ・・・

「『戦車！！？？』『』『』」

現れたのは1両の戦車・・・らしき物体であった。車体上部の砲塔から砲身突き出し、全体を茶や緑、黒を合わせた迷彩色で塗装していた。さらにエンジン音を届かせて、車体両側のキャタピラで動いている姿はまさしく戦車だった。

が、しかし。

（（小さい！））

参加者の多くが心に抱いた感想であった。たしかに戦車のようなだが、高さが人の身長より少しばかり大きい位であった。

そしてその小さな戦車は一同の前に止まると、エンジンを止めた。それからまもなくして、砲塔上のハッチが開いた。

「愛！誕生日おめでとう！」

「ママ！？何やってるの！？」

「何って？愛への誕生日プレゼントを持ってきたのよ！」

「と言うか、何それ！？」

愛の問に、舞は何事もなかったかのように答える。

「見ればわかるでしょ？豆タンクよ。正式な名前は確かヴィッカーズ6t戦車だったかしら？東露軍から放出されたのを、うちの会社で買い取ったのよ。1台をあんたに上げるから感謝しなさい。これで名実共に愛は「豆タンク」よ」

「いらないよ！！そんなの！」

愛が泣きながら反論する。

「涼、あの人が義母になるのよ？大丈夫？」

「・・・多分」

律子は本気で従姉弟の将来を不安視し、涼は漠然とした答えしか返せなかった。

他にも周囲からは、様々な声が聞かれた。

「さ、さすが舞さん」

「やることのスケールが違うわね」

春香と千早が驚きと呆れを通り越した、困惑の声を上げる。



「なんとも面妖な」

と、現在の光景に百パーセントマッチする決め台詞を口にするのは、765プロのアイドルである四条貴音だ。

「ライブ会場に戦車で乗り付けたって話は聞いたけど、娘の誕生日にまで同じことするなんて、とんでもないな!」

「噂に違わない人だよ。それにしても、ヴィツカーズ6t戦車か・・俺としては日高愛にはガーデンロイドかL3の方がお似合いだと思うけどな」

我那覇響と八幡弘毅のカップルも、それぞれの感想を口にした。

「ところで、この戦車舞さんが操縦してきたんですか?」

涼が素朴な質問をする。

「お!さすが涼ちゃん。私が見込んだ男だけのことはあるわね。違うわよ。前の時と同じく、専門家に頼んだわ。あ、もうエンジン止めて出てきていいわよ」

そして、操縦席部分のハッチが開いた。

「やあ、こんにちは」

と言って出てきたのは。

「ぱ、パパ!？」

「ヴィルさん!？」

リリアとトレイズが素っ頓狂な声を上げた。操縦していたのは、リリアの父親であるヴィルヘルム・シュルツであつた。

「いやあ、さすが元軍人さん。操縦が上手くて助かつたわ」

「もうママたら、ヴィルさんまで巻き込んで」

母親の傍若無人ぶりに、愛は恥ずかしくなる。だが、そんなことで引き下がる日高舞ではない。

「いいじゃない、彼だってOKしてくれたんだから」

と、彼女は言うが。

「無理やり巻き込まれたと言つたほうが正しいんだけどね」

とヴィルが呟いたが、舞は全く聞こえなかったようにそれをスルーした。

「それに愛。この程度で終わると思つたら、それはあまりにも私達を見くびっているわ」

「ええ!?!まだ何かあるの!?!」

「もっちのろん!?!」

秋月律子&日高愛誕生日記念・・・のつもり 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 秋月律子&日高愛誕生日記念・・・のつもり 下

3年目 6月24日 布哇王国王都ホノルル郊外

いきなり戦車で、愛と律子の誕生日会会場に乗り付けてきた愛の母親である日高舞。それだけでもスゴイことなのに、彼女曰くまだ続きがあるとのこと。

（（（（（一体何をやらかすつもりだ！？）））））

と参加者全員が内心で不安を覚える。

そんな参加者達的心情を知ってか知らずか、舞は腕時計を眺めた。

「そろそろ来る頃ね」

と、彼女が空を見上げると、まるで図ったかのようにエンジン音とプロペラ音が聞こえてきた。

「え！？」

「飛行機？」

涼と愛をはじめ、他の参加者も視線を空中へと向けた。

「しかも、この音はレシプロ機だ」

飛行機に詳しいトレイズは、すぐにその音が発するエンジン音を聞き分けた。また、彼のパートナーであるリリアも。

「あら？この音どこかで聞いた覚えがあるような」

そんなことを言っている間にも、音は段々と会場に近づいてきた。  
そして。

「あそこだ！」

最初にそれを見つけたのは、山育ちで目の良いトレイズだった。  
他の参加者たちが、一斉に彼が指差した方向へと目を向けた。

彼らの目に映ったのは、5機の小型レシプロ機の姿であった。その内2機が並行に飛んで先行し、3機がV字編隊を作って続行していた。

「あら？5機？確か2機だけの筈じゃ・・・」

舞が珍しく首を捻って怪訝な表情をする。しかし、その眩きと表情は空に目を向けてしまった皆には全く気づかれなかった。

そして先行する2機は高度を下げると、そのまま会場のほうへと向かって飛んで来た。

「あ！こっちに来る！？」

「何だ何だ！？」

驚き慌てる参加者達を尻目に、2機は低高度で会场上空を横切った。その機体の片方は尖った機首が特徴で、主翼と胴体には黒い十字の国籍マークが描かれていた。もう1機は機首が丸く、濃緑色の

塗装に鮮やかな日の丸が描かれていた。

「皆伏せ・・・てきやあ！」

どんがらがっしょん！

「春香、こんな時にまで何をやってるのよ！」

「伊織ちゃん、落ち着いて！」

「あわわわ！穴掘って隠れないとー！」

「雪歩ちゃん、それはもう手遅れよ」

「これはマジでヤバイ？」

「先輩、早く逃げまショウ！」

「一体何が起きてるのよ！」

765プロと876プロのアイドルたちは、もう大パニックだ。

そんな中でも、冷静な面々はしっかりと観察していた。

「トレイズ！右の戦闘機はママが操縦してたわ！」

「何だって！」

トレイズも驚きを隠せない。

そして涼は、そこであることを予想する。

「じゃあ、もしかして左のゼロ戦は・・・」

「そうよ涼君。あつちは正道さんが操縦してるわ!!」

舞が誇らしげに言う。

「ええ!? ちょっと、パパも何やってるのよ!？」

「まあ見ていなさいって」

混乱する面々とは対照的に、舞は自信満々の表情であった。そしてヴィルは苦笑いしながら、上空の2機を見守っていた。

その2機は今の低空飛行から一転して、急上昇していた。

同時刻 上空

「いやあ! リリアちゃんもトレイズ君も驚いていたわね」

低空を飛行行行って地上にいる人たちを驚かしたアリソンは、御満悦のようだった。その声を無線越しに聞いていた日高正道二等空佐は、呆れながら返す。

「アリソン、君が舞と馬が合う理由が良く分かるよ」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

「にしても、まさかこんなことになるとは」

正道は、自分たちの少し後方を旋回している3機の「烈風」艦上戦闘機の方を見る。今正道たちが乗っている機体とは違い、向こうは正式な海軍機であつた。

「フフフ。参加者が多いならそれに越したことはないじゃない」

「そう言う意味じゃなくてだね」

「とにかく、予定通り始めましょう」

「わかったよ。それじゃあ君は右、私は左だ。くれぐれも気をつけて」

「そっくりそのお言葉お返しするわ。それじゃあ」

「スタート！」

二人は機体に設置されているスモークの発生装置のボタンを押した。

「あ！？煙を出した！！」

「何かを描いてる？」

涼と愛は空を見上げながら、2機の飛行機の行動を見守っていた。



最初は単なる曲線であるかのように見えたスモークが、徐々に何かの形へと変わっていく。空という雄大なキャンパスに、2機の戦闘機は自らを筆にスモークを絵の具にして作品を描き上げる。

「なるほど。そう言うことか」

空に描き上がった物を見て、律子が舞の言葉の真意を悟った。

「へえ」

「綺麗」

アイドル達も空に描き上がった物に、溜息を吐く。

「スゴイ。こいつはブルーインパルス並みの腕だ」

響の相手である八幡が少しばかり違う感想を口にしていたが、実際空にスモークで絵を書き上げるにはそれなりに腕が必要であった。

「ハ、ハート・・・あれが、パパからのプレゼント？」

「そうよ。パパから愛へのプレゼントよ。まあ、提案したのはアリソンだけどね」

「ママったら」

舞の言葉に、リリアが顔に手を当てる。だが、愛は途端に表情が笑顔になる。

「ありがとうママ！こんなプレゼント、初めて！」

「喜んでもらえたのなら良かったわ。この日のために、パパはうちの会社の飛行機を使って、アリソンと練習してたんだから」

「あれ？けど正道さんは確かロクシエの大使館勤務でしたよね？」

律子が疑問を口にした。

「そうよ。向こうにも支店があるから。空いた時間にアリソンと訓練してたの」

「さすがはアイドル界を席卷した日高舞とその旦那さんに友人ね。やることが伊達じゃないわ」

舞の言葉に、律子が感嘆の言葉を口にする。

「遅れて来るって言うのはこう言うことだったんですね？」

「そうよ涼君。愛には知られなくなかったから、黙っていたけどね」

「けど、これでアリソンさんたちも遅れてくる理由もわかりました・・ところで、あっちの3機は誰が乗っているんですか？」

「それがわりからないのよね。予定じゃ正道さんとアリソンの2人だけの筈なんだけど」

「え！？舞さんも知らないんですか？」

涼は驚かずにはいられなかった。

それから間もなくして、3機の戦闘機も動いた。彼らは正道とアリソンのように、スモークで空に何か絵を描くようなことはしなかった。

その代わり、3機揃ったの連続宙返りを3回おこなった。

「スゴイ！3機揃って連続宙返りだなんて」

「よっぽど腕のいい人が乗っているんだろうね」

自らもパイロットであるリアとトレイズは3機の動きからパイロットの腕の良さを推測した。

3機の戦闘機は、連続宙返りを終わると正道とアリソンたちの戦闘機に翼を振って挨拶して、飛び去っていった。

一方正道とアリソンの乗った機体は高度を下げた。

「あれ？あの2機は飛行場に行くんじゃないんですか？」

「まさか。それじゃあ愛と律子ちゃんを祝えないじゃない」

涼の疑問を、舞は笑い飛ばす。

「もっとも、私の誕生日はもうほとんどオマケですけどね・・・けど、それってつまりあの2機はここに着陸すると？」

「「「！？」」」

律子の言葉に、舞とヴィル以外の全員が固まる。

「まあ、そうしても良かったんだけどね」

（（（ちょ、お前！）））

舞の言葉に、その場にいる全員そう突っ込まずにはいられなかった。

「でもそれじゃあ、私も巻き込まれちゃうから。目の前の道路に着陸するわ」

「いいんですか？そんなことして？」

涼の突っ込みに、舞は平然と答える。

「大丈夫よ。この道はホテルの私道だし。今の時間は封鎖してもらってるから」

彼女の言うとおり、まもなくホテルの側の道に2機とも着陸した。道路脇に設置されている電柱にぶつけることなく、見事な着陸であった。そして2機は、そのまま滑走するとパーティー会場すぐそばの駐車場に停止した。

「さ、愛。パパを迎えに行くわよ」

「おう！涼さんも行きましょう！」

「うん」

「私たちもママを迎えに行きましょう。パパ、トレイズ」

「ああ」

「そうだね」

5人が駐車場に着いたのは、ちょうど正道とアリソンの2人がコクピットから出ようとしている時であった。

「パパ!!」

「愛!」

正道が地上に降りると、愛が駆け寄った。

「パパ、素敵なプレゼントをありがとう!」

「喜んでもらったのなら良かった。あと、アリソンさんにも礼を言っておけよ」

「うん、わかった!」

愛はトレイズとリリア、それにヴィルが出迎えているアリソンの方へと走って行った。

「あなた、お疲れ様」

「ああ。それにしても舞。お前本当にあれで乗り付けたんだな」

「いいでしょ？愛にプレゼントする奴なんだから」

「ありがた迷惑じゃないのか？」

妻との問答を終えると、彼は涼の方を向いた。

「やあ涼君。わざわざ出迎えありがとう」

「いえ。ところで、この飛行機は舞さんの会社の飛行機ですよな？」

「ああ。舞が軍から払い下げられたのを買ったのだよ。旧海軍の零式艦上戦闘機33型だ」

「あんまり詳しいことはわかりませんが、舞さんの会社って今どれくらいの数の飛行機を持っているんですか？」

「うーん。今エア・スタント用の機体はそこら中で引っぱり放題。舞の場合金にだけは苦労しないからね。全ての支社をあわせれば100機はいくかも」

「ねえねえ正道さん。いい加減自衛隊なんか辞めてうちの会社に入りなさいよ。給料は2倍にするから。というか、この会社は正道さんのために作ったのよ」

舞は現在日高プロと言う芸能プロダクションを開いているが、アイドルの育成はあまり熱心にやっておらず、代わりに重点を置いているのがカー・スタントやエア・スタントの仕事であった。

転移後ロクシェやサクラスに対して経済的に優位に立った日本で

は、その豊富な資金力によって映画やドラマの制作費が格段に増加した。

それまで低予算でチャチなCGに頼らざるを得なかった様々なシーンを、実写で撮影できるようになり、映画関係者は泣いて喜んだ。

そして、これまで色々と茶々を入れてきたお隣の半島国家や赤い大陸国家が消え、さらには前の戦争から70年以上も遠ざかったこともあり、広大なサクラスやロクシエ、トリステイン近海等を撮影場所にした戦争映画が何本も製作されるようになった。

舞はこの機を逃さず、映画用のエア・スタント会社を作った。もっとも、その目的は夫である正道を自分の側に置いておきたいだけであつたが。

しかし、この目論見は未だ成功していなかった。

「いや、身内のお前に給料増やされても仕方がないだろ。それに自衛官は俺の天職だから、辞めないよ。いいじゃないか、アリソンが入ってくれたんだから」

「確かにそれはそれで良いんだけどね」

正道は舞の誘いに乗らなかつたが、代わりにアリソンが誘いに乗った。彼女は堅苦しい軍よりも自由に飛べるこの仕事を選んだのであつた。

「まあまあ。舞さんもあまり無理強いしちゃいけませんよ」

涼が仲裁に入った。そして彼は、話題を変える。

「ところで、向こうの飛行機は形も塗装も違いますけど?」

涼がアリソンの乗っていた機体を見ながら言う。

「ああ、あれは今度撮影する「レッドサン・ブラッククロス」とか言う戦争映画の撮影用だよ。機種は三式戦闘機の「飛燕」だけど、塗装だけはドイツ軍仕様にしたんだ」

「あ、その映画なら僕にもオファーが来てます」

「あら、そうなの?」

「ええ。愛ちゃんにも確か「ママ! パパ! 涼さん!」

愛がリリアたちと一緒に戻ってきた。

「何? 愛ちゃん?」

「早く戻りましょう。パパやアリソンさんも来たことですし、そろそろケーキを食べましょうよ」

「うん、そうだね」

「折角だから、お互いにアーンして食べましょうか?」

「ええ!?!」

そんな愛を、舞は呆れながら見る。



「やれやれ。愛たら涼君に首ったけね」

「けど、彼なら愛を任せて置けるだろうさ」

「そうね。けど、あなたは愛を取られて寂しくないの？」

「寂しいに決まってるじゃないか・・・」

「そう・・・じゃあ、自衛隊辞めて私の会社に入ってずっと一緒にいましょう!!」

「まだ言うか!?!」

舞がそれまでの雰囲気을 全てぶち壊した。しかしながら、彼はそんな妻や娘に優しい表情を向けていた。

「と、愛に大事なことを言うのを忘れていた」

「え?」

「お誕生日おめでとう!愛」

「あ、ありがとうパパ!!」

おまけ 1

「私、なんか後半忘れられちゃってない？」

目を細めて作者を睨む律子。

「ハハハハ・・・そんなことないよ。律チャンはシュジンコウデスヨ」

「・・・」

おまけ2

「そう言えば正道さん」

「なんだい涼君？」

「さっき一緒に飛んでいた戦闘機はどここの飛行機だったんですか？」

「ああ、あれはだな・・・」

同時刻 海軍飛行場

「坂井大尉、大田飛曹長、西澤中尉。哨戒飛行をほったらかして何をしとったか！？」

「ハッ！笹井中佐。ちよつとばかり寄り道を。しかし、先方からは非常に感謝されましたよ」

「坂井大尉、あなたももう少し士官としての自覚を持ってくださいよ」

おまけ3

「舞さーん！アリソンさーん！早く戻ってきてください！！もうこれ以上4人の赤ちゃんの面倒は見切れません！！」

悲鳴を上げる岡本まなみ23歳、独身。

彼女の元に舞とアリソンがやって来た時、彼女は燃え尽きる寸前だったとか。

おまけ 4

「わー！愛ちゃんストップストップ！」

「キャアアア！！」

ガシャン！

「ああ、またぶつけちゃった。やっぱり戦車の操縦で難しいですね、涼さん」

「そうだね。けど、愛ちゃんが戦車を受け取るとは思わなかったな」

「折角もらったんですから、使わないと勿体無いです！」

その後愛はプレゼントされた6t戦車の運転を、数ヶ月掛けてマスターしたという。

おまけその5

「全くトンデモナイ誕生日になっちゃったわね律子」

誕生日会の翌日、律子は竜宮小町の面々と一緒にホノルルの町へと繰り出していた。

「本当よ。舞さんとアリソンさんのテンションにはついて行けないし、涼は完全に慣れきってるし」

「まあまあ律子ちゃん、そう気を落とさないで」

「そうだよ。今日は亜美たちとショッピングを楽しもう楽しもう！」

「そうさせてもらうわ」

ドン！

「あ、ごめんなさい！」

「いえ、こちらこそ・・・！？」

「！」

目と目が逢う瞬間、好きだと気づいた。

秋月律子&日高愛誕生日記念・・・のつもり 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 世界を翔けるアイドル 1（前書き）

アイマスのアニメに感動して書いたら、765プロのキャラが出てこない罫。



## 世界を翔けるアイドル 1

転移4年目8月 日本・東京 日高プロ東京支社

「「「暑い!!」「」」」

真夏のある日、東京にある日高プロ東京支社内にアイドルやプロデューサー達のダレ切った声が響く。

「仕方が無いでしょ。クーラーが故障したんだから。これでも転移前の夏よりは遥かにマシなのよ。それに暑い暑い言わない。余計暑くなるでしょうが」

アイドル達に苦言を呈するのは、支社長の石川実だ。暑い中でもスーツをピシッと着こなしているあたり、さすがはプロであった。

「ご、ごめんなさい。うー、これくらいじゃ負けませんよ!」

と暑さにもめげず、元気に言うのは高槻かすみ。765プロで活躍する高槻やよいの妹だ。今年14歳になる彼女は、かつての高槻やよいを内外ともに彷彿とさせる。

「けど支社長。本当に暑いんですよ!」

と文句を言うのは、現在日高プロ東京支社で研修中のプロデューサー高木祐太郎だ。現在19歳になる彼は、本来765プロのプロデューサーであるが、現在はこちらに出向中であつた。

なお彼と付き合っているのが、かすみの姉のやよいだ。

「全く、最近の若い子は本当には堪え性がないんだから。涼や愛や絵理はもつと我慢強かったわよ」

と石川は日高プロの前進である876プロの古株アイドルたちの名前を出す。

「あの人たちと比べないくださいよ。それに桜井さんや鈴木さんたちと一緒に、今頃サクラスでのライブツアーでしょ！？いいなあ」

「高木Pの言うとおりです。先輩たちが羨ましいです。こつ暑いと本当に死んじゃいますよ」

祐太郎に続いて、どこか醒めた感じの少女も不満を口にする。

「あらあら。あの春日さんの娘のあなたも弱音？」

「あの無茶苦茶な母と兄と一緒にしないで下さい！私は極普通の人間なんですから！！」

と文句を言うのは、春川響子。通称キョン子。現内閣総理大臣春川響の娘にして、俗に「次世代の閣下」と呼ばれる新人アイドルだ。

母親の春日と双子の兄の春彦がぶっ飛んだ行け行けタイプなのに對して、彼女は父親と同じく地味な冷静タイプだ。どう考えてもアイドルには見えないのだが、涼やかな目元と醒めた所が「イイ！！」と言うファンが続出し、最近では「彼女のことを次世代閣下と呼ぼうぜ」とまで言われていた。

ちなみに先代は、765プロの天海春香のことだ。

「だいたいアイドルだってなりたくなっただけじゃありません。舞さんに誘われて無理やり引き込まれたものなんですか。たく、迷惑なことこの上ない」

「ほう。誰が迷惑ですって？」

「だから舞さんが……え!？」

キョン子の目が点になり、次の瞬間には顔から血の気が引いた。周囲の人間も戦々恐々な表情となっている。

キョン子が恐る恐る振り返ると、案の定そこには日高舞が立っていた。

「「ま、舞さん（社長）!？」」

「そうよ」

「どうして!？今日東京へ来るなんて連絡はなかったんじゃない？」

「うん。だってしてないんだもん!」

石川の質問に、平然と答える舞。

「（（この人は!））」

気まぐれ大魔王である舞の行動に、皆もう何も言えなかった。

「で、どうしたんですか?ここに来るなんて珍しい」

「そうそう。実は家の会社に新しい人が入ったから紹介しにきたの」  
「新しいアイドルと言うことですか？」

「違う違う。まあ新しいアイドル候補も見つけたんだけど、生憎そ  
っちはロクシエ支社だったから。今日連れてきたのは航空部門の新  
人さんよ」

日高プロは、舞が夫の正道用に作った会社だ。プロダクションと  
名前はついていますが、実際の所はエア・スタントやシー・スタント  
をやる会社として設立された。そのためそれらを行う航空部門や海  
上部門は彼女の友人であるアリソン・ウィッティングトンをはじめ  
とする優秀なメンバーで固められている。

装備も、ロクシエ軍や東露軍から放出された戦車や装甲車だけで  
も100両以上、飛行機も100機以上、艦艇も戦艦を含めて5隻  
を持っている・・・どこの軍隊だ！？

ただこうした装備のおかげで、臨場感溢れる戦争映画やアクション  
映画が撮れるとあって、その手の方面からの評判だけは良かった。  
しかしながら、当の正道はそれに興味を示さず未だに自衛官をや  
っている。

一方アイドル部門は、その名前の通りアイドルが所属している部  
門であるが、当初は舞もやる気がなく名前だけの部門であった。現  
在は876プロの石川の合併要請によって、同社を吸収する形でそ  
れなりの活動をしていた。

「そうなんですか。それで、その新しい人とは？」

「ああ、紹介するわ。東露帝国空軍出身のリリーさんよ」

すると舞の後から、1人の少女が出てきた。

「初めまして。リリー・リトヴァグです」

「あら？中々可愛い人じゃない」

「残念だけどアイドルになる気はないそうよ。彼女はスタントパイロットとして入社したんだから」

すると、裕次郎が反応する。

「へえ。じゃあ、飛行機を操縦できるんですか！？」

「もちろん。これでも空軍の戦闘機パイロットでしたから」

一方石川は残念そうだ。

「勿体無い話だわ。あなたには何か感じる場所があるんだけど。リリアさんといい、アイドルの原石はそこら中にあるんだけどね」

「あきらめなさい、みのりん」

「わかりました。それで、リリーさんを紹介しにきただけですか？」

「ううん。実はあなた達に仕事を持ってきたのよ」

「仕事ですか？戦争映画かアクション映画の？」

「違うわ。イメージガールの仕事よ。今度行われるワールド・エア・カップの話聞いているでしょ？」

「ええ。ニュースでやっている程度には……たしかサクラスを出発して、ロクシエ、日本、布哇を経由してアラスカへと飛行機でレースするあれですね？」

「そうよ。その大会のイメージソングを歌うのと、開会式と閉会式での余興をうちと765プロダクションが任されたわけ」

「『ええ！！？？』『』『』」

いきなりの大仕事受注発言に、全員驚きを隠せるはずがなかった。対して舞はニコニコと嬉しそうだ。

「いやあ、やっぱり皆驚いたわね。秘密にしてきた甲斐があるってもんだわ」

「ちょっと舞さん！幾らなんでもいきなりすぎます！支社長の私にも秘密だなんて酷すぎます！」

「まあまあ。ちゃんとその分の穴埋めはしておくから……そう言うわけで、明後日には出発するから皆準備しておいてね」

「『』『』『えええ！！？？』『』『』」

「どうせ8月で皆夏休みで学校は休みでしょ？それに、さつき暑い暑いて言っていたじゃない。安心なさい。今回行くのは涼しい所よ」

「そ、そんないきなり言われても」

「うっうー。困っちゃいます!」

「父さんの言うとおりのハチャメチャな人だ」

「はいそこ。文句を言っていないで、ちゃんと来なさいね。こないと、この世からあなたたちの存在、抹消しちゃうぞ!」

語尾にハートマークがつきそうな言い方だが、目は笑っていないかった。

「「「い、イエッサー」「」」

その光景を、リリーは呆然として見ていた。

「ちょ、ちよつとそこのあなた?」

「あ、私ですか?」

リリーが声をかけたのはキョン子だった。

「日高社長て何時もあんな風なの?」

「知らないんですか?」

「ええ。私採用されて半年たったけど、ずっとサクラスにいたから社長と会うのは今回が初めてなのよ」

「そうなんですか。あの人は何時もあんな感じです」

「うーん・・・私就職する会社間違えたかな？……けど、軍を除けば他に良さそうな会社なかったし」

「御愁傷さまで。どうしてリリーさんは家の会社に？」

「私は東露帝国空軍のパイロットだったんだけど、戦争が終わって軍縮になって……軍隊生活もあり水に合わなくて。それで結局除隊になっちゃって。けど、戦闘機を操縦する以外に能がないから」

「そう言うわけですか」

「その2人。何を話してるのかしら？」

目ざとい舞がおしゃべりをしている2人を見つけた。

「ちょっとした身の上話ですよ」

「そう。まあ、とにかくそう言うわけだから。明後日朝9時に羽田空港に集合ね」

「……はい！……」

2日後、日高プロの一行は機上の人となった。行き先はロクシェ連邦の首都であった。

「どうしてロクシェに寄るんですか？普通に直行便でサクラスに向かえばいいじゃないですか？」



「ふふふ。それはねキヨン子ちゃん。実はそこで会う人があるのよ」

「「「会う人？」」」

「そう。我が日高プロの大事なスポンサーよ」

日高プロの一行は、舞の思惑を掴みきれなかった。

そしてロクシエ首都に到着すると、そこで先着していたリリーと合流し、彼女が操縦する四発の飛行艇へと乗り換えた。

「一体どこへ行くつもりなんですか？」

あまりにも不可解な行動に、ついてきた石川が舞に尋ねる。

「イクスよ」

「「「イクス？」」」

石川以外の面々が声を上げた。

「あら、知らないの？ロクシエを構成している小さな国よ。冬は寒いんだけど、この時期は避暑地として最適なの」

「なるほど、そう言うことでしたか。確かに、我がプロダクションとしては挨拶に窺わないと失礼ですね」

「どういふことですか、支社長？」

「ああ。高木Pはまだ知らなかったわね。実はイクスの女王様と殿

下とはいろいろあつて舞さんと知り合いなの。それで、あの国でうちの会社がやるイベントとかあるとそれなりに便宜を図ってもらえるわけ」

「それはまたスゴイ話ですね」

「まあ、あの舞さんだからね。それに知っていると思うけど、舞さんと愛はサクラスやトリステインの女王様とも面識があるの。よく芸能界で、日高プロは芸能界どころか世界を征服できるって言われるのは、そういうことなのよ」

その石川の言葉に被せるように、不敵な笑みを浮かべた舞が言う。

「ふふふ。しかも今回はそれだけじゃないわ」

「どう言うことですか？」

「実はイクスには今765プロの秋月さんと、その彼氏に菊池さんと萩原さんがいるのよ」

「あら、そうなんですか。けど、確か秋月律子の彼氏って……舞さん。あなたただけ強力な味方をつけているんですか？」

石川はもはや呆れるしかなかった。

「強い味方が多いことに、越したことないでしょ？」

そう言う彼女は、どこか楽しそうであった。

世界を翔けるアイドル 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 東露帝国転移編 6

1年目＋3日目 北太平洋上海上自衛隊護衛艦「えちご」

「漁船が消息を絶った海域まで、あと60マイルです艦長」

「警戒を厳にせよ」

角松の言葉に、梅津は静かに命じる。

既に「えちご」をはじめとする各艦は北太平洋へと突入しており、波が高くなりつつあった。その中を、消息を絶った漁船の搜索を行うべく北東へと進んでいた。

「既に消息を絶った漁船や貨物船の数は20隻近くに達しています。今頃東京は大騒ぎでしょうな」

「そうだな。去年のあの時みたいにな」

梅津の言うあの時とは、ちょうど1年前の転移の時だ。その時梅津は神戸にある基地隊所属の第42掃海隊の司令だった。朝、混乱した市民からの問い合わせに追われていた基地の人間の様子や、その後直ぐに出された搜索命令など、今でも鮮明に思い出せる出来事だった。

「ところで艦長、後方から付いて来る巡洋艦ですが、このままで良いのですか？」

梅津らの部隊の後方2000mには、ピタリと日本海軍の巡洋艦

が2隻ついてきていた。

「まあ良からう。こちらの搜索を妨害しないならば、抗議をする必要もあるまい」

その時、CICから報告が入る。

「艦橋CIC。方位355。距離100マイル。艦数8。速力20ノット。単縦陣にて接近する艦隊を探知」

CICに詰めている砲雷長である菊池の声だ。

「CIC艦橋。艦種はわかるか？」

「反応からおそらく駆逐艦か小型巡洋艦クラス」

「どうしますか？」

「念のためだ。偵察にヘリを出そう。出せるか？」

「確認します……とれました。波が大分高くなっていますが、今ならなんとか出せるそうです」

「よし。では直ちに発進」

「わかりました。SH60K発進用意！」

「ひゅうが」型の拡大改良型である「えちご」型にも、当然ながらヘリが搭載されている。しかも、転移後在日米軍から移管されたシーコブラまで搭載されていた。

ただし、今回発進させるのは汎用型のSH60Kヘリだ。索敵から対潜・対艦・対地攻撃任務までをこなせる主力ヘリコプターである。昨年護衛艦「さざなみ」に搭載された機体はトリステインで大活躍している。

その内の1機が直ちに飛び立ち、北へと向かって飛んで行った。

1時間ほどして、報告がもたらされた。

「北方より接近中の艦隊は、四本煙突の旧式巡洋艦2隻に、駆逐艦6隻。いずれも旧海軍艦艇とのことです」

「わかった。そうすると、アリューシャン列島方面から南下してきたようだな」

「やはりあちらも、搜索活動を？」

「だろうな。我が国がそうしたようにな。ヘリには帰還命令を出してくれ」

「了解しました」

その時、新たな報告が入った。

「CIC艦橋！」

菊池の声である。しかし、先程とは違い明らかに声に焦燥感が含まれていた。

「どうした菊池？」

「ソナーが潜水艦らしき反応を探知！」

「何！？」

角松もいきなりの事態に、驚きを隠せなかった。

その頃、CICは大騒ぎであつた。

「ソナーCIC！どうして探知できなかったんだ！？」

「付近海中の変温層に紛れ込んでいた模様です。この付近の海中データが不足しています！」

「バカモノ！お前達の訓練不足だ！」

ソナー員の言い訳に、菊池が雷を落とす。

「すみません」

そして事態は最悪の方向へと動く。

「魚雷音聴知！方位250！距離2500！雷速40ノット！」

「いきなりか！」

ソナーからの報告は艦橋にも届く。

「全艦対潜戦闘用意！取り舵一杯！」

梅津が即座に命令を出した。

艦内にアラームが響き、乗員たちが走り回る。

「いきなり魚雷を発射してくるとは」

驚きの声を上げる角松に対して、梅津は冷静だった。

「相手は戦争中だと思っているだろうからな。とにかく今は回避だ」

「反撃しますか？」

「艦長、ただちに反撃するべきです。攻撃を受けたのは明白なんですから」

角松の質問に続いて、航海長の尾栗は即時反撃を具申した。だが、梅津はその意見を退けた。

「まずは警告だ。魚雷を回避したらピンをモールスで発信してこちらには敵対の意志がないことを伝える。それで攻撃を再度行うようなら、攻撃を許可する」

「了解」

「それから、後方の日本海軍の巡洋艦にも警告を」

「わかりました」

魚雷の発見が早く、さらに魚雷自体が海面に真っ白な航跡を残し



ていたので回避するのは容易だった。「えちご」以下4隻の護衛艦は悠々と魚雷を回避した。

その間に、各艦のアクティブソナーを用いたモールスによる通信がおこなわれた。内容はいずれも「我に戦闘の意志無し。攻撃をやめられたし」であつた。これを日本語・英語・ロシア語で行つた。

だが目標の潜水艦はそれに応じず、再び魚雷を「えちご」目掛けて発射した。

「艦長！相手は警告を無視しましたよ！攻撃しましょう」

「止むをえんな……だが、相手は本当に敵なのだろうか？なあ、副長」

「明らかに敵意を向けられ攻撃を受けたのです。正当な自衛権の行使に当たるかと」

「……アスロツク発射用意！」

梅津は決断した。

「アスロツクデータ入力！」

CICではアスロツクの発射準備に入っていたが、さすがに実戦とだけあつてデータを打ち込んでいる若い士官は緊張気味であつた。

「落ち着いてやれ。訓練の時みたいにヘマをやらかすなよ」

菊地がアスロツクの発射準備に入っている士官、米倉三尉の肩を叩く。

「わかっています……砲雷長もやはり緊張しますか？」

自分の肩を叩いた菊地の手が少しばかり震えているのを見て、米倉は問い返す。

「ああ。怖い……だが、俺たちは海上自衛官だ。命令を受けた以上、やらなきゃな」

「はい！……目標方位250。距離3500。敵速6ノット……データー入力完了！VLS扉開きます……発射用意よし！」

「CIC艦橋。発射準備完了！」

「発射！」

「サルボー！」

米倉が発射ボタンを押した。途端に、「えちご」艦橋前に装備されたVLSの扉が開き、アスロツクが天高く轟音と炎を吹き上げて舞い上がった。

「前甲板VLS開放！目標敵潜水艦へ向かってアスロツク飛翔中！」

アスロツクの発射と共に、前甲板はその煙に覆われていた。アスロツクはミサイルの弾頭部に対潜用魚雷を搭載した兵器で、魚雷は目標地点まで高速飛翔するとブースターから切り離され、パラシュ

ート降下する仕組みとなっている。

その光景は各護衛艦と、そして後方から追求している巡洋艦からも確認できた。

「なんだあれは？ロケットの一種か？」

巡洋艦「黒部」艦長の吉川潔大佐は、先程オートジャイロを発艦させた艦から突如炎が吹き上がる光景に、最初は被弾したのかと思った。

ところがそれは間違いで、すぐに尾から炎を引く飛翔体が飛んでいくのが確認された。

「まさか、対潜ロケット？」

彼らの混乱を他所に、まもなく弾頭部とブースターが分離してパラシュートが開き着水する。アスロツクの弾頭部に搭載された魚雷は、最初は無音で潜航していく。その後目標の推進器音を探知すると、機関部が駆動し、探信音を放ちながら敵艦目掛けて進む。

「魚雷正常に作動。目標命中まで50秒！」

60ノット以上の高速で進む魚雷である。わずか6ノットで動いている潜水艦など、単なる的ではない。

「敵魚雷第二波も回避しました」

「うむ」

梅津は目を瞑って、何事かを考えているようだ。

「艦長……」

「副長。本当にこれで良かったのかな？」

「私にもわかりません。しかし、これ以外方法はないかと」

「……そうかな？」

「命中まで後15秒！」

CICのモニターでは魚雷と目標の潜水艦を示す光点が間もなく交差しようとしていた。そこへ、通信が入る。

「菊地、魚雷を直前で自爆させろ！」

「アイサー！」

命中まであと5秒というところで、菊地は魚雷に自爆を命じる電波を飛ばした。

その直後、魚雷の爆発が肉眼でも海上に現れた水柱という形で確認された。

「ソナーCIC、目標の状況報告！」

「魚雷は目標の150m手前で爆発しました。命中はしていません。」

しかし、機関音ならびに推進器音消失。タンクの排水音を探知。急速浮上中の模様！」

「艦橋CIC。目標は浮上後も抵抗する可能性があります。対水上戦闘用意を具申します」

「砲雷長の意見具申を認める」

「了解。主砲は浮上中潜水艦に指向。ただし、命令あるまで発砲は禁止とする」

直後「えちご」「はるかぜ」「ゆうだち」の各艦砲が高速で旋回し、潜水艦が浮かび上がる筈の海上に照準を合わせる。

そしてしばらくして、海上が泡だったと思うと黒い影がその姿を現した。

「潜水艦、本艦右舷前方に浮上！」

そちらに向かって、梅津や角松、尾栗ら艦橋に詰めていた者は双眼鏡を向けた。

「あれは？」

「アメリカ海軍の潜水艦のようですが……誰か柳を連れて来い！」

間もなく、第二次大戦時代のミリタリーオタクである柳が艦橋に現れた。

「艦長、副長。あれは間違いなくアメリカ海軍の「ガトー」級潜水

艦です」

柳が興奮しながら言う。

「艦長、早速降伏勧告を行いましょう」

「ああ。それと、後方の日本海軍の巡洋艦にもその旨を打電しろ」

「了解です」

ちなみに、その日本海軍の巡洋艦では。

「異世界とか未来の日本とか、ホラ話かと思っていたが、確かにあんなスゴイ兵器はアメリカやドイツでも造れまい」

吉川ら多くの人間が舌を巻いて呻いていた。

5分後、米潜水艦から返電があった。

「潜水艦より入電。発アメリカ海軍潜水艦「ガードフィッシュ」。  
宛日本海軍司令官。我降伏す。ジュネーブ条約に基づく処置を要求す。以上です」

角松の言葉に、梅津は満足そうに頷いて返す。

「そうか。では降伏の受託と、30分後に臨検部隊を移乗させることを伝える」

「了解です艦長。臨検部隊はどのようにしますか？」

「副長に一任する。必要ならば「はるかぜ」と「ゆうだち」からも送らせる」

「わかりました」

「とにかく、これで一先ず区切りはついたかな？」

と梅津は言ったが、残念ながらことは彼の希望通りには動かなかった。間もなく、新しい情報が入ってきた。

「大変です！」

通信科の人間が文字通り血相を変えて艦橋へと飛び込んできた。

「どうした？そんな血相を変えて？」

「海上警備機構の警備船が、ソ連海軍の水上艦艇と戦闘状態に入っ  
たとのことですよ！」

「何！？」「」

東露帝国転移編 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。



フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 1（前書き）

砂漠のウサギに嵌った作者の妄想をまとめてみました。

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編）

1

転移5年3ヶ月目（新世界暦5年7月） 北アフリカ カッターラ  
低地西方 第3オアシス近郊

ドグワーン！

1両の戦車が被弾し、派手に炎を吹き上げた。

「クリス4被弾！」

味方の戦車が吹き飛ぶのを見た操縦手の言葉に、車長が真っ先に確認したのは。

「乗員は！？」

戦友の安否であつた。

「何とか脱出したみたい！」

「畜生！敵討ちよ！フラワー！目に付いた目標から片っ端に撃ちこんで！」

怒り心頭の車長の若い女性は、同じく女性の照準手に命じる。

「わかつてる。イドリブ！」

フェアリーランド軍北アフリカ派遣部隊独特の掛け声と友に、長髪で顔中包帯だらけのフラワーと呼ばれた照準手の女性が引き金を

引く。

次の瞬間。

バーン！

1両のソミユアS35戦車が派手に爆発を起こして、砲塔が空中高く舞い上がった。弾薬庫が派手に誘爆したのであった。

「やった！」

「さすがフラワー！」

操縦手と無線手の女性が賛辞を送るが、言われた本人は表情険しく仲間に向かって言い放つ。

「たった1両を仕留めただけ！まだうじゃうじゃいる！」

実際、彼女らの目の前には多数のソミユア戦車やM13戦車が突進してくる光景があった。とてもではないが、戦車1両を撃破したくらいでは喜んではいけない。

「たく！ロマーニヤにオリュンポスめ！ありったけの戦車を繰り出してきたわけね。英軍は何をやってるのよ！？」

操縦手の女性が、姿かたちも見せない同盟軍に吐き捨てる。

「彼らは補給がなくて来れないらしいわよロイス」

装填手のモーリスの冷静な一言が、ロイスの怒りの炎に油を注ぐ。

「もう！今出し惜しみしてどうするのよ！？」

操縦手のロイスが悪態を吐くが、それは車長のメイアも同じであった。

「今更無いものねだりよ」

「どうするのよメイア！？」

「どうするもこうするもないわロイス。ここで私たちが持ちこたえなきゃ、防衛線全体が崩壊する。今はここで私たちが食い止めるしかないわ！ノーパン！」

「うん」

「百発百中で当ててね。ロイスもモーリスもしっかり頼むわよ」

「了解！！」

その後、4人の乗る55号車は良く奮戦し、多数のM13戦車とソムユア戦車を撃ち取ったが……

「ひいひい！？取り囲まれた！！」

ロイスが悲鳴を上げる。多勢に無勢。55号車は完全に包囲されていた。

「カリーン！どこにいるの！？救援頼む！」

メイアは部下のカーリン軍曹を呼び出すが。

『こつちも自分守だけで精一杯だよ！！少尉の方でなんとかしてくれー！！てうわああ！シャルルだ！！逃げる逃げる！！』

「あいつらー！！」

救援に来られそうも無い不甲斐ない部下に、メイアは齒軋りする。

「どするのよメイア！？」

「決まってるわよモーリス……強行突破よ！ノーパン！正面の戦車を撃って！相手が怯んだらロイスは全速前進！エンジンが爆発しても構わないわ！とにかく今はこの包囲網を抜け出すのよ！」

「「わかったー！！」」

「ようし。今よ！イドリブ！」

次の瞬間60mm砲が唸り、目の前にいたM13戦車が吹き飛ぶ。

「よし行ける！」

ロイスがアクセルを目一杯に入れて走る。その瞬間、包囲していた敵戦車が一齐に砲撃してくる。

55号車の周囲に多数の砲弾が降り注ぐが、急加速したため命中弾はない。

「行ける！」

とメイアはほくそ笑んだが、次の瞬間キューポラの監視窓一杯に、  
オリュンポス軍のシャルbisが映り込む。

「「「嘘でしょおおお！！？？」」」

フラワー以外の3人が絶叫した。シャルbisの重装甲には60mm砲でも歯が立たないからだ。単独でなら、運動戦に持ち込み勝てるが、包囲下の現場ではそれは無理だった。オマケに55号車はシャルルの75mm砲の射線に入ってしまったていた。

「やられる！？」

とメイアが半ば覚悟を決めた瞬間。

「何か来る」

フラワーが呟いた。

「え！？」

とメイアが発した直後。

グワン！

目の前のシャルbisが吹き飛んだ。木っ端微塵に。しかもシャルだけではない、彼女達を包囲していたロマーニヤのM13やソミユア戦車にも爆発が起きる。

「な、何！？」

メイアの狼狽振りを他所に、無線機に聞きなれない音声が入り込んだ。

「両軍ともただちに戦闘を中止せよ！繰り返すただちに戦闘を中止せよ！こちらは国際派遣旅団である！」

「国際派遣旅団！？」

「何それ！？」

ロイスとモーリスが首を捻る。

「もしかしてあれ？異世界の国の軍隊が派遣した部隊……ええ！？チビのベルタの冗談じゃなかったの！？」

「冗談じゃないみたいメイア。3時方向！距離2000に複数の車両！」

「3時ですって……」

フラワーに言われて、メイアは3時方向を見る。戦車のキューポラから見える範囲は狭い。メイアは危険だがハッチを開けてそちらを窺った。

確かに、見ると砂漠の向こうに戦車と思しき車両が見えた。しかし、旅団と聞いたから数十両もいるかと思えば、数えられるのは2〜3両だけだ。

一方彼女らを包囲していたロマーニャとオリュンポスの戦車は一

齊にそちらへ向けて突撃を開始していた。

「ちょっと。旅団で言ったくせにあれだけ！？助かったのはいいけど、本気であれだけのイタ公やオリュンポスの戦車を止められ「ドグワーン！ドガン！バーン！」

メИАたちの目の前で、次々とM13やソミア、シャル戦車が吹き飛んでいく。しかも、その吹き飛び方も砲塔がはじけ飛ぶような生易しい物ではなく、車体も砲塔も木っ端微塵であった。

「う、嘘でしょ！？」

「あんなの重砲じゃなきゃ無理よ！」

「まさか戦車にそんなデカイ大砲を積んでるの！？」

啞然とするメИА、ロイス、モーリス。

一方フラワーは双眼鏡で、ジッとその戦闘を見ているだけだった。

イタリア軍とオリュンポス軍の戦車は、距離1500から1000と言う距離で一方的に撃たれて破壊されていた。

「ば、化け物だ！」

終いには乗員が逃げ出す車両や、反転して逃げ出す車両まであらわれた。そして気を吐いて突撃し、なんとか47mmや75mm砲をお見舞いした車両もいたにはいたが、命中した砲弾は明後日の方向に弾き飛ばされてしまい、すぐに強烈な反撃を食らわされて沈黙した。



「あ、あれだけの戦車を赤子の手を捻るように……」

啞然とするメイア。

「あの戦車の砲は90mmくらいあるみたい」

フラワーが分析した通り、彼女らの目の前で一方的な戦闘を繰り広げたのは日本の陸上自衛隊が基本設計を行い、その後各国で「標準型」として量産された四式中戦車の90mmライフル砲によるものであった。

そしてその「異世界」の戦車が1両、メイア達の方に向かって走ってきた。

「ちょ、ちょっとどうするのよメイア？」

「ど。どうするって……」

混乱するメイアたち。そんな彼女達にフラワーが言う。

「大丈夫。こっちから撃たなきゃ何にもされない」

「どうしてそう言えるのよノーパン？」

「何となく」

「」「何となくかよ」「」

と他のメンバーは呆れずにはいらなかった。

そうこうしている内に、その戦車はメイアたちの車両の隣にやってきて停止した。

「大丈夫か？あんなら？」

出てきたのは若い男だった。

「あなたたちは一体？」

「俺は国際派遣旅団所属、ロクシエ陸軍のラリー・ヘプバーン少尉だ。あんたは？」

男が敬礼して名乗ったので、メイアも渋々返礼する。

「フェアリーランド陸軍、第6機甲師団第5大隊第5中隊クリス小队小隊長のメイア・ヴァン・ペルト少尉よ。それよりも、一体あなたたち何者なのよ？異世界から来た軍隊とは聞いているけど」

「正確には異世界に来たのはあんただけだな。何だ聞いてないのか？ここ北アフリカとあんならや、あんならの敵の国がこの世界に飛ばされたって？」

「『『『へ！？』』』」

この3ヶ月前。フェアリーランド本国とその植民地、そして彼らが交戦中であったロマーニヤ共和国とオリュンポス共和国が北アフリカの戦場付（範囲はチュニジアからリビア中部まで）で転移した。彼らが転移する前の1942年4月、北アフリカの戦場では独・

ロマーニヤ・オリュンポスの枢軸と英・フェアリーランド等を中心とする連合国が血みどろの戦いを繰り広げていた。

その最中に転移現象が起きたのだから、厄介なことこの上なかった。

本国を失った英連邦軍とドイツ軍は早々と戦闘を停止（何せ命令も補給も来ないから）し、日本・ロクシェ連邦・トリステイン王国・サクラス帝国・東露西亞帝国・布哇王国・ヘルベチア共和国はただちに転移してきた3国に停戦を勧告した。

これに対して、フェアリーランドは比較的早く停戦の受け入れを示したが、ロマーニヤとオリュンポスはこれを拒否し、なおも戦闘を続行した。

この戦闘続行が、新世界（各国が転移した世界）における秩序を乱す恐れ大として、各国は早々と実力を持つての戦闘終結を目指すことを決定し、北アフリカ方面に戦力を送り込んだ。

なお日本は未だに憲法9条を堅持しており、世論も一部を除いて派兵に消極的であったため、最終的にロマーニヤとオリュンポスを国家と認めず、テロ組織認定してその取締りと現地における救護活動目的で陸自を派遣した。また現地付近の海域などでの航路の安全確保名目で、海自の艦艇や空自の航空機を少数派遣するに留まった。

もっとも、その少数の部隊も最新兵器で身を固めた部隊であることを考慮する必要があったが。

この辺りの事情を、ラリーはかなり簡略した上でメイアたちに伝えた。

「そ、そんな事が起きていたなんて……」

「いや、知らない方が可笑しいだろ？」

「仕方が無いでしょ！毎日毎日戦闘なんだから！？」

「まあいいけど。ところで、そっちの人は包帯だらけだけどケガでもしたのか？」

ラリーがメイアを指差す。

「え！？ああ、大丈夫よ。ケガとかそう言うわけじゃないから」

「そうか、だったら何で」

と、その時一陣の風が吹きぬけ、フラワーのスカートを持ち上げた。ほんの一瞬だが、その中が見えたわけだが……

そこを見たラリーは口をパクパクさせた。

「な、なんで下着を着けてない」ドゴーン！

「ごめんあそばせ」

言い切る前に、メイアがラリーを殴り倒した。そこへ、ラリーの部下が戦車から降りてきた。

「少尉、通信が入っています……て、どうかしたんですか？」

「……痛たた。たく、女っていうのはどこへ行っても乱暴な生き物だな」

「ごめんなさい、ちょっと足が滑ってね。とにかく、さっきのは忘れて」

「あ、ああ……で、通信内容は？」

「あ、はい。旅団長の池田中将名で全車ここから東にあるオアシスに集合せよとのことですよ」

その言葉に、メイアが反応する。

「で、それって第3オアシスのこと？ だったら私たちの拠点だわ」

そこへメイアたちにも命令が飛び込んできた。

「メイア。大隊長命令よ。第3オアシスに緊急終結せよですって」

「そう。だったらちようどいいわ。私たちが案内してあげる」

「そりゃ助かる」

二人はまだ知らなかったが、この命令こそが北アフリカにおける最後の戦闘の前触れであった。

つづく……かも？

**フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 1（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。

転移5年3ヶ月目（新世界暦5年7月） 北アフリカ カッターラ  
低地西方 第3オアシス

転移後の北アフリカ戦線は、転移直後からしばらくの間、交戦している各国それぞれが大混乱に陥り、一時的に戦闘が止まった。そのまま戦闘が終われば万々歳なわけだが、生憎とそうはいかなかった。

異世界へ転移してしまうと言う異常事態によって、ドイツ軍とイギリス軍はそれぞれ本国を完全に喪失した。またフェアリーランドやローマーニャ・オリュンポスは本国や植民地が一緒についてきてはいたが、前の世界において築かれていた交易網はもちろん壊滅していた。

そうになると、各国は新しい国際秩序の中で生きていく必要があるが、ここでフェアリーランドとローマーニャ（+オリュンポス）で大きな差が出てしまい、以後の国際関係に影響を与えることとなった。

もともとフェアリーランドが北アフリカで戦闘を行っていたのは、ラ・デューン州（地球におけるレバノン）やモクスター州（同キプロス）と言った植民地の防衛のためであった。そのため、北アフリカに対する領土的野心は全くない。

一方のローマーニャ側からすれば、リビアは元々自分たちの物。そして今回一緒についてきたチュニアやエジプトの一部も、いずれは自分たちの物とするべき場所と考えていた。

そして転移してきた世界にあった日本やロクシェ等の国々にしてみれば、戦争を行ってもらうのは正直迷惑以外の何物でもなかった。特にロクシェ連邦はロマーニヤとオリュンポス、フェアリーランド本国とも距離が近いため、戦争が続けられると貿易や水産業に大きな影響が出ること必至だった。

実際、転移直後フェアリーランド本国近海に潜伏していたロマーニヤの潜水艦が、ロクシェ船籍の貨物船を攻撃して撃沈するという事件まで起きていた。

他にも、似たような世界から飛んできた日本からしてみれば、この地域には膨大な地下資源がある可能性があり、戦争を終わらせてそちらの調査に当たりたかった。

またその他の各国も、それぞれ自国の利益の観点から北アフリカ地域に注目した。

各国とも様々な思惑があったわけだが、最終的に日本を始めとする以前に転移してきた国で作る「国際連合」（通称新国連）は、停戦勧告に加えて北アフリカ地域における国連による監視団の派遣と、事後の統治体制の整備を3カ国（実際には英国やドイツも加わるが、国家としての体裁は既になかった）に要請した。

これにフェアリーランドは好意的な反応を示し、さらには各国と早々と国交締結の動きを見せた。

ところが、ロマーニヤとオリュンポスは逆の道を選択した。彼らは自分たちが苦勞して分捕ろうとしていた土地が失われることを、さらには今後分捕れる可能性のある土地を永久に失うことを恐れた。



既に交易網は壊滅していたが、本国に残る物資を掻き集めれば短時間で北アフリカとキプロス位なら取れると彼らは考えた。すなわち既成事実を作ってしまったおうと言っわけだ。

そうして転移から3ヵ月後に、ローマーニャとオリュンポスの総力を上げて行われたのが北アフリカにおける大攻勢と、モクスター州に対する上陸作戦であった。

しかし後者の作戦は、フェアリーランド海軍に加えてロクシエ海軍や日本の海上自衛隊による妨害によって大損害を被って撤退した。

残る北アフリカ戦線においても、日本など各国から派遣された国際派遣旅団が戦闘に加わることで、大きくその流れが変わった。

ちなみに、北アフリカ戦線の本来主力とも言えるロンメル率いるドイツ・アフリカ装甲師団は本国消失にともない、最高指揮権をロンメルが握って、ローマーニャやオリュンポスの再三再四の出撃要請を蹴って、トブルクへと引きこもって様子見をしていた。

対して、モンドゴメリイ率いるイギリス軍は少しかり状況が異なっていた。

こちらでも本国消失という事態ではドイツ軍と変わりは無かったが、今回転移した地域にはマルタとエジプトの一部地域が含まれていた。この時期両土地はまだイギリス領であり、北アフリカ戦線に展開するイギリス軍にとっては、最後に寄る辺となりえる土地であった。

つまり、彼らもマルタやエジプトを自分たちの土地として既成事実化を図ったのであった。

もつとも、英軍自身は既に補給も絶たれており、必然的にその行動は消極的にならざるをえず、ローマーニヤとオリュンポスの攻勢に対しては、フェアリーランド軍と共に、全力を持って迎撃しなければならなかった。

しかしながら、同盟国でありながら英国のフェアリーランド軍に対する見方としては「女子供動物の軍隊」と言う見下した物が未だに幅を利かせていた。

バキッ！

女の拳から放たれたとは思えないような重い一撃をアゴにうけ、チャールズ・ダーブロウ大英帝国陸軍少佐は文字通り吹っ飛んだ。無様に地面に叩きつけられた彼の鼻先に、追い討ちをかけるようにサーベルの剣先が突き付けられる。

「貴様、我が隊を囷に使ったな」

驚くほど冷静な声で、だが文字通り死を刻むかのように、サーベルの持ち主であるフェアリーランド陸軍のジャンヌ・マッハ少佐がダーブロウに尋ねた。

「し、知らん！ 第一貴殿の隊は全くの無傷でなかったはないか！」

いつもの尊大そうな態度をかなぐり捨てダーブロウがわめく。

だが数時間前の彼の頭の中では、ジャンヌの自走砲部隊は巧妙に

偽装されたロマーニヤ軍の砲兵部隊を誘い出すための罠にすぎなかったのはまぎれもない事実であった。

それが無事で済んだのは、敵の罠が完成する寸前で国際派遣旅団の回転翼機（攻撃ヘリ）部隊が突然として乱入し、偽装された陣地をあつさり見破り猛攻を仕掛けたことと、ロマーニヤ軍砲兵部隊の司令官であるシレーネ中尉が恐怖におののいてすぐに白旗を上げてしまったせいである。その偶然が無ければ、ダーブロウの戦車部隊はともかくジャンヌの部隊が無事で済むわけがなかった。

だがそんなことはすべて過去の話だ。作戦終了後に部下を率いて第3オアシスの一隅にあるイギリス軍陣地に現れたジャンヌは、銃を突きつけダーブロウの部下たちを武装解除をさせるや、いきなり彼を殴りつけたのである。

（この山賊風情の、フライフェイスの女狐め！）

栄光ある大英帝国の貴族、名誉あるダーブロウ伯爵家の一員たる彼は、あらん限りの侮蔑の言葉をジャンヌに浴びせたかった。

彼にしてみればフェアリーランドの私掠部隊である666部隊、通称「バツカニアンズ」の出身者であるジャンヌなぞ単なる消耗品としか見なしていかなかったし、まして彼女はケルト系亜人間であった。冷徹だが美しい彼女の顔に醜く走る傷痕と、狐のような鋭い両耳（もつとも左耳は半分ちぎれ飛んでいたが）では同じ人類とは呼べない。そんな亜人が同じ言葉を話すだけで虫唾が走る思いだった。

だが今は彼女がダーブロウの生殺与奪を握っている。彼の人生でこれ以上の屈辱はなかった。

ダーブローウにしてみれば永遠に思える時間、実際には殴り飛ばされてからきっかり1分後、二人の耳にバラバラ、と聞き慣れぬエンジン音がひびいてきた。しばらくして、司令部のテントにジャンヌの部下が入ってくる。

「少佐、国際派遣旅団の司令官がお目にかかりたいとのことです」

「わかった、すぐに向かうと伝えてくれ」

そう言うなり彼女はサーベルを鞘に納めた。突き付けられた死から逃れられたダーブローウが安堵の溜息をもらす。

「今回の件、司令部に報告したいのならそうするがいい。その汚れたパンツを換えてからな」

薄い笑みを浮かべ、笑い声代わりにブーツにつけた拍車を軽やかに鳴らしながら、ジャンヌはテントを後にした。彼女の部下たちも銃を下し去ってゆく。そこでダーブローウは初めて自分がどういう状況になっていたかに気付いた。

「今回の件、大丈夫でしょうか？」

打ち合わせの場所とされたテントに向かう際中、不安そうな表情の部下がジャンヌに質問してきた。

「ダーブローウはプライドの塊だ、そんな男があんな醜態を晒すのを見られたんだ。絶対に喋らんさ」

先ほどの光景を思い出しつつジャンヌは再び笑みを浮かべた。友

軍であるイギリス軍とはいえ、ダーブロウは日ごろの鼻につく態度からフェアリーランド軍では最低の評価を受けていた。今日の出来事はそんな彼のタマを引つ摺んだといえる、彼女としては多少汚い真似をしてでもこのネタを利用するつもりだった。だがその前に別の案件を片付けなければならない。

案内されたテントにはすでに国際派遣旅団の兵士たちが着席していた。鋭そうな印象を持つ髪の短い女を中心に、屈強な白人の男と軽薄そうな印象を抱かせる東洋系の男。いずれも砂漠になじむ茶褐色のまだら模様の戦闘服に身を包んでいる。ジャンヌが入るなり三人は立ち上がり敬礼した。彼女も綺麗に返礼する。

「初めまして。国際派遣旅団所属トリステイン王国陸軍銃士隊隊長のアニエス・ミラン少佐です」

真ん中の女性が口を開いた。少々堅い印象ではあるが、ジャンヌとしては部下に持たいたいなと心から思わせる女だった。

「同じく、アルカディア自治領陸軍特殊作戦群のウィリアム・レノックス大尉です。よろしく」

「どうもはじめまして、日本国陸上自衛隊第一空挺団の友澤文夫三等陸尉です」

「遠いところをようこそ。フェアリーランド陸軍のジャンヌ・マッハ少佐だ。もう一人、イギリス軍の戦車部隊を統括するダーブロウ少佐が来るはずなのだが、もう少々遅れると思う」

そう言うと、ジャンヌは先ほどのことを思い出し笑い出しそうになった。

この時の様子を、後に友澤はこう語っている。

『そのジャンヌって姐さんだが、どっかの漫画に出てくるロシアンマフィアの女幹部さながらって感じでね。あんなのとアニエスが出会って、しかもすぐに意気投合したもんだから、あの場所がアフリカで一番おっかないグランドゼロに思えたぜ』

「ところで、あなた方の最高指揮官も同行していると聞いたが、どこかな？」

ジャンヌの質問に、友澤が答える。

「我が方の最高指揮官であるの池田末雄中将は、今頃そちらの師団長とお話中ですよ」

何かを思い出したか、友澤はクスツと笑った。

「どうかしたのか？」

「いいえ。先程ウチのボスがオタクの指揮官に出会った時のことを思い出しましてね」

友澤の脳裏には、128cmという身長と子供じみた言動から『ちびのベルタ』の異名を持つベルタ・アーウィン・シュトラウス中将と初対面した時の池田中将の顔が思い浮かんでいた。その様子を彼は「あごカックン状態」と簡潔に表現している。

「そうか」

一方のジャンヌも、一般常識の範疇からかなりずれた自分たちの上官を見れば普通の人間がどういうことになるか容易に想像できたため、軽い頭痛を覚えた。

「で、貴官らと私が対面した理由はどう言うことかな？」

彼女の問に答えたのは、外からテント内に入ってきた人物たちだった。

「それについては私たちが説明するよ」

「説明するよ」

天幕の入り口が開き、数人の男女が入ってきた。

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なおダーブラウとジャンヌの会話のシーンは、ジョン・ドー先生提供です。本当にありがとうございました。



1年目＋3日目 北太平洋アリューシャン列島沖 日本海上警備機  
構警備船「ゆうばり」

「対水上戦闘！主砲右砲戦！目標ソ連海軍駆逐艦！CIC指示の目  
標、撃ち方初め！」

「対水上戦闘！主砲右砲戦！目標ソ連海軍駆逐艦！CIC指示の目  
標撃ち方始め！」

前部甲板に装備された76mm砲が目標へと旋回、指向するやい  
なや発砲を開始する。

「まさか水上砲戦をすることになるとは思わなかったな」

「ゆうばり」船長の藤原讓二上等警備正は、双眼鏡で現在交戦中の  
艦艇を観察しながら呟いた。

相手をレーダーで捉えたのは4時間前のこと。その後各種無線に  
て連絡を試みるが、相手は沈黙したままであつたので、目視圏内ま  
で接近を試みた。

そして目視圏内へと接近したのが、1時間前のことであつた。改  
めて無線と発光信号で連絡を試みるが、その最初の返答は「帝国主  
義者の妄言に付き合う必要なし」と言う強烈なものであつた。

既にソ連海軍の海軍旗を掲げているのが確認されており、「ゆう  
ばり」は増援を呼ぶことを試みたが、その途端に敵からの発砲を受

けた。

藤原はまだ創設されてまもない警備機構のために、海上保安庁から移籍した人間であった。

移籍してから半年、警察組織である海保と準軍事組織である警備機構との違いに戸惑うことも多かったが、海竜や密輸団相手にした任務を通して主砲や機銃を発射する機会もあったが、軍艦相手に戦うのはこれが初めてであった。

「目標は2隻！前の艦が「グネフヌイ」級、後方が米海軍の「シムス」級と思われます。ただし、どちらともソ連海軍旗を掲揚しています」

識別表を捲っていた士官が、ようやく相手の艦型を特定した。

「識別表によれば、相手は12.7cm砲と13cm砲を保有している模様」

「だが第二次大戦型の艦の性能じゃ、早々当たるものか。さっきから外ればかりじゃないか」

ある下士官の言葉に、別の士官はせせら笑った。確かに、ソ連艦からの砲撃は北太平洋の荒波のせいも加わってか、先程から近弾さえ得ていない。

対して、現在は警備船とは言え元は護衛艦であった「ゆうばり」の76mm砲弾は、さすがに射撃式装置などの性能が良いこともあって、早々と命中弾を得ている。さすがに小口径であるため、数発撃った位では相手に致命傷を与えられないが、その1分あたり10

0 発近い速射性能を生かして次々と命中弾を叩き込んでいた。

40 発程発射した所で、敵艦に火災が発生するのが確認できた。

「それもう一息だ！」

と誰かが言った直後、前を走っていた「グネフヌイ」級が爆発を起こした。

「やった！」

「ざまあ見やがれ！」

と叫ぶのは主に民間からの転籍者や海自出身者であった。一方で、藤原ら海保出身者は複雑であった。

海保は警察組織であり、軍事的な訓練・任務に就かないことが明記されている。しかしながら警備機構は必要あらば海自の指揮下に入ることが明記された組織であった。

海保時代は人の救難が主任務であった藤原らにとって、発砲して相手を撃破することは、任務とはいえ気分の良い物ではなかった。

「船長。目標を変更します！」

「ああ。警告は続けているだろうな？」

「はい。日本だけでなく英語とロシア語でも打電していますが、一行に聞き入れる気配がありません」

「むむ。止むをえんな。砲雷長。敵2番艦に目標を変更」

「アイ・サー！」

海自出身の砲雷長が返した直後。

グワシャーン！！

突如艦橋前方で爆発が起き、艦橋のガラスにヒビが入った。

「一番砲被弾！」

「消化装置作動！」

その報告に、藤原を含む全ての人間の表情が歪んだ。

「しまった！！」

ソ連艦の撃った砲弾が命中した。しかも、よりにもよって主砲に。

「ゆうばり」は護衛艦時代には対艦ミサイルを搭載していたが、現在は撤去されている。主砲を除くと、水上戦闘に使える武器は何一つ有していなかった。

魚雷はあるにはあるが、これは水上艦用ではなく対潜用だ。無理をすれば水上艦相手に使えないことはないかもしれないが、元々そのような用途は想定していないので、使わないほうが懸命である。

「針路270。機関全速！現海域より離脱せよ！！」

「ようそろつ！」

藤原は艦を回頭させて、遁走を図った。戦えない以上、逃げるが勝ちである。しかしながら、敵駆逐艦は余程腹に据えかねたのか、「ゆうばり」を追跡してきた。

「味方の救助をせずに追ってくるだ！？」

この辺りは海保出身である藤原の思考の限界であつたかもしれない。

「敵の殲滅を最優先にするなら、それも間違つた判断ではないでしょう」

海自出身の士官が淡々と答えた。

ちなみに彼らは知らなかったが、ソ連艦ではやられて敵を取り逃がした場合と、一矢報いた場合とでは後々党からの評価が大きく変わるというのも、追跡を止めない理由の一つであつた。

「救援要請は続けているな？」

「はい。砲撃戦が始まってからずっと。しかし、援護してくれる味方は付近にはいないようです」

「とにかく、全速力で回避しつつ逃げるんだ。敵も何時までも砲弾があるわけじゃないだろうからな」

その内諦めて反転する。と藤原は予想していたが、期待に反して2時間ほど経つてもソ連軍駆逐艦は追いかけてきた。

「しつこいな。そんなに我々が憎いか!？」

「船長。敵の方が速力が速いようで、少しずつでは距離が縮まっています」

「むづ」

相手は高速の駆逐艦であった。「ゆうばり」も30ノット近い速度は出るが、振り切ることは出来ず、逆にジワジワと距離を縮められていた。

「どうしたものか？」

藤原はそんな呟きをした時、報告が入った。

「艦長。水上レーダーが複数の艦艇を探知しました」

「艦艇!？味方か？」

そんな報告全く聞いていなかったのも、自然と疑問形での返答となる。

「そこまではわかりません。敵味方識別装置を積んでいないようなので、識別不能です。しかしながら、一直線に本艦の方向へと進んできます。数は8隻。速力27ノットで急速接近中。1時間ほどで視認できます」

「となると……もしかしたらロシアか日本海軍か……いや、アメリカなんて言う可能性も有るな……まあ今は目の前の脅威に集中しよ

う。接近中の艦艇の動きに注意しつつ、後方のソ連駆逐艦からの攻撃の回避に全力を尽くせ」

「アイ・サー！！」

それからさらに1時間後。

「艦影見ゆ！3時の方向！」

「どれどれ……こりやまたレトロな船が来たね」

藤原の双眼鏡の中に入ったのは、4本煙突の如何にも旧式な感じの巡洋艦と、大昔の映画に出てきそうな駆逐艦が合わせて8隻であった。

ところが、その8隻を見た途端、それまで自分たちを追及していたソ連駆逐艦が反転した。

「さすがに適わないと見たか……て、バカが！」

藤原はそう叫ばずにはいられなかった。ソ連駆逐艦は操艦を誤って急激に左へと傾斜した。

「横転するぞ！？」

誰かが叫んだが、幸いにもソ連駆逐艦はその後なんとか建て直し正常な姿勢に戻った。しかしながら、機関に異常を来したのか、急激に速度を落とした。

その瞬間を見逃さなかった者がいた。

「日本水雷戦隊！ソ連艦を包囲します！」

「スゴイ！この波の高い海でなんと云う手際だ！？」

藤原は感嘆せずにはいられなかった。日本の水雷戦隊は激しい波を物ともせず、あつと言う間にソ連駆逐艦の退路を塞ぎ、そのまま包囲してしまった。高い練度がこれだけでも窺えると言ったものだ。

間もなく、ソ連駆逐艦のマストに白旗が掲げられた。

「軽巡「多摩」よりモールスで信号。貴艦は無事なりや？」

「返信。我損傷するも艦の航行に支障なし。救援に感謝するだ。それと俺の名前も入れておいてくれ」

「了解！」

モールス信号（と発光信号）はどんなに信号装置が発展しても、使われ続ける不滅の通信手段である。そして同じ日本人同士であるため、連絡は円滑に進められた。

「返信。貴艦の無事を祝す。我これより拿捕艦をダッチハーバーへと曳航す。また先に貴艦が撃破した艦の救助も行う。貴艦は安心して帰港されたし。大日本帝国海軍北太平洋艦隊司令官、田中頼三中将」

「ふう。過去の人間とは言え同じ日本人に助けられるのは悪くないものだ。それにしても、旧海軍の練度の高さは噂に違わぬものだ。さすがは海保……と海自の御先祖様だけあるな」



「それでどうしますか船長？任務を続行しますか？」

士官の問に、藤原は首を振った。

「残念だがそれは無理だ。主兵装の主砲が損傷した現在任務の続行は難しい。それに燃料も大分食った。ここは彼らに任せよう。本船は根室基地に帰還する」

「了解です。船長」

「それにしても田中中将か……どこかで聞いたような気がする……」

藤原が彼の正体に気づくのは、その後図書室で旧海軍に関する文献に触れた時であった。

こうしたソ連軍やアメリカ軍による襲撃で貨物船や漁船など最低でも10隻が撃沈され、100名近い死傷者を出した。

一方で日本を含む各国（ほぼ日本単独であったが）も搜索と合わせてこれらの拿捕・攻撃を行い最終的にアメリカ潜水艦2隻、ソ連潜水艦1隻、水上艦艇2隻が拿捕され、13隻が降伏指示に従わずに撃沈された。

その最中にロクシエ海軍駆逐艦の大破や日本の海上警備機構の警備船が主砲を全損するなど大きな犠牲を払ったが、3週間ほどこの騒ぎは収束した。

一方で新たに出現した東露西亞帝国と布哇王国との接触は彼らが転移した7日後に本格的に始動し、その2週間後には暫定的な国交締結まで持ち込むことが出来た。

この素早い交渉の影には、後に多くの日本人を驚かせた東露帝国侍従長の広瀬武夫の存在が大きく働いている。

一方で、布哇王国をはじめとする各地に駐留していた日本軍の扱いが、日本政府にとって大きな課題となった。何せ彼らが忠誠を誓っているのは日本国ではなく大日本帝国なのである。

日本政府は国内の意見一致に加えて、布哇や東露に人を送って現地軍代表者と協議を重ねて、善後策を検討した。

この問題が片付いたのは、結局彼らが転移してから半年後のこととなった。

東露帝国転移編 7（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

東露帝国転移編 完結（前書き）

スペシャルサンクス水底先生！！

## 東露帝国転移編 完結

転移3年目8月 日本国東京湾

この日東京湾では、転移以来初めてとなる国際観艦式が挙行されようとしていた。

日本の海自が誇るへり空母「えちご」「ひゅうが」をはじめ、「こんごう」級や「あたご」級のイージス護衛艦に「ゆきかぜ」級を始めとする各種汎用護衛艦が並ぶ。いずれもこの世界においては、他の追隨を許さない高度な戦闘能力（主に索敵能力）を有する艦艇ばかりだ。

また転移1年後から建造が開始されたロースペック艦艇もその姿を見せている。特に小型ジェットとターボプロップ・レシプロ機用空母として建造された空母「瑞鶴」級や、155mm速射砲と多数の対艦ミサイル（ハープーンではなく廉価型）、水上戦闘にも使用可能な魚雷発射管を装備した巡洋艦「白馬」級はその筆頭であった。

ちなみに余談だが、これらロースペック艦艇のハイテク機器も通常の護衛艦より劣った物しか搭載されていない。しかしながら、諸外国ではそれすら過剰スペックで、これらの艦をモデルとした輸出艦はさらにスペックダウンした物を採用している。

またそうした海自艦艇以外にも、白と赤と黒を基調とした海上警備機構の警備船。白と蒼の塗装が美しい海上保安庁の巡視船も列に加わっていた。

しかしながら、その存在も東露西亜帝国と日本海軍の3隻の「大

和」級戦艦を前にしては霞んでしまふ。

転移後東露西亞帝国は一大軍事国家としての地位を確立した。艦艇の数だけで見れば、転移後の世界では最強と言えた。

ただし、転移によってソ連とアメリカという二大敵国が消滅したため、その軍備は半ば遊兵と化してしまった。そのため現在では旧式艦の整理等と言った軍備削減に動いていた。

この時放出された艦艇を、ロクシェやサクラス、トリステインにヘルベチアと言った各国が乗員込みで購入している。

乗員込みというのは、指導役としてそのまま傭兵契約したということだ。

各国共にその領海の拡大から、空海軍の拡大もしくは戦力再編に動いており、特にサクラスやヘルベチアと言った新興海軍国にとつては、これら中古艦艇さえ咽から手が出るほど欲しい物であった。

そうした国々の艦艇も最小で1隻から、この観艦式に出席していた。そのため、東京湾にはこの日転移してきた国家（連邦国家は統一政府を指す）全ての国旗がはためいていた。

これらの艦艇を見るために、沿岸部や見学船として指定された艦船には鈴なりの観客が詰め掛けていた。

日本国の代表である人物も、多数の軍艦が色とりどりの旗を掲げて停泊している姿に、胸の高鳴りを覚えずにはいらなかった。

「これは中々に壮観ですな。アレクサンドラ皇女殿下」

各国代表者が乗り込んでいる戦艦「近江」に設けられた貴賓席には各国の代表や大使が並んでいるが、その内の1人である日本国の春川首相は東露より参加した第一皇女のアレクサンドラに話しかけた。

「そうですね。私は陸軍なので海軍のことはあまりよくわかりませんが、これだけの軍艦が揃うとさすがに胸打つものがあります」

「帰国したら是非とも陛下や侍従長殿にお伝えください。お世話になりましたと」

「それは我が国が言うべきセリフですよ、春川首相」

転移以来、東露西亜と日本は多くの会談を行ってきた。その中でも、他国には見られない会談となったのが、東露西亜と布哇に駐留する日本人や日本軍に関する物であった。

本来であれば、大日本帝国の後継政体である日本国が彼ら全てを引き受けるべきなのであったが、やはり70年近い時間の隔たりは容易に解決するべき問題ではなかった。加えて日本国の現在の状況がややこしいこととなった。

民間人であれば、別に現在の日本国への転籍、それが嫌なら布哇やロシアへの帰化で事足りる。最悪在日外国人のような永住権を与えれば良かった。

しかしながら軍に対しては、日本の場合現在に至るも憲法九条を堅持しているため、扱いが困る物であった。手っ取り早いのは全ての部隊を日本国自衛隊へ編入することであったが、これは現状の国

家予算を考えるとほとんど不可能であつた。

加えて編入されるべき大日本帝国側の反応も良くなかつた。同じ日本人として、日本を守る自衛隊へ編入されることに妥協できた人間もいるにはいた。特に日本政府から説明を受けた堀大將はじめとする高級将官や、大学出身の士官や商船学校などを出た予備士官にその傾向が強く見られた。

しかしながら、多くの兵士たちはアメリカとの戦争における敗北から再出発し、天皇を象徴制として戦争放棄を行った日本国への帰属を拒否、少なくとも海上自衛隊への参加は拒絶した。最低でも大日本帝国海軍、ひいては大日本帝国臣民としての存在が続くよう願つたのである。

日本国内においては「強制的に日本へ帰属させてしまえ。感情的なシコリは数年も経てば払拭される」等と言う意見があつたが、これは極少数であつた。日本政府も各国政府も、そんな安易に事が進むなどとは毛ほども考えていなかった。

また一部からは「陛下から一声掛けさえすれば全て丸く治まる」と言う声もあつたが、これも「天皇の明確な政治参加で憲法違反だ！」と言う反対意見が出て頓挫した。

この問題に関しては、日本と東露西亜（転移1年後に正式に露西亜帝国に改称）、さらに堀大將や本間中将らを交えて何度も会談が持たれ、半年も掛けて以下の様な方針で最終的に妥結した。

？艦艇並びに部隊の内日本国への帰属の意志のあるものは日本国自衛隊へと編入する。



？帰属の意思のないものは今後も大日本帝国籍のままとする。そしてその身分は各国において相互保証する。その外交的な代表は駐布哇王国大使館が代行する。

？日本国自衛隊へ編入されない艦艇ならびに部隊は以後布哇王国・露西亞帝国・トリステイン王国・ロクシェ連邦と個々に傭兵契約を結び運用されるものとする。（後に日本と新国連もこれに参加）

と言うかなり特殊な形となった。もつとも、転移という非常識な事態を前にしては常識とか慣例などは通用しないのだから仕方がないと言えば仕方が無い。

ちなみに日本海上自衛隊へ編入されたのは2隻の「大和」級戦艦に2隻の改「大鳳」級空母、4隻の巡洋艦に6隻の駆逐艦であった。また陸上自衛隊へは陸軍や陸戦隊から2000名程が編入されている。

艦艇はいずれも予定されていたロースペック艦艇の建造を一部中止して、それらに準じる改装を行っている。

そして自衛隊に編入されなかった部隊は各国との間で傭兵契約を結び、それを資金源としてその後の活動を行う建前となった。もつとも、実際には東露西亞帝国と布哇王国がその大部分を引き受けたのだが。これには日本が今後の両国との貿易で相当な便宜を図ると約束した結果であった。

事実、その後ロシアとの間では多くの資源開発やその購入で協力関係を築き、布哇との間では観光産業への積極的な投資を行っている。

しかしながらトリステインのように自国の財政状態が悪いにも関わらず、今後の海軍などの拡張に備えて思い切って傭兵契約を結んだ国もあれば、ロクシェやサクラスの様に潜水艦の運用技術を学ぶために潜水艦隊のみと傭兵を結んだような例もあった。

「首相、それにアレクサンドラ殿下。もう間もなく式典が開始されますよ」

「ありがとう小泉。もうそんな時間か。それじゃあ、あまり気が進まないが祝辞と行きますか」

「ええ」

春川ら各国からの参加者代表は、式典で行うスピーチをするため立ち上がった。

各国代表によるスピーチが終わると、停泊していた艦艇が一斉に抜錨して沖へと出た。そして相模湾上において、これ以後この世界において恒例となる国際観艦式が盛大に行われることとなった。

おまけ（ここから先は水底に眠れ先生から送られてきた物を許可を得て改変した物を使用しています）

転移直後の防衛省での一コマ。

「これはマズイ事態かもしれませぬな」

1人の海上自衛官の士官が重苦しい口調で言った。

転移直後、海上自衛隊。いや、全自衛隊にとってのきつぴらない事態が発生していた

「戦艦どころか、巡洋艦も沈められないとは」

ロクシエ海軍は数は少ないが重装甲の戦艦や巡洋艦を保有していたが、調査とシュミレーションの結果、それらをミサイルで撃沈するのは容易いことではないとわかり、自衛隊関係者は戦慄した。

「彼らが友好的な関係をすぐに築いてくれたから良かったものの」

もし衝突するような事態になっていたら、どうなっていたことが表面爆発でだいぶダメージは与えてるだろうが、相手は殴りあい前提の艦だ。

「護衛艦隊のミサイル装備数が少ないのでは？」

常に8発搭載しているのは稀だし、仮に搭載していたとしても、今後最低護衛隊毎の活動を行うとして3艦、24発で戦艦のような大型艦船が存在する海で、果たして優位に立ち続けることが可能なのか？

「巡洋艦はもしかしたら、それでなんとか出来るかも知れんな。だが、戦艦はどうする？」

最大500mmと言うような戦艦相手を想定したミサイルなど当

然ながら存在しない。

「それよりも、目標選択のモデリングを強化したらどうか」

目標選択のモデリング。当然ながら、ロクシエ海軍のモデルなんぞないから、シースキムで舷側に当ててる。しかし、それはそれで問題がある。

「モデル情報を入れると、処理に問題が出るぞ」

対艦ミサイルを一発か二発受ければ間違いなく撃沈か戦闘不能に持ち込める現代戦に、モデリングなぞ不要だった。それを入れるとなると処理能力に問題が出かねない。

「だが、トップアタックはさせるべきかも知れんな」

確かに、それならば舷側よりは喰いやすかるう。だが。

「それでも、戦艦の脅威は残る」

上・中甲板での弾頭破壊、炸裂では致命傷には程遠い。少なくとも沈める見込みはない。

「潜水艦に任せては？」

と常識的な意見も出るが、これは物理的な理由で否定される。

「何隻張りつかせる気だよ。特に受け身だと厳しいぞ」

待ち伏せする範囲が広すぎる。自衛隊の保有する隻数からも、大

量投入は難しい。ちなみに転移時の保有艦数は22隻であった。

「ミサイルだと、足を止めるのも難しいな」

そして、武装を消耗してしまう。もし敵に第二陣や別勢力がいたらやっかいなことになる。

「トマホークがもっとあれば」

と誰かが言えば、別の誰かが否定する。

「あれでもダメだろ、対応出来るとされた「キーロフ」級でさえ舷側200ミリだ」

「ザラ」級並みだと、トマホークですら殺しきれない可能性があるのだ。

結論を言えば。

「打撃力が足りない」

「魚雷なら、どうか？」

「水上艦に搭載している短魚雷は対潜用だし、口径は324ミリかつ、射程が・・・まさか長魚雷にするってのは無しだぜ？対潜攻撃力が必要だ」

此処まで来て全員が唸る。確かにこれは大問題かもしれないと。会議はそこで解散となり、次回に持ち越されることとなった。

「相変わらず海幕長はお人が悪い」

会議終了後、海幕長の隣を歩く若い左官が言う。

「危機感をあおらせるなら、君が一番だと聞いてな、志摩二佐」

志摩二佐は旧海軍からの海軍一家の出だ。そして彼自身も有能で、35にして既に二佐であった。

「これで、我々内の楽勝ムードは払拭されよう。ロクシエやサクラを時代遅れの軍隊と侮る連中が多くて仕方が無いからな。しかし、二佐、この問題を君ならどうする？」

少し考えるそぶりをみせて、志摩は答えた。

「VLAを使います。短魚雷の通常射程に+22キロと、戦艦の射程に多少踏み込まねばなりませんが、従来の74式の11キロに較べたら、まだ戦えます」

まあ、戦えるのはこんごう以降の艦だけですがね。と呟く。戦艦がこんなに厄介とは。

しかし志摩は想像すらしていなかった。この1年後に日本はその厄介な戦艦を自ら保有してしまうこと。そしてその3年後に志摩が一等海佐に昇進した途端艦長へと就任し、まさかの戦艦同士の砲撃戦を行うことになるなどとは。

**東露帝国転移編 完結（後書き）**

御意見・御感想お待ちしています。

海自が戦艦を持つなんてバカな思われるでしょうが、既に市販小説ではありますからね！！題名は「戦艦大和2010」懐かしいなあ。

転移5年目3ヶ月（新世界暦5年7月13日）      フェアリーランド  
王国モクスター州西300km

フェアリーランド海軍は、地中海の植民地であるモクスター州（地球で言うキプロス）に艦隊拠点を持っており、ここを中心に潜水艦隊や水上艦隊が出撃していた。

一方でこの島はもう1つの植民地であるラ・デューン州（地球のレバノン）を背後に抱えており、もしここが陥落すれば名実共に地中海は枢軸の海となり、さらにはラ・デューンも危うくなる。

ローマーニヤとオリュンポスの2大枢軸国は、新世界における自国領土の既成事実化を行うため、このフェアリーランドの植民地を短期間で占領しようと目論んでいた。

「……見えた！ローマーニヤとオリュンポスの艦隊だ……ひゅー。こいつはスゴイ数だ」

潜望鏡越しに見える大艦隊の姿に、フェアリーランド海軍潜水艦N7号艦長リチャード・ウォンクリン少佐は感嘆の声を上げた。

彼の任務は、フェアリーランド王国の海外領土の1つモクスターへと上陸作戦を敢行するローマーニヤ・オリュンポス連合艦隊の動向を監視することであった。

「……まさか攻撃なんかしませんよね？」



副長のデバイアス・ミニット・パット大尉が聞いてくる。

「しないよ。あんな大艦隊に1隻で挑むなんて自殺行為だ。やりすぎしたら無電でモクスターの潜水艦隊司令部に連絡だ」

「それじゃあ無電を打ったら私たちの仕事も終わりですね」

と笑いながら言うのは次席士官のナンシー・スチュワート中尉だ。

「んなわけないだろ。後続がいるかもしれんし、味方との交戦で落伍するやつも出るかもしれんしな。隙あらば攻撃だつてするさ」

「ですよー」

「しかし、あれだけの大艦隊、モクスターにいる艦艇や空軍だけじゃ止めるのは無理じゃないかな」

「……なんでもロマーニヤ中の艦艇を掻き集めたと統領は豪語しているそうですよ」

副長の言葉に、艦長は頭を抱えた。

「うーん……」

2時間後。ロマーニヤ艦隊が通過したのを待つてN'号は海上へと浮上。潜水艦隊司令部、ならびにテーチスフリート総司令部（フエアリーランド王国地中海艦隊総司令部）へと敵艦隊発見の電文を送った。

するとすぐに返信が来た。その内容は彼らを驚かせるものだった。

「積極的に敵艦隊を追撃、友軍艦隊を支援しろだつて！？友軍艦隊  
つて、あの大艦隊に対抗できる艦隊があるのかよ！？」

7月14日 北アフリカ・カッターラ低地南西 フェアリーランド  
ネスト・オブ・タイガー  
陸軍航空部隊飛行場

フェアリーランド王国では空軍が空の戦いの主役であつたが、こ  
こ北アフリカ戦線には唯一の陸軍航空隊が展開していた。その名も  
「ネスト・オブ・タイガー」（トラの穴）。

戦闘機や爆撃機など4個中隊（1個中隊の定数12機）からなる  
この部隊は、北アフリカ戦線の陸軍部隊にとって貴重な航空支援戦  
力であつた。

一方でわずか50機弱で戦線を支えねばならず、要請しても飛ん  
でこないことから地上部隊からは「張子の虎」とさえ言われていた。

「何時の間にここはドイツ軍の基地になつたのかしら？」

ネスト・オブ・タイガー所属の対地攻撃機中隊隊長のパプリカ・  
ルージュ中尉は列線を敷く飛行機の群れを見て呟いた。

「まあまあ中尉。怒らなくても良いじゃないですか」

「別に怒っていませんわ」

相棒であるカーラ・オブライエン軍曹の言葉に、パプリカ中尉は

素っ気無くそれだけ言った。

彼女の気分が悪いのは、昨日突如としてやってきた「異世界の」軍隊のせいであった。

彼らはまず4発の鯨のような輸送機で設営隊員と燃料や弾薬を送り込み、その後現在ネスト・オブ・タイガーが運用するよりも数の多い航空機を送り込んできたのであった。

自分たちの領域に突然やってきたことだけでも腹立たしいのに、デストリーその使っている機種に関しても、彼女からすればあまり気分の良い物ではなかった。

バラバラバラ・・・

キーン！！

「もう！耳障りと言ったらありやしませんわ！」

今回送りこまれた航空隊には、彼女がまだ噂程度にしか聞いたことのない回転翼機ヘリコプターやジェット機が含まれていた。

ちなみにパプリカがドイツ機と言ったのはロクシェ空軍の三年型軽爆撃機と一年型戦闘機のことであった。前者はドイツ空軍のJu 87。後者は同じくドイツ空軍のTa 152と外観がそっくりであったため、パプリカにはドイツ軍機に見えたのだ。

もちろん、それらの機体には矢を象ったロクシェ空軍の紋章が描き込まれているが、そんなのは彼女にとって些細なことであった。

ロクシエ空軍はこれらの機体をそれぞれ6機ずつこの基地に投入していた。

また回転翼機は日本の陸上自衛隊の機体で、今回の作戦にはUH60J、CH47、AH64、OH1が2機ずつ投入されていた。

そしてジェット戦闘機も日本製の機体ではあったが、こちらは所属がサクラス連合帝国空軍であった。また露西亜帝国からも、ターボ・プロップ搭載の「流星改」攻撃機が12機投入されていた。

もちろん、これらの機体は砂漠戦に備えて改造が加えられていた。

これらの内の一部は既にこの日先行して出撃し、相応の戦果も上げたと聞いていた。これがよけいに、パプリカの機嫌を悪くしていた。

「これまでこの北アフリカ戦線の主役は私達でしたのよ。それをどこの馬の骨かわからない連中がノコノコと！」

「まあまあ隊長。堪えて」

「こうなったら、次の攻撃で戦果を挙げて私たちの实力を見せ付けてあげますわ！」

7月15日夕刻 カッターラ低地西方第3オアシス

日が落ち、まもなく戦場に夜の帳が下りようとしている。フェアリーランド王国軍の兵士たちはようやくの夕食にありつこうとしてい

た。

「あーあ」

55号車車長のメイアが如何にも不機嫌な様子で料理を調理している。

「メイア機嫌悪そうね？」

装填手のモーリスが言うと、メイアは堪っていた物を吐き出すように捲くし立てた。

「当たり前でしょ！いきなりやってきた得体の知れない連中といきなり共同作戦をしるなんて、無茶もいいところだわ！」

「けど、彼らの戦車は強力だし、素直にありがたいと思うべきじゃないかな？」

「そりゃあの戦車は認めるけど、今日まで戦線を支えてきたのは私たちのよ。それなのに、ベルタもピゴットも、あいつらを主力に組み入れるなんて！」

「もうやめなよメイア。せつかくの夕飯が不味くなるよ」

と操縦手のロイスが嗜めるが。

「そんなこと気にしなくてもいいわよ。どうせこれ以上不味くなるわけじゃないし。あーあ、モクスターでの食事が懐かしいな。せめてレーションが欲しいな」

フェアリーランド王国軍の食事の質は、極端に悪かった。何せ不味い料理で有名なイギリス料理さえ美味しい食事と言うのだから、その味に関しては推して図るべしだ。

今メイアたちが作っているのも豆のスープに粉末ジャガイモと粉末卵を入れたもので、栄養価はともかく「不味い」以外の何物でもない代物だった。

こんな物を食わされているから、アメリカ軍やイギリス軍のレーションでさえ「美味い」部類に入る食事であつたし、もしイタリア軍の食料が手に入れられたなら「一生に数回しか味わえない御馳走」であつた。

もつとも、これが植民地になると話は変わり食事の質が良くなるから不思議な話であつた。

「ところでフラワーはどこ行つたのよ？さっきから姿を見かけないけど」

ノーパンこと照準手のフラワーがいないことによつやく気づいたメイアが辺りを見回す。

「足りない調味料を貰ってくるんだって」

「ふーん、そう言えば味付け用のソースがほとんどなかったわね」

と話している所に件のフラワーが戻ってきた。

「お帰り……あら、手ぶらなの？」

「うん。補給部の方でも切らしちゃったんだって」

「「「えー!!??」」」

3人が半ば絶望に近い声を上げる。

「じゃあどうやって味付けするのよ!？」

「味の無いクラッカーに味の薄いスープだなんて、最悪じゃない!」

「神様、私たち何か悪いことしましたか!？」

3人は天を仰いだ。ただでさえマズイ食事がさらにマズイなんて  
もはやありえない。

しかしながら、フラワーが表情に笑みを浮かべながら言う。

「そんなに悲観することはないよ」

「どうして?」

「実はあの異世界の人たちが良かったら一緒に食事しないかって誘  
ってくれたの」

「え!？」

「マジ!」

ロイスとモーリスの間に、フラワーが頷く。

「やったやった！メイア、せっかくだしただきに行こうよ！」

モーリスの言葉に、メイアが露骨に嫌な顔をした。

「ええー」

「メイア。さっきのことは頭の隅に置いて置こうよ」

「そうそう。もしかしたらスッゴク美味しいものがありつけるかもしれないじゃない」

ロイスとモーリスの言葉に、メイアの心もぐらつく。

「逆だつてありえるじゃない！？」

「わかった。じゃあ私達で行って来るわ」

このロイスの言葉が決定打になった。

「ちょっと！……わかったわよ。私も一緒に行くわ」

メイアが折れると、ロイスが頷きながら言う。

「そうそう。人間素直が一番」

「じゃあ行こう」

フラワーを先頭に、メイアたちは国際派遣旅団の面々がいる方へと歩いて行った。



「来ました」

「おおいらっしやい。来ないんじゃないかと思ってたよ」

先程テントで会った友澤という少尉（彼女たちは三尉をそう認識した）が彼女達を出迎えた。

「おいアニエス！お客さんたちの分も用意してくれ！」

「わかってる」

「お、お世話になります少佐！」

メイアが食事の準備をしていたアニエスに敬礼すると、彼女は微笑みながら返した。

「気にしないでくれ。私の階級なんて意味のないものだ。まあ座りなよ」

「は、はあ」

あまりにも気さくに接してくるので、メイアも拍子抜けしてしまった。

「でアニエス、どの缶を開けるんだ？」

「しいたけ飯に牛肉缶、それからたくあん缶だ」

すると友澤が苦笑した。

「おいおい。牛肉とたくあんはいいとして、しいたけ飯はもう食い飽きたぜ」

「贅沢言つな。戦場で食う食事だぞ」

アニエスがお湯を張った鍋の中に、缶詰を投入しながら言った。

「そりゃそうだけど。お前好きだよな、しいたけ飯」

「ふふ。私はこれがお気に入りなんだ」

と微笑んでみせるアニエス。その表情をみた友澤はボソツと呟いた。

「ちえ。柄になく可愛い顔見せやがって」

「フン！……すまなかった。今お湯で温めるから、しばらくまってくれ」

「……は、はい」「」

2人の奇妙な掛け合いに、メイアたちは圧倒されていた。

それからしばらくして、湯だった缶が引き上げられ、蓋が外されるとメイアたちに渡された。既に関けた瞬間から良い匂いが立ち込めている。

「おいしそうな匂い！」

「これライスよね？こんな風になっているのはじめて見た」

「意外とおいしそう」

「さ、遠慮なく食べなよ」

驚きの声を上げる面々に、友澤が進めた。

「じゃあ、お言葉に甘え「私もいい？」

突如後から声を掛けられた。一行が振り向くとそこには、1人のチビッ子が立っていた。

「」「軍団長！？」」「」

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ちなみに作者はとり飯は食べたことありますが、しいたけ飯はありません。

## 世界を翔けるアイドル 2

転移4年目 8月 ロクシェ連邦イクストーヴァ王国ラス湖

イクストーヴァ王国（通称イクス王国）は、ロクシェ最西端にある唯一の山岳国家、そしてロクシェ構成国で唯一王制を継続している国である。

30年ほど前に、王宮が武装グループに襲撃され、当時の女王と王女が暗殺されるという悲劇もあったが、その後王女の双子の妹であったフィオナが次期女王となり、さらにその娘のメリエルが次期女王に指名されており、今しばらくは安泰であった。

山岳地帯の国家であるため、冬は一面雪と氷に覆われる。そのため、夏は避暑地として冬はスキーなどのウィンタースポーツを楽しむ場所として有名になっている。

産業は農業・酪農・漁業に加えて金細工の装飾品が有名である。

長年交通手段が陸路の道路のみという問題があったが、日本からの技術に供与による道路網の拡充や、山越えの鉄道建設、さらには航空路の拡充で急速に他の地域との便がよくなりつつあった。

そんなイクスのラス湖は、冬は凍って生活道路として活用され、夏は漁場や水上機の着陸場に使われていた。

「と言うわけで、到着」

舞ら日高プロの一行は、ラス湖の飛行艇用飛行場に足跡を記した。

「へえ、山も湖も綺麗でいいところですね」

キヨン子の言葉に、舞はウンウンと頷く。

「でしょ？キヨン子ちゃんも新婚旅行にでも来たら？」

「そうですね。考えておきます」

「まあ、新婚旅行はキヨン子ちゃんよりも祐太郎君とやよいちゃんの方が早いだろうけどね」

舞が裕次郎を茶化す。彼は現在765プロの高槻やよいと付き合い合っているからだ。

「や、やめてくださいよ」

「おうおう初心ね……まあそれはともかくとして、行くわよ。ちゃんと付いていらっしやいね。家の会社の車が来ているはずだから」

「行ってくてどこへ行くんですか？」

キヨン子の言葉に、舞は事も無げに答える。

「決まってるじゃない。王宮よ」

イクス王国の宮殿は首都クンストの郊外にあった。

王宮自体は、如何にもお城という感じの建物であった。しかしながら、一行の注意を引いたのはその王宮の前に広がる土地であった。

「これって？」

「どう見ても飛行場ですね」

口よどむキョンの言葉を、祐太郎が引き継いだ。

「何でも女王様の旦那のベネディクト殿下が、元空軍少佐でパイロットだったから併設したらしいわ。今でも偶に自家用機に乗るしね……実を言つとね、今度のレースではここを中継基地に使う予定なの」

「え！？そうなんですか？」

祐太郎が目を開く。そりゃそうだろう。王宮の飛行場を使うなどありえない。

「ここが一番ロクシエの西にあるからね。まあ、別に絶対にここを使う予定はないんだけど。一応確保だけはしているの……とにかく、まずはご挨拶ね」

王宮へ入ると、早速一行は女王様と謁見することとなった。

どんな人が出てくるのか、舞を除く全員が緊張して待ったが。

「お待たせしました。皆さんようこそイクストーヴァへ。私が女王のフィオナです」

出てきたのは30代前半と思しき黒髪の女性だった。白いブラウスに長いスカートと、美人ではあるが威風堂々とか高貴とか、そう言う印象とは程遠い感じであった。

なお声は能登ヴォイスである。

「お久しぶりです女王陛下」

「あらあら。ここじゃ誰も見てないから、普段どおりでいいわ舞」

「そう。じゃあ遠慮なく。久しぶりフィー」

「ちょ、ちょっと舞さん！何女王陛下と親しげに話しているんですか？」

今度は石川をはじめとする一行が目を見て慌てるが、舞もフィオナも平然としている。

「お気になさらないで。私は外での生活が長かったから、あんまり儀礼とかそう言うのは好きじゃないの。むしろ気軽に接してもらった方がありがたいわ。あなたお名前は？」

「失礼いたしました。日高プロダクション東京支社長の石川実です」

「ようこそイクストーヴァへ。涼しさと穏やかさしかないような所ですけど、ゆっくりして行って下さい」

その笑顔は、同じ女性としても惚れ惚れとする位美しいものだった。



「ところでフィー。旦那さんと娘さんは？」

「2人なら先にサクラスに入った筈よ。お陰で政務を1人でしなくちゃいけないから大変で」

「書類仕事なんて退屈だもんね」

舞とフィオナはそんな感じで雑談を続けた。

「スゴイ。女王様にあそこまで気軽に接するなんて。私の国で言ったら皇帝陛下に接することはとてもスゴイことなのに」

「あの人は異常なんです」

リリーと裕次郎は舞にきこえないようにヒソヒソ声でそんなことを言い合っていた。

一方キョン子は大胆にもフィオナに疑問を口にした。

「先にサクラスに入ってたってことは、まさかお2人もレースに参加するとか？」

「ここまでの流れるに、キョン子はそんなことを考えた。しかし、フィオナはクスツと笑うと返した。

「うーん。ベネディクトは参加したかったみたいだけど、さすがに40過ぎで長距離レースは過酷だから、今回は展示飛行だけやるらしいわ。ただメリエルは整備チームに加わっているから、皆さん娘に会ったらよろしくね」

「は、はあ」

「あなたは確か、日本の首相の？」

「はい。春川響子です」

「そう……お父さんにそっくりね」

「は！？」

キョン子は何が父親と似ているのか、理解できなかった。

「ところで、皆さんも今回のレースに参加するのよね？」

「参加するといいますが、式典で歌を歌わせてもらっただけです」

「あなたは？」

「高木裕次郎です。今は日高プロでプロデューサー、アイドルたちのコーディネートをする仕事をしています」

「そうなの。がんばってね。応援していますから」

「ありがとうございます」

「うっうー！がんばります」

「あらあら、元気な娘ね。愛さんみたい」

「高槻かすみです！よろしくです！」

「はい、よろしく」

とフィオナ女王は、日高プロのメンバー一人一人と挨拶を交わして激励した。

「ところで、さっき舞さんから聞きましたけど、この王宮の前にある飛行場を使わせてもらえるって本当なんですか？」

裕次郎の質問に、フィオナは笑って答える。

「ええ。今は夏でしょ？イクストーヴァは山がちな地形だから、空港がないのよ。冬になればラス湖が凍って滑走路になるんだけど、夏の間は使えないの。日本からの技術で小さな飛行場を幾つか造っているんだけど、今回のレースには間に合いそうにないから、王室の飛行場を提供するの」

「へえ、よくそんなことができましたね？」

「フフ。ベネディクトとメリエルが強く推したのよ。2人も飛行機が大好きだし。それに最初は王室の飛行場を使うのを反対した首相達も、いい宣伝になるってことで最終的には折れてくれたわ。私は王宮の留守を預かっているから出られないけど、テレビ中継で見ているから。それに新しく頂いた日本製のカメラも試したいし。レースが楽しみで仕方が無いわ」

キラキラと目を輝かせるフィオナのその顔は、まるで子供のよう  
にキラキラしていた。

「女王様って言うても、意外と親しみ易い人でしたね」

「そうでしょキョン子ちゃん。物分りもいいし。お陰で随分とレーズを私好みに楽し……じゃなくて面白くすることができたわ」

「今なんか変な言葉が聞こえたような。まあいいですけど、舞さんの人脈はすごいですね」

「フッフ。アイドルの頂点を極めた私を侮ってもらっちゃ困るわ」

「けど、一刻の首相や女王様と知り合いだなんて。つくづく恐ろしいです」

石川が汗を掻きながら言ったその言葉に、周囲にいた全員内心で頷いた。

ところが、舞はさらに不敵な笑みを浮かべた。

「これくらいで驚いてもらってちゃまだまだね」

「それどう言う意味ですか？」

嫌な予感しかしないと言わんばかりに、キョン子の顔が強張る。そんな彼女に対して、舞は飄々としたまま答えた。

「すぐにわかるわ。さて、女王様への挨拶も済んだことだし。後は夜のクンストの街を楽しみましょう。ここの料理やお酒も結構行けるのよ」

クンストの街に一泊し、イクス料理や酒を楽しみ、工芸品のお土産を買い込んだ一行は、翌朝再びラス湖から自社所有の飛行艇に乗り換えて西へと向かった。

ロクシエ最北端に位置するイクス王国は、かつては山脈を挟んでスー・バー・イルと国境を接していた。ただし、高い標高のお陰で両軍が互いに侵攻し合うこともなかった。

唯一ヶ所、両国間を通り抜けられる場所もあったが、そのルートはイクス王国によって嚴重に隠蔽されていたため、結局イクスが戦火を受けることはなかった。

スー・バー・イルが消失したため、山脈は途中で刃物で切られたようにバツサリとその断面を覗かせている。その横を通り抜けて、飛行艇は海上へと出た。

「舞さん。まさかこの飛行艇でサクラスまで飛んでいくんですか？」

石川の質問に、舞は首を振る。

「そんなわけないでしょ。さすがにこんな小さな飛行機じゃ無理よ」

「じゃあどこかで別に飛行機に乗り換えるんですか？」

「それも手だけど。まだ時間もあるから、皆には優雅な船旅を楽しんでもらおうと思っているの」

「『船旅！？』」

「じゃあどこかの港に降りるんですか？」

「それも違うわよ。優雅な船旅の前に、少しばかり皆にはスリリングな体験もしてもらおうわ」

（（（嫌な予感しかしない）））

すると、間もなくパイロットの一人がやってきた。

「まもなく会合予定地点です。着水しますので、皆さんベルトと救命胴衣をつけてください」

「『救命胴衣！？』」

「ほら、ポケットとしてないでさっさとつけなさい」

「ちょっと待ってください！降りるって、こんな海原にですか！？」

キョン子がたまらず声を上げた。

「そうよ。大丈夫よ、ちゃんと拾ってもらえるから……ほら、見えてきた」

「『！？』」

全員が窓から海上を注視した。すると、海上に2条の航跡が見えた。飛行艇はそれに向かって降下していく。

「何あれ？」

「さあ？」

かすみとキヨン子が首を傾げる。

段々と飛行艇はその航跡を発する船に近づいていく。そしてようやく、相手の輪郭がハッキリとしたとき、裕次郎が声を上げた。

「あれ軍艦じゃないですか！？」

「そうよ。あれが今回私たちを乗せてくれる、巡洋艦の「摩耶」よ」

舞が胸を張って言った。

世界を翔けるアイドル 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。



## フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 4

新世界暦5年7月14日 正午 フェアリーランド王国領モクスタ  
州<sup>キプロス</sup> 西方50海里km地点 国連艦隊旗艦海上自衛隊戦艦「近江」  
CIC

陸上での戦闘が始まる数日前、日本をはじめとする各国艦艇で編成された新国連艦隊は、地中海方面におけるロマーニヤ軍とオリュンポス軍の動きを掣肘するために、先に同盟関係を結んだフェアリーランド側に実質的に組する形で、艦隊を派遣していた。

艦隊は海自と帝国海軍から合わせて戦艦2隻、巡洋艦4隻、空母2隻、護衛艦4隻、駆逐艦6隻。ロクシエからは戦艦1隻、巡洋艦1隻、駆逐艦4隻。サクラスからは駆逐艦2隻。露西亞帝国海軍からは戦艦2隻と空母1隻、巡洋艦3隻に駆逐艦8隻であった。

合計すると戦艦4隻、空母3隻、巡洋艦8隻に駆逐艦20隻と護衛艦4隻からなる強力な機動艦隊であった。

これらの内ロクシエや露西亞帝国、そしてサクラス軍の艦艇は転移後日本から受けた技術供与によって、電子兵装などが強化されており、いずれも地球の1950年代レベルの水準を保持していた。

これだけでも、既にロマーニヤとオリュンポス艦隊に対して圧倒的優位に立っている。

しかしながら、恐ろしいことに海上自衛隊所属艦艇についてはいずれもより高度な改装が加えられるか、あるいは元々西暦2000年前後の技術で建造されているから、最早チートであった。

その象徴とも言つべき改「大和」級戦艦の「近江」がこの艦隊の旗艦であつた。

「ロマーニヤ・オリュンポス連合艦隊。本艦隊の西方60海里地点を20ノットのスピードで東進中。その後方30海里地点には護衛艦に守られた輸送船団の存在も確認できています」

「了解」

艦隊司令官の坂本良馬海将補は、新設されたCIC内のレーダーの画像を注視する。

「キプロス……いえ、モクスター州から100海里（185'2km）地点に敵が到達した場合、まず威嚇攻撃。それでも止まらず、反撃する場合はそのまま本格的攻撃で宜しかったですね？」

「ああ。すでに「白鳳」から出した偵察機が攻撃を受けているので、交戦規定は完全にクリアしているしな……志摩艦長。対戦艦戦闘の準備は整っているかな？」

「はい。全主砲、何時でもいけます。しかし……」

「うん？」

「転移直後、私はロクシエの戦艦や巡洋艦を撃破する手段を研究していました。その私が、まさか戦艦の艦長とは」

「近江」艦長の志摩一等海佐は、自嘲気味に苦笑いせずにはいられなかった。

彼は転移直後、数は少ないが厚い装甲を持つロクシエの戦艦や巡洋艦に対する対策を研究していた。最終的にその時は、VLA発射型魚雷を使うという結果で落ち着いたが、その後露西亜帝国の転移とそれに伴い海自に戦艦が編入されたことで、状況は一変した。

海自は戦艦を撃破出来る艦を手に入れ、その運用方針を決定する必要に迫られた。

その問題にも関与した志摩は、一等海佐に昇進と「近江」の改装が終了したのに伴い艦長へと抜擢されることとなった。

「私だつて護衛艦の艦長から艦隊司令官になるとは思わなかったよ。そりゃ最初に怪獣相手に戦つて、その時の縁でロクシエ海軍の受けは良いかもしれんがね」

坂本司令官は転移直後、現在は日・ロクシエ領となっている美麗諸島の近海で、ロクシエ海軍駆逐艦を撃沈した怪獣を撃破している。

「まあ、ウダウダ言つても始まらん。今はやれることをしよう」

「そうですね」

「準備はいいかな？」

「はい。主砲をはじめとする各兵装異常なしです」

「近江」は海自編入以降、約1年に渡る改装を行っている。改装内容は日本国内の航行法規に必要な各種装備の設置から電子機器を含む武装の強化まで多岐に渡った。

改装の結果、主砲は全基そのままであつたがレーダーとの連動や装填装置の改良などが行われている。また副砲や高角砲、機銃のほとんどは撤去され後に150mm速射砲や76mm速射砲、そして20mmCIWSが搭載されている。

ミサイルは、当初VLAを搭載する計画であつたが、結局予算や時間の都合から後回しにされ、現在は煙突基部の4連対艦ミサイル発射機2基と8連装のシーパロー発射機2基しか搭載されていない。

しかも対艦ミサイルもハーブーンではなく、廉価版のものだ。それでもこの世界では異常な程の戦闘力を保持しているが。

両艦隊は接近しているが、すでに互いに偵察機を出し合っているので、その姿を直に確認していた。

「敵艦隊との距離40海里まで接近！」

「敵艦隊100海里ラインを突破！」

その報告があげられたところで、坂本は命令を出した。

「戦闘用意！全艦対艦戦闘用意！」

「了解！最初の攻撃はどうしますか？」

「まず30海里地点で対艦ミサイルを発射し前衛の駆逐艦と巡洋艦を叩く。それでも撤退しないなら25海里で砲撃開始。艦隊針路270へ」

「ようそろっ」

敵艦隊に丁字を書く形で、国連艦隊は変針する。

「主砲射撃用意！対艦ミサイル発射用意！」

「主砲装填対艦ロケット徹甲弾！」

「対艦ミサイルは先頭の巡洋艦に照準を集中！」

「各艦もミサイルの照準に入りました！」

「ミサイル目標の重複に注意！」

「「信濃」主砲射撃準備完了！主砲目標を敵2番艦にとることです！」

次々と報告が舞い込む中、志摩が溜息を吐く。

「目標が他艦と重複する可能性があるなんて、護衛艦なら考えられないことです」

「仕方が無いよ。旧軍艦艇改造艦やロクシエやサクラスの艦艇にそこまで高尚な電子装置を積んでいないからね」

坂本も溜息を吐く。

旧軍艦艇やロクシエ、サクラスの艦艇は日本からの技術供与の元、電子技術を飛躍的に発達させている。しかしながら、それは以前の

た世界の基準と対比しての話に過ぎない。

旧軍艦艇がいた1943年は電探がようやく普及し、初歩的な射撃指揮が可能となったレベルに過ぎない。またロクシエの場合無線技術はあったがレーダー技術は無し。そしてサクラスに至っては無線技術すら無しであった。

そんな国々の艦艇に、平成時代の電子装備を載せるのはかなり面倒なことだ、仮に無理やり載せたとしても、莫大な予算と乗員の訓練時間を要する。

もちろん海自の人間は現代人だから、その点大丈夫な筈だが、旧海軍からの横滑り組の人間を多く抱えてしまった以上、そう言うわけにもいかない。彼らへの再教育を行う必要があるが、何分万単位の間人（海自への横滑り組だけでなく、ロクシエやサクラス、露やヘルベチアからも受け入れている）がいるから、担当者が「20〜30年は掛かるんじゃない？」と言う始末だ。

結局最終的に行き着いた結論は「別に大した脅威もないんだから、高度な電子技術は海自の護衛艦だけにして、後は相当なスペックダウン版で良くない？」だった。

さすがに軽く見積もっても60年近い技術差をいきなり埋めるなど正気ではないので、各国も日本からの技術供与は使い古されてはいるが、実現可能な段階の物からとした。

それでも各国からすれば、これまでより5〜10年近く進んだ技術が入ってきたのだから、技術者などが泣いて当然であった。

こうした結果、旧軍艦艇や各国の艦艇は飛躍的な電子技術（もち

ろん電子技術だけではない）の発展を見たが、海自艦艇に比べたらおもちゃに近い技術には違いなかった。

「近江」に搭載されている電子装備も、同時複数の標的に対処できる物ではなく、他艦との情報共有能力に大幅な制限があった。そのため、太平洋戦争時と同じく各艦と無線や発光信号で互いに連絡を取り合いながら、手動で目標の割り振りを行う必要があった。

それでも相手を一方的にアウトレンジする能力と、高い命中精度を誇る兵器（それでも護衛艦より劣るが）を手に行っているだけでも良しとしなければならなかった。

「これなら旗艦は、やはり護衛艦の「あたご」にするべきだったのではないだろうか？」

「仕方が無いさ。デカイ戦艦は存在感だけはあるからな。護衛艦じや他国に対しての示しがつかん」

技術大国日本の存在は、新国連内でももはや不動のものだ。だからと言って、その立場が常に盤石とはいえない。それなりに体面的な示しをつけないといけない場面もあるのだ。

結局戦争も政治の延長線上にあった。

2人が少々憂鬱になっていたところで、待ちに待った報告が入った。

「長官、お待たせしました。目標の割り振りと確認完了！対艦ミサイルの発射準備完了！何時でも行けます！」

「よし！敵艦隊に異常は無いか？」

「はい、相変わらずの針路と速度を維持しています」

「よろしい……全艦対艦ミサイル発射！」

「撃て！」

「近江」をはじめとする、対艦ミサイル搭載艦から一斉に対艦ミサイルが発射される。

しかしながら、その弾道を見ていると2種類あるのがわかる。1種類はある程度上昇したら海面まで降下して突進して行く。もう1種類は砲弾のように弧のような弾道を描いて中高度を飛んでいった。

実は護衛艦から発射されたのはいずれもハーブーン系統のミサイルで、当然低空飛行とホップアップ機能を搭載している。

一方、「近江」をはじめとする各艦のミサイルは、そのような高度な飛行機能がないため、中高度を突進し、砲弾よりも緩い角度で敵艦の上方から襲い掛かるものだ。

この対艦ミサイルは所謂簡易対艦ミサイルと言つもので、調達価格は通常のハーブーン系統の4分の1を目標に設計され、実際には量産効果で5分の1までコストダウンしている。

もちろんコストダウンしているので飛行能力だけではなく、目標の識別機能や命中率も落ちている。しかしながら、射程と速度はハーブーンよりわずかに劣る程度なので各国海軍はこぞって採用していた。



今回発射されたのは、ハーブーン型8発に簡易型40発。この内簡易型1発が飛行途中故障で墜落したが、残る47発は敵艦隊に襲い掛かった。

ロマーニャとオリュンポス艦隊は弾幕を張り、奇跡的にさらに1発を撃ち落とし、また2発が目標をそれた。が、最終的に44発は当初目標となった前衛の駆逐艦や巡洋艦に全て直撃した。

轟沈したのは駆逐艦2隻だけであつたが、この一撃で艦隊前衛の駆逐艦6隻と巡洋艦2隻は事実上戦闘能力を喪失した。

それでも、ロマーニャ艦隊とオリュンポス艦隊は前進を止めない。

「主砲撃ちー方はじめ！」

「撃て！」

一番射程の長い「近江」と「信濃」が46cm砲で攻撃を開始した。この時点でロマーニャ戦艦との距離は未だに25海里はあつたが、新開発のロケット推進砲弾はその長距離を楽々と飛び越えた。

この戦艦による砲撃戦は一方的な結果となり、ロマーニャ・オリュンポス艦隊は1発も反撃できないまま、「大和」級の2隻とその後砲撃に参加した露西亞の「クニヤージ・スワロフ」（史実の13号艦）の砲撃を受けて轟沈1隻を含む6隻の戦艦を失った。

この光景を海中から見ている者たちがいた。水上航行と水中航行を巧みに使い分け、敵艦隊を追尾していたウォンクリン少佐らのN6号潜水艦であつた。

「すげえ！オリュンポスの戦艦が一撃で轟沈しやがった！何つつ威力のある砲だ！」

彼は旧式とは言えオリュンポスの戦艦を一撃で撃沈した46cm砲の威力に戦慄した。

「艦長、それで我々はどうしますか？」

デバイアス副長の言葉に、ウォンクリンは自分に課せられた任務を思い出した。

「そうだった。ようし、せっかくだからトライデントを使おう。目標はロマーニヤのドーリア級戦艦だ」

「了解！」

トライデントとは、フェアリーランドの大型潜水艦に搭載されている外装式の61cm魚雷のことであった。

「トライデント準備完了！」

「撃て！」

この魚雷は見事にロマーニヤの「アンドレア・ドーリア」級に命中し、46cm砲の攻撃で損傷していた同艦に止めを刺した。

さらに、N6号以外の潜水艦やモクスター州から飛び立ったフェアリーランド空軍機、さらには国連艦隊から発進した攻撃隊の波状攻撃も加えられ、ロマーニヤ・オリュンポス艦隊は叩きに叩かれた。

この結果、艦隊の全ての艦艇が撃沈破又は降伏して、艦隊は全滅することとなる。

もちろん、後続する輸送船団が上陸作戦を行える状況になどあるはずが無く、艦隊全滅の報を受けると全船回れ右して帰還するしか手が無かった。

こうしてロマーニヤとオリュンポス軍によるモクスターならびにラ・デューン（レバノン）の占領作戦は失敗に終わった。

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 5（前書き）

本当にジョン・ドー先生に感謝です。

新世界暦7月15日夕方 フェアリーランド王国陸軍前線基地 第3オアシス

「うん！おいしい！」

温められたしいたけ飯の缶詰を幼女、もといフェアリーランド王国陸軍第6軍団長のベルタ中將が満足そうに食していた。御満悦と言って良い。

しかしながら、彼女を目にしている彼女の部下たちや国際派遣旅団の面々は、文字通り面喰っていた。

「よろこんでいただけのなら幸いです。ですが、軍団長自らこんな所に来て大丈夫なんですか？」

アニエスの常識的な質問を、ベルタは笑い飛ばす。

「大丈夫大丈夫！それにしても、異世界の料理はおいしいわね。これでよく冷えたコーラがあれば最高なんだけど」

その言葉に、自衛隊から参加している友澤三尉が反応する。

「コーラ？」

「ああ、軍団長はコーラが好きなんですよ」

メイアが少しばかり困った顔で言う。これでは軍団長の威厳も何

もないからだ。

しかし友澤から出たのは、意外な返事であった。

「コーラなら、自治領軍がしこたま持っていたはずですよ」

「それ本当!？」

と言っているそばから。

「ようトモ。冷えたコーラでも飲みながらカードでもしようぜ!……  
……て、失礼しました!」

やってきたのはアルカディア自治領軍のレノックス中佐だった。  
両手にコーラの缶詰を持っている。最前線では酒が飲めないから、  
代わりの嗜好品として持ち込まれたものであろう。

持ってきたレノックスは、軍団長がいるのに気づいて慌てて敬礼  
したが。

「別に気にしないで……それよりも、それはコーラ?」

ベルタがレノックスの持つ缶に目をやる。

「ええ。そうですけど」

「だったらそれちょう「いたー!!」」

突如男性の声が木霊する。

「げ！？ピゴット！」

ベルタがギョツとする。やってきたのは軍団参謀のピゴット大佐であった。

「全くなにやってるんですか！？これから池田中将を交えて報告会を兼ねた夕食会だって言うのに、勝手に抜け出した挙句何食べているんですか！？さ！帰りますよ！」

「ま、待つて！せめてコーラを貰ってか「だまらっしゃい！それじゃあ諸君、迷惑かけたね」

そう言つと、ピゴットはズルズルとベルタを引きずって行つた。

「あー！冷えたコーラ！！！」

ベルタの叫びは、夜の砂漠へと消えて行つた。

「何だつたんだ？今の？」

アニエスの呆然とした間に、メイアが再び笑いながら答える。

「まあ、気にしないで。うちの軍ではよくあることだから。それにしても、それがコーラなんですか？何かの缶詰のように見えるんですが？」

「ああ、コーラだよ。ただし、缶に入っているけどね。そらトモ」

「ありがとさん」



レノックスから渡されたコーラを、友澤が受け取る。

「異世界には随分と変わったものがあるのね」

「そりゃまあ、あんたちから見れば未来の産物だからな」

「未来？それって一体どう言うこと？」

メイアの間に、友澤とレノックスがキョトンとする。

「何だ？聞いてないのか？俺たちの国のこと？」

「うん。異世界の人間としか。何せ私たち最前線で戦っている下っ端だし」

「だったら教えてやるよ。まず俺の生まれた日本についてだ」

友澤は元いた世界での日本に関してと、転移後の状況を簡単に説明してやった。

「……と言っわけさ」

「へえ。つまり70年も先の世界なんだ。どうりで見たことも無い装備ばかりなわけだわ。てことは、あの戦車も70年後の戦車？」

「あの戦車？ああ、4式のことか？あれは他国との共通運用を目標に開発したロースペック戦車だからな。最新式の90式と10式も派遣されているはずだけど、まだ到着していないぜ」

「ロースペックって。あの戦車でも充分強力じゃない」

「まあ90mmライフル砲に傾斜装甲を生かした最大100mmの装甲板。この世界じゃ無敵レベルだよな」

「化け物よそんなの！ドイツが最近投入したって言うタイガー並みじゃない！」

「それで驚いちゃいけないぜ。90式と10式は主砲口径が120mmなんだからな」

「120mmで、どうやって弾装填するんですか！？」

装填手のロイスが驚嘆した。75mm砲弾でも相当重くて取り回しが難しいと言うのに、120mm砲など想像すら出来ない。

「90式も10式も自動装填装置があるからな。装填手はいらないよ」

「むう。さすが未来。けど、そんな化け物戦車が来れば戦線は安泰ね。モクスターへ侵攻しようとした敵は全滅したって言うし。ドイツ軍もトブルクに引きこもったままだし。ロマーニヤ軍なんか、一撃すれば逃げ出すかも」

「それは甘いぞメイア少尉！」

メイアの楽観的な言葉を、アニエスが戒める。

「日本には窮鼠猫を噛むと言う諺があるぞ。追い詰められた奴はどんなことをしかすかわからないものだ。お前達も戦場でそう言う経験をしたことがあるだろう？」

「そりゃ、まあ」

「油断しないことだな。舐めてかかると痛い目を見るぞ」

「わ、わかりました。ところで、少佐の国はどんな国なんですか？」

「私の国か？私の国は口で言うのも憚られる位遅れているが、隠すこともないから教えてやろう」

アニエスがトリステイン王国について説明中。

「というのが我が国だ」

「驚いた。魔法使いばかりでいまだに中世な国があるなんて」

「正確にはあつただな。我が国は現在改革の真つ最中だ。今回私が派遣されのだって、近代戦術を学ぶためだ」

「御苦労様なことですね」

「まあ苦労せずに国は変えられんからな」

と言うものの、アニエスの顔はどことなく嬉しそうであつた。

「あとは、レノックス少佐。アルカディア自治領について説明してやったらどうです？」

友澤がレノックスを促す。

「俺はあんまりそう言うの得意じゃないんだが。まあいいぜ」

こうして、それぞれ出自の世界が異なる者同士の草の根交流は続くのであった。こうした交流こそが、双方の懐疑心を取り去り、なおかつ一体感を生むのには最適な手段であった。

翌日 アレクサンドリア港

この日、海上自衛隊の輸送艦「おおすみ」がアレクサンドリアの港へと入港していた。アレクサンドリアは英国海軍地中海艦隊の拠点の一つであるが、現在港内にはロマーニヤの潜水コマンドによって破壊された2隻の戦艦が大破着底していた。

しかしながら、それ以上に頼もしい存在を「おおすみ」は引き連れていた。それは2日前にモクスター沖にてロマーニヤ・オリュンポス連合艦隊を完膚なきまでに叩いた2隻の「大和」級戦艦、「近江」と「信濃」の姿であった。

「まさか歴史上のワンシーンをこの目で拝めるとは思わなかったよ」

艦隊司令官の坂本海将補の言葉は、日本艦隊の全乗組員の言葉であった。

「まあ、どうせすぐにおいとましますけど。」「おおすみ」の水島艦長から、上陸準備完了とのことでした。

「近江」艦長の志摩一佐が報告してきた。

「ようし。じゃあちゃっちゃとやってしまおう」

「了解」

それから数分後「おおすみ」の艦尾が開いて、搭載されているホバークラフト型揚陸艇のLCACが発進した。その艇上には、日本から運んできた10式戦車が搭載されていた。

先に上陸した四式戦車は、いずれもロクシエ軍やサクラス軍、自治領軍所属車両であった。対して今回上陸させた2両は遙か彼方の日本からわざわざ持ってきたものであった。

「たった2両の戦車のために、御苦労なことだな」

坂本の言葉に、志摩が冗談めかして答える。

「仕方がないですよ。何せ1両が8億もするんですから」

志摩の言う8億とは戦車1両あたりの調達価格だ。

もちろん戦車だけでなく、それを運ぶ特大トラックや整備班、消耗品を運ぶ輸送車両なども合わせて「おおすみ」で運ばれている。

「「おおすみ」はこれで帰還ですか。羨ましいですね」

「我々は海の上で冷房の効いた艦に乗っただけでもヨシとしよう。気の毒なのは昼は極暑、夜は極寒の中で戦う陸<sup>オカ</sup>の連中だ。

そんなことを話していると、遠くから音楽が聞こえてきた。

「おや？本艦の音楽隊が演奏でもしているのか？」

「違いますよ司令。着底している「クイーン・エリザベス」と「ヴ  
アリアント」からです。確か英海軍は枢軸軍に2隻が行動不能状態  
にあることを悟られないよう、甲板上で軍楽隊の演奏をするなど偽  
装をしていたと聞いています」

「どれどれ。あ、本当だ」

確かに双眼鏡で確認すると、着底している戦艦の甲板上で軍楽隊  
が演奏を行っていた。

それを見ていた志摩が何かを思いついたようだ。

「司令官、せっかくですからこれから出発する陸自の部隊のために  
何か演奏でもしたらどうですか？ここから戦闘の矢面に立つのは彼  
らなんですし」

「そうだな。親善航海も兼ねてわざわざ乗せてきた音楽隊を遊ばせ  
ているのも勿体無い。出港までの時間を使ってせっかくだからやつ  
てみよう」

こうして、2人の考えはすぐに艦隊各部に伝えられた。もちろん、  
音楽隊の連中が喜んだのは言うまでも無い。

港を管理する英軍からも許可が出たので、さっそく坂本と志摩は  
内火艇を出して音楽隊の隊員とともにアレクサンドリア港に上陸し、  
先に上陸して内陸部への進撃準備を進めていた陸自部隊に合流した。

「我々からのささやかな贈り物だ。これ位しか出来なくてすまない

ね」

と言う坂本に対して、陸自側の隊長は笑顔で答えた。

「いえいえ。このような壮行会を開いていただけるだけでも光栄です。日本を出発したときは、ひっそりとしたものでしたから」

炎天下なのと、艦隊の出港並びに部隊の出発を考えて演奏する曲は1曲だけとなった。

もつとも、物珍しさからか近くにいた英国兵士やフェアリーランド兵士がわらわらと集まってきて、あつと言う間に周囲はギャラリ―で一杯になった。

「それじゃあ隊長、頼むよ」

「わかってますよ」

坂本の言葉を受けて、音楽隊の隊長が笑って答える。

彼は奏者の前に立つと、指揮棒を上げた。そしてその棒が振られると、途端に音楽隊が勇壮な曲を弾き始めた。

その曲名は、「宇宙戦艦ヤマト」であった。

たった1曲の演奏であったが、これはイギリス兵やフェアリーランド兵にも好評であった。そのためだろうか。自衛隊の音楽隊「宇宙戦艦ヤマトのテーマ」と言う図式が成り立ったとか成り立たなかったとか。

オマケ 新世界小銃事情（ここから先の部分はジョン・ドー先生による提供です）

自衛隊と在日米軍は、共同で および 諸島に調査隊（居留地確保のための害獣駆除ともいう）を投入したが、案の定というかオオトカゲの駆除などに苦戦し、慌てて本土へ緊急打電を行った。

「5, 56ミリじゃ効かないから7, 62ミリ以上のでっかい奴をよこしてくれ。今すぐだ！」

もともと対人用小口径弾としては威力不足ではないかという意見も囁かれていた5, 56ミリ弾（89式やM16系の専用弾）であったが、案の定大型獣（牛や熊クラス）相手では十数発撃ちこんでもびくともしなかったなどというケースが続出し、慌てて威力の大きい7, 62ミリ弾を使用するライフルの補給を要請したのである。

自衛隊は予備自衛官向けにストックしていた64式小銃を慌てて送り付けた。米軍もアフガン戦争等で再評価されたM14ライフル（海兵隊がベトナム時代からデットストックしていたもの）や旧型のM60機銃に新型のM240機銃、はては爆発物処理班が持ち込んでいた50口径のバレットライフルまで歩兵に支給。何とか急場をしのいで調査団は最低限の犠牲で済むことになった。



以後、各国との民事、軍事的レベルの交流が始まっていく。

その際新兵器を導入したい軍としては自動装てん式ライフルの導入も検討することになるのだが、ここで各国とも『予算』という思わぬ強敵が関係者の前に立ちふさがることになる。

・日本

「というわけで新型の軍用ライフル計画について、予算計上できませんか？」

「帰れ。海自の新型艦や空自のターボプロップ戦闘機、陸自向けの新型（4式）戦車の予算で手いっぱいなんだ。小銃は既存ものを使え。64式の使用期間もしばらく延長する」

シヨボーン……

「あの、64式を輸出向けで生産を開始するというのはどうでしょうか？」

「却下。ロクシェもサクラスの軍事関係者も、使用中に部品欠落するようなライフルは遠慮したいと丁重に断っていたぞ。M14の製造ライン構築をホーワに打診したが、89式なみの単価を吹っかけられたんだ。とにかく今は無理だな」

・米軍（アルカディア自治領）

「ライフル寄せやゴルア！」

「冗談じゃない、金食い虫の既存兵器の維持管理でこっちの予算枠は限界こえてるんだ！今までどおりふんだんに予算が出ると思うんだよ！」

「だぶついてる航空機や艦艇を売りつけて予算ゲットというのはどうだ？」

「このあいだ見積り見せたら向こうの担当者が泣いていたぞ。こんな高いの買えないって。改造キット買い付けるだけでも手一杯だそうだ」

「ハイテク装備のツケがここで回ってくるとはねー」

・ロクシエ、サクラス（たぶんヘルベチアも）

「というわけでボルトアクション式のライフルや短機関銃程度の装備しかない我々としては、新型のアサルトライフルやバトルライフルにも興味があります」

「ですが高いですね。軍全体の銃の入れ替えだけでなく弾の購入もありますし、既存装備は丸ごと廃棄になりますからね」

「おまけに武官がジンボウチヨウの書店で仕入れてきた向こうの世界の兵器に関する歴史資料によると、軍用ライフルに見解について時代ごとに意見が二転三転して、理想的な1丁というのがまだない

状況なんだとか」

「本国としては見栄えのする戦闘機や戦車の入れ替えを優先したい様子ですしね。不確定要素の多い歩兵銃の入れ替えは後回しになりそうです」

「既存品で何とかなるなら、しばらく様子見ですね」

「仕方ないですがそうしますか」

#### ・露西亞帝国

「ロクシエなどに比べて予算がふんだんな我が国としては、それこそ製造機械ごと買い込んでライセンス生産を……」

「却下です。ソビエトやアメリカといった仮想敵が消え平和が享受できそうな状況にあるのです。我が国は産業発展に重点を置いて軍備は縮小方向に向かわねばなりません。新兵器の導入は確かに優先すべき事項ですが、あまりのべつ幕なしにやっては世論も黙っておりません。それに余剰兵器の処分問題も重要な課題ですよ」

#### ・布哇王国

「ウチも露西亞と同じ意見だな、しかも向こうほど金がないと来ている。それに海上防衛の整備を優先したいから、やはり軍艦と艦載機の改良が優先されるな」

「しかし、軍縮という点でも露西亞と意見は一致するぞ。加えて駐留する帝国陸海軍の職探しの問題もあるし」

「それについては、御近所にいい身売り先があると思うんだが？」

・トリステイン王国

「国内の鉱物資源の採掘権と近海での漁業権や資源開発権を一部担保にして日本から融資を受け、それを元手に露西亞と布哇にいる帝国陸海軍の余剰兵器と人員の確保に成功しました。我が国としては過剰すぎるぐらいの新兵器です」

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

番外 音無小鳥誕生日記念 (前書き)

小鳥さん、誕生日おめでとう!! 私からのプレゼントです!

## 番外 音無小鳥誕生日記念

転移90日目 東京ナムコプロ

「はあ、暇ね。今日は皆仕事でお出かけだし、社長も取引先を回っていていないし……」

欠伸をしながらそう言うのは、765プロの名物事務員音無小鳥だ。自称2×歳の彼女は、今日は1人寂しくお留守番であった。

「どうしようかしら？夏コミ用の原稿を描く……て、さすがにマズイわね。下手すれば律子さんに見つかっちゃうし。今度見つかったらお盆と年末の有給は容赦なくカットって社長にも言われてるし」

音無小鳥、腐女子事務員としても有名であった。

仕事をサボってネットサーフィンをしたり、同人誌の原稿を描いたり、以前は色々やっていたのだが、何時までも悪事が続く筈もなく先日同僚兼アイドルの秋月律子に見つかってしまい、社長からきつい言葉を喰らっていた。

「仕方が無いわね、事務所の掃除……は昨日したし。やることが見つからないわね」

事務所内をグルグル回りながら、何かやることがないか考える小鳥。すると、彼女の視線の先にあるものが映った。それはアイドルたちが練習用に使うハンドマイクであった。

彼女はそれを手にとると、過去に思いを馳せた。

「懐かしいわね、私もアイドルだったころよく1人で歌の練習したっけ」

今では事務員だが、これでもかつてはそこそこ売れたアイドルであった。しかしながら同時期にブレイクした日高舞には遠く及ばず、彼女はアイドルから引退せざる得なかった。

「歌か……」

小鳥は何かを思いついたらしく、まず本日の来客予定を確認。それが終わると、アイドル達のスケジュールを再確認した。

「今日はお客さんが来る予定もないし、皆も後3時間は帰ってこないし。ようし、だったら今日は久々に小鳥祭よ！」

小鳥祭。簡単に言えば小鳥の1人カラオケ大会のことだ。

さっそく彼女はラジカセを持ち出してきてCDをセットし、さらに必要なことなのか服までアイドル用のコスチュームを持ち出してきて着替えた。

「ようし準備完了！まずは、「空」！音無小鳥行きマース！」

ノリノリで歌いだす小鳥。ちなみに彼女の歌を聴きたい人はCDを買うか動画サイト見てみよう。

そして現役時代の勘が戻ってきたのか、段々とヒートアップし踊り始めた。



そのため、周囲に対する注意力が大幅に削られることとなった。だから事務所の扉が何度もノックされたことも、終いには扉が開いて人が入ってきたのにも、全く気づかなかった。

そんなことになっているとは夢にも思わず、小鳥は1曲を歌い終えた。

「はー。久しぶりに歌って踊ったなあ。やっぱり誰も見ていないって気楽でいいわよね」

と、小鳥は今室内に自分しかいないと完全に思い込んでいた。

が！

「あのー」

「うつひゃあああああ！！！！؟؟？」

いきなり声を掛けられ、小鳥は飛び上がらんばかりに……いや、本当に飛び上がってしまった位に驚いた。

「あ、あの。大丈夫ですか？驚かしてすいません。幾らノックしても全然答えてくれないので、鍵も開いていたから入ってきちゃいましたが、まずかったみたいですね」

「い、いえ！こちらこそ、気づかなくて申し訳ありません！……それで、どちらさまでしょうか？」

ようやく落ち着いた小鳥は、やってきた人物をマジマジと見つめる。おそらく20代半ば。眼鏡を掛けた好印象な青年であった。

（プロデューサーさんになんとか印象が近いわね。けど、どこかで覚えがあるような）

会ったことは無いはずなのだが、どうしても既視感を捨てきれない小鳥。その答えはすぐに彼自身が答えてくれた。

「ああ、失礼しました。自分是我那霸一樹と申します」

「我那霸？もしかして、響ちゃんのお兄さんですか？」

我那霸響は765プロに所属するアイドルの1人で、沖縄出身で動物大好き。現在は倒産した961プロからの転属組の1人だ。

（なるほど、だからどこかで会ったような気がしたのね。確かに、どこことなく似ているわね）

「はいそうです。響は自分の妹です。妹がお世話になってます」

「いえいえ。とんでもない。ところで、その響ちゃんのお兄さんがどうしてここに？ま、まさか！？真ちゃんや雪歩ちゃんのお父さんたちみたいに、連れ戻しにきたとか！？」

「あ、それは違いますから御安心を」

その言葉に、とりあえず小鳥はホッとする。

「よかった」

「自分がここに來たのは、ずばり響に会うためです」

「あら？けど、お兄さんなら響ちゃんと連絡位出来るんじゃない？」

小鳥の素朴かつ常識的な質問に対して、一樹は呆れ顔で答える。

「それがあいつと来たら、新しい住所や電話番号を一切連絡してきてないんですよ。あいつの方から電話もしてくるんですが、言うことだけ言っただけで聞く前に切っちゃうものでして」

「ああ、響ちゃんらしいと言えらしいですね」

「3ヶ月前の転移以来、家族全員ずっと心配していたんですが、あいついくらこつちから聞いても大丈夫の一点張りですから。自分が会いに来たわけです」

「けどもう転移から3ヶ月も経っているじゃないですか。どうして今になって？」

当然の疑問であつたが、一樹は極普通に答えた。

「なにせ転移直後は航路も航空路もストップしちゃいましたし、その後も中々チケットが取れない状態が続きましたし」

「そう言えば、転移したばかりの頃は大混乱でしたからね」

小鳥にとつても、転移直後の様々な混乱は記憶に新しい。その後この新世界の状況が少しずつわかり、ロクシエやサクラスとの貿易がスタートするなどして、大分転移前に近い状況になった。

「それに自分も仕事がありましたから。実は東京に来たのは、仕事

の件もあるんです」

「お仕事は何をされているんですか？」

「自分ですか？警察官です。沖縄県警で自ら隊（自動車警邏隊）の隊員をしています」

「え！？警察ですか！？」

「父がそうでしたので。実は自分と響が一人称を使うのは、父が家でも自分のことを自分と言っていたからなんです。お陰で大学入学時の面接試験の時は、私と言うのに苦労しました。標準語の方は本土の大学を出たのでこの通りですが、この一人称だけはどうしても直りませんね」

「そうだったんですか。響ちゃん自分の家族について話すことが少なくて」

「まあ、話す必要もないでしょうし。ところで、その響は今日どこへ？」

「ああ、すいません。そうでしたね。ちょっと待ってください。すぐに調べますから」

小鳥は慌てて先ほどまで見ていた皆のスケジュール表を確認しなおす。

「ええとですね。響ちゃんは今日、歌番組の収録に出かれていますね。ただ、午前中だけなので、多分午後には戻ってくると思います。それまで事務所で待ちますか？お茶とお茶菓子くらいは準備します

から」

「はあ。それは、ありがとうございます。しかし、アイドルはそんなこともやるんですか？」

「え！？アイドル？私は事務員ですけどね？」

「そうなんですか？そんな格好しているから、てっきりアイドルかと思いました」

「え！？……キャアア！！」

小鳥はようやく自分がアイドル用の衣装を着ているのを思い出し、叫び動揺した。

もちろん、いきなり小鳥が叫んだので一樹もビックリだ。

「ちょっと、音無さん大丈夫ですか？」

「恥ずかしい！こんな格好で歌って踊っている所を見られるなんて！？お願いだから、イタイ目で見ないでください！」

「いや、別にイタイ目で見ていませんから。それに、そこまで恥ずかしがることないでしょ？中々似合っているじゃないですか？」

「え！？」

「それに歌と踊りも上手でしたよ。アイドルとしてそのまま通ってもおかしくない位でしたよ」

「そんな、お世辞なんて結構です」

「お世辞じゃないですよ」

一樹は微笑みながらそう言った。

「さっきのあなたは確かにアイドルでした。それも心の底から楽しんでるように感じられました。恥ずかしがることは何もないですよ」

男性からそのような声を掛けられたことのない小鳥は、急激に顔が熱くなっていくのを感じた。

「あ、ありがとうございます。と、とにかく着替えてくるので待っていて下さい」

「ええ」

小鳥はまるで逃げるように、更衣室へと飛び込んだ。

「はあはあ。な、何この気持ち？こんなにドキドキするなんて！Pさんと一緒にいてもこんな気持ちになったことないのに……けど、ちよつと嬉しかったかな？ウフフフ……ていけない。早く着替えないとー！」

小鳥はちゃっちゃんと着替えると、部屋から出た。

「お騒がせしました」

「いえいえ。お気になさらず。その服も似合っていますね」

ズキューン！

「あ、ありがとうございます！」

「大丈夫ですか？さっきから少し様子が変わりますが？」

「い、いえ！何でも無いんです！」

「はあ、そうですか」

「と、とにかく。お茶を入れてくるので……キャ！？」

緊張していたついでに慌てていたので、小鳥の足がもつれた。

「危ない！」

転びそうになった小鳥を一樹が受け止めた。

「大丈夫ですか？音無さん？」

「え、あ、はい」

小鳥はそれどころではなかった。何故なら。

（嘘！？私今男の人に抱きしめられている……嘘でしょ！？こんな都合のいいことが起きる訳、私の妄想でもないわよ！）

と突っ込んでみるが、体を感じる感触はまぎれもなく今の状態が事実であることを物語っていた。

「あ、あの音無さん？」

「……」

あまりのことに言葉が出ない。困惑する一樹を他所に、小鳥はと言えど。

（もう少しだけこのまま……）

と考えていた。

しかしながら、それがこんま数秒後にその場の空気を激変させるとは思わなかった。

「ただいま！ピヨ子帰ったぞ！」

「ただいま戻りました、小鳥殿」

事務所の扉が勢い良く開き、入ってきたのは我那覇響と四条貴音であった。意気揚々と入ってきた2人であったが、もちろんすぐに抱き合っている（ように2人には見えた）小鳥と一樹の姿を目にし、てしまい、固まった。

「「……」」

「「……」」

気まずい空気が数秒、いや数分か。とにかく、4人はしばしの間沈黙に包まれた。



その空気を唐突に破ったのは、響の絶叫だった。

「あ、兄貴がピヨ子と抱き合ってる!!」

さらに貴音も口を開いた。

「め、面妖な!」

もちろん、誤解なのですぐに一樹が反論する。

「いや違うぞ響!こ、これには理由があつてだな!」

「響ちゃん落ち着いて!」

が2人の声を全く聞かず。と言うより聞く耳持たずの響は、一樹に襲い掛かった。

「こんのバカ兄貴が!!」

「うお!??」

いきなり蹴りを繰り出した。幸いにも2人は一樹が咄嗟に避けたので何を逃れたが、後にあつた事務机が吹き飛んだ。

さらに、2人が以前抱き合つたまま（に響には見える）なのだから、彼女の怒りは治まらない。

「ゆ、許さないぞ!事務所で抱き合っているなんて絶対に許さないぞ兄貴!」

「だから話聞け！！！！！」

2時間後。

「で、2人で本気で戦った拳句事務所がめちゃくちゃになったと」

滅茶苦茶になった事務所を背に、帰ってきたプロデューサー兼アイドルの秋月律子が呆れながら言った。その目の前には、正座した我那覇兄妹がいた。

「ごめんなさいごめんなさい！妹共々ごめんなさい！」

何度も土下座する一樹。対して響は多少反省の色は見えるものの、ブスツとしていた。よっぽど兄が小鳥と抱き合っている（ように見えた）のが腹に据えかねたのであろう。

「いや、お兄さんがそこまでして謝らなくても」

Pが恐縮しながら言う。

「いや！理由はどうあれ、事務所を滅茶苦茶にしまった責任はありますので。弁償でも何でもしますから」

「まあ、特に壊れたものは無かったからいいんですけど。騒ぎにしろたくもありませんし。ただ、仕事がこれじゃあ出来ないんで、良かったら片付け手伝ってください。明日には新しいPも来られるので」

「喜んで手伝わせていただきます！」

律子の言葉に、一樹は土下座しながら答えた。

1時間後、何とか事務所の後片付けは終了した。

「全く。東京に来るなら来るって言って欲しかったぞ」

「お前が連絡先教えないから来たんじゃないか！だいたい、お前アイドルになってから一度も沖縄に帰ってないじゃないか！俺や母さんがどれだけ心配したか！」

あまりにも激しいお説教を見かねて、小鳥が助け舟を出す。

「まあまあお兄さん。響ちゃんだって辛かったですよ。前の事務所をいきなり解雇されたり、その後も故郷を離れて一人でがんばっていたんです。もちろん、家族に連絡しなかったのは褒められたことじゃありませんが、響ちゃんも響ちゃんなりに苦労してがんばってここまで来たんです。今回は大目に見てあげてください」

小鳥に続いて貴音にP、律子も言う。

「その通りですよ一樹殿。響だって何度も壁に突き当たりました。しかしながら、ひたすら自分の夢に向かって突き進んでここまで来たのです。彼女のそのがんばりだけは、認めてあげて下さい」

「響だっていい加減な気持ちでやっていたんじゃないんです。これ

からは、ちゃんと連絡させますから」

「皆の言つとおりです。妹さんにはちゃんと私たちが言っておきますから」

「……わかりました。響はいい仲間恵まれたみたいですね」

「フン！」

だが響は恥ずかしいのか、それとも兄に対する反抗心からかソツポを向いた。

「素直じゃないな。まあいいさ。これから2ヶ月は毎週見に来るか楽しみにしているんだな」

「」「毎週？」「」

「具体的な任務はお話できませんが、実は昨日付けで2ヶ月間警視庁配備になりました、既に官舎に入っただです。毎日はむりですが、週1位なら顔を見に来ることは可能です」

「な、72……じゃなくて何！？」

響の叫びに対して、一樹はイジワルな笑みを向ける。

「覚悟して置けよ響」

「認めないぞ自分は！！」

「勝手に言ってる。それじゃあ皆さん。御迷惑をお掛けしました。」

特に音無さんにはすまないことをしました」

「い、いえ。トンデモナイ。むしろ楽しかった位ですから、お気に  
なさらず」

「それこそトンデモナイ。今日の埋め合わせに、今度どこかで食事  
でもいがかですか？」

「え！？いいんですか？」

「はい。あなたが良ければですが」

「い、行きます行きます！喜んで！」

「ありがとうございます。それじゃあ、携帯を持っていたら出して  
下さい」

「は、はい」

小鳥は自分の携帯を取り出した。そして一樹も取り出すと、赤外  
線通信でアドレスを交換した。

「それじゃあ、また具体的なことはメールしますので……それじゃ  
あ皆さん。お騒がせしました。今日は失礼します」

一樹はその言葉を残して立ち去っていった。

残されたのは、啞然とする響らと、少しばかり嬉しそうにしてい  
る小鳥だけであった。

「み、認めないぞ！」

数分後、響が搾り出すように言った。

「え、響？」

律子の声に反応することなく、彼女は叫んだ。

「兄貴とピヨ子が付き合うなんて絶対に自分は認めないぞ！！！」

その心の底からの叫びも空しく、小鳥と一樹は順調に交際を重ねて、小鳥は我那覇小鳥となってしまうのであった。つまりは、目出度く響は小鳥の義妹になったわけだ。

もちろん、彼女がウェディングドレスを着て彼の隣に立った時、嬉泣きしていたのは言うまでも無い。

番外 音無小鳥誕生日記念 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

新世界暦5年7月16日 北アフリカ トブルク

ロマーニヤ軍とオリュンポス軍が自分の占領地域を広げ、その既成事実化を狙って戦闘を続ける中、枢軸軍の主力とも言うべきドイツ北アフリカ軍団は早々と中立を決め込んで、トブルクに引きこもっていた。

この裏切りとも取れる行動に、ロマーニヤ軍は当初力による接收も考えはしづらい。しかしながらイギリス・フェアリーランド軍（実際にはこれに新国連軍が加わっている）との戦闘を考えた場合、燃料や弾薬に既にストックはなく、精強なドイツ軍と万が一戦闘になった場合とてもではないが対処できなかった。

加えてドイツ軍自身も余分な燃料・弾薬のストックは持っていない。さらに言えば、本国を失った彼らにしてみればロマーニヤのためにイギリスやフェアリーランドと戦う理由などそもそもなかった。

なおこの世界では、統領が史実（日本が元いた世界での歴史）よりも真面目に働いたことや、ロマーニヤがゴーラ（フェアリーランド王国が元いた世界での中東の大国）から石油を買い付けていて海軍の動きが活発だったなどび理由が絡み合い、DAKはそこまで深刻な物資不足には陥っていなかった。

またロマーニヤが主敵としているフェアリーランドに対するドイツ軍の感情は良好であるため、とても戦闘を起こす気などなかった。フェアリーランドは第一次大戦前から、軍民問わずにドイツに多数の留学生を派遣しており、そのため両国国民の感情は極めて良好だ



ったのだ。

実際の所、北アフリカ戦線を含む全ての戦線においてフェアリーランド軍はドイツ軍（を含むローマニア・オリエントス以外の枢軸国）との戦闘を避けていたし、ドイツ軍も戦闘行為を控えていた。

こうした諸々の事情の結果、ロンメル元帥率いるドイツ軍は中立を維持することは出来ていた。一方で、だからと言って何もしないわけにはいかなかった。本国無き今、彼らは今後の身の振り方を考える必要があったのだ。

もつとも、実際の所既に各国からロンメルを含むDAKに対して亡命受け入れの打診が申し入れられており、特にフェアリーランドと露西亞、ロクシエの動きが顕著であった。

これはDAKにロンメルやバイエルライン大佐と言った名だたる名将たちが数多くいたことに加えて、DAKの場合は厄介なSS部隊を抱えておらず、しかもその騎士道精神は折り紙付であったからだ。

もちろんフェアリーランド以外の国々は、日本経由で得た別世界のDAKの情報しか持ち合わせていなかったから、初動こそ出遅れたがフェアリーランドからの猛烈なアタックを見て、すぐに動いた。

なおローマニアとオリエントスも自分たちの国への受け入れに動いたが、代償として「一緒にフェアリーランドと戦ってくれ」と言うバカな条件をつけたために「ナイン！」の返答をいただいている。

だがこれにカチンと来たのか、ローマニアとオリエントスは徹底的にドイツ軍が外部の国家と連絡をとるのを妨害し始めた。

無線の送受信はなんとか維持できたが、トブルクへ入港する艦船や着陸を行うとする航空機に対して目を光らせて、それこそ蟻の子一匹たりともトブルクには向かわせんとした。

しかしながら、トブルクのロンメル軍を四六時中見張るだけの兵力の余裕は既になく、加えてそもそも北アフリカ戦線自体がそもそも虫食い戦線であるから、ローマーニヤの監視網を抜けるのは比較的簡単だった。特にローマーニヤ軍が最後の攻勢を目論んだ7月以降は顕著になった。

この日も、連合軍占領地から飛び立った1機のロクシェ製輸送機が海上の機動部隊から発進した戦闘機の護衛の元、トブルク郊外の飛行場へと向かっている。

輸送機はロクシェ製だがJu52に瓜二つの機体で、しかも塗装は白色で胴体には赤十字マークを入れた念の入れようであった。

その機上には、今回ロンメル元帥と交渉を行うべく派遣された新国連職員の姿があったが、その中に炎のような赤と空のような透き通る蒼の髪を持つ2人の少女の姿もあった。

「どこまで行っても砂の海ね。これで反対側に海が見えなきゃ嫌になるわね。そう思わない？タバサ？」

「私には新鮮で面白い。ただ、日に焼けるのは嫌かな」

笑顔でそんなことを言うタバサに、魔法学院以来の友人であるキ

ユルケは微笑ましい気持ちを抱かずにはいらなかった。

母国の消失、家族との別れ、さらには失恋と精神的にも手痛い打撃を短時間に被った彼女であったが、現在はそれを微塵も感じさせない程、いや以前にも増して明るくなっていた。

「確かに、タバサの白い肌を焦がしちゃうのは犯罪よね。ちゃんと日焼け止めを塗っておくのよ」

「わかってる」

転移後のトリスティンはいきなり南の島になってしまい、日差しも強くなった。そのため、日本から輸出されるようになった日焼け止めは、女性にとって必需品になったと言っても過言ではなかった。

もちろんタバサも愛用していた。

「トブルクまで後30分ほどです。乗客の皆様はベルトの準備をお願いします」

機内にアナウンスが流れる。

「やっと到着ね」

「けど、ここからが大変」

タバサの言ったとおり、間もなく機内が騒がしくなった。

「前方に戦闘機らしい機影！」

操縦室内の機長の声が機内へも伝えられた。

「何!？」

「ロマーニヤか!？それともオリュンポス!？」

慌てる職員がいる一方で、キュルケとタバサは冷静な方であった。

「護衛戦闘機が動いたわね」

「うん」

窓から見える24機の護衛戦闘機の内、半数が前に出て接近する機体へと備えた。

しかし、程なくしてそれは杞憂であったことがわかった。

「接近中の機体はドイツ軍機。出迎えの戦闘機隊とのこと」

その放送が流れると、機内の全員がホッとした表情になる。

が、すぐに表情は驚きに変わった。

やってきたドイツ空軍の戦闘機は6機。キュルケやタバサも知らなかったが、その機体はMe109戦闘機であった。

そしてその内の1機が編隊から外れると、見事な旋回技を披露して見せた。空中での妙技に、職員達の口から歓喜の声が漏れる。

「へえ、やるわね。才人や才吉、武雄よりも上手そうだわ」

その戦闘機は空中での実演を終えると編隊に戻り、そのままこちらの護衛戦闘機と並進して飛んだ。

「黄色の14番」

タバサが突然そんなことを言った。もちろん、キュルケには何のことだかわからない。

「何？」

「黄色の14番。あの機体にペイントされていた番号」

「ふーん。それにしても良い腕ね。どんな男が操縦しているのかしら？」

ミーハーな発言をするキュルケに、タバサは釘を刺す。

「浮気はダメだよキュルケ」

「わかってるわよ。私はジャンー筋だから。今のは単なる興味本位よ」

「ならいいけど。それにしても、編隊から1人だけ抜け出すなんてよっぱどね」

「確かに。軍隊で言うのは集団行動が原則だって言うのに、あんな1人だけ勝手なことして。後で怒られるんじゃないかしら？」

「よっぱどのバカか怖い者知らずだと思う」

「アハハハ。確かにね」

タバサの言葉に、キュル家は笑った。

新国連職員を乗せた輸送機が、ロマーニヤ軍に襲われることもなく飛行場に到着したのはそれから35分後のことであった。

この新国連とロンメル將軍を含むドイツ軍との交渉は、はつきり言ってフェアリーランド王国の大勝利で既に確定しており、無駄骨に近いものとなった。

やはり親フェアリーランドのドイツ兵士の多くが、今後フェアリーランドへの移住を希望もしくは容認しており、新国連を構成する各国の出る幕ではなかったのだ。

結局の所、新国連とドイツとの間で交わされたのは、今後ともに両者間は中立を維持することの再確認と、今後のロマーニヤやオリュンポスとの協議に際しての必要あらば仲裁役となることを検討してもらうことだけであった。

この結果に、各国では落胆が大きかったが彼らが元いた世界での勢力バランスや友好関係を考えれば仕方が無い結果であった。

新国連職員は1週間ばかり滞在して引き上げる予定であったが、その間にロマーニヤ軍による最後の反攻作戦やロマーニヤ本土での異変などの事態が重なり、結局1ヶ月近くもトブルクに足止めを喰らうこととなった。

もつとも、さすがに海外からやってきた賓客だけに、ドイツ側はそれなりのもてなしをしてくれたので、当の職員達には悪いことばかりではなかったようだ。

ただし、ロンメルが「中立国として戦闘の様子を観戦する」とか言い出してマンムートで前線視察に行ってしまったり、一部の部隊が独断でフェアリーランド軍を助けるためにロマーニャ軍と戦闘をしたりと、冷や汗を掻く場面も何度かあったが。

そんな中で、職員連中の中で一番若いキュルケとタバサはドイツ兵士達から注目を浴びることとなった。ただし、キュルケが既婚であるとわかれると彼らの目はタバサ1人に注目した。

空のような蒼い髪に蒼い目、体型も良いと来ているから注目を集めない方がおかしかった。

しかしながら、彼女自身は異性に対して醒めた目をしており、ドイツ兵たちのアプローチを尽く断ってしまった。

そのため、彼女が帰るまでに食事の誘いを成功させれるかさせられないかがドイツ兵たちの間で一種の流行となった。

そんな中、ある日タバサは他の職員達と一緒に空軍基地を見学する機会を得た。

その折、キュルケと共に先日目の前でアクロバットをしていた黄色の14番を見つけ出した。

「この飛行機のパイロットはどんな人物？」

「この間私たちを出迎えた時に勝手にアクロバットをやっていたわよ」

彼女は案内役の兵士に訪ねてみた。すると、すぐに笑いながら彼は答えた。

「ハンス・マルセイユ中尉ですね。彼ならば納得できる行動です」

「一体どんな人物なの？」

「気になるわね」

2人の言葉に、その兵士は苦笑いしながら答えた。

「非常に腕の立つパイロットです。ただ、少々性格に難がありましたね」

「構わない。一度会ってみたい」

「わかりました」

すぐにそのパイロットが呼び出され、タバサたちと御対面した。

「第三帝国空軍中尉のハンス・マルセイユです……」

「！？」

「あらあら」



キュルケが見詰め合う2人を見て、微笑んだ。

目と目が（クドイ！）

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今回もジョン・ドー先生には感謝です。そして、ごめんなさい。

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 7

新世界暦5年7月17日

「次行つくよー！」

「オラオラ行けぜ！」

「よし行つて！」

「レッツハンティング！BANG！」

4人の少女たちが呼吸を合わせて戦車を動かしている。彼女たちが狙った演習用標的は見事に吹き飛んだ。

少女たちはメアリー少尉率いるフェアリーランド陸軍ダイナスティ大隊クリス小隊所属の5X号車の乗員達、通称力〇タデリバリーズたちであつた。いずれも16〜18歳の少女達であつたが、この時代難しいとされた行進間射撃を見事にやっていた。

「ほつ」

「やるなあ。行進間射撃なんて」

「こりゃバカに出来んな」

と彼らの訓練の様子を見ながら感嘆の声を上げているのは、国際派遣旅団に所属する新国連軍の兵士達だ。今日彼らは互いの練度を披露するために、合同訓練を実施中であつた。

新国連軍の兵士たちは装備の質や、やはり少女兵が多数の割合を占めるフェアリーランド軍に表立ってこそ言わなかったが、最初は内心軽んじる気持ちを持っていたのだ。

しかしながら、それを裏切るように練度だけ言えばフェアリーランド軍は非常に高い能力を有していた。だから新国連軍の将兵たちは認識を改めていた。

「おたくの軍隊も中々なものですね」

訓練の様子を見ながら、新国連軍国際派遣旅団司令官（旅団長）の池田末雄中将はフェアリーランド軍のベルタ中将に言う。もつとも、身長差があるので少しばかり滑稽な絵になっているが、もちろん当人たちは気にしない。と言うか気にしていられない。

「誉めてくれるのはありがたいけど、数じゃイタ公の方が断然有利だし、この広い砂漠の虫食い戦線じゃ、いつでもどこから敵が襲ってくるかもわからないよ」

「ちょ、ちよつと軍団長。失礼ですよ」

ベルタの素っ気無かつ無遠慮な物言いに、参謀長のピゴット大佐が慌てるが、池田の方は全く気にしていなかった。

「気にしていないよ。確かに、英軍も一部を除いては部隊を動かす余裕がないようですし」

「まあそれを言ったら先生たちと戦わないだけマシだけどね」

先生。それはフェアリーランド軍の人間がドイツ軍を表わす時に使う言葉だ。

「先生ですか。確かあなたはあのロンメル元帥に教えを請うたんですよね？」

するとベルタは頷く。

「そう。あなたの世界でも、ロンメル元帥は有名だった？」

「ええ。砂漠の狐と呼ばれてその名は世界中に轟いていました。そんな人物に鍛えられたとは羨ましい」

「昔の話よ。それよりも、あなたの所の部隊もやるじゃない」

そう言うベルタの視線の先では、ロクシエ軍の槍のマークとロシア軍の双頭鷲の紋章マークを施した四式戦車がやはり行進間射撃をおこなっていた。

フェアリーランド軍に負けないとばかりに、こちらも命中弾を次々と演習用標的に叩き込む。

「あんな強力な戦車があるなら、是非ともうちの部隊と一緒に戦って欲しいんだけどね」

ベルタが残念とばかりに言う。

到着後の打ち合わせで、新国連軍はフェアリーランド軍の事実上の味方として戦うことが再度確認されている。しかしながら、共同で戦うと言う話は出てこず、それぞれの受け持ち戦区を決めただけ

であつた。

これは両軍がまともに共同訓練をしたことが無い（当然である）ためだつた。しかも使う戦車をはじめとする兵器の性能も違つので、そもそも共同で戦うことに無理があつた。

そのため、両軍は互いの車両や航空機のシルエットや国旗などのマークを提供し合い、無線の周波数を決め、戦闘が起きた場合の最終的も目標をすり合わせるに留めた。

「直接共同出来ればそれに越したことはないでしょうが、そればかりは何とも。後は実際に戦つてみないことには……まあ戦わなければ一番良いのですが。先日の海戦で、ローマーニヤが講和に傾いてくれれば」

「うーん、どうだろう。意外とイタ公にも骨のあるやつがいるしね。それにローマーニヤ軍はこつちの5倍はいるし。はつきり言つて五分五分ね……ただ今回はあなた達がいるからあまり心配してはいないわ」

ベルタは不敵な笑みを浮かべた。

「おや？得体の知れない軍隊に対して随分と信頼してくださいませね？」

「まあ海戦のこともあるけど、見たところ随分と我が軍の兵士と打ち解けているから」

フェアリーランド王国軍と新国連軍の兵士が意外と早く親密な関

係を作れたのは、それは新国連軍を構成している各国やフェアリーランド軍がそれぞれに持つ異民族に対する感覚が大きい。

フェアリーランド王国は国民の多くに亜人を抱えており、その多くがウサギのような耳を持つ。しかしながらそれはあくまで多数派の話であって狐のような耳を持つ者や、犬の様な耳を持つ者もいる。また長い歴史の中で色々な血が混じった者もあり、それでも普通の人間もいる。

こんなお国柄であるから、そもそも外見だけで相手を差別すると言う觀念自体が持ちにくい国であった。これゆえに転移前に彼らがいた世界では、多くの植民地を短期間に取り込むことが出来ていた。

一方新国連軍の内、数の面で主力を努めるロクシエ軍は多くの民族の集まりであったが、長年スー・バー・イルという共通の敵に対して一つの連邦を構成してきており、やはり民族差別と言う問題を人々が感覚として有していなかった。

また露西亞帝国の場合も国内に露西亞系、ドイツ系、イギリス系、日本や朝鮮などの東洋系に加えて土着の民族やユダヤ教徒を抱えた多民族国家であったので、意外と他民族に寛容であった。

今回の新国連軍にはあまり参加していないが、サクラスの場合も国内にいくつかの民族やドラゴンなどを抱えている関係上、こうした問題はあまりないだろう。ヘルベチアも、そもそも民族が滅茶苦茶になった世界の人々なので、この点を心配する必要は小さい。

問題なのは長年に渡るメイジ至上主義だったトリステインと、よく島国根性を例に上げられる日本の二国であった。

これに関しては、今回は両国から派遣されている兵士の数があまり多くないことに加えて、これまで異国への派遣期間が長い兵士らを意図的に選抜することで凌いでいる。

実際今回トリステイン軍で最上位のアニエス少佐は平民出身で異民族に対して差別意識は持っていなかったし、陸自にしても空挺所属の友澤をはじめとしてトリステインやヘルベチアなどへの派遣経験を持つ兵士で固めていた。

ただし、実際の所兵士たちが短期間で友好的なムードを醸し出せたのは、言葉が通じると言う点が大きかった。

日本人が異なる民族を嫌う島国根性を持つ傾向にあるとよく言われるのは、島国という地理的な条件に加えて、自分たちと話せない人を信用しないと言う部分も大きかった。

実際言葉が通じるようになったせいか、前世界に比べて日本人は社交的になったと言われている。

それはともかくとして、諸々の要因が絡み合った結果、両軍兵士は意外と短期間で良好な関係を築けていた。

さて両軍による演習とその見学が行われる中、陸自の友澤はある光景に啞然としていた。

「あ、悪夢だ……」

彼の言う悪夢とは、今彼自身が乗るフェアリーランド軍の自走砲の上で繰り広げられていた。



「そこだ撃て！」

「いいぞ！中々よい手際だ！」

前者のセリフがトリステインから派遣されているアニエスのもの。そして後者のセリフは現在演習中のフェアリーランド陸軍第666部隊、通称「バツカニアンズ」の隊長を努めるジャンヌ少佐のものだ。

「何でこうなるかな……」

新国連軍の各部隊の兵士たちは、それぞれフェアリーランド軍の各部隊を視察することになった。そして2人の場合は、この666部隊の訓練視察に回されることとなった。

なお、今回派遣された新国連軍において日本の自衛官は観戦と連絡役を兼ねた数名が派遣されているだけだ。トリステイン軍に至っては、アニエスと彼女の副官だけであった。（ただし陸上に限つての話であるが）しかしその副官は、この特別の部隊を視察するようアニエスに命じられていた。

自衛隊の場合陸自の直接派遣（戦後復興を除く）を嫌ったため、お披露目程度の90式と10式、その支援部隊を派遣するに留め、主力は海自の機動艦隊となった。空自も参加したが、それは主にC130輸送機などの輸送部隊であった。

トリステインの場合は、そもそも軍隊自体が再編の途上にあるため、まとまった部隊の派遣などそもそも不可能であった。彼の場合陸軍の戦車は各国のお古。軍艦も中古品。空軍に至ってはレシプロ機を中心にわずか80機あまりで、その運用のほとんどを傭兵に任

している始末であつた。

まあそれはともかくとして、何故に友澤が悪夢と言つたかと言え  
ば、それは目の前の一番苦手とする女とジャンヌ少佐が息を合わせ  
て部隊を指揮しているからだ。

最初アニスはただ見ていただけなのだが、すぐにジャンヌら  
がとる豪快な戦術に引き込まれ、思わず口に出してしまったのだ。そ  
して止せばいいのにジャンヌ少佐も止めないから、何時の間にかア  
ニスとジャンヌが共同して部隊を指揮しているような状況になつ  
た。

それが友澤にしてみれば悪夢であつた。彼から見れば、まるでア  
ニスが2人になつたように見えたのだ。

（そう言えば、ジャンヌ少佐は以前乗っていた自走砲が被弾して、  
ボロボロになりながら1人で対戦車ライフル抱いて戦車1両を撃破  
したとか聞いたな。メイジに躊躇わず向かつていくアニスみたい  
なもんだぜ）

と溜息をつく彼に、アニスが顔を向ける。

「何をやっている？お前も立ってちゃんと見たらどうだ？」

「へいへい」

友澤はダラダラとであるが立ち上がり、666部隊を見回す。

（ふむ。激しい動きをするわりには統制が取れているな。訓練が行  
き届いている証拠だな）

と隊長の人格は別として、666部隊の腕は認めるところであった。

そして訓練が進んでいく中で、彼は1回だけ口を開いた。

「そこに伏兵がいますよ」

「何!？」

その時3人が乗る自走砲は、わずかな窪みの側を通り過ぎる所だった。そして実際そこに、敵役の兵士がカモフラージュしていて、演習用手榴弾を投げてきた。手榴弾はオーブントップの自走砲の中に落ちた。

「はい、全員戦死と言うところですか？」

「おい友澤!何故もつと早くに言わなかった!？」

「あのなアニエス。俺たちは観戦武官だぜ。実際の戦闘に参加出来るわけではないだろ。……ま、今のはさすがに危ないからつつい口に出ちまったかな」

「ほう。では君はあのカモフラージュした兵士が見えたのか？」

「まあ」

「そうかそうか。大いに結構」

とジャンヌは怒るわけでもなく、ただ微笑んだ。

（嫌な予感……）

彼の予感は的中する。この数時間後、彼は池田中將からアニエスと共に、第66部隊専従の観戦を命じられたのであった。

フェアリーランド転移編 (北アフリカ転移編) 7 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

フェアリーランド転移編 (北アフリカ転移編) 8 (前書き)

ごめんなさい。なんか面白いので、まだ続きそうです。

新世界暦5年 7月18日 北アフリカ戦線上空

「こいつはいよいよだな」

晴れ渡った砂漠の空を轟音を轟かせ、一条の飛行機雲を残しながら、日の丸を付けた1機のプロペラ機が飛んでいく。三式艦上攻撃機の「流星」である。

「流星」はズバリ旧海軍の「流星改」の流れを組んでおり、発動機を出力3600馬力のターボプロップである「希望」エンジンに換装しているものの、逆ガルの翼を持つなど遠めに見れば「流星改」に見えなくもなかった。

もちろんただエンジンを換えただけではない。無線装置や航法装置などの艤装は、現代日本の飛行機が必要としている物を搭載している。また機体素材も超々ジュラルミンではなく、カーボン材などを多用している。また主翼の形や風防なども空気を抵抗を抑える形に再設計されている。

ロクシエやサクラス、露西亞でもライセンス生産されているが、いずれもターボプロップエンジンの出力が低かったり、機体素材が違うなどしており、その性能は日本製の物には及ばない。

純日本製の機体であれば、武装を搭載しない偵察機状態で最高速度は700km。大型増槽搭載での航続力は最大4000kmを誇る。また日本製の機体の場合、武装は基本的に搭載せず、必要であれば機銃や爆弾を搭載する。また同機の設計時点でのコンセプトが

汎用性を高めることであったため、カメラなどの偵察機材を搭載しての偵察任務や、電子機器を搭載しての簡易電子戦機として使用することも可能であった。

「流星」は新世界において、急速な防衛力拡充に迫られた（国内的にも国外的にも）日本が「ある程度数が揃えられるローコスト機」として同じく製造した「烈風」と同じく、海自や帝国海軍などの主力艦載機になりつつあった。

また前述した2機種以外にも、第一（第二世代のジェット戦闘機を参考に設計した四式ジェット艦上戦闘機「震電」が既に実戦配備されつつあったが、今回はサクラス帝国軍が試験的に4機を陸上基地に持ち込んだ以外はなかった。

それはともかくとして、空母「白鳳」から発艦した「流星」を操る橋本敏男三佐は、眼下の砂漠に見える光景を見ながら、ロマーニヤ軍が最後の攻勢に出るのを感じ取った。

実際に多くの戦車や砲が最前線に配備され、夥しい車両や歩兵の移動が確認できれば誰にだってわかる。しかもそれは飛行機で直接確認出来なくとも、偵察衛星で確認することができる。

航空機での偵察を行うのは、解像度の低い衛星（初期に打ち上げた物は良かったが、後から打ち上げた物は各国からクレームがついたため性能が低い）を補完するためであった。

と、その時後方の偵察員が叫ぶ。

「敵機！MC202と思われます！」



自衛隊出身のその兵士は、初めて見る敵機に多少狼狽しているようだった。だが、太平洋で米機動部隊相手に雷撃をした経験もある橋本の場合は、落ち着いていた。

「了解。全速離脱するぞ」

橋本はスロットルと入れ、希望エンジンの出力を上げた。見る間に「流星」は速度を上げていく。それまで巡航の450kmで飛んでいたのが、あつと言う間に500km、そして600kmを越えてまだまだ上がる。

追尾してきたロマーニヤのマツキ戦闘機も全速力で追ってくるが、600kmを過ぎたあたりから徐々に引き離され、最終的に後方へと置いてかれてしまった。

「畜生め！あいつは化け物か！？」

ロマーニヤのパイロットは視界から消えた「流星」に悪態を吐いた。

もつとも実際の所は彼だけでなく、この日偵察に出撃した「流星」や「烈風」は追尾したロマーニヤのMC202、Re2001などを簡単に振り切ってしまう、ロマーニヤ空軍パイロットを驚かせていた。

この日の偵察の結果、ロマーニヤ軍が近日中に最後の反攻を行うことが確実となった。

そして2日後、ロマーニヤ軍の最後の攻勢が開始された。

その攻撃はセオリーどおりに始まった。

まず、ロマーニヤ軍は戦線全体に渡って配備していた砲兵と航空機による攻撃でフェアリーランド軍の前線に対して攻撃を開始した。

枢軸軍側にはDAKが抜けており、またオリュンポス軍も一部しか配備されておらず、その主力はロマーニヤ軍であった。

一方のフェアリーランド軍も、本来の主力であるはずのイギリス軍がエジプトの防衛など様々な理由をつけて後方へと移動してしまった（もつとも全てではないが）ために、ロマーニヤとの戦力差は5対1にまで膨らんでいた。

モクスター州とラ・デューン州の奪取には失敗したが、こちら（北アフリカ）だけはなんとしても自分の手にしておきたかった。特に、戦争を始めた統領にとっては切実な問題であった。

だが、この第一波の攻撃は新国連軍によってまたも邪魔されることとなった。

同軍が最前線に持ち込んでいた長距離用野戦対空レーダーは、奇襲を行おうと画策したロマーニヤ軍機をことごとく捕捉してしまった。その結果数が少ないフェアリーランド軍と新国連軍の各機体は有効な迎撃を行うことが出来た。

この迎撃にはロクシエ空軍オリジナルの1年式戦闘機（新世界暦1年に正式採用）や前述したサクラス帝国空軍の四式ジェット戦闘機も参加していた。ちなみに両機種合わせて出撃機数15機で、未

帰還は0。対して撃墜50機を記録している。

さすがに被害0などと言う虫の良い話にはならなかったが、フェアリーランド軍は効果的な迎撃によって空襲に関する被害は最小限に抑えている。また砲撃に関しても、前日までに集まった情報によって予め陣地変えや部隊の避退をしていたので、こちらも最小限の被害で乗り切っている。

ただし神出鬼没のコマンドによる攻撃によって、少なからぬ損害を受けた部隊もあり、ロマーニヤ軍が決して弱小な軍隊でないことを見せ付けた。

そして事前攻撃が終わると、戦車を中心とした部隊がフェアリーランド軍の前線を突破するべく前進を開始した。

一方で攻撃を受けたフェアリーランド軍と新国連軍も黙っていないかった。

真っ先に動いたのは前線飛行場に配備されていた爆撃機や地上襲撃機のグループで、制空権が獲得されるや否や、前進を開始したロマーニヤ軍の頭上に爆弾やロケット弾、対戦車砲弾の雨を降らせた。

特にわずか数機であったが、強力な対戦車火力を誇る陸上自衛隊のヘリコプター部隊はロマーニヤ軍に大打撃を与えた。

続いて陸上でも反撃が始まった。

「全車出撃！イタ公のケツをぶっ飛ばしてやるわよ！！」

指揮下にある全ての車両に向かって出撃命令を下したのは、同オアシスに駐留するダスティーナ大隊大隊長のアルメリク・トパーズ中佐だ。

彼女らはこれから、第三オアシスへ進撃してくるロマーニヤ軍の大部隊に正面から反撃を挑むのである。

もつとも、その指揮下にある第5中隊を任されているダリア・コノリー大尉はあることが気がかりであった。

「メイアたちは大丈夫かしら？」

本来彼女の指揮下にあるメイア少尉率いるクリス小隊は、現在彼女の指揮下を離れて別行動中であった。

「ダリア、あのノーパンたちの心配をしているのか？」

彼女の無線機のヘッドフォンに、突如若い男性の声が飛び込んできた。

「ちよつとアスコット大尉！いきなり話しかけないでよ。今は作戦中よ、場を弁えなさい」

彼女に交信して来たのは、今回臨時にコノリーの指揮下に入った英軍戦車小隊を率いるジェリー・アスコット大尉であった。彼は今回、指揮下のマチルダ4両でダスティーナ大隊を支援する。

今回数少ない英軍よりの援軍であるが、彼は以前コノリーと共に戦闘を行って以来、彼女に惚れていた。その惚れ具合と来たら異常な程で、婚約指輪を送りつけながら剃刀入りの手紙を返されても諦めないくらいだ。もちろん、今も諦めていない。

「悪い悪い。けど、ダリアが随分と心配そうにしているからな。こっちからも良く分かるぞ」

「う！？そんなに顔に出ていたかしら？」

コノリーは今戦車のハッチから頭を出している。しかしながら、アスコットの乗るマチルダからはそこそ離れている筈であった。なのに表情を見られたことに、気恥ずかしさを覚えずにはいられなかった。

「ああ。だけどあんまり気にしすぎるなよ。士気に関わるぞ」

「そうは言っけど、今回戦うロマーニヤはこれまでで最大の数なのよ。いくら幸運続きのメイアやフラワーたちでも心配よ」

「けど彼女らの部隊はあの「バツカニアンズ」なんだろう？しかもその指揮官はダーブロウ少佐に一発かましたって言うじゃないか？」

第66部隊通称「バツカニアンズ」の隊長であるジャンヌ少佐が、英軍戦車隊指揮官のダーブロウ少佐を殴りつけた話は、既にフェアリーランド軍のみならず、英軍内にまで轟いていた。

そのせいなのか、2人は知らなかったが、ダーブロウは現在後方にお呼び出しを喰らっていた。

「それにあの日本とか、他のよくわからん国の新型戦車もいるし、航空支援もあるって言うじゃないか。なんとかなるさ」

「……そうね。もっと前向きにならないとね」

「安心しろつて。もしイタ公がダリアに何かしようとしても、俺が守ってやるから」

「フン！イタ公から逃げていたあんたが何を言うんだか」

「うう、それを言われるとつらい」

途端にアスコットの表情がシヨボーンとなる。

「フフフ。気にしているなら、しっかり働きなさい。それ次第じゃ考えてもいいわよ……」

「え！？」

「もう。で、デートのことよ。その、1回位なら……言っておくけど、この戦いが終わってからよ！」

コノリーは顔を真っ赤にしながら返した。

「……了解。その約束、忘れるなよ」

「当たり前でしょ。一端切るわよ」

「ああ。それじゃあ、お互いに健闘を」

「そつちもね」

2人は交信を切った。

「それじゃあ、私たちも行くわよ。戦車前進！」

コノリーが乗るハイドライドMK？戦車、そしてアスコットの乗るマチルダも前進を開始した。

ちなみにこの会話、無線機を介していたので当然他の隊員にも聞かれていた。そのため……

「きいい！中隊長とデートですって！？」

「生意気よあのササナ野郎！」

「戦場でそれとなく撃ち殺しちゃいましょうか？」

「それがいいわ。装甲の薄い後ろからバンよ！」

アスコットはコノリーに心酔する彼女の部下から、いらぬ殺意を買っていたのであった。

「あ、あなたちねえ……」

コノリーは一気に体から力が抜けて行くのを感じた。

フェアリーランド転移編 (北アフリカ転移編) 8 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。



新世界暦5年7月20日早朝 北アフリカ・サルーム沖250km  
洋上 海上自衛隊戦艦「近江」

「坂本司令。CICより連絡。陸上での戦闘が始まりました。ロマーニヤ軍ならびにオリュンポス連合軍は前線各地において砲撃ならびに空襲を実施中とのこと」

「近江」艦長志摩一佐の報告に、国連艦隊司令の坂本海将補は訪ね返す。

「つまり、こちらの警告を無視したと言うことか？」

「はい。確認も取れています。そして、現在我が艦隊の周囲に敵艦隊の姿は確認されておりません」

志摩の言葉に、坂本は頷いた。

「よろしい。それでは我が艦隊はこれより、我が方の警告を無視した武装勢力の武力攻撃に対して反撃を開始する」

「了解です……攻撃計画は予定通りのものでよろしいですか？」

「ああ」

「わかりました。空母「麗鳳」および「白鳳」、「オリョール」に攻撃を準備させます……それにしても、この回りくどい攻撃は何とかなりませんか？」

「仕方が無いよ。未だに我が国は憲法で国家間の交戦権を禁止しているんだ。まあ、以前のように集団的自衛権云々と言う必要がなくなっただけありがたいことだ」

「確かに」

志摩は自嘲気味に笑った。転移後に起きた海獣による巡視船撃沈事件や、露西亞帝国転移の際に起きた米ソ艦船による攻撃などから、自衛隊が武器を使用する条件は転移前に比べて大きく拡大されている。

事後査問を受けることになるが、前線指揮官が独自の判断で武器を使用することも限定的に可能となっている。

しかしながら、現在に至るも日本は憲法9条を堅持しているため、自分の側から戦争を仕掛ける（と受け取られる）ようなことは出来ない。集団的自衛権こそ認められている（と言うより国民が認めた）状況にこそあるが、対外的に対内的にも先制攻撃はよろしいものとは見做されなかった。

ちなみに、転移後に日本では憲法限定無効論と言う解釈が幅を利かせつつある。

それはともかくとして、艦隊に含まれている各空母から攻撃隊の発進が開始された。もっとも空母は海上自衛隊と露西亞海軍共に同型の改「大鳳」級空母で固められている。

海上自衛隊の2隻は帝国海軍から転籍したもの。露西亞海軍は東露時代に日本から購入したもので、外見だけ見れば全く同じだ。転

移後にターボプロップ機の運用が可能なように改装された点でも同じで、3隻ともアングルドデッキを備えている。

艦載機も戦闘機と攻撃機が36機ずつと同じだが、海自の2隻には連絡と対潜用を兼ねたSH60Kが1機ずつ、対して「オリョール」は純国産のシコルスキーS55ヘリが搭載されていた。

各空母の艦載機は対地攻撃用のロケット弾や機銃ポッド、爆弾を予め搭載しており、準備万端とばかりに待機していた。そのため攻撃開始命令が出ると、直ちに発進に移った。

「ようし！艦首を風上に立てろ！攻撃隊発艦開始だ！」

海自所属の2隻の空母を指揮する第一航空戦隊司令兼「白鳳」艦長の貝塚武男一佐の命令の元、空母群は艦首を風上に向けて走り攻撃隊を発進させた。

3隻の空母にはいずれもカタパルトが設置されており、爆弾や燃料で重くなった攻撃機を楽々と発進させることが出来た。

発進した攻撃隊の数は合計で180機であった。総隊長は空母「白鳳」乗り込みの千早竹彦一佐であった。

同時刻 第三オアシス周辺 最前線

「イドリブ！」

フェアリーランド軍の主力戦車であるハイドライド巡航戦車の5

7mm砲が咆え、直後に目標としたロマーニヤのM13戦車が吹き飛んだ。

かと思えば、ロマーニヤ軍の最新鋭戦車であるP26戦車の75mm砲による攻撃によって破壊されるハイドライド戦車の姿もあった。

ロマーニヤ軍はフェアリーランド軍の5倍と言う数に物を言わせて、前線各地で攻撃を加えつつあった。一方フェアリーランド軍はジャイロ・スタビライザーを戦車に搭載しているため、高い命中率を誇り、多くのロマーニヤ戦車に命中弾を与えていた。

また極少数ではあるが援軍として参加していた新国連軍の四式戦車も次々にロマーニヤ戦車を撃破し、ロマーニヤ軍の前進を停滞させていた。

戦況は5分5分と言って良いだろう。

そんな中でフェアリーランド、ロマーニヤ双方が戦術を持って相手を出し抜こうとしていた。ジャンヌ少佐率いる第666部隊にとっても、それは同じであった。

「敵の側面に回りこんで攻撃を仕掛ける！ドイツ軍に出来た機動戦が我々に出来ぬ筈がない！ただし、伏兵に注意！……3号車、敵戦車が側面に回りこもうとしているぞ！5号車、敵の歩兵が寄っているぞ！なぎ払え！！」

ジャンヌ少佐は座乗する自走砲上で、全軍の士気を執っていた。しかも、すごいのは激しく走って砲撃しながらである。もちろん、自走砲も敵の攻撃を受けており、戦場全体の状況把握だけでも一苦

労と言う状況でだ。

その様子を、後から友澤とアニエスの観戦武官のコンビが見ていた。

「うひゃあ。本当に歴戦の将を感じだな」

「ああ、あそこまで貫禄のついた指揮官は、「烈風力リン」以外見たことが無いぞ」

「いやあ、アレと比べるのは間違いだろ？……と、そこ！！」

友澤は持っていた銃で、自走砲に岩場の影から接近を図ったロマ  
ーニヤ兵を仕留める。

「よし！……けどさあ、何で俺たちまで戦うハメになるんだよ！？」

「そんなの決まっている！……戦わないと私たちも危ないからだ！  
！」

そう言うアニエスも、手に持った拳銃で応戦していた。

「2人には悪いが、これも観戦料と思って諦めてくれ」

こんな状況下でも、しっかりと聞いていたのか、ジャンヌが笑いながら答えた。

「……こんなことになるんじゃないかと思ったぜ！」

「無駄口を叩いていないで手を動かせ！じゃないと死ぬぞ！」

「わかつとるわ！」

666部隊はロマーニヤ軍に着実に出血を強要していた。しかしロマーニヤ軍も負けずに損害を出しながらも、攻撃を続行していた。時間が経つに連れて、フェ軍の損害も増えて行った。

1両のハイドライド巡航戦車が被弾し、左全部の転輪が吹き飛ばされた。その直後、フェ軍の無線に悲痛な報告が入る。

「こちらクリス3！車体左側に被弾！脱出する！」

「OKクリス3！敵に注意しながら下がりなさい！」

クリス小隊の指揮を執るメイア少尉は、味方に損害が出たことに歯噛みした。既に3両の味方戦車が撃破されるか戦闘続行不能に追い込まれていた。

「メイア、大丈夫かな？撃つても撃つてもわいてくるけど」

操縦のロイスも心配げに言う。

「敵の数が多すぎる。この間あれだけ撃破したのに、まだこんなに出てくるなんて。ロマーニヤ軍も本気って言うわけね」

メイアはロマーニヤの本気に多少寒気を覚えた。その時、照準手のフラワーが叫ぶ。

「大変メイア！」

「どうしたの！？」

「オリュンポス兵が！！」

メイアが確認すると、特徴的な猫耳の亜人の兵士の一段が、少し離れた所で砲撃を行う自走砲に接近しつつあった。

「ニャアア！」

「うお！？寄るな！この猫野郎！」

自走砲に駆け寄り、手榴弾を投げつけようとするオリュンポス兵に、友澤は慌てて拳銃を抜いて発砲した。

「ギャ！？」

オリュンポス兵は額を撃ち抜かれ、糸の切れた人形のように倒れた。

「オリュンポス兵か……また厄介な連中だ」

一度彼らに自走砲に乗り込まれ、あやうく戦死しかけたジャンヌとしては、オリュンポス兵は疫病神そのものだった。

猫系亜人であるオリュンポス人は、陸上と空中における戦闘では無類の強さを発揮する。

友澤とアニエスも事前にその位の説明を受けていたが、実際に相手にしてみると厄介なことこの上なかった。

「オークや吸血鬼も厄介な相手だが、こいつらはそれ以上じゃないか!？」

アニエスの言葉は間違っているようで、あながち間違っていない批評だった。オリュンポス兵の動きのよさと戦意は凄まじく、しかもそれでもって一人一人突撃銃を持っているのだから、ある意味オークや吸血鬼以上に厄介な相手であった。

「まずいぞ、我が軍が押され気味だ」

ジャンヌは初めて焦りを感じた。オリュンポス兵が戦線に登場した途端、目に見えてフェ軍は押されていた。

しかしながら、666部隊を含むフェ軍には予備戦力がないために、撃てる手は強引に迂回攻撃を続けるか、それとも敵正面にいる囹役で敵を引き付けながら下がることであった。

囹役を引き受けているのは、ロクシエ軍の四式戦車なので、未だに損害なしで戦闘を続けている。しかし、その弾薬も無限ではない。決断を急がなければならなかった。

「仕方が無い、ここは一端下がるか……」

その時、通信兵が叫んだ。

「隊長！航空隊の援軍が来るそうです！」



「何！？まさか！」

ジャンヌは出撃前に、基地航空隊以外の航空機の支援は宛に出来ないと言われていた。それなのに、援軍がやってきた。

「どうやら地中海上の機動部隊からですね……ジャンヌ少佐、部隊に後退を命じて下さい。このままじゃこっちも目標になっちまいます」

「わ、わかった。全軍後退しろ！騎兵隊が来るぞ！」

666部隊の上空にやってきたのは、ここまで特に爆撃目標がなく進撃を続けた太田敏夫二尉率いる「烈風」12機と、総隊長である千早一佐直卒の「流星」6機であった。そして彼らに先行する形で、空中管制機仕様の「流星」が偵察と目標への誘導を行っていた。

先に戦場上空に入ったのは、「烈風」隊であった。

「エノケンよりバンツマ。付近に打ち上げ花火および蠅の存在は確認できず。心置きなく配達されたし」

空中指揮管制機からの指定された符号による通信が、太田たち「烈風」隊にもたらされた。

「了解。とっておきを配達する……各機へ、敵味方に注意しつつ攻撃開始！突撃！！」

突入した「烈風」隊は20mm機銃と12.7mm機銃を乱射しながら、ロケット弾をロマーニヤ軍の戦車やトラックに叩き付けた。もちろん、叩きつけられた側は瞬く間に炎上する。

ロケット弾はいずれも熱源探知式で、トラックや戦車のエンジンなどから出る熱源に向かうよう設定されていたため、面白いように命中した。

「ええい！敵は少数の戦闘機だぞ！対空砲火で蹴散らせ！」

とロマーニヤ軍の士官は反撃を命じたが、未来の技術で化け物に仕上がった「烈風」は容易に落ちない。と言うより弾を当てるのさえ難しかった。

その間に、真打である「流星」隊が登場した。その半数は翼下に無誘導式のロケット弾を12発、そして爆弾倉に1枚爆弾を、残る半数は翼下に30mm機関砲ポッドを搭載していた。

「ようし、後は任せろ！」

千早ら熟練の艦爆乗りたちの正確無比な投弾が、ロマーニヤ・オリュンポス軍の頭上に降り注いだ。

この攻撃による結果は、15分後それまで攻撃を仕掛けていたロマーニヤ・オリュンポス連合軍が、大量の残骸を残してほうほうの体で逃げ出したのを見れば、一目瞭然であった。

「終わったな」

「あっけないな」

「制空権がないことは、本当に悲劇だな」

友澤、アニエス、ジャンヌは半ば呆然としながら各々に呟いた。

フェアリーランド転移編 (北アフリカ転移編) 9 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 10

新世界暦5年7月23日 北アフリカ 第三オアシス近郊

「あの異世界の連中反則過ぎるわ」

フェアリーランド王国軍ダイナスティー大隊第5中隊クリス小隊を率いるメイア少尉は、空を見上げながら言った。彼女の頭上には、地中海上から発進した日の丸をつけた攻撃隊の姿があった。

「イタ公の飛行機どころか、戦車さえなくなっちゃったもんね」

操縦主のロイスが苦笑いしながら言う。

以前なら、彼らは航空支援を受けることさえまならず、少ない戦力を遣り繰りしながらロマーニヤ並びにオリュンポス軍と苦労して戦っていた。

ところが、異世界から来たと言う連中が戦闘に参加すると、戦況は一変した。一時的に大戦力を集めたロマーニヤ軍に最初こそ押されはしたが、その後地中海や後方の飛行場から幾度と無く発進する攻撃隊が制空権を握ると、戦いはフェアリーランド・新国連軍連合に一方的に有利なものとなった。

ロマーニヤ軍は各地で敗退し、わずか3日で後退してしまった。

「いいんじゃないかな？」

メイアの言葉を聞いていた砲手のフラワーが、唐突に口を開いた。

「フラワー？」

「戦わないにこしたことはないでしょ？」

その言葉に、メイアはフツと小さく笑う。

「まあね。このまま戦争が終わってくれたら万々歳なんだけど」

と、その時メイアのヘッドフォンに無線交信が入る。

「……聞こえるか？」

「こちらダイナスティー大隊第5中隊クリス小队小队長のメイア少尉です。よく聞こえています」

「こちらは第一歩兵戦車連隊第一大隊」

交信して来た相手の正体を聞いて、メイアは驚きの声を上げた。

「歩兵戦車連隊って……マル重!？」

「メイア! 3時方向!」

フラワーの叫びを聞いて、メイアは3時方向に双眼鏡を向けた。

「スゴイ!？」

やってきたのは王国軍最新の歩兵戦車の集団であった。メイアたちの乗っている巡航戦車に比べて動きは鈍く感じるが、75mm砲

に如何にもゴツイ車体は圧巻であった。

その歩兵戦車で編成された部隊は、通称マル重と呼ばれていた。

もつとも、メイアはそれ以上にスゴイ存在を見つけた。

「何あれ!？」

「ば、化け物戦車!？」

装填手のモーリスも啞然としている。歩兵戦車に混じって、2両のやたら角ばった戦車がいたが、その戦車はどう見ても歩兵戦車より二周りはデカイ。しかも搭載している主砲も新国連軍の四式戦車の90mmよりも大きそうであった。

そしてその砲塔には、多少くすんでいるが最近メイアたちが味方の識別表示として覚えた、日本の日の丸が描かれていた。

だがそんな戦車に気を止めていられる時間は短かった、メイアは小隊長として歩兵戦車連隊の大隊長と挨拶しなければならなかったからだ。

「メイアお疲れ様」

「全くお偉いさんと、しかも男組としゃべるのは疲れるわね……て、何であんたたち笑ってるのよ？」

メイアを出迎えた55号車のクルー、さらには僚車である5X車のクルーたちまでがニヤニヤと笑っていた。

「実は隊長にお客さんが来てマース！」

5X号車のクリス砲手が答える。

「お客？」

メイアが首をかしげていると、皆の影に隠れて座っていたソバカス顔にウサ耳の青年が立ち上がった。

「久しぶりだね、メイア」

「ま、マツクルー！？」

現れたのは、メイアが士官養成所で出会ったマツクルー少尉だった。彼とメイアが一緒にいた時間はほんの半日程だったが、メイアにとっては忘れようにも忘れられない人物だった。

「久しぶり。モクスターの士官養成所以来ね……そうか、確かあなたはマル重だったわね」

「うん。メイアの部隊のことを思い出してね。顔を出しておこうと思つて。迷惑だったかな？」

「ぜんぜん迷惑なんかじゃないわ！むしろ、会いにきてもらえて光栄だわ」

（うー、周囲の空気が……）

自分に歳が近い青年が訪ねてきたせいか、仲間たちの視線は好奇心な物を見るそれだった。しかも、メイアとマツクルーの関係は満更



ではないものであった。何せキスをしたぐらいなのだから。

（いけない、このまま行くと根掘り葉掘り聞かれそうだから、話題を変えないと）

「ところで、あなたの部隊は戦闘をしたの？」

「うん、ロマーニヤの戦車部隊と。けどほとんどの戦果はあの日本の戦車にとられちゃったけどね」

「日本の戦車って、あの化け物みたいな奴？」

「そう。本来は一緒に行動する予定はなかったんだけど、あの戦車を積んでいた貨物列車がロマーニヤのコマンドの妨害にあって、後から来た僕たちの部隊を載せた列車に追いつかれちゃったんだ」

「ふーん」

「それで一緒に行動していたんだけど、昨日の早朝に迂回して味方の陣地を攻撃しようとした敵戦車部隊を航空隊が見つけて、攻撃することになったんだ。そして戦闘になったんだけど、あの日本の戦車はスゴいんだよ。2000m先から簡単にロマーニヤの戦車を撃ち抜いちゃうんだからね。しかも行進間射撃で」

「そ、それはまたスゴイ話ね」

「僕の戦車も1両だけ撃破したんだけど、ほとんどおこぼれをもらったような感じで。あの戦車はスゴイよ」

「さすがに未来の戦車と豪語するだけあるわね」

「それに航空支援もスゴイからね。僕たちの部隊も一度支援を受けたけど、やっぱり安心できるね」

マックルも、ここ数日の制空権掌握の恩恵を受けたようだ。

「それも日本軍（厳密には自衛隊）だったの？」

「うん。百合のマークを付けた……確かトリステインと言う名前の国だったと思う」

7月20日 午後 地中海上 新国連艦隊旗艦戦艦「近江」

「最初報告を受けたときは冗談かと思ったが、まさか本当に艦隊を派遣するとは」

艦隊司令官である坂本海将補は、遥々やってきたトリステイン艦隊の参戦に、半ばあきれながら言った。

「トリステインとしても、自分たちに箔をつけておきたいんじゃないんですか？ここで新国連軍に参加しておくことは、あの国にとってはプラスでしょうし」

「でも、あの国の空母ってあれだろ？」

「ええ。あれです」

2人の会話から1日経った7月21日、トリステイン艦隊が北アフリカ沖へと到着した。その編成は軽空母2、巡洋艦1、駆逐艦5隻であった。

艦隊旗艦は軽巡の「スルト」であった。

もつとも、トリステイン海軍はここ5年の間に設置された新興海軍であるし、そもそも中世ヨーロッパ程度の技術力しか持ち合わせていなかった。

そんな同国が近代的な海軍を作り上げるなど、無理な話であった。

そこで、トリステイン王国は自国将兵による海軍が出来上がるまでの繋ぎとして、傭兵による海軍を保有することとなった。折りしも転移2年目に東露西亞とハワイが転移してきたことで、同地に展開していた大日本帝国海軍が大幅な艦艇や人員余りを起こし、傭兵として採用することが出来た。

彼らはトリステイン海軍の実戦艦艇を運用する者として、或いはトリステイン士官や水兵の教育係としてトリステインへと赴いていた。

トリステイン海軍が運用する艦艇の8割は旧日本軍艦艇である。旗艦である軽巡「スルト」は旧日本海軍軽巡洋艦の「川内」であるし、駆逐艦も改装されているとはいえ特型駆逐艦ばかりであった。

そして極めつけは空母であった。

トリステイン海軍が保有する空母は計3隻だが、いずれも軽空母だ。うち1隻は真珠湾に停泊中に転移に巻き込まれた「沖鷹」であ

る。現在は「ブリシंगाメーン」と改名されているが、同艦はトリステイン本国艦隊としてトリステイン本土に留まっている。

今回派遣された空母は現在「ビフレスト」と「ヨツンハイム」と改名されていたが、旧名は「にぎつ丸」と「ときつ丸」であった。

何と、この2隻は旧日本海軍の艦艇ではなく旧日本陸軍の艦艇であった。この2隻は丁度ハワイの陸軍航空隊に補充機を運んでいるときに転移に遭遇したのであった。

搭載機はそれぞれ13機で、2隻合わせても26機にしかない。しかも艦載機も戦闘機こそ海軍から譲渡された零式艦上戦闘機54型であったが、爆撃機は一式軽爆撃機であった。

この1式軽爆撃機は、なんのことはない。旧海軍の99式艦上爆撃機の改修版であった。一応爆弾架に代えて対戦車用の30mm砲を搭載可能ではあったが、旧式なことに違いない。

ただそれでも、これら装備はトリステイン国内で想定される内乱や、海獣退治、吸血鬼退治などでは最強の威力を発揮するものであった。

艦隊司令長官は、空軍から転籍したドクー中将が名目上の司令官であったが、海に関する知識が皆無の彼に艦隊指揮が取れるはずも無く、現在は「スルト」座乗の城英一郎中将が司令官代理として指揮していた。

また空母戦隊は元日本陸軍少将で転移時に2隻の陸軍空母の指揮を執っていた川俣千秋少将が、そのまま戦隊司令官として着任していた。

旧日本軍将兵たちは、傭兵であるため制服こそトリステイン海軍正式（もつともモデルが旧日本軍のためあまり印象的に変わらない）の物に変わった以外は以前と同じように艦艇を操るだけであった。他に一部の乗員がトリステイン人、日本人以外の傭兵に変わった以外は、旧日本軍の時代そのままと言ってよかった。

ただし、機体のマークはトリステイン王国の白百合のマークとなり、軍艦旗も白百合と錨を合わせたトリステイン海軍正式のものとなっていたが。

「攻撃隊発艦開始！」

トリステイン艦隊が参戦したのは、空襲2日目であった。既にロマーニヤの空軍力は壊滅しているため、彼らは初っ端から地上軍援護に回った。

攻撃隊の先陣を切ったカタパルト発進したのは、零戦に搭乗する佐々木武雄海軍中尉機であった。

トリステイン海軍の空母の総合計機数はたったの26機。この内攻撃に用いれるのは最大で18機であった。

それでも、この18機はその後数日間にわたって空襲を行い、ロマーニヤ軍にそこその打撃を与えた。特にフェ軍の歩兵戦車連隊の支援に成功したことで、北アフリカ戦線で活躍したことをなんとか印象付けることができた。

また佐々木武雄海軍中尉と平賀才吉中尉のコンビは、数少ない空戦を行い、それぞれ1機ずつを撃墜し、トリステイン軍初めての公

式撃墜戦果を残すことに成功した。

そして同軍がなんとか活躍したことを歴史に記すことが出来た7月25日、ローマーニャならびにオリュンポスは新国連軍とフェアリランド王国が要求した講和案の全面受け入れを受諾したのであった。

**フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 10（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。

フェアリーランド転移編 (北アフリカ転移編) 完結(前書き)

なんとか完結。



フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 完結

新世界暦7年 4月10日 日本・東京 秋葉原

「ああ、その君！」

警官が一人の少女を呼び止めた。

「何？」

「こんな所で子供1人だけだと危ないよ。お母さんかお父さんはいないのかな？」

「私は子供じゃない!!」

と少女が叫ぶが。

「はいはい。子供は大抵そう言うものだよ。ほら、こっちに来なさい」

警官は少女の手を掴んで、交番へと歩き始めてしまう。

「こらああ!話を聞け!」

そして少女が連れていかれた交番には、先客がいた。制服を着込んだ中年の男性であった。彼は警官に何事かを焦りながら話していた。そして、後からやってきた少女に気づくと振り向いた。

「あ!いた!」

幼女を見るなりその男性は目を吊り上げて声を上げた。一方幼女の方は、明らかに憂鬱そうな表情をした。

「ゲ！？ピコット」

「ゲ！？じゃないですよ。全く大將に昇進したお人が、日本にまで来て何醜態を晒しているんですか！？」

「いいじゃない。少し位観光したって。今日一杯は予定もないんだし」

「予定が無くても、観光をするならするで1人で出歩かないで下さい！しかも私服で！！」

「堅苦しいのは嫌なのよ」

「だから子供と間違われて連行されるんですよ。と・に・か・く、ここから先は私がしっかり監視させてもらいますからね……ああ、日本の警察諸君。騒がせて悪かったね……さ、行きますよ。下手すると大使に怒られます」

「へーい」

警官たちが呆気にとられる中、男は幼女の背をズルズルと引いて交番から出て行った。

「今大將って言ってたよな？」

「ええ、あの人も軍人みたいですし」

「しかし、あの幼女が大将って……」

「悪い冗談ですかね？」

警官たちは首を捻るばかりであった。

同じ頃、秋葉原の中心部から少し離れた路上を2人の男女が歩いていた。この内女性の方は溜息を吐いている。

「はあ、全くチビのベルタにも困ったものね。日本にまで来て何をやってるんだか」

「まあまあダリア。あの將軍らしくていいんじゃないか？」

「だからってフラツと消えてもらっちゃ困るわよ！来たことも無い大都会で、こっちは地図を見ながら歩くだけでも苦労しているのに、これだったら北アフリカで戦っていた時の方がマシだったわ」

女性は再度溜息を吐き、悩ましい表情になる。

「……」

「な、何よ？」

「いや、悩んでいるダリアも可愛いなあって」

「うー？こんなところで恥ずかしいセリフはやめなさいよ、ジェリ

「・アスコット少佐！」

「はいはい。すいませんでした。ダリア・コノリー少佐」

ただの口喧嘩に見えるが、周囲から見ると砂糖を撒き散らしているようにしか感じられない。実際、2人の左手の薬指には同じデザインの指輪がはめられていた。

「ところで、何かさつきから変に視線を感じるけど、何故かしら？」

「多分、ダリアのウサ耳のせいじゃない？」

ダリア・コノリーは所謂ケルト系亜人であり、その中でも一番多いウサギ系である。そのため、ウサギのような耳が外見的特徴となっている。

ちなみに、このウサギ系亜人は老化が遅いので歳の割に若く見え、しかも男女問わずスタイル抜群と来ている。

だから。

「ティンとキタアアア！！君、アイドルにならないかね？！」

「な、何！？」

「いきなり、何か黒い人が声を掛けてきたぞ！」

「ハハハ。驚かなくてもいい。私は怪しい者ではないぞ」

「そんなこと言う時点で怪しさ爆発よ！行きましようジェリー！」

「あ、ああ」

と自分を見無視してスタスタ歩き出した2人を見て、黒い男が慌てる。

「ちょ、ちょっと君たち待ちたまえ……グハ!？」

いきなり黒い男が倒された。

「なあ姉ちゃん。こんなオッサンやそんなひ弱そうな奴なんか放っておいて、俺たちと遊ばないか？」

典型的な不良グループが声を掛けてきた。

「はあ、あんたたち頭沸いてるんじゃないの？イタ公やオリユンポス人だってもう少し気の利いた誘い方をするわよ？ふざけてないで、お家に帰ってなさい」

「お、おいダリア」

とアスコットが止めようとするが、手遅れだった。

「な、何だって!？」

「このアマ!」

これまた典型的な言葉を吐いて襲い掛かってきた。

「ちょうどいいわ、ムシャクシャしていたところなのよね……フフ

フ、グッドラック」

「あーあ。仕方が無いな。女だけに喧嘩させるなんて、英国紳士としてできないし」

「「かかってこい！」」

バキッ！　ボキッ！　ボガッ！　ドガガガガ！！（？）　グチヤッ！

ピーポーピーポー……

「……それで、チンピラとやり合って5人を病院送りにしたと？」

「「ごめんなさい」」

やってきたピコットに深々と頭をさげるダリアとジェリーの2人。現場にはパトカーと救急車が駆けつけ、野次馬が群がって騒然としていた。

「正当防衛になるから罪には問われないそうだが、民間人相手にこれはやりすぎだろ。襲い掛かってきた5人全員病院送りとは……」

「「ごめんなさい」」

「せっかく大將を無事に捕まえられたのに……君たちは私の胃を殺す気か？」

「「ごめんなさい」」

2人はもう恐縮しきりだ。

「とにかく、始末書だね。明日の揚陸までに2人で100枚ずつ書くように」

「「ええええ！！！？？？」」

ちなみに、この話を聞いた元ドイツ人で砂漠の狐と言われたR元帥は、秘書官となったフェアリーランド人の少女兵であるM軍曹にこう言ったそうだ。

「いやはや、この軍隊も中々に楽しいね」

翌日 東京港晴海ふ頭

「と言うようなことがあったんだって」

貨物船が接岸している岸壁で、2人の男女が昨日上官たちが起こした失態について話込んでいた。

「全く中隊長……じゃなかった。少佐たちも昇進して結婚までした

のに、何をやってるんだか」

コノリーの元部下にして、今回共に日本へ派遣されてきたメイア中尉は呆れてしまった。そんな彼女の表情を見て、マックルー中尉が苦笑いする。

「ハハハ」

「笑い事じゃないわよマックルー。おかげで、私たちが少佐たちの代わりに揚陸を指揮しなくちゃいけないのよ」

「まあまあ。僕たちも今日の午後からは自由行動が許されているんだし。良かったら、どこかへ食事にも行かない？」

「え！？あ……そうね、御馳走になろうかしら？」

と、2人に声が掛けられる。

「2人とも、降ろしますから気をつけて！」

「「ハイー！！」」

まもなく、接岸している貨物船からクレーンで1両の戦車が降ろされてきた。1年前の戦争でフェアリーランド軍の主力を努めたハイドライド巡航戦車であった。

「まさか極東の日本でこの戦車を操縦するとは思わなかったわ」

メイアが岸壁に降ろされた55号車を見ながら、感慨を呟く。



1年前日本をはじめとする新国連軍の介入によって、フェ軍とロマーニヤ・オリュンポスの戦争は終わった。フェアリーランドは開戦前より保持していた植民地を守りきり、戦争目的を達成した。

一方のロマーニヤとオリュンポスは、戦後首脳陣の交代劇や多くの軍備の喪失など大打撃を負ったものの、戦後ただちにフェ国と国交を結ぶとともに、新国連に加盟した。

母国を失ったドイツ軍はフェ軍が引き取るか、その他の国への移住を認めた。

戦場となっていた北アフリカ地域は、史実とは違い歪な形での転移であり、現地住民による独立や国際的な管理地域、独立準備地域案など様々な策が出たが、最終的にフェアリーランドを担当とした、新国連による委任統治領となり、5年後に完全独立するかの投票が行われることとなった。

またマルタ島は、英国軍の残党を中心にマルタ共和国になった。

そしてフェアリーランド王国も、先に転移してきていた国と同じく、日本の技術力に驚き、その導入に積極的に動いた。

ただし、終戦から半年程の間は出征していた兵士の復員などの仕事もあり、日本との交流は少しかり出遅れることとなった。

それでも、復員や戦後のゴタゴタが軒並み片付くと、ロマーニヤやオリュンポスとともに日本への接近を開始した。

しかしながら、短期間とは言え同盟軍として戦い、さらに植民地などに有力な資源を保有しているフェアリーランドがその競争に先

んじるのは自明の理であつた。

フェアリーランド軍はロクシェなどの先に轉移してきていた国と同じく日本からの技術の吸収や、武器の購入に成功することとなつた。

ただし、日本としてもただ売るわけではない。資源もそうだが、フェアリーランドと言う国や彼らがロマーニヤとの戦いで得た経験と言つた情報も欲しがつた。

その結果、航空機や戦車などの一部がサンプルとしてフェアリーランドから日本へと売却されることとなつた。

そしてその戦車を操縦士、北アフリカ戦線で戦い抜いてきた兵士や将官たちの中でも、際立つて活躍した面々が教官や駐在武官と言う肩書きで日本へと上陸した。

メイアが乗っていた55号車の面々や、部下であつた5X号車の面々は今回日本行きに選抜されたのであつた。

ただし、上陸した途端から総司令官であるベルタ大將が迷子になつたり、兵士や下級士官を束ねるコノリー少佐がベルタを探しに行つて乱闘騒ぎをおこすなど、初っ端から問題ありまくりであつたが。

「よし、予定していた6台全て降ろしたわね。あとはトラックに載せて、確かフジとか言う場所に持っていくだけね」

「何でも近くには遊園地とか温泉もあるいいところらしいね」

「楽しみだわ。戦争中はそんなものとは無縁だつたから……フラワ

「もこればよかったのに」

「彼女の場合は仕方が無いよ」

「そうね、仕方が無いわよね。ノーパンのせいでビザが降りなかったんだから」

「それに、彼女軍を辞めたんでしょ？」

55号車の乗員であり、ノーパンと言うあだ名で知られたフラワ―は終戦となり、軍の整理が始まると退役して去っていった。同様に666部隊のジャンヌ少佐も退役し、トリステイン王国陸軍の指導教官として旅立って行った。

「うん。また傭兵課業に戻ったみたい。何でも南ア自治領のゲリラの残党狩りをやっているって聞いたわ。例のドイツ人の将校さんと一緒にね」

とそこまで話したとき。

「メイア！」

「何ロイス！？」

「トレーラーが到着したわよ！積むのを手伝って。マックルー少佐もお願いします！」

「お呼びみたいだね」

「そうね」

2人は話を打ち切って、部下達とともに今度は岸壁に降ろした戦車を大型トレーラーに積み込んだ。

そしてさらにその翌日、戦車を積んだトレーラー、補充部品を積んだトラック、そして兵隊が移動する小型乗用車が日本の警察と自衛隊から派遣された護衛車両と共に隊列を組んだ。

「それじゃあ、出発！」

フェアリーランドの戦いは未だ終わらない。むしろ、新しい世界での戦いはこれからであった。

フェアリーランド転移編（北アフリカ転移編） 完結（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ちなみに予定では幼女つながりで、あきらたろう先生作品から出張してもらったエミーや、またアイドルつながりでリナ・オーガスタを出そうかと考えましたが、結局断念しました。

## 御先祖様来襲 1（前書き）

世界を翔けるアイドルのアイデアが出ないので、とりあえず仮題としてネタです。続くかはわかりません。

## 御先祖様来襲 1

新世界暦2年10月 日本・東京

最初の転移が発生してから1年と半年。当初こそ混乱した日本であつたが、その後新領土や資源の発見、さらに同じく転移してきた国同士での貿易開始によって、転移前の生活水準をほぼ取り戻している。

だからと言って、転移前の生活と全て同じかといえばそうではない。同時期に転移してきた国々や、その後転移してきた国々との付き合いによって、変わった部分もある。

と言うよりも、変わらなければおかしいと言うものだ。なにせどの国も、それまでの日本の常識が通じない部分を多々内包していたからだ。

魔法至上主義だった中世国家のトリスティンに、魔法を持つてはいるが急速に科学技術を発展させているサクラス、地球の1940〜50年代の技術のロクシェ等々。

こう言う国と付き合う以上、色々と以前のままではいられないことは多いのだ。

そして新世界暦2年4月に起きた東露西亞帝国と布哇王国などの転移は、日本にとってかなりややこしい問題を引き起こした。両方とも地球から転移した国家なのだが、この世界の日本が元いた地球とは微妙に違う歴史を辿っていた地球からやってきた。しかも、その世界の日本人大勢とともに。

全く別の時代、別の政体とは言え同じ日本人。切っても切れない関係となってしまうのは止むを得なかった。

特に、直接の血の繋がりにある人間にとっては。

トリステインに『使い魔』として召喚された少年、平賀才人は転移発生の翌年4月から高校に復帰し、足りなかった2年分の授業を消化することになった。そのため、今は東京にある実家に戻っていた。

トリステインにいた時は伝説の使い魔として、或いは平民の希望の星として何かと騒がれた彼であったが、日本に戻って高校生活を始めると、途端に以前のどことなく抜けた高校生になってしまったのだから、人間の習慣とは恐ろしいものである。

この日の朝も、彼は枕元で鳴り続ける目覚まし時計を手で止めると、そのまま二度寝しそうになる。

が！

「こら才人！早く起きなさい！！」

「起きろ兄ちゃん！」

ピンク色のブロンド髪の才人と同年代の少女と、どこことなく才人に似ている小学生位の少女の2人が、だらしなく二度寝しようとしている才人に対して、布団越しにタックルをかました。



「へぶ!？」

さすがにこれでは、目を覚まさない方がおかしい。

「お前ら……もう少し穏やかに人を起こせよ」

そんな才人の言葉を、2人の少女はあっさりとスルーした。

「起きたわね。さっさと降りてきなさい。もう朝食出来てるわよ!」

「早く降りないと、今度はお母さんが来るよ」

「へいへい。全く、KANOUJOとIMOTOがいるのも考えもんだな」

才人はブツブツと言う。

「何か言った?」

「何も言ってます」

完全に頭が上がらない才人であった。

「じゃあ行きましょう才香ちゃん」

「うん、ルイズお姉ちゃん」

仲良ろしく部屋から出て行く2人の姿に、才人はまたもポツリと漏らす。

「あいつら最強じゃねえか？」

文句を言いながらも、才人はベッドから這い出して身支度を整えた。カッターを着て、ネクタイを締め、ブレザーを羽織る。帰ってきたばかりの頃は懐かしさを感じた高校の制服も、今ではすっかり日常に溶け込んでいる。

身支度を整えると、彼は1階へと降りた。

「おはよう母さん」

「おはよう才人。早く食べなさい。遅刻するわよ」

「わかってるよ」

台所で作業をしている母親の瑞江と挨拶を交わす。

食堂にあるテーブルでは、先に降りていったルイズと才香、そして父親の才助が食事を摂っていた。

才人がハルケギニアに行く前は、才人と両親で4人掛けのテーブルで食事をしていたため、椅子が一つ余っていた。ところが、現在は才人の家族4人に加えてルイズもいるため、椅子をわざわざ一つ買わなければならなかった。

ルイズは今年4月の才人の高校復帰に合わせる形で、日本の高校へ2年間留学することとなった。もっとも、それ以前に4ヶ月間の語学留学をしているので、既に平賀家に通算10ヶ月いることとなる。

最初はやはり違和感を感じた才人であったが、今ではこれも日常であつた。

ちなみに、ルイズ以外にもキュルケやタバサと言つた魔法学院の面々で数名が日本に留学していたが、もちろん別々にホームステイしている。

「おはよう才人」

「おはよう父さん」

ルイズたちと一緒に先に食事を摂っていた父親の才助と挨拶を交わす。

「何時も何時もこりずに2人に起こされて、たまには自力で起きたらどうだ？」

「起きれば苦労しないよ」

「そう言う典型的なダメ発言はやめろ」

そんな才助の発言に、ルイズがウンウンと頷く。

「本当ですよね。姫様がこんな所みたら幻滅すること間違い無しね」

「余計なお世話だ」

「何が余計なお世話だ。曾爺さんが見たら幻滅どころじゃすまないかもしれないぞ」

才人の何気ない一言に、才助が注意する。しかし、才人は最初父親が一体何を言っているのかわからなかった。

「曾爺ちゃんて、そんな昔の人が何だって言うんだよ？」

「あれ？お前知らなかったっけ？うちの曾爺さんが転移してきたこと」

「え？」

才人は記憶の系を手繰り寄せる。

（そう言えば、そんなことあったような……）

「この間転移してきたハワイの海軍航空隊の隊員にうちの曾爺さんがいて、今日到着する艦隊に乗って日本に来るって言ったよな？」

「ええと、そんなこと聞いたような聞いてないような……中間テストで忙しかったし」

「「は」「」」

才助とルイズが溜息を吐く。

「だって仕方が無いじゃん！赤点とらないように必死だったんだぜ」

「お前なあ。頼むから留年だけはやめてくれよ。そうしたらルイズさんの御両親に顔向けできないぞ」

「わかつてるよ！」

才人は情けない声を上げた。

この日、海上自衛隊・日本海上警備機構横須賀基地（在日米軍基地を含めて改編された）に向かう10隻の艦隊があつた。内2隻は平らな甲板を持つ空母であり、残る8隻は巡洋艦と駆逐艦であつた。いずれも古臭いシルエットをしている。

それもそのはず、この日入港したのは大日本帝国海軍に所属する艦艇であつた。

半年前に東露西亞や布哇と共に転移してきた大日本帝国陸海軍部隊であつたが、当然と言おうか彼らが所属するべき大日本帝国は既がない。

このため、大日本帝国の軍人や民間人は現在の日本国に帰順するか、それとも東露西亞か布哇に留まるかの選択をしなければならなかつた。

「どんな時代でも日本は日本」と考えて日本への帰属を選択する者もいれば、「今の日本は俺たちのいた日本じゃない！それよりは布哇か東露に留まる！」と考えるそちらに帰化する人間もいた。

そして日本国籍を採つた大日本帝国軍人と一部の装備は、そのまま自衛隊へと編入が決まることとなつた。今日入港した艦隊も、海自に編入される空母と、その格納庫に搭載された日本政府へ提供される航空機や戦車を護送してきたのであつた。

その内の1隻、空母「麗鳳」の艦上では、複数の艦載機がプロペラを回して、発進準備を整えていた。

「上空に誘導の海上自衛隊機飛来！」

「艦首風上にたちました！」

空母は飛行機を発進させるために、合成風力を起こす必要がある。そのためには風上に向かって走るカタパルトを使う必要がある。今回は風上へ向かつての航行で、飛行機を発進させようとしていた。

「よろしい。では発艦始め！」

「発艦始め！」

甲板上で発進始めを合図する旗が振られ、先頭の零戦が滑走を開始した。そして甲板の先頭に行き着く前にフワリと浮き上がった。

続いて1機、また1機と飛行甲板に並べられた機体が発進して行った。その機種は各種ごちゃ混ぜで、戦闘機もいれば艦爆や艦攻もいた。さらに陸軍の「隼」や「鍾馗」、「飛燕」に「疾風」までいた。

これらのごちゃ混ぜ編隊は、陸地から飛んで来た海上自衛隊のP3C哨戒機の誘導を受けて、一路北西へと飛んだ。

編隊の行き先は、現在海上自衛隊専用航空基地となっている厚木基地であった。

厚木の飛行場に零戦が着陸する光景は、太平洋戦争末期の本土防空戦を彷彿とさせるものであった。

しかし、その後降りてきた機体が陸海軍ごちゃまぜであったが。

着陸した機体は、海上自衛隊の基地員の誘導を受けて次々と格納庫や駐機場へと移動させられた。そして停止すると、エンジンをストップし車輪止めが嵌め込まれた。

そこまでの所で、パイロットたちがコクピットから出て地面に降り立つ。

飛行服に「平賀少尉」と縫い付けてあるパイロットが、乗ってきた「紫電改」から地面に降りると、隣に止まった零戦から降りたパイロットが声を掛ける。

「おい平賀！」

「なんだよ佐々木？」

平賀才吉少尉は、同僚の方へと顔を向けた。

「お前空から地上見たか？一面家がビッシリで、驚いたのなんのつて」

「ああ。未来の日本って言うのは、聞いていた以上にスゴイみたいだな」

すると佐々木武雄海軍少尉は口惜しそうに言った。

「クソ！こんなことなら、あの自衛隊とか言うのに転籍しておけばよかった！」

「憲法が嫌だからこのまま帝国海軍に留まるて言ったのはお前じゃないか？」

「そりやそうだけどさ。未来の日本もなんか良く見えてきてさ」

2人は帝国海軍の残留組であった。今回厚木基地へ飛んだのは、機体の空輸のためであった。

「けど、本当に浦島太郎になった気分だな。一体どんな風に子孫に会えばいいのかわかんねえ」

「それ言ったら、俺なんかどうなるんだよ？俺の子孫なんか、なんでもトリステインとか言うわけのわからん国にいるらしいし。一体どうなっているんだか」

「うん、あれはスゴイ話だったな。けど、日本にも子孫がいるんだろ？」

「日本の厚生省とか言う役所はそう言ってるけど、結婚もしていないのに子孫とか言われてもねえ」

「それを言ったら俺も同じだよ。全然実感がわかないよ。今度会うことになったけど、どんな顔をすればよいやら」

と2人が少々悩んでいると、声が掛かる。

「平賀先輩！佐々木先輩！」



「うん？」

「どうした秋月？」

「集合が掛かっていますよ！」

「わかった」

「すぐ行く！」

御先祖様来襲 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 御先祖様来襲 2（前書き）

八幡先生に感謝します。

そして、当作品においては一部のキャラが大変なことになっていますが、決して原作キャラを冒瀆しているわけではないことを、予め明記させていただきます。

## 御先祖様来襲 2

新世界暦2年10月 とある日の午前 日本・横須賀港

「本日より、交代での半舷上陸を許可する。ただし、何分諸君らもわからないことが多いだろう。幸いにも、日本政府の好意で外務省と自衛隊から案内役の人間がつくことになった。上陸中は彼らの指示に従うこと。同じ日本とは言え、文化や人々の意識は我々のものとは大きく違うそうだ。その点に留意し、くれぐれも無用なトラブルは起こさないように。以上、解散！」

大日本帝国海軍艦隊が横須賀に到着し、空母を海上自衛隊に引き渡した翌日、2隻の空母を含む艦隊の乗員に上陸許可が降りていた。

ちなみに、半舷上陸とは乗員を左舷と右舷の2組にわけて交代で上陸させることだ。さらに言えば、旧海軍では基地航空隊や陸戦隊など、陸上で勤務していた兵士達も基地の外に出るのを上陸と言ったりした。

さて、これが乗員達の故郷である日本だったら喜び勇んで上陸して行ったことだろう。しかしながら、彼らが今いるのは別世界の70年後の日本である。そのため、感情的に行き難い者も多かった。

こうしたことから、帝国海軍残留組のほとんどは上陸休暇が許可されても、基地内の娯楽施設かせいぜい基地周辺で過ごす者がほとんどであった。

しかし、もちろん中には遠出を希望する者もいた。

「ええと、あなたが外出希望者の如月さんですか？」

案内役の海上自衛官が、希望した水兵に確認をとる。

「はい。如月飛鷹水兵長です。よろしくお願いします」

「風間雄一郎海士長です。よろしく。お若いようですが、歳は？」

水兵は自衛官から見て相当若いように見えた。少年と言って良かった。なお、案内する風間も高卒入隊のため、歳は21とそこまで年配ではなかった。

どうやら若く同じ階級であるため、彼の案内役に指名されたようであった。

「今年で17（数え年）です。それから敬語はいりません。僕の階級は急遽1階級昇進したものですし、歳も僕のほうが若いでしょうから」

「わかった……他の人たちは皆外出を控えているようだけど、君はどうして？」

「実は僕、このまま帝国海軍に残ろうか、自衛隊に転籍しようか、それとも除隊しようか、まだ迷っているんです。この世界の日本については、聞かされた話しか知りません。だから、最終的な決断をする前にこの世界の日本を見ておこうと思って」

「へえ、いい心がけだね。わかった。それじゃあ半日だけだけど、しっかりと案内するよ。それで、どこへ行く。列車に乗れば横浜や東京にも出られるけど？」

横須賀にはＪＲと京急の駅がある。どちらも都心部へと列車が走っている。

「じゃあ東京の神田へ。そこが僕の生まれた所なんです。どんな風に変ったのか見ておきたいんです。」

「わかった。それじゃあ、とりあえずＪＲの横須賀駅へ行こう」

「はい」

同日午後 都立のとある高校

校内に授業終了を知らせるチャイムが鳴る中、生徒の１人である平賀才人は机の上に出していたノートを閉じた。

「今日はこれで終わり」

「それじゃあ、早く帰らなくちゃね」

とノートを鞆に仕舞いながら言うのは、隣の席のルイズだ。

２人は荷物を手早く鞆へと仕舞い、授業後のＳＴを終えると足早に教室から出た。

「あら、２人とももう帰るの？」

と声を掛けてきたのは、同じ教室にいるトリスティンからの留学

生、モンモランシーであった。さらに、その後から同じくトリステインからの留学生である蒼い髪の少女、タバサが現れる。

「何か用事？」

タバサの問に、才人は答える。

「ああ、タバサ。実は今日曾じいちゃんが家に来ていてさ、早く帰って来るように言われているんだ」

「曾おじいさん？」

その問に答えたのはルイズだった。

「ほら、半年前に布哇とか言う王国と一緒に昔の日本の艦隊が現れたでしょ？あの中に才人の曾おじいさんがいたのよ。それで、昨日から日本に来てるのよ」

「なんかややこしい話ね」

「そう言うわけだからさモンモン、ギーシュたちには今日は付き合いえないって言うておいてくれるか？」

「わかったわ才人。それから、何度も言うけどモンモンはやめてよ。お陰で他の生徒までそう呼ぶようになったじゃない!？」

「ごめんごめん。とにかく、そう言うわけだから」

「それじゃあね、2人とも」

才人とルイズは2人に簡単な挨拶をすると、足早に行ってしまった。

「本当にもう家族みたいなもんね、あの2人」

「……うん」

「才人のこと、まだあきらめてないの？」

「そう言うわけじゃない。ただ、やっぱりルイズが羨ましい」

「そうでしょうね。ま、いつかあなたにも素敵な王子様があらわれるわよ」

恋に敗れたタバサを慰めるモンモランシー。以前だったらそれはキュルケのポジションであったが、その彼女は隣のクラスなので、今はモンモランシーがそのピンチヒッターを務めていた。

「モンモランシーにタバサ、才人を知らないかい？教室にはいないようなんだが」

「ルイズさんの姿も見えないけど」

「あの熱々カップル、ついに私たちとの関係よりも自分たちの方を優先したのかしら？」

2人の後ろから、数人の少年少女がやってきた。

「違うわよ、キュルケ。才人とルイズは今日家の用事があるんですって」



「だから2人で先に帰った」

「そう……じゃあ私たちだけでどこか遊びに行きませんか？」

「それがいいわね春名」

モンモランシーはそう言うと、高風春名に微笑んだ。

同日正午過ぎ 東京・神田

「やっぱり昔の面影はほとんど残っていませんね」

「まあ戦災もあつたし、その後再開発もされただろうから」

飛鷹が生まれたという神田を訪ねたが、彼の家があつた周辺は戦後再開発された地域だったらしく、何の痕跡も残っていなかった。

歩いてくる途中に立ち寄った古書店街などに、多少面影が見られた程度だ。

「どうする？お昼を過ぎたけど、どこかで食事でも摂る？」

「そうですね。それじゃあ、お任せします」

「よし。じゃあとりあえず、靖国通りへ出よう。大通りなら、何か店もあるだろうし」

「わかりました」

2人は通りに出て、どこか食事が出来そうな店を探し始めた。

ところが、数分ほど経ったところ、突如呼び止められた。

「如月千早！」

「「!？」」

いきなり声を掛けられたので、2人はかなり驚きながら振り返った。そして振り返ったその先には、銀髪で長身の女性が1人立っていた。

「やつと見つけました。全く、勝手に行ってしまっからわからなくなつて……て、あら？何時の間に着替えたのですか？と言うよりも、そのこすぶれは何でしょうか？」

飛鷹は面喰つてしまった。銀髪の女性に声を掛けられ、さらにわけのわからないことを言われたのだから当然と言えば当然であった。

「あの、僕は千早と言う名前ではないんですけど」

「そんなバカな。その蒼い髪に顔立ち、さらには胸の大きさ。どこからどう見ても如月千早」そう。四条さんもヤッパリ私の胸のことそう思っていたんですね」

またも後から聞こえてきた声。しかし、その声には淡々としていゝる中に殺意が感じられた。

「な！？如月千早！？」

「ええ。お目当ての本を見つけたから、戻ってきたんですが……さっきの発言は一体どういうことでしょうか？」

「え！？あ、あれはべつに如月千早の胸がないとか、板のようだったか、貧しいとか、成長が絶望的だとか、決してそう言う意味では「それが遺言ですか？」」

千早を見ている3人には千早の後に、何かどす黒い物が見える。いや、見えた。

「あの、怒っている理由はよくわかりますが、関係ない我々は何行っても良いでしょうか？」

このままだと命に関わると思った風間が、さりげなくこの場から離脱しようとする。

「薄情な！お待ちください！私をお見捨てになるのですか！？」

貴音が逃げようとする二人を止める。止めないと命に関わるからだ。誇張抜きで、マジで。

「そう言われると弱いな。帝国海軍軍人たるもの、危機に瀕している女性を放っておくわけにはいきませんね。ええと、そちらの方も少し落ち着いてください」

飛鷹が千早と貴音の間に割ってはいる。

「部外者は口を挟ま……え！？うそ！」

飛鷹の顔を見た途端、それまで怒りに染まっていた千早の表情が崩れ、泣き顔になる。

「あの、どうかしました？」

怪訝に思った飛鷹が尋ねるが、千早はそれに答えることなく呟いた。

「千歳……」

バタン！

「キヤアアア！如月千早！大丈夫ですか！！」

「ど、どうしたんですか！？」

「いきなり倒れた！？きゅ、救急車だ！！」

突然倒れてしまった千早を見て絶叫する2人。

この10分後、如月千早は双海総合病院に搬送された。

同時刻 都内とある路上

「見つけた！ちょっと涼！何こんな所に突っ立っているのよ！しかもコスプレなんかして！」

桜井夢子はようやく見つけ出した同僚である秋月涼のもとへと駆け寄った。今日の彼は、紺色の制服らしきものを着ていたが、夢子はそれをコスプレか何かの類と考えた。

「え！？涼！？」

駆け寄られた男性は、突然女性に声をかけられたことに困惑していた。

「ほら、遅刻しちゃうじゃない。早く行くわよ。たく、最近恋人出来て人気絶頂だからって気が緩みすぎよ！！」

相手が困っているのにも目をくれず、夢子はその腕をガチッと掴む。しかし、涼と思った

「ちょ、ちょっと待ってください！僕は涼じゃありません！」

「バカ言っんじゃないわよ。その女みたいな顔で男離れた声を出せる人間が他にいるわけ」夢子ちゃん！何やってるの！？」

「へ！？」

夢子が振り返ると、そこにはもう1人の秋月涼が。

「え！？……ええ！涼が2人！？」

夢子はあまりのことに腰が抜け、座り込んでしまった。それほどまでに、2人はそっくりだったのだ。

ところが、普段見慣れている格好の方の涼がクスクス笑いながら

夢子に言う。

「いや、僕が2人になったんじゃない、この人は僕の曾お爺ちゃん」

「……は!？」

夢子が意味を理解できず、目を点にしていると、男性は手袋をつけた手を差し出した。

「秋月龍海軍少尉です。お嬢さん」

「……えええええ!!!!????」

夢子の絶叫が周囲に響いた。

## 御先祖様来襲 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

なおギーシュたちの制服姿は、ゼロの使い魔のゲーム「夢魔が紡ぐ夜風の幻想曲」をイメージしてもらえるとよいでしょう。

そして、千早ごめん。

御先祖様来襲 3 (前書き)

千早、ごめん。



### 御先祖様来襲 3

新世界暦2年10月 とある日の午後 日本・東京 平賀家

「ただいま！」

「ただいま帰りました」

「お帰りお兄ちゃんにルイズお姉ちゃん！」

玄関の扉が開き、帰ってきた才人とルイズを才香が出迎えた。

「ただいま才香。曾爺ちゃんも来てる？」

「うん。今リビングでお父さんたちとお話してるんだけど、凄いんだよ！曾おじいちゃん！」

「何が凄いの？ 才香ちゃん」

「会えばわかるよ」

ルイズの間に、才香はニコニコ笑いながらそう答えるだけであった。才人とルイズは意味がわからず顔を見合わせたが、すぐにそのままリビングへと入った。

「「ただい……」」

リビングに入るなり、才人もルイズも固まってしまった。

「君が平賀才人君か？」

「え！？はい、そうです」

「よろしく。帝国海軍少尉の平賀才人だ。君の曾祖父と言うことらしいね。よろしく」

才吉が右手を差し出す。

「ああ、よろしく」

才人はぎこちなくその手を握って握手した。

「そして君が彼のガールフレンドか？」

「は、はい。ルイズ・フランソワーズ・ヴァリエールです。よろしく」

「よろしく……それにしても、本当に似てるんだな」

「ええ、俺もそう思いました」

才人の目の前に現れた曾祖父は、髪型こそ海軍の兵士のためか短く刈り込んでいたが、それ以外は才人と瓜二つだった。海軍士官であるため、海軍の紺色の第一種軍装を身にまとっているが、とにかく顔立ちは才人とそのものであった。

2人が驚くのも無理がないことであつた。

「ね、いったでしょ。ビックリするって」

才香が自慢げに言う。もちろん、才人は頷くしかなかった。

「ああ。本当にビックリした」

「顔も声もそっくり。髪型と背の高さが少し違う位かしら？」

ルイズが指摘する。確かに、顔も声もそっくりだが戦前生まれのせいか才吉の方が心なしか背が小さい。それでも、大した差はないようであった。

そして最後に才吉が自ら違いを教える。

「後は歳だろうな。君は18と聞いたが、俺は21だ」

「あ、俺より3つも年上なんだ。そう言えば、なんか貫禄が付いているよな。何と言うか、死線を潜り抜けたって言うか……」

「まあ、ミッドウェイ沖の海戦で危うく撃墜されそうになったこともあったけどな。そう言う君だって、異世界で随分と武勇伝を作ったそうじゃないか？」

立ち話を続ける2人に、才人の父である才助がすすめる。

「まあ2人とも、何時までも立っていないで座ったらどうだね？これじゃあルイズさんたちが何時まで経っても座れないじゃないか？」

言われてようやく2人は、席に付いた。もちろん、ルイズと才香も席についた。そして異世界の御先祖様との話し合いがようやくスタートした。

同時刻 東京 双海総合病院

「……うーん……ハッ！？ここはどこ？私は誰？」

如月千早が目を開けると、知らない天井が飛び込んできた。

「如月千早、幾らなんでもお約束過ぎます。ちなみにここは双海総合病院です」

「四条さん……病院？どうして私病院に？」

「あなたがあの殿方を見て気絶したからです」

「あの？……あ！」

千早はようやく、ベッドの傍らに2人の青年が立っているのに気づいた。その内の1人が、千早が気絶した原因となった人物だ。

「ようやく目を覚ましましたね。いきなり倒れて心配したんですよ」

「千歳……」

千早が思わず口にする。そんな彼女に、貴音が冷静に言い切る。

「如月千早。その殿方は残念ですが千歳と言う者ではありません」

「え！？」

「僕の名前は如月飛鷹と言います」

「ヒヨウ？」

「はい。飛ぶ鷹と書いて飛鷹です」

「そんな……」

「如月千早さん？」

呆然としている千早に、もう1人の青年が問いかける。

「はい。あなたは？」

「私は海上自衛隊の風間海士長です。こちらにいる如月飛鷹さんは、転移してきた布哇王国とともにやってきた旧日本海軍の方です。残念ですが、あなたの言う千歳さんではありません」

「千歳じゃない……そうよね。千歳は死んだのよね」

「あの差し支えなければ、その千歳さんについて教えていただけませんか？」

飛鷹の問に、一瞬千早は視線を背けた。しかし、すぐに彼のほうに向き直ると喋り始めた。千歳が自分の弟であったこと。数年前に交通事故で死んでしまったこと。そのことが原因で家族が不和となったこと。飛鷹がその千歳と瓜二つで驚いたことである。

「そんなに僕、その千歳君に似ているんですか？」

「ええ。一瞬あの子が生き返ったかと思った位です。生き写しといってもいい位です」

「そうになると、お二人はどこかで血縁があるかもしれませんね」

「けど風間さん。僕に血縁者はいないはずでは？」

「確かにそう通達は受けています……でも、もしかしたら間違いかもしれません。再照会をしてもらいましょう。すぐに横須賀基地に連絡してみます」

電話をするため、風間は病室から出て行った。

そんな彼と入れ替わるように、ドタドタと入ってきた一行がいた。

「ちーちゃん、大丈夫？」

「ちーちゃんが倒れたと聞いて、真美参上！」

「お2人とも、病院内で走るのはハシタナイですよ」

入ってきたのは一組の双子の少女たちと、気品溢れる美女と言っても差し支えない女性であった。

「あれ？ちーちゃん何でコスプレなんかしているの？」

「本当だ。けどセーラー服も良く似合っているよ」

双子、双海亜美と双海真美は自分たちに近い側にいたからだろう

か、先ほどの貴音と同じく飛鷹を千早と間違えた。

「あ、あの。僕は千早さんじゃないんですけど」

「えー、ウソはいけないよちーちゃん」

「そうそう、その蒼い髪」

「その顔立ち」

「「そして胸！」」

「あ、あのお2人とも」

文字通り調子に乗っている亜美と真美に、カトレアが引きつった笑みで声を掛けた。

「何？カトレア姉ちゃん？」

「せつかくいい感じに決まっていたのに」

と文句をブツクサ言うが、カトレアの方は真剣であった。しかし、もう既に手遅れであった。

「それ以上言うと、千早さんが……」

「「え！？」」

2人の目ね前にいる千早と思しき人物は苦笑いしていたが、その後方に鬼がいた。そして、よくよく見るとその鬼の方が如月千早で

あることに、ようやく2人は気づいた。

「あなたたち、覚悟出来ているんでしょうね？」

「ウヒヤアアア！！」

その後、大声を出して暴れた千早と亜美・真美姉妹はすっ飛んできた医師や看護婦達に正座させられたあげく、こっぴどく説教を受けることとなる。

そんな彼女らを見て、飛鷹はボソツと呟いた。

「貧乳の呪いは異世界にもあったのか……」

同日午後 876プロ事務所

秋月涼と桜井夢子は、とりあえず所属している876プロダクションの事務所に到着し、先に到着していた日高愛、水谷絵理と共に涼の御先祖様である龍から話を聞いていた。

「へえ、涼さんの御先祖様なんですか？」

日高愛が秋月涼と秋月龍を見比べて言う。

「うーん、正確には違うんだけどね」

「え！？どうしてですか？」



「確かに名前と姿形は涼さんの曾お爺さんかもしれない。けど、異世界から来たから全くの同一人物じゃない」

水谷絵理が愛の問に答える。

「あ、なるほど」

「僕の本当の曾おじいちゃんは、曾おばあちゃんと結婚してすぐに戦死してるんだ。だけど、龍さんはまだ独身だったよね？」

「うん。兵学校（海軍の士官学校）を卒業してからずっと部隊勤務で、その後戦争が始まっちゃったから、お見合いとか色恋とかしてる余裕なんてなかったしね」

「そう言えば、曾お爺ちゃんは予科練に入ったって聞いたんだけど？」

「それも違うね。僕は中学を修了して海軍兵学校飛行科に入学したから。予科練だと、確かにパイロットを養成するのは一緒だけど、下士官だから」

「うーん、それについてはよくわかりません。そっち系の知識があるわけでもないです」

涼をはじめ、876プロの誰もが戦前の日本軍に関する知識を持ち合わせてはいなかった。そのため、彼が教育制度の違いを言ってもわからない。

ちなみに、龍がいた世界では海軍兵学校に飛行科と言う形でパイロット専門のコースが設けられており、史実の兵学校とは違ってい

るのだが、それもわかるはずがなかった。

「けど本当に涼そっくりね。軍服を着ている涼なんて滑稽だわ」

「軍人て言われても、イメージがわからない？」

夢子と絵理が龍に対して言う。もちろん、本人からしてみればイタイ言葉だ。

「酷いなあ。こう見えてもパイロットなんですよ。戦闘だってちゃんと経験しているし」

「え！？戦ったことがあるんですか？」

「うん。1回切りだけだね。ミッドウェイ沖で。ただその時は先輩にくっ付いていくのが精一杯で、とても撃墜は出来なかったけどね。逆に被弾したし」

「」「被弾！？」「」

「うん。1発が操縦席の後を貫通していてね、あと5cmずれていたら頭が吹き飛んでたよ。さすがに帰ってからヒヤツとしたけど……て、大丈夫？」

龍はまるで「運が良かったなあ」程度の軽い感じで話していたが、聞いているほうは全員がゾツとした寒気を覚えていた。

この辺りは平和な時代を生きている人間と、戦時中に生きている人間との違いだろう。

と、場が凍り付いていると事務所の扉が開いた。

「ただいま……皆して何やってるの？」

「「「お帰りなさい。社長」「」」

「はいただいま……あら、涼にそっくりな人がいるわね。ひょっとして涼の御先祖様かしら？」

「あ、はい。そうです。秋月龍といいます」

「初めまして、私がこの876プロの社長の石川実よ」

「社長、どうしてこの人が涼さんの御先祖様ってわかったんですか？」

愛の質問に、石川は呆れながら返す。

「ニュースでやっているのを見なかったの？ 転移してきた布哇や東露西亞に多数の日本人がいて、実在した人も多くいて、その国籍や扱いが問題になっているって」

「うー、ごめんなさい。テレビはアニメとバラエティしか見ないんです」

愛が情けない答えをする。

「アイドルとしてはもう少し知識をつけなさい。そんなんだからクイズ番組でおバカキャラの烙印を押されるのよ」

「うっー」

「全く……それで、どうしてその涼の御先祖様がうちの事務所に来ているのかしら？」

その間に、龍が答える。

「あ、はい。実はしばらく日本に滞在することになったんですが、今日と明日は特別に休暇をもらえまして、涼の家に1泊させてもらうんです。それで、時間に余裕もあるから、涼がどんな仕事をしているのか知りたいと思って、無理を言って付いてきたんです」

「今日は夢子ちゃんのラジオ番組の録画ですから、見学だけなら大丈夫だと思って」

「あらそう……ティンと来たわ！」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「ねえ、龍さん」

「はい？」

「良かったらそのラジオ番組にゲストとして出ない？」

「「「「「「「「「「「ええ！！？？」」」」」」」」」」」」」」

### 御先祖様来襲 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ちなみに、龍が入った海軍兵学校飛行科の設定は独自の物で、原作としている「双頭鷲の紋章」にもないので悪しからず。 原

御先祖様来襲 4（前書き）

丸々千早と飛鷹の話になりました。

## 御先祖様来襲 4

新世界暦2年10月 とある日の夕方 双海総合病院

「確認が取れました」

千早と飛鷹の身元確認のため病室を出ていた風間海士長が千早のいる病室へと戻ってきた。

「どうやら飛鷹さんは如月千早の先祖で間違いないようです」

その言葉に、千早と飛鷹が顔を見合わせた。

「けど、厚生労働省は僕の血縁はいないって」

「ええと……その件なんです。どうも厚労省の役人がわざとそう報せたようでした」

「どう言つことですか!？」

飛鷹が声を上げる。どうしてお役所が嘘を吐いたのか理解出来ないらしい。他の面々も顔を見合わせている。

「これには如月千早さんのプライバシーに関わる問題なので、千早さんと飛鷹さん以外は部屋からでていただいてよいでしょうか?」

「えー」

「しょうがないなー」

「「わかりました」」

亜美真美、そして貴音とカトレアらは病室から一端外へと出て行った。

「では、話の続きを。ちょっと聞きにくいのですが、千早さんは家庭内に複雑な事情を抱えておられるそうですが、間違いありませんか？」

風間の問に、千早が視線を逸らす。

「どうやら間違いないようですね」

「そんなことまで調べられているのですか？」

「まあ、どの程度まで調査がされたのかは私にもわかりませんが、それはともかくとして、どうやらそれが原因らしいです」

千早は俯いた。一方飛鷹は全く話についていけない。

「一体どう言うことなんですか？この人……千早さんの家族に何かあるって言うんですか？」

「それは「私から話します！」」

風間が話をしようとしたのを、千早が制した。

「千早さん？」



「他人に言われたくありません。だから私の口から言います……私の家は、壊れています」

「壊れている？」

「さっき言った千歳と言うのは、私の弟です。歌や音楽が大好きで、私たち家族全員から愛されていました。そしてあの子を含めて、あの事故が起きるまで私たちの家族は普通に幸せな家族でした。しかし、あの子が交通事故で死んだことで、私たちの家族は壊れてしまったんです。両親の仲は嫌悪になり、また私との関係も冷え込んで……籍こそ一緒ですが、事実上私の家族はバラバラなんです」

飛鷹の顔に哀しみの色が浮かぶ。自分の子孫が家庭崩壊を起こしていると言え、そうなるだろう。

「どうしてそこまで？ 確かに、家族の死は悲しいことでしょうけど、どうしてそこまで酷いことに？」

「それだけ、私たちはあの子を愛していたんです。そして、あの子が死んだとき、私たち家族の誰もがあの子が目の前で事故に遭うのを防げなかった。だから……」

「自分を責めている？」

飛鷹の問に、千早は小さく頷いた。

「けど、それと飛鷹さんのこととどう関係が？」

「飛鷹さんとの面会については、まずあなたの御両親に連絡が行ったそうなんですが、どうも断られたようなんです。そして調査の結

果、あなたの家庭の状況がわかった。わざわざ崩壊した家庭の人間に会わせたいなんて思わなかったんでしょね。もしかしたら旧帝国海軍の人間に、現代日本の悪いイメージを持たれることを嫌がったのかもしれない。だから血縁者はいないなんて通告したのでしよう。狭量な官僚が考えそうなことです」

「でも、確かに今の私の家族は、あまり人様に見せられた関係ではありません。以前よりはマシになったのでしょうけど、冷え込んだままなのは変わりありませんから」

千早はそう言うと、また俯いてしまった。そんな彼女を、飛鷹はしばらくジッと見ていた。

「……千早さん？」

「はい？」

千早の暗い表情とは対照的に、飛鷹は微笑みながら言った。

「僕に会わせてもらえませんか？」

「え！？」

翌日 都内某所墓地

如月飛鷹は一つの墓の前で線香をあげ、合掌していた。目の前の墓には、如月家之墓の文字が刻まれている。そして彼の後には、千早とその両親が立っていた。

飛鷹は帽子を被りなおす（この時も彼は帝国海軍の水兵服を着ていた）と、千早たちの方へと振り返り頭を下げた。

「彼に会わせていただき感謝します」

「どうして、千歳の墓に？」

千早の父親の質問に、彼は笑みを浮かべて答える。

「だって、彼と僕は血が繋がっているんでしょ？ だったらお線香を上げる位してあげないと」

「失礼だが、君は違う世界の人間だ。私たちとは何の関係もない。なのにどうして？ しかも我々まで呼び出して？」

「もちろん、話がしたかったからですよ。皆さんの家庭の事情は昨日聞きました。亡くなった千歳君についても……よほど彼を愛していたんでしょうね」

飛鷹は先ほど初めて会った時の千早の両親の反応を思い出した。千早が彼を見た時以上に驚かれた。いや、驚かれるという表現は妥当ではない。

千早の母親など「千歳が帰って来た！」と言って泣き出した位である。

「だけど、だからって何時までも彼の呪縛にしがみつくべきでもないと思いますよ」

「君に何が分かる!？」

千早の父親が声を荒げた。

「もちろん、僕はあなたの方の全てをわかるわけじゃありません。けど、親しい人が目の前で死ぬ悲しみは知っています」

「それはどう言うこと？」

千早の問に、飛鷹は哀しい目をして語り始めた。

「僕には海兵団に入ってから親友がいました。同郷出身で、互いに音楽が好きで。そして、同じ駆逐艦に配属になりました。親友として戦友として、彼となら一緒に生き残れるって思っていました。けど、彼は死にました。僕の目の前で……僕をかばって。敵機の機銃掃射を受けて」

「……けど、それは戦争だから」

「戦争だから、そうかもしれないね。けど、戦争だろうとそうでなかつたら、大好きだった人が死ぬことに違いがあるんじゃないかな?」

「それは……」

「違いなんてないでしょ?……だから僕も悩みました。どうしてもあの時彼が死んだのか。どうしても助けられなかったのかって……」

「「「「……」」」」

「けど、考えた所で彼が帰って来るわけじゃありません。そしてどんなに忘れようとしても忘れられるわけがありません。だから、僕はそのことにしばらくられないようにしようと思いました。もちろん、彼のことは忘れません……そして彼を助けられなかったことが罪なら、甘んじてその罪の十字架を背負って生きよう。そう考えています」

「それであなたはいいの！？苦しみを背負って生きるのよ！」

そう叫ぶように言ったのは、千早の母親だ。

「確かに辛いことです。でも、そうでもしないと死んだ友人に対してあまりにも失礼じゃないですか！だって生きている人間にできるのはそれくらいですから。だから僕は罪から逃げようとか、解放されたいなんて考えません。それが僕なりのケジメです」

「……」

千早たちは何も答えなかった。

「今日はお付き合いさせて申し訳ありませんでした……千早さん」

「はい」

「あなたのような子孫がいるのなら、この世界の僕は満足だったと思いますよ。もっと自分に自信を持って……じゃないと千歳君も喜びませんよ」

「……ありがとう」

「で「待つて！」

引き止めたのは千早の母親だった。

「はい？」

「あなたはこれからどうするの？」

「……一応海軍に戻ろうと思っています。そこ以外に、今の僕には居場所がありませんから」

「そうなの」

「明日にはハワイに戻ります。どうか皆さんお体に気をつけて。それじゃあ」

飛鷹は千早たちに敬礼をした。

そして彼は1人墓地の出口へと歩いていった。

「良かったのかい？あれで」

入り口には、案内役の風間が待っていた。

「はい。あとはあの人たち自身の気持ちです。僕がとやかく言う必要もないでしょう」

「けど、君が身を寄せられるのはあの人たちだけだよ」

「そうかもしれませんが、僕にはそんな図々しいことできません。」

この世界の如月飛鷹は既に死んでいるんですから」

厚労省の調査によれば、如月飛鷹は間違いなく如月千早の父方の直系の先祖だった。ただし、彼は戦争を生き延びたものの、戦後早い段階で病死していた。だから千早どころか、千早の父親にもその記憶がない人物であつた。

「じゃ、横須賀へ行きましょうか」

「わかった」

と2人が歩き出そうとした時。

「「待つて!!」」

「「?」」

翌日 横須賀軍港

「それじゃあな如月!」

「こつちの日本でもがんばれよ!」

「うん、皆も元気で!」

如月飛鷹は、帝国海軍軍人としての道を選んでハワイへと帰還する中間たちを握手し、見送る。

汽笛を鳴らして、帝国海軍籍の巡洋艦や駆逐艦が次々に横須賀の港から出港していく。

「結局こうなるか」

飛鷹の後から、風間が声を掛ける。

「僕の居場所が出来ましたから……」

「で、如月千早の家に？」

「ええ。まだどう言う風になるかはわかりませんが、恐らく養子として入ることになりそうです」

「軍人もやめるのかい？」

「それはまだ決めていません。けど、千早さんのお母さんからは「あなたまで失いたくはない」と言われました。そう考えると、危険の多いこの仕事を続けるのかも考え物ですね。せつかくだから、好きな音楽でもやろうかなあなんて考えています」

「前向きだね」

「それが取り柄ですから」

「ま、その前に日本の生活に慣れないとね」

「それについては、如月さんのお宅に今日から住むことになりましたから」



「へえ、見事に修復したんだ」

「見事からは分かりません。あの人たちが新しい道を歩もうとしているのは間違いありませんけど、ちゃんとその道を進んでいけるかは、これからですから」

「まあがんばれよ。俺も力になるから」

「ありがとう」

如月飛鷹が正式に海軍を除隊するのはこれから1カ月後のことだ。彼はその後日本政府から支給された学費で高校を卒業する。

子孫の千早と違い、歌の才能はなかったが彼には音楽を弾いたり作ったりする才能はあった。特に、歌い手の気持ちを汲み取って詩を書き、曲を作るその腕は武田蒼一の再来とまで言われることとなる。

しかし彼自身にとって喜ばしいことだったのは、異なる日本において自分の居場所を新たに作ることが出来たこと。そして、その居場所となった家族がかつての幸せな関係を取り戻したことだったのかもしれない。

#### 御先祖様来襲 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

私の住んでいる地域は愛知なので、アイマスの放送が1週間遅れなのですが、第20話の内容が千早回になるそうで……どうしてそうなる！？

## 御先祖様来襲 5

新世界暦2年11月午前 神奈川県厚木飛行場

転移後の在日米軍解散（自衛隊への編入と自治領軍への分離）によって、日本国内に点在していた在日米軍基地は軒並み日本へと返還されている。

これにともない、長年の懸念であった沖縄の普天間基地（ただし閉鎖後土壌汚染が判明したため、除染作業中）や沖縄本島北部の演習場が民間へと返還され、この結果春川内閣の支持率が沖縄を中心に上がると言うオマケがついている。

一方で本土にあった三沢基地や横田基地、厚木基地、横須賀海軍基地、岩国基地をはじめとする各種施設も各自衛隊へと引き継がれている。

こうしたことから、現在各自衛隊の航空隊では基地とそこに常駐する航空隊の再編が進められている。もっとも、騒音問題などもそれに伴ってぶり返されており、防衛省と各自衛隊の悩みの種になっている。

現在各地の航空基地は、軒並み飛行場周辺が住宅地化しており、騒音の大きい軍用機の運用にははつきり言って適さないが、こればかりはどうにもならないことであった。まさか万単位で民間人を強制移住させるなど出来ない。

それはともかくとして、海上自衛隊厚木基地は以前と変わらずP3CやP1哨戒機の基地として使用されていたが、今後海上自衛隊

がレシプロ艦載機（実際はターボプロップ機となる）を運用する可能性が出てきたため、その時にはそれらの基地となる予定であった。

そして先日横須賀にやってきた旧海軍の2隻の空母から発進した陸海軍の航空機は、この厚木基地に着陸し、乗員達も一時的に厚木基地の兵舎に入っていた。

才人の御先祖である平賀才助もその1人であった。彼は課業がある日は基地に、そして休みの日には東京の平賀家へ遊びに行くのが通例となっていた。

しかしこの日は、才人の方がルイズと一緒に厚木基地へとやって来ていた。

「よう才人、いらっしやい。待ってたよ」

営門の所で待っている2人を、才吉が迎えに来た。もちろん、才吉は帝国海軍の1種軍装を着込んでいる。対して才人とルイズは晩秋らしい、多少温かい今時の若者の格好をしており、それぞれの立場や時代の差を感じさせる光景だ。

「こんにちは、才吉」

「失礼します」

既に出会ってから1ヶ月以上も経過しており、3人は気軽に声をかけあう。才人と才吉は血縁的には曾祖父と玄孫と言う関係であるが、歳がわずかしかなかったりで、呼び捨てで呼び合う仲になっていた。

「今日わざわざ来てもらって悪かったな」

「こつちこそ、自衛隊の基地に入る機会なんて滅多にあることじゃないから」

「けど、何で私まで」

「そりや曾孫の嫁さんを仲間たちに見てもらいたいからだよ」

「!？」

途端にルイズの顔が真っ赤になる。

「ハハハ。まあ、それもあるけど。トリステインについてもっと知リたかつたつてのもある」

「それって、この間言っていたトリステインからの引き抜きのこと？」

才人の言葉に、才吉が頷く。

日本への帰属を拒否した帝国海軍であったが、彼らを引き受けることとなった布哇王国にしろ、東露西亞帝国にしろ、仮想敵（ソ連とアメリカ）が消えたため、余計な軍備はいらない、むしろ余っている位であった。

そのため、帝国海軍としてはなんとか働き口を見つけねばならなかったが、幸いにもロクシェやサクラス、トリステインが受け入れ先として名乗りを上げていた。

特に、近代的な軍備を殆ど持たないトリステインにとって、日本に比べれば数十年遅れとはいえ自分たちの軍備から見れば100年以上は進んでいるのだから魅力的であった。陸海空3点セットで揃っているし。

そのためトリステインが勧誘に一番熱心であった

ただし、トリステインの近代化がはじまって1年も経っておらず、またこれまでの国の内情から、人気は今一つであった。

「それぞれ。トリステイン政府からうちの上層部……つまり帝海のお偉いさん達に、傭兵としてこないかってお誘いがあったんだ。上層部はかなり乗り気らしいけど、何せあまり言い噂聞く国じゃないからな。俺たちとしても判断に困るってわけよ。この間説明に来た目つきの鋭い大使の姉ちゃんも、型通りの説明しかしていかなかったし」

（ああ、エレオノールさんね）

（お姉様に聞かれたらただじゃすまないセリフね）

「どうかした？」

「「いいえ、何も」」

「ならいいけど。まあ、そう言うわけでトリステインで言う国について俺や仲間たちに話して欲しいんだ」

「まあ、それ位だったらお安い御用だけど」

「悪いね。それじゃ、行こうか」

「行くってどこに？」

ルイズの言葉に、才吉は微笑みながら返す。

「俺たちの仲間の所にだよ」

同時刻 基地内の別室

「すいません、迷惑かけちゃって」

「いや、いいんだよ涼。上の方が許可したんだから。まあ、ラジオ……じゃなかった。テレビジョンの取材なんて受けたことないから、多少は緊張しているけどね」

秋月涼と秋月龍は互いに苦笑いしながら言う。その表情は生き写しと言うか、コピーしたかのように似ているので、ある意味滑稽な光景だった。

「涼がまるで2人いるみたい。服装でしか区別できないわ」

「本当にビックリする位似ていますよね。声に喋り方、仕草まで」

桜井夢子と日高愛の2人も困惑気味だ。

今日涼たちが厚木基地にやってきたのは、テレビ番組の取材のためだ。

先日龍が876プロを訪れたさいに、石川社長は彼に番組への出演を依頼したが、結局その時は予定やら軍の許可が降りてないやらと言った理由でお流れになった。

しかし。

「涼が2人いるなんて、これは絶対に受けるに違いないわ！」

と言い切った石川は、なんと龍がいる厚木基地へと取材を申し込んだ。すると、以外にもあっさりと許可が出た。

こうして、涼たちは厚木基地へと取材のために入ることが出来た。もちろん、撮っては行けない所などもあるし、帝国海軍の軍人たちはテレビ取材など受けたこともないから、海自と海軍側から案内と監視の人間が付くと言う条件付である。

ちなみに番組自体は夢子の番組で、今回涼と龍がゲスト扱いになっている。

それでは愛の役割が余るわけだが、彼女の場合お目当ては別にあった。

「皆お待ちせ。それじゃあ、行きましょうか」

担当者と挨拶や打ち合わせをしていた石川社長が戻ってきた。その隣に、女性自衛官が1人と帝国海軍の制服を着た男が1人ついていった。彼らが案内役のようだ。

「本日皆さんを案内する海上自衛隊の新谷紗英二尉です」



「同じく、案内役の帝国海軍大尉の三田六郎です」

2人が敬礼をする。

「秋月涼です。よろしくお願いします」

「桜井夢子です。よろしく」

「日高愛です。よろしくお願いします」

「じゃあ、始めましょう」

数時間後

「トリステインで一体どんな風に思われているのかしら？」

ルイズは疲れた表情で言った。

「仕方が無いよ。魔法とかそんなこと言われても実感湧かないだろうし。特に戦前の人なんだから」

「だからって！まるでお化けや妖怪だけしかいないみたいに思われているのは我慢ならないわ！」

ルイズがついに感情を爆発させ、才人に怒鳴り散らした。

2時間ほど、才人とルイズは才吉の同僚達にトリステインの説明

をしていたのだが、やはりと言おうかトリステインに対する彼らの認識はかなり間違ったものであった。

「魔女の婆さんに食われる」のを皮切りに「吸血鬼が跳梁跋扈している」「妖怪の巣窟」「人間は悪い魔法使いに虐げられている」など、決して間違っているとは言えないが、かなり内容が誇張された認識を持たれていた。

「まあまあ。あいつらも悪気があつて言っただんじやないんだ。半分以上は冗談や単なる想像で言っただけだから。最後の頃にはちゃんと納得していただろう」

才吉が2人の間に入り、場をとりなす。

彼の言うとおり、才吉の仲間たちは最初こそトリステインに対して間違った認識を持っていたが、2人の話を聞いて多少なりとも正しいトリステインの姿を認識してくれたようであった。

「それはそうだけど」

「それに、2人の話を聞いて行く気になった奴もいるみたいだし」

「確かに。シエスタの曾爺さんは行く気満々で言う感じでしたね」

シエスタの曾爺さんとは、才吉の同僚である佐々木武雄海軍少尉に他ならない。

「俺も行こうかなって思ったよ。まだまともな空軍がないなら、俺たちが好き勝手出来そうだしな」

才吉が不敵な笑みを浮かべる。

「何か動機が不純なような」

「ま、そう言うな才人……そう言えば、お前は高校を卒業したらトリスティンへ行くんだったよな？」

「まだそこまでは決めてないけど、戻ろっかなとは思っているよ」

「そうかそうか。ところで、2人はまだ時間ある？」

「あるけど」

「だったら食堂で何か食べていけよ。時間も時間だし。それにせっかく来たんだから、後で格納庫でも見せてやるよ」

「お、面白そうじゃん！」

「別に飛行機には興味ないけど、お昼は食べたいし、案内してくれるって言うなら見ていこうかしら」

「けど大丈夫なのか？いきなり食堂なんか行っても？」

「多分、2人分位ならなんとかかなると思うよ。とりあえず行くだけ行こうぜ」

才吉に連れられて、2人はそのまま基地の食堂に直行した。

すると、食堂内が妙に騒がしかった。

「何かしら？」

「テレビの撮影かな？」

才人が食堂内にカメラやライト、マイクの姿を認めてそう予測した。

「そう言えば、今日テレビジョンの撮影があるとかミロクの大尉が言ってたな」

「一体どんな番組なんだろう？」

「何でも、女が来ているとか聞いてないけど」

「ふーん」

アイドルに友人がいるせいか、最近才人はこの方面への興味が小さい。

「それよりも食事にしましょうよ」

「そうだな」

「俺たちには関係ないしね」

才人たちはテレビ撮影には興味も示さず、食堂へと入った。ただし、才人たちが食事をするのは才吉が中尉（先日昇級した）であるため、幹部食堂（士官食堂）になる。

才吉が調理員に2人分の食事を手配できるか頼む。すると。

「大丈夫だつて。今日はお客さんが多いから多目に材料を仕入れてあるんだつてさ」

「なら安心ね」

「じゃ、早く食おうぜ」

と、3人が席に向かおうとした時。

「あれ、才人さんにルイズさん。何やっているんですか？」

「へ！？」

2人が振り返ると、そこには1人の少女が立っていた。

「「あ、愛！？」」

御先祖様来襲 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 御先祖様来襲 6

新世界暦2年11月午後 神奈川県厚木飛行場

「まさか才人とルイズさんが来ているとは思いませんでした」

「俺も涼たちとこんな所で会うとは思わなかったぜ」

平賀才人と秋月涼は、まさかこんな所で鉢合わせするとは夢にも思わなかっただけに、顔を合わせた瞬間はもちろん驚いた。

「けど、涼の曾爺ちゃんも海軍のパイロットだったのなら納得だな」

「しかも、才人の曾お爺さんの部下だったなんてね」

2人は不思議なめぐり合わせと縁に、不思議なものを感じずにはいられなかった。

それは2人の曾祖父たちにしても同じであった。

「平賀先輩の子孫と僕の子孫が知り合いだなんて夢にも思いませんでした」

「俺もだよ秋月。奇妙なことが世の中あるもんなんだな」

秋月龍海軍少尉と平賀才吉海軍中尉も、今回の出来すぎた出会いには驚き、そして不思議なものを感じていた。

一方女子の方はと言えば。

「ふーん。ルイズも大変ね」

「夢子もこんなところで仕事だなんて、大変ね」

ルイズと涼と一緒にやって来た夢子の間には、どこかでピリピリした空気が漂っていた。同族（ツンデレと言う意味で）嫌悪と言う奴なのだろうか。

そんな空気を気にせず、ニコニコ笑いながらルイズに会えたことを喜んでいるのは愛だ。

「けどルイズさんに久しぶりに会えて、私とっても嬉しいです」

「フフフ。愛は相変わらず元気ね。まあ、お父さんに久しぶりに会えるんだから仕方が無いわね」

夢子と涼は仕事のために厚木基地に来ていたが、愛の場合は父親に会うためにここに来ていた。

愛の父親である日高正道一等空佐は、階級を見ればわかるように航空自衛官。しかも現役の戦闘機パイロットだ。

もつとも、駐ロクシェ駐在防衛官や現地における航空機搭乗の経験が買われて、最近は新型機や各国から試験輸入された航空機テストパイロットをやっているらしい。

ちなみに、今彼らは格納庫の前の駐機場にいる。ここで涼や夢子は龍や基地にいるパイロット、整備兵にインタビューを行い、先ほどそのシーンの撮影が終わったばかりであった。



才人とルイズ、そして愛はその撮影を見学名目で見ていた。3人ともそれぞれ関係者であるために、出来ないことではなかった。

そしてここからが番組のとりとも言っべきシーンの撮影であった。それが涼と夢子による旧海軍機への体験搭乗であった。

「それじゃあ、秋月君と桜井さんは飛行服に着替えてください!!」

案内役の自衛官、新谷二尉が2人を呼んだ。

「はい!!」

「いいなあ、二人とも飛行機に乗れて」

愛が2人を羨望の眼差しで見る。

「愛は飛行機に乗ったことはないの？」

「いえルイズさん。乗ったことはありますよ。ただ、2人だけが乗れるのが羨ましくて」

「あ、そう言うこと」

（ふーん。意外とお茶目なのね……まあ、恋人が他の女とだけ飛行機に乗せてもらえるのも不愉快だろうし）

ルイズは愛が口にできなかったこと、嫉妬の部分までちゃんと読んでいた。

「ふーん、嬢ちゃんも飛行機に乗りたいのかい？」

と、突然後から声を掛けられた。見ると、何時の間に話を終えたのか龍と才吉、さらにその後には才人と涼がいた。ちなみに声を掛けたのは才吉のほうだ。

「えー？あ、はい。乗りたいですー！」

「そうかそうか。だったら乗せてやるよ」

「ええ！？」

「いいんですか、平賀先輩？」

龍が才吉を心配そうに見つめる。だが、才吉の方は余裕綽綽だ。

「大丈夫だよ秋月。2機も飛ぶんだから、さらに1機や2機飛んでも問題ないって。上には訓練か試験飛行とでも報告しておくさ」

「いや、そうじゃなくて」

「勝手に民間人乗せて良いかってことだろ？」

「そうそう」

才人の言葉に、龍が頷く。

「大丈夫大丈夫。整備の方もバッチリだし。あ、けどミロクの親分にだけは報告しておくか。まあ、親分もそう言うのが好きな人だから、大丈夫だろ」

（それでいいのかな？）

5  
分後

「ハイ、OK 出ました」

「ムジで!!?」

「と言うわけで喜べお嬢ちゃん。そして才人にルイズさん。君たちも乗れるぞ」

「やっ  
たー！」

と愛は無邪気にはしゃぐ……が！？

「ちよつと待った！」

「何で私たちまで!？」

「この際だから1人や2人増えても大丈夫だと思って……別に乗りたくないならいいけど」

「いや、別に嫌とは言わないけど」

⌈  
⋮  
⌋

「どうしたルイズ？」

「ふえ！？な、何でもないわよ！！」

すると、2人を見ていた才吉がニターツと笑う。

「もしかして才人と一緒じゃないと嫌とか？」

「「な！！！？？」」

「だったら安心しろ。君たちには素敵な機体を用意しておくからな。  
ハハハ……」

（（嫌な予感しかない））

とその場にいる全員そう感じずにはいらなかった。

「まあ、その前に着陸する機体が来てからだけだな。それまでに全員着替えて厠行っておけよ。上空は寒いからな」

「「「「……」」」」

更衣室へと移動した一行は、そこで空を飛ぶための装備に身を包む。才吉が言ったように今が冬であることに関係なく、上空は寒くなる。そのため、飛行服を身につけなければ危険であった。特に今回は第二次大戦時代の機体に乗るのだから尚更であった。

もちろん、着替える前に自衛官たちから着方の説明や万が一不時着した時に備えた簡単な講習を受けている。

それが終わって、飛行機に乗るメンバー全員が着替えたわけだが

……

「うー、胸のところがキツイです!!」

「我慢なさい。女性用は私のしかないそうだから」

愛の言葉に、夢子が呆れ気味に言った。

全員飛行服に着替えたのであるが、航空自衛隊の女性用パイロットスーツは生憎と夢子1人分しか調達できず、やむなく愛とルイズは男性用でサイズの小さいものを着せられた。

身長のはうはそれでなんとかあったのだが、愛の歳に似合わず（彼女は現在15歳）成長した体には、少々きつい様であった。

そしてそんな彼女の様子を見て、ルイズは不愉快を通り越してあからさまに怒りの感情を見せた。

「愛。それは私に対する宣戦布告と受け取ってもいいのかしら？」

「ご、ごめんなさい!! そう言う意味で言ったんじゃないやありません」

そんな遣り取りを、才人は醒めためで見つめていた。

「あいつここまで来て何をやっているんだか？ まあ、それは置いておくとして。涼意外と飛行服が似合ってるじゃないか」

「ありがとう。そう言う才人も格好いいよ」

「ダサイ旧海軍のやつなのがちょっとだけどな」

才人と涼は、才吉から「お前らはこれ着ろ」と旧海軍の飛行服を渡されていた。

「ダサくて悪かったな」

2人の側には、同様に飛行服姿となった才吉と龍もいた。

「つべこべ言つてないで、着替えが終わったなら早くいくぞ」

「はい」

「女性陣もいいかな」

「大丈夫です」

「よし、じゃあ行こうか」

一行は外へと出るが、涼と夢子はここから撮影に戻るため他のメンバーとわかれる。また彼女らと一緒に乗り込むこととなった龍もここでわかれた。

涼と夢子は出発前に、それぞれのヘルメットに撮影用のカメラを取り付け（このために涼は飛行帽子を交換した）、さらに機内を撮影するための小型カメラを渡された。

一応彼らはテレビ番組の撮影としてここに来ている。

「僕たちが乗るのはあれだよ」

「え！？あれですか！」

夢子は少しどころか、驚きの声を上げた。龍が指差す先でエンジンを廻しているのは、上下に2枚の羽根を持つ所謂複葉機であった。

何となく何十年も昔の映画に出てきそうな感じがした。

「そう。93式中間練習機。僕たちは「赤トンボ」て呼んでいる機体だよ」

「て、何ですかあれ！吹きさらしじゃないですか！？」

夢子の言うとおり、「赤トンボ」のコクピットには窓ガラスがなく吹きさらしであった。見ているだけで寒そうだ。

「仕方がないんだよ。あれしかなかったんだから」

「そんなー……て、涼の方はちゃんとした飛行機じゃないですか！」

夢子がさらに声を張り上げる。

涼が乗り込もうとしているのは、車輪が翼に入らない古いタイプの機体であったが、少なくとも操縦席に窓はついていた。ちなみにその機体は99式艦上爆撃機であった。

「あ、その……テレビ局の人からこれで行って欲しいとか」

「私はイ○トじゃない！！」

それはアイドルとしての、彼女の精一杯の叫びであった。

その後テレビ局の人間に文句を言ったり、涼と変わってほしい（涼はいいと言ったのだが）と散々訴えたが、「龍さんと一緒のショットの方が絵になりますし、より古い機体らしさが出るので、がんばってほしい」と押し通されてしまった。

夢子の場合、最近アイドル活動に復帰したと言う負い目があるため、それ以上は強く言えず、渋々マフラーをしっかりと巻いて、重防寒装備で乗りこまざるをえなかった。

一方才人たちはと言えば。

「俺たちはこれに乗るぞ」

才人とルイズが才吉に案内されたのは、見慣れた零戦のように緑色に塗られた機体であった。しかし、零戦よりも長いキャノピーが印象的である。

また車輪は翼に折りたたむのではなく、出っ放しのようであった。

「これは戦闘機じゃなくて、確か「攻撃機だよ。正確には97式艦上攻撃機2型だよ。3人が都合よく乗れて空いている機体で、丁度良くあったのがこいつだからね」

才人の言葉を遮るように、才吉が説明する。

「戦闘機じゃないんだ」



戦闘機に乗れると期待していた才人としては、少しばかりガツカリである。

「3人乗れる戦闘機なんて「月光」か「天雷」しかないからな。二つともまだこっちに持ってきてないから、今はこれで我慢しろ」

「わかったよ」

才人にはそれ以外言いようがなかった。

ルイズはその話の内容についていけないため、聞き流してそのまま乗り込んだ。

なお余談であるが、この機体のアメリカ軍コード名はメイベルだ。

そして残る愛とは言えば。

「これに乗るんですか!？」

「そうだよお嬢さん」

愛の機体のパイロットは、才吉たちの上司である三田六郎大尉が勤めることとなった。そして乗る機体は、一種零戦を思わせる均整のとれた複座機であった。

「零式練習用戦闘機と言う、本来は練習機なんだけど。二人乗りだから。今日はよろしく」

「よろしくお願いします！」

こうして愛も機上の人となった。

御先祖様来襲 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

実は最初涼と夢子は同じ機体に乗せるつもりでしたが、変更しました。

## 御先祖様来襲 7

新世界暦2年11月午後 相模湾上空

「うー。寒い」

「桜井さん、大丈夫ですか？」

夢子の飛行帽子と一体となっている機内通話機越しに、龍の声が伝わってくる。

吹きさらしの「赤トンボ」の操縦席にはビュービューと冷たい風が流れ込み、飛行服を着込んでいても寒い。そのため夢子は飛び立つてからずっと座席内に縮こまっていた。

「はい、大丈夫です」

普段から強気な彼女はそう返すが、実際の所大丈夫とはいいかねる状況であった。

「寒いだろうけどがんばってください」

「うう。龍は寒くないの？」

「もちろん寒いことは寒いけど、もう慣れたよ」

龍は涼そっくりな外見をしているが、腐っても帝国海軍航空隊の戦闘機パイロット。当然「赤トンボ」で訓練を行なっているし、また戦闘機に乗ってからはより寒い高高度飛行なども体験している。

これで寒くて飛べませんなどと言っていたら、とてもやってはいられない。

外見は似ていても、やはり全く違う人生を歩んだ差はこうした形で現れている。

「私にはとても無理そう」

「けどそんなんで大丈夫なの？ 後からカメラを乗せた機体が追いかけてきているけど」

「うう、そうだった」

夢子の被っているヘルメットにはカメラが設置されており、彼女の目線と彼女の顔を映し出すようになっていた。

しかしながら、それだけでは不十分なので外から機体を撮影するためにカメラマンとカメラを乗せた機体（98式直協機）が後続して飛んでいた。

案の定、すぐにその機体から無線で「夢子ちゃん。顔を見せない」と画にならないでしょ」と言うお叱りの声が聞こえてきた。

「仕方が無いわね。嫌だな」

「だったら顔を出したらすぐに下を見るといいですよ」

「下？」

「そう」

夢子は思い切って操縦席から顔を出し、眼下に広がる光景を眺めた。

顔には思いっきり風が当たり、ゴーグルとマフラーをつけていても辛い。しかし、彼女の目には眼下に青々と広がる相模湾が広がっていた。

「うわー……」

夢子だって飛行機に乗った経験位ある。しかし、直に風を切って空を飛んだ経験は今回が初めてだ。確かに風は冷たく、寒い。しかし風を感じながら飛び、そしてカメラのファインダーや窓ガラス越しではなく、直接その目で眼下の光景を眺めてみると、違ったように見えた。

「どうです？ 風を受けて空を飛ぶのも中々なものでしょう？」

「ま、まあ悪くは無いわね。寒い中飛んだんだから、これくらい綺麗じゃなきゃ損だわ」

素直に綺麗とは答えないところが彼女らしい。そんな彼女の声を聞いて、龍は少々苦笑してしまう。

「そうですね」

と、そこへ後方のカメラマンから新しい指示が飛んで来た。「何か派手なことをしてもらえない？」

「派手なことって、一体何をすればいいのよ？」

するとカメラマンからは「パイロットの方に任せます」と言う返事がきた。つまり、何をするかは龍に任せるということだ。

「うーん。「赤トンボ」はどんな飛行でも出来るけど……桜井さんは酔いやすいタイプですか？」

ちよつと思案した後、龍は突然夢子に問いかけてきた。

「別に乗り物酔いとかはしないけど……ちよつと待って！一体何を  
する気！？」

夢子は嫌な予感を感じずにはいられなかった。そしてそれは現実となる。

「宙返りとかロールですか？」

龍はアクロバットをする気のようにだ。

「ええ！？大丈夫なの？」

「だから機体と僕は大丈夫ですけど、桜井さんは大丈夫かって確認  
しているんです」

夢子は知らなかったが、「赤トンボ」は曲技飛行も出来る優秀な運動性能を持つ練習機である。また龍は戦闘機パイロットであるから、急旋回や横転、宙返りなどは朝飯前である。

となると、問題は夢子である。ジェットコースター並みかそれ以上のGが掛かるのであるから、下手すれば失神する。

しかしながら、夢子はそんなこと知らなかった。もちろん、彼女も飛行機がアクロバットする光景位は目に浮かんだ。

「うーん……うん！多分大丈夫よ。ジェットコースターに乗っても大丈夫だし」

夢子はこれまでの経験からそう判断した。

「了解。それじゃあ、後の機から距離を取ってから始めるので、ベルトや帽子の固定を再度確認してください」

「わかったわ」

と気軽に応じる夢子。

安全のためにカメラマンが乗る機体と一定のを取ったところで、龍が合図する。

「それじゃあ始めます！」

「OK！」

次の瞬間、夢子から見える世界がグルグル回った。

「まずは宙返り……連続横転……急上昇……急失速……錐揉み……回復しての急上昇……さらに急降下。やるじゃねえか、秋月のやつ」



空中でアクロバットを行なう「赤トンボ」を見ながら、99式艦爆を操縦する佐々木武雄少尉は笑う。

一方後席の涼は少々心配そうだ。

「夢子ちゃん、大丈夫でしょうかね？」

「どうだろうな。慣れたパイロットならアレ位でへこたれはせんだらうが、女の子か……ちよつとやりすぎかもな」

そんな2人の心配はすぐに現実のものとなる。

「こちら秋月！桜井さんが失神したみたいです！！」

龍の叫び声が無線機越しに2人に届く。

「やっぱり」

「手加減しろよ」

と2人が呆れている間に、今度は一番階級が高い三田六郎大尉（愛とともに零式練習戦闘機に搭乗）の声が無線に入る。

「こちら三田だ。秋月はすぐに厚木飛行場へ戻れ！」

「りよ、了解！」

三田の命令を受けて、龍の操縦する「赤トンボ」は旋回して、厚木飛行場へと引きかえして行った。

「たく、何をやっているんだか……しかし、あいつもつくづく女に縁がある奴だな」

「そうなんですか？」

「おうよ。あいつは三田大尉と並んでネイビーエス殺しで有名だったからな……ああ、ネイビーエスって言うのは海軍の料亭にいた芸者のことだよ」

「そうだったんですか」

「しかもあいつの場合性質が悪いのは、クソ真面目に女を惹きつける言葉をサラツと言うことだからな。呉やハワイであいつに熱を上げる女の何と多かったことか。俺が知ってるだけでも基地の近くの農場の我那覇さんの娘とか、設営隊隊長の水瀬少佐の娘さんとか……あ、露西亞の貴族に嫁いだ四条家の御令嬢にも脈アリとか噂されていたな」

「そ、そうなんですか……」

涼は乾いた声で笑いながら、考えてしまう。

（今何かとても聞き覚えのある名前を聞いたような）

「それでもってあいつは気づかないときとるし。何て羨ましい……いや、ケシカラン奴。君は龍の子孫らしいけど、あんな御先祖みたいになっちゃいかんぞ」

「アハハハ……気をつけます」

まさか自分もそうでした（涼は愛と付き合い始めてから、周囲から聞かされ知りました）とは口が裂けても言えそうにない涼であった。

佐々木少尉と涼のペアから少し離れた場所では、才吉・才人・ルイズの乗る97式2号艦攻が飛んでいた。

「たく秋月の奴、何をやっているんだか」

「大方夢子の奴が挑発したんじゃないか？あいつ、ルイズに似て負けず嫌いなところがあるから」

「確かに、見るからに2人ともそんな感じだったよな」

「それって一体どう意味よ!？」

才吉と才人の会話を聞いていたルイズが、割り込む。声からして若干イラついているようであった。

「別に悪い意味で言ったわけじゃないよ」

「どうだか。ちゃんと行動で示しなさいよ」

「たく、すぐにヘソを曲げるんだから」

そんな2人の遣り取りを聞いていた才吉は笑った。

「ハハハ。全くいいコンビだな」

「「どこが!?!」」

才吉の言葉に、2人の声がハモる。

「そう言うところだよ……ところで才人。お前零戦を操縦したことがあるんだよね?」

「え!?!そうだけど」

「だったらちよつと操縦してみるか?お前の席にも操縦装置があるだろ?」

1930年代から40年代に掛けての飛行機には、単発機でも操縦主の後部座席に操縦装置がついている機体があった。この機体にも、それがついていた。

「え?ああ、確かにこの座席にも操縦桿とフットバーはあるけど、あの時はルーンの力で飛べただけだし」

才人は伝説の『虚無』の使い魔『ガンダールヴ』。その力をもつてすればあらゆる兵器を使いこなせる。ただし、その魔力の適用範囲はトリステイン本土から50km地点まで。それ以外の地では、ルーンは発動しない。

「大丈夫大丈夫。何も離着陸をやるってわけじゃないんだ。ちよつと水平飛行を体験してもらっただけだよ。それに、何か起きたらすぐに俺が操縦貰うから」

「うーん……」

「それに、彼女にいい所みせる機会じゃないか？」

「うー!？」

「ま、無理にとは言わないけどな」

才人はチラッとルイズの方を見る。

「……わかった。じゃあ、ちょっとだけ」

「よし。じゃあ、俺の言ったとおりにしろよ。まずは操縦桿を握って、次に両足をペダルに乗せ……」

「空を飛ぶって楽しいですね」

「お嬢さんは空を飛んだことはないのかな？」

「飛行機に乗ったことはありますけど、こんな昔の戦闘機に乗ったことはありません！だからスッゴク楽しいです」

「そう言ってもらえると、こちらとしても嬉しいよ」

愛と三田を乗せた零式練習戦闘機（零式練戦）。愛は飛び立ってからずっとはしゃぎっ放しであった。

「フフフ。パパもこんな感じでお空を飛んでいるのかな？」

「パパ？」

「はい。私のパパは航空自衛隊の戦闘機に乗っているんです」

愛の父の日高正道は空自の戦闘機パイロットである。

「ああ、そう言えば君はあの日高二佐の娘さんだったね」

「はい！三田さんはパパに会ったことがあるんですか？」

「あの人は一度だけ会ったけど、いい腕をした立派なパイロットだと思ったよ。そうか、確か今日あの人は福生……じゃなくて横田基地から飛行機を持ってくるんだったな」

「パパと会うのは1ヶ月ぶりなんです。ロクシエやサクラスに出かけてばかりで会えないんです。せっかかく結と正が生まれたって言うのに」

「そうか。軍人とは大概そう言うものだよ。けどねお嬢さん」

「はい？」

「君はまだ幸せだよ。少なくとも、月に1回はお父さんに会えるんだから」

「え？」

「俺は今までに色々なパイロットと出会った来たよ。けどその中に

は、二度と家族と会えなくなったパイロットもたくさんいたんだ。理由は言わなくてもわかるね？」

「あー！」

「だからね、月1回とは言えお父さんに会える君はまだ幸せだよ」

「じ、ごめんなさい」

「別に謝ることは無いさ。子供がお父さんに会いたくなるのは当然だから……お！？」

「どうしました？」

「左前方に機影だ」

「え？」

愛は左前方の空を見る。最初は何も見えなかったが、少し経ってから芥子粒のようなものが見えてきた。それが豆粒になり、さらに飛行機の形になった。

「東露軍のS n a 1型戦闘機だ」

その戦闘機は、愛たちの機体の側までやってくると、旋回して来て並んで飛ぶ。操縦席に座るパイロットが、マスクと眼鏡を外して愛たちの方を向いた。

「あ！？」

その顔を見て、愛は声を上げずにはいらなかった。



御先祖様来襲 7（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## ヘルベチア交流編 1（前書き）

ごめんなさい。節操無しでごめんなさい。

## ヘルベチア交流編 1

新世界暦5年10月 ヘルベチア共和国 セーズ近海 日本海上警備機構練習船「若葉」

ヘルベチア共和国は新世界暦3年に転移してきた国家で、共和国と名がついているが大公と言う存在があり、実質的な王制を採っている国家だ。

転移後の新世界においては、その大公の意志のもと新国連に早期に参加し、新しい世界の枠組みに加わっている。

同国の生い立ち他の転移国家同様、かなり特殊だ。何せ日本から見れば遥かに未来、文明が一度滅んだ（ヘルベチア人は大断絶と呼んでいる）時代からやってきた国家なのだ。

人種は白人から黄色人種までごった煮のように滅茶苦茶、文化も日本的なものもあれば西洋的なものもある。何より宗教がアマテラスの神を祀っていると言いながら、どうみてもキリスト教的な教会が布教しているのだから、日本人から見たら完全にカオス祭だ。

それでもって、日本語がイデア文字と言う古代文字の一種として存在（なおヘルベチアの公用語は地球のフランス語）しており、またそこかしこに日本的な物が廃墟や遺跡として現存している。

こうしたことから、国交が締結されると日本から様々な調査団や研究者が入国し、この国の生い立ちや文化についての研究に着手した。

この内文化に関する研究は、日本人のヘルベチアへの理解を促進させることとなった。この結果ポツポツであるが、ヘルベチアへの旅行者も増えている。

一方で歴史研究は資料の多くが失われているため、同国の研究者と共に少しずつ進められている最中であつた。

そのヘルベチアが前いた世界では大断絶によって海が汚染されており、人間が海を利用することはほとんどなくなっていた。加えてヘルベチアと言う国自体がそもそも内陸国であり、海とは縁遠かつた。

そのため、転移後のヘルベチアは一から海運や海軍と言つたものを作りださなければならなかつた。もしヘルベチアにとつて幸運なことだつたとすれば、今の所転移先における世界の国家の中に侵略志向の国がないことであつた。

日本を始めとする各国はヘルベチアに対して、支援を表明し実際に実行していた。無論それぞれの国々がなんの思惑も無く、慈善活動的にそんなことをする筈がなかつた。

その一方でサクラスのメイベル首相のように、お人好し甚だしい性格の権力者や日本の春川首相のようにそこまで金銭欲の強くない指導者がいるためか、どこぞの世界の紅茶好きで三枚舌外交を平気でするような国に翻弄されるような悪夢だけは避けられていた。

とは言つものの、海洋に関する技術がないに等しいのであるから、海防や海上貿易に関しては日本を始めとする各国から技術導入せざるをえないのも事実であつた。

状況的には先に轉移したトリステインと大同小異であつたか、一方で新たな技術を導入してこの世界における地位向上を目指している点でも、両国は同じであつた。

そんなヘルベチア共和国であつたが、この日日本の海上警備機構の練習船「若葉丸」が西岸のセーズの街へと寄港した。船体の点検と、乗員の休養のためであつた。

「やっと上陸だ」

「大地に足をつけられる」

「けどヘルベチアで古い建物とか遺跡以外、何にもないところだろ？」

「それでも揺れない地面があるだけでもありがたいって」

船上では実習生たちが久しぶりに拝める陸地に喜びの声を上げていたが、そんな実習生達の半数近くが、どうみても十代半ばにしか見えない、言うならば少年達であつた。

どうしてこんな光景が現出しているかと言えば、これは海上警備機構の教育体制による。

海上警備機構は轉移後に発生した海獣による船舶への襲撃に対する対策と、広大な海域における漁船や商船の保護や警備行動目的で発足した。

海上保安庁が法律で一切の軍事行動や訓練を行なわない司法機関としての特性を持つ、すなわち警察機関であるのに対して、海上警

備機構は準軍事組織としての体裁を取っていた。実際使用する艦船や航空機、さらに装備も海上自衛隊以下、海上保安庁以上の物を備えていた。

一方で正式発足が転移後の若い組織であるから、人材不足は深刻であつた。

転移前の日本は、黄海事変による韓国の競争力低下や人件費高騰やストで世界の工場としての翳りが見せた中国などの影響で、ある程度製造業を中心に景気の持ち直しが見られた。

とは言え、就職氷河期を脱したものの雇用情勢が格段に改善されたわけでもなかった。

そのため、志願者を募るだけなら簡単に集めることは出来た。しかし、海の上での仕事は専門性の高いものであり、一朝一夕で使い物になる人材を育てるなど不可能であつた。

理想的なのは、海上自衛隊や海上保安庁、そして転移による影響で遊んでいる商船の乗組員を採用できれば良いのであつたが、万年人手不足の海自や海保からはそうそう多くの人材を出してもらえない余裕などなかった。

商船にしても転移から半年もするとロクシエやサクラスとの交易が活発化していた。それに加えて、そもそも乗員の多くにインドネシア人やフィリピン人と言つた外国人船員がいたため、問題があつた。

となると、やはり国内で一から人材を集めると言うことに行き着き、採られたのが中卒や高卒と言つた階層の採用であつた。若いう

ちから仕込んで、早めにプロフェッショナルを作ってしまうということだ。

これに沿って設立されたのが、初等警備士養成所と中等警備士養成所だ。前者が中卒以上の学歴を持つ者、後者が高卒以上の学歴を持つものだ。また数年後には両養成所を卒業し、船長などの幹部を養成する幹部候補生養成所も設置予定であった。

この内初等警備士養成所は実質的に高等学校扱いとなるので、卒業時には高卒認定を受けられ、しかも毎月給料も出る。ただし、船上での実習などのため卒業まで3年6ヶ月と高校より半年長い教育期間が特徴であった。

それでも第一期の募集から応募が殺到し、人気の学校の一つとなっていた。

教育内容は高等学校の勉強に加えて、船舶や海洋（航空隊志願の場合はそれに関する技術）に関する専門性の高い教育内容である。そして2年目に入ると実習船による近海または遠洋への実習が行なわれるのだ。

今回「若葉」に乗り込んでいるのはその初等警備士養成所の実習生たちであった。

「高槻はどうする？上陸するか？」

「あ、うん」

「上陸したら、美味しい物でも食べに行くか」

「あ、けど俺無駄遣いは出来ないから」

すると、言い寄った少年は意地の悪い笑みを浮かべる。

「たく、優等生は金遣いまで優等生なのか？姉妹にアイドルが2人もいる癖に、しけた奴だな。そんなに稼ぎが悪いのか？それともお前の姉ちゃんや妹は大したこと無いってことか？」

「やよい姉ちゃんとかすみのことをバカにするな！！」

高槻とよばれた少年が飛び掛った。その形相は怒りに染まっていた。

「何しやる！」

飛び掛られた側もやり返そうとする。

途端に周囲にいた同期生たちが、慌てて止めにかかる。

「止める2人とも！」

「教官に見つかったら上陸取り消しになるぞ！」

その一言が利いたらしく、飛び掛られた側の少年は舌打ちすると、船内へと入っていった。

「長介、お前の気持ちもわかるけどあんな奴の挑発に乗るなよ」

と同期生の1人から諭される高槻長介練習生であるが、未だに口惜しそうな表情をしていた。



「けど、姉ちゃんやかすみのことをバカにするなんて許せないんだ」

「気持ちは俺だってわかる。身内をバカにされれば誰だって怒るさ。けど、あいつらはお前の成績を妬んで根も葉もないことを言ってるだけだ。そんな連中につつかかって成績を落とすなんてアホらしいじゃないか。放っておくのが一番だぞ」

すると他の同期生も頷いて言う。

「朴の言うとおりだ。言いたきや言わせておけばいいのさ」

「マルコまで……わかったよ。注意するよ」

「それよりも折角の上陸だぜ。お前があまり金使えない理由は知ってるけど、ちょっとくらいなら大丈夫だろ？外国に来たんだし、楽しめる内に楽しもうぜ」

朴の言葉に、長介は顔を綻ばす。

「うん」

と、その時。

「高槻練習生！ちょっとブリッジに来い！」

彼を呼ぶ教官の声が聞こえてきた。

同時刻　セーズ　ヘルベチア軍１１２１小隊基地「時告げ砦」

「今日港に日本の海軍の船が来るんでしょ？一体どんな人が乗っているのかしら？」

「若くて格好いい男の子がいるといいよね」

警備船「若葉」の入港は、すでにセーズの街でも噂になっていた。

セーズは本来内陸の国境に面した街であつたが、転移後は海沿いの小さな港街になっている。しかし、日本の軍艦（厳密には警備船）が寄港するのは珍しいことなので、噂になってしまっていた。

そしてこの街を守るのが、ヘルベチア陸軍の第１１２１小隊である。もともと、実際には僅か１０人ばかりの分隊と言えるかさえ怪しい規模の部隊ではあつたが。

またこの部隊は、数年前から変わった特徴を持っていた。それは小隊長であるフィリシア・ハイデマン大尉から新兵の二等兵まで、全員が女性で占められていることであつた。

そのためか、新兵の二等兵や彼らより１期上の一等兵たちまでもが「若葉の」入港を聞いてはしゃいでいた。

「こらあんたたち！下らないこと言ってる暇があるなら、早いところ洗濯物終わらせなさい！」

新兵達の頭上に、叱責の雷が落ちる。

「はい！！墨埜谷上等兵！！」

一括された新兵たちは、お喋りをやめると慌てて持ち場へと戻って行った。

新兵たちの背中を見送った墨埜谷暮羽上等兵は、溜息をついた。

「まったく、日本の船が来るくらいで浮かれ過ぎだつていうの」

「まあまあそう怒らないの。あの娘たちはまだここに来て日が浅いんだから」

微笑みながら声を掛けたのは、小隊長であるフィリシア・ハイデマン大尉だ。

「それはわかってますけど、規律と言うものがありますから」

「フッフ。まるで梨旺を見ているみたい。けどあまり肩に力を入れすぎないようにね。じゃないと体が持たないわよ」

「お気遣い感謝します」

「ところでその日本船だけど、出迎える用意は出来ているかしら？」

「え！？……あ！」

「私ちゃんと言ったわよね、船長さんたちを夕食会に招くって？そのために迎えに行くって」

「す、すいません！すぐに車の準備をします！」

「急いでね。もし間に合わなかったら……わかっているでしょうね」

フィリシアが笑う。途轍もなく黒い笑顔で。

「はいいい!!」

## ヘルベチア交流編 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

御先祖様来襲 完結編（前書き）

かなり強引に終わらせました。

## 御先祖様来襲 完結編

新世界暦2年11月午後 相模湾上空

東の空からやってきたのは、東露西亜帝国製のSna1型戦闘機であつた。おそらく日本の軍事マニアが見れば、陸軍の97式戦闘機に似ていると言つたろう。

それもその筈、Sna1型戦闘機は中島が97式戦闘機の原型としたPA機をシコルスキー社とともに改良した機体なのだから。

もちろん、涼や才人、愛にルイズと言つた面々はそんなことわかる筈がない。

ただし、才人のみは固定脚に主翼に張線が出ているスタイルの機体を見て。

「あれはまた随分と古臭い機体だな」

と感想を口にした。

ちなみにやってきた機体には外から白赤青の三色のラウンデル（球形の国籍マーク）が描かれていた。

「布哇王国軍のマーク……念のため確認するか。こちら帝国海軍大尉三田六郎。官姓名ならびに所属を答えよ」

すると、すぐにその返事が帰つて来た。

「こちら航空自衛隊所属日高正道二等空佐です」

「パパだ！」

思わず愛が声を上げる。

それに対して、いきなり愛が無線に割り込んできたので日高二佐の方もビックリであった。

「な！？愛！どうして無線に愛が出るんだ？」

「こちら三田大尉です。現在娘さんは私の機の後部座席に乗っています。これには少々事情がありまして」

「……わかりました。それについては着陸してからお聞きしましょう」

「了解です。と言うわけで、平賀に佐々木。秋月も先に帰ったことだし、俺たちも一端厚木基地へ戻るぞ」

「「わかりましたミロクの大尉」」

「そう言うわけで、一端基地に戻りますよ愛さん」

「わかりましたー！！！！」

三田はすぐに機体を翻し、厚木基地へと機首を向けた。



「帰還命令だ。操縦を返してもらっぞ」

「わかった」

才人に操縦させていた才吉は、スイッチを切り替えて操縦を自分の方へと戻した。

「それにしても、さすがに零戦を操縦しただけあるな。中々上手いじゃないか」

「そうかな。アレ位なら誰でも出来るんじゃないか？才吉が教えながらだったし」

しかし、才吉はその才人の言葉を笑い飛ばした。

「バカ言っちゃいけないよ。適性も知識も皆無の奴じゃ、どんなに上手く教えたってさっきみたいには行かないさ。だから才人にはパイロットの適正があるかもな」

「適正があっても、俺頭悪いし」

すると才吉が笑った。

「俺だって頭はよくないさ。普通の兵学校だったら多分落第だったさ。まあ、航空部の試験も正直受かる気がしなかったけどな。何事もやってみないとダメなもんさ」

「そう言っもんかな？」

するとルイズが会話に入ってきた。

「才吉の言うとおりよ才人。出来る出来ないの前にかくやってみなさいよ。それでも出来なければそれでいいだけの話でしょ」

「でもパイロットになるって言うても、俺ルイズがトリステインに戻るときは一緒に戻るつもりだし」

「焼かせるね」

「……」

才吉がちゃかすと、ルイズは黙り込んでしまった。そして才人には逆に開き直った。

「何とでも言え！それが俺の正直な気持ちなんだから」

「そうかそうか。けど、トリステインでもその内パイロットになる道が開かれるんじゃないか？」

「そんなことありえるのかな？」

と言っていた才人だが、この半年後トリステイン空軍にパイロット養成学校が設置され、教官となった才吉にビシバシしごかれつつも、第一期生として空軍士官に任官するのであるから、人生わかったものではない。

厚木基地

「うーん……」

「あ、やっと目を覚ました。大丈夫ですか？桜井さん」

「あ……あああ！！！！？？？」

目覚めた途端大声を上げる夢子。何故なら、目の前に自分を見つめる龍の顔があつたのだから。

もちろん、龍はビクリした。

「わー！いきなり大声出さないでくださいよ！」

「し、仕方が無いじゃない！いきなり目の前にいたんだから！と言うか、私どうなったんだっけ？なんかいきあなり空が下になったり、海が上になったりして、上へいたり下へ行ったりグルグル回ったりして……いきなり頭がボーっとしてきて」

「桜井さんはアクロバットの最中に失神しちゃったんです」

「そうだったの……（強がるんじゃないかな。これじゃあいい恥さらしじゃない！）ここは？」

「厚木基地の医務室です。皆心配したんですよ、全く目を覚まさないから。けど軍医の見立てじゃ、全く異常なしのことです。しばらく横になっていれば、酔いも醒めるでしょう」

「テレビのスタッフは？ここにはいないの？」

「皆さん今は外に出ています。何でも機材の片付けや東京に連絡する必要があるとかで」

夢子はまさかアクロバットがあそこまで激しいものだとは思わなかった。それなのに龍の言葉を安請け合いて挑戦した挙句、気を失って迷惑を掛けてしまった。

もちろん、撮影スタッフにも迷惑を掛けたに決まっているし、もしかしたら番組の製作にも響いたかもしれない。

（トホホホ……）

「ええと、桜井さん？」

「あ！？ごめんなさい。何かしら？」

「いや、こちらこそ申し訳ありませんでした」

「え？何であなたが謝るのよ？」

「機体を操縦していたのは自分ですから。桜井さんのことを考えて、もつと慎重にやっていれば桜井さんも気絶せずに済んだでしょうし」

「けど、私もあの時あんな安易に決めずに、龍の話をちゃんと聞けば良かったし。それに龍に聞かれて、いいつて言っただから」

「でも、機上にあつて僕が機長である以上、責任は僕にあります。それに」

「それに？」

「紳士であらねばならない帝国海軍軍人たるもの、可愛い女の子を

危険に晒してしまつて責任を取らないわけにはいきません」

(えー!?ま、マジでそんなこと言ってるの?)

恥ずかしい言葉を極自然に言うものだから、夢子は驚かずにはいられなかった。

「あ、あの龍?本気で言ってるの?」

「えー!?なんでそんなこと聞くんですか?冗談だと思ひましたか?」

龍は首を傾げる。どうして質問をされたのか全く理解出来ないらしい。

(うわー。外見だけじゃなくて中身まで涼と同じだわ。さ、さすが涼の御先祖様)

「あ、あの夢子さん?」

「ふえ!?!」

「まだどこか調子でも悪いんですか?」

「いや、そう言うわけじゃないけど……さっき言った責任だけど、本当にちゃんと取ってくれるの?」

「もちろん、出来る範囲ですが」

「そう。だったら……」

夢子はある提案を口にした。

厚木基地へと戻ってきた機体は、次々と誘導路を通って格納庫や駐機場に誘導された。そして停止すると、整備員が素早く車輪に車輪止めを噛ませて行った。

そんな中、愛は逸早く乗っていた零式練戦から飛び出し、父親の乗る機体へ向けて走った。

「お父さん！」

「おう愛！」

正道も機体とエンジンを止めると、すばやく操縦席から這い出した。

「出迎えありがとう。基地に来るのは聞いていたけど、まさかゼロ式練戦に乗っているとは思わなかったぞ。一体何があったんだ」

「へへへ。ちょっとお願いして乗せてもらったんだ」

「おいおい」

すると愛の後から三田がやってきた。そして正道に向かって敬礼した。

「どうもです日高二佐」

「おう三田大尉。早速だが、事情を話してくれるか？」

「喜んで」

説明中……説明中……

「なるほど、そう言うわけか。御迷惑をかけたね大尉」

「いいえ。良い息抜きになりました。私にとっても部下にとっても」

「それは何よりだ」

「ところで日高二佐。よろしければ後で手合わせ願いませんか？」

「と言うと？」

「模擬空戦ですよ。折角航空自衛隊のベテランと名高いあなたと御一緒できたんです。機体はうちので悪いですが、どうです？」

「いいだろう」

（あれー。なんか私置いてかれてる？）

側にいる愛など目に入らないかのように、2人は話を進めて行った。

ちなみにこの2人の模擬空戦は、一緒に帰って来た才人や涼たちまでもが観戦者になって成り行きを見守った。

2人は安全を確保するため相模湾上空で空中戦を行なったため、

ギャラリーは無線機越しに聞こえてくる音と2人の声だけしか聞けなかったが、それでも迫力ある空中戦の雰囲気はヒシヒシと伝わってきた。

が、ある事態によって状況は一変した。

ガガガガ……

突如機関銃の発砲音が聞こえてきたのである。そして、無線も沈黙してしまった。

「何!？」

「うそ!？」

「まさか本当に撃ったのか!?!??」

「ぱ、パパー!!」

一同はざわめいた。特に愛など泣きそうな表情になった。

が、それから1時間ほどして2人の乗った機体が揃って帰って来た。

「よかった」

と愛をはじめ胸を撫で下ろした……が!

「あれ?あの2機とも無線柱がありませんね」



「本当だ」

才吉と佐々木が指摘したとおり、2人の乗った機体の無線用アンテナの先端が吹き飛んでいた。

「大尉！一体何があつたんですか！？」

すぐに機体に才吉たちが走り寄り、事情を質した。

「いや、久しぶりにアンテナ飛ばしを決めたんだけどな、すぐに日高二佐にやり返されてな。結局お互い無線機がお釈迦になっちまったぜ」

どうやら2人で、互いの機体の無線機のアンテナだけを実弾で撃ち抜いたらしい。

と書くのは容易いが、幅にして30cmもない無線アンテナだけを撃ちぬくなど、普通に考えれば人間技ではない。

「パパそんなことしたの！？」

「先に手を出したのは三田大尉だぞ。やられっぱなしも癪だから撃ち帰したまでだ」

（（（やっぱりこの人、舞さんの旦那だ）））

と舞のことを知っている全員は、そう思わずにはいらなかった。

この後、才吉や龍たちが運んできた機体は研究資料として、日高から自衛隊によって徹底的に調査された。

一方才吉らパイロットたちはトリステイン王国軍の傭兵募集に答える者、或いはハワイやロシア軍に籍を移す者、熟慮の上自衛隊に転籍する者、除隊するものなどさまざまであった。

彼らは元いた世界や時代とこの世界とのギャップに苦しまなければならなかった。結局新しい世界に馴染むことの出来ない者もいれば、自分の居場所を見つけられた者もいた。

前者に比べて後者の方が断然多かったことは幸いであり、人間が持つ強さを改めて示した物であったかもしれない。

そして、その中には新しい世界で新しい繋がりを作る者も……

数週間後 東京

「お待たせ龍」

「おはようございます。桜井さん」

答えた龍は見慣れた帝国海軍の制服ではなく、どこか似合わない現代の服装であった。

「ちょっと、せっかくのデートなんだから下の名前で呼びなさいよ」

そう言う夢子の方は、華やかに着飾っていた。

先日何でも責任を取ると言った龍に、夢子は今日1日自分と付き合うよう命じたのであった。つまり、デートしろと言うことだ。

「す、すいません。ええと、じゃあ夢子さん？」

「まだ物足りないけど、まあいいわ。それじゃあ約束どおり、今日は私に1日付き合ってもらうからね」

「はい」

「じゃあ、行きましょう」

と2人が手を繋いで歩き出そうとしたその時。

「「「ちよつと待った!!!」」」

「え!?!水瀬伊織に我那覇響に四条貴音!?!」

夢子が声が出た方を見ると、3人の少女たちが立っていた。夢子には見覚えのある面々ばかりだ。

しかし。

「違うわよ。私は水瀬沙織よ」

「自分是我那覇香」

「私は四条貴美にございます」

それを聞いた瞬間、夢子はなんとなく察した。

「あー、もしかしてこのパターンって……」

「「「龍は私のものよ(だぞ)(です)!!!!」」」」

「勘弁して!!!!」

夢子が熾烈な龍争奪戦を勝ち抜いたのは、この1年後のことだ。

御先祖様来襲 完結編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8870u/>

---

交差する世界 番外

2011年12月21日15時51分発行